明治三十三年十二月廿五日
第三種郵便物認可
明治四十三年十月廿六日印刷納本
（毎月一回廿六日印刷納本）

十一月一日發行

女學世界

第十卷
第拾四號




美顔水
幾千代かけて美しき人の顔よ美しかれとて
すゝめまゐらする美顔水
色を白くし きめを細に つやを出し
桃谷順天館

「東京へ注文いたすのが便利

であります。東京の三越呉服店へ向け、必要なるものを手紙にていつてやりますと、直に小包郵便にて送つて參ります。かういふ便利なる方法のあるを當地の人は未だ知らない様ですから、よく教へて上げて居ります」とさる地方の奥様が仰せられました。誠に難有き仕合せに存じます。

（地方注文案内書は御一報次第進呈）

東京駿河町

三越呉服店

女學世界第拾巻

第拾四號目次



成形美術
脱毛術
矯毛術

本郷お茶の水
東京美容院
院長　北原十三男

遠地は送藥す尙本誌讀者に院生の經驗になれる美容の栞と題する小冊子を無料進呈す郵稅二錢御送附の事

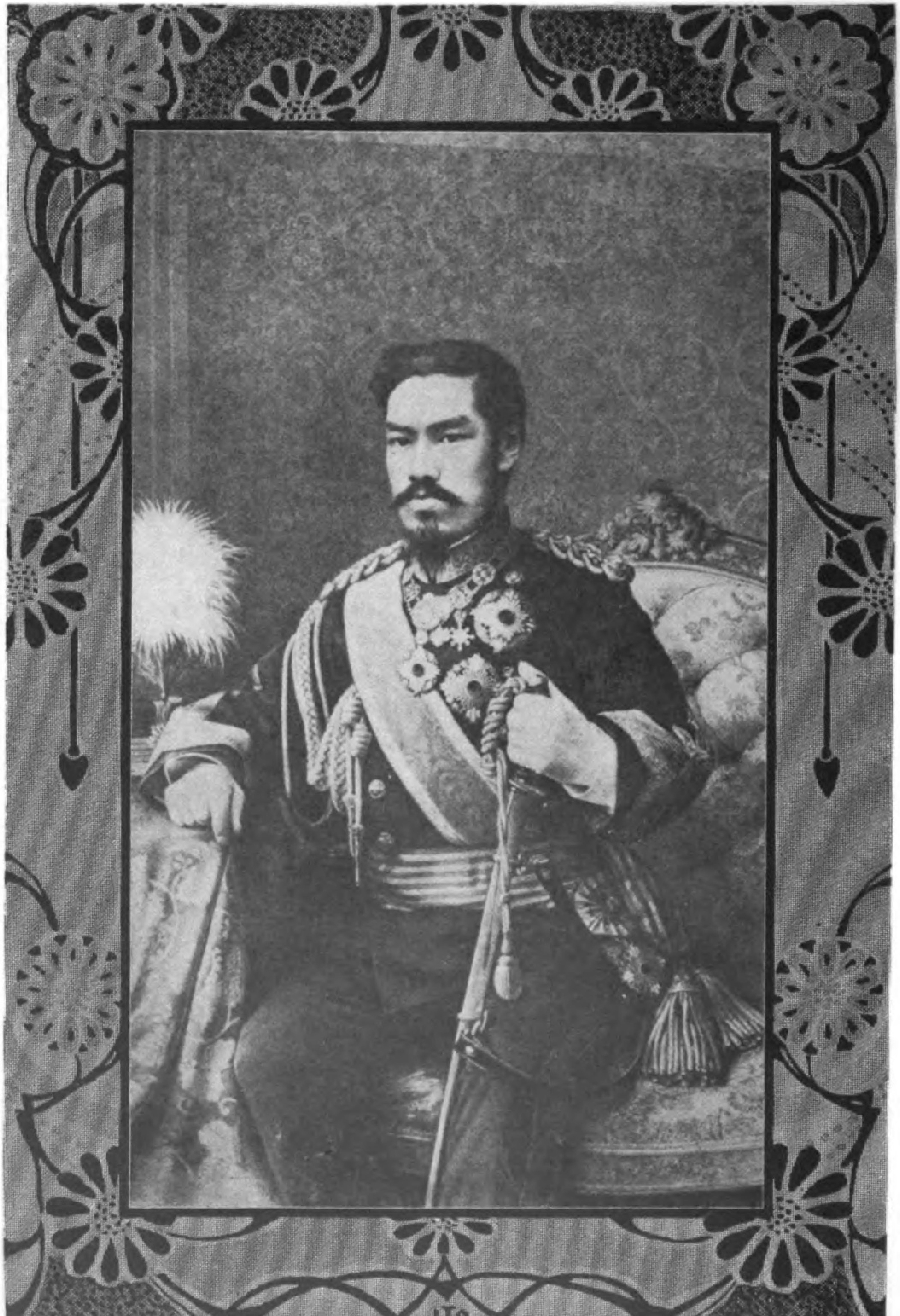


女（いの一）

女(へ.の三)

女(、の四)

尊影



御影



女(ろの一)

興味溢るゝ菊花號

婦人くらぶ

十一月一日發行　第三巻拾貳號　定價十五錢 税一錢五厘　六冊税共九十錢　十二冊一圓七十四錢

▲婦人くらぶ臨時増刊

日韓併合紀念 皇室畫報

一冊卅五錢税六錢

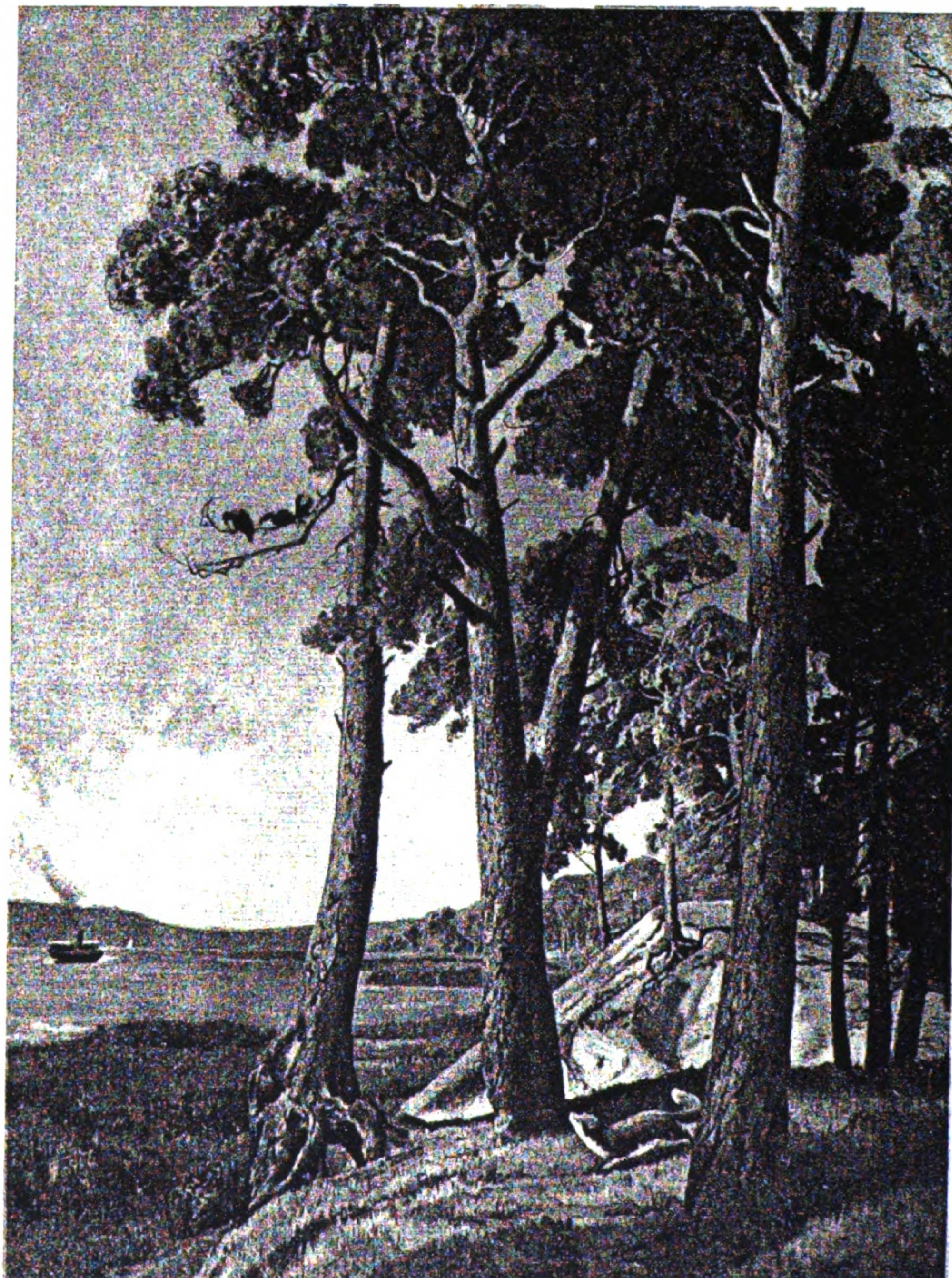
▲三版賣切れ……四版製本出來

▲各宮家御七十一方が日韓併合當時に於ける最近の御眞影御貸下の榮を賜へる者にして曠古の盛事に對する絶好の紀念品▲發行以來旬日にして既に**四版**を頒布し今や四版も亦盡きんとす各家庭に一部を勸む

東京市神田駿河臺北甲賀町十番地　紫明社發行　電話本局三六八四番　振替口座一七五五四番

女（ろの三）

夕陽



田中製版所印刷



化粧道の新福音!!

●當所は眞正なる化粧の方法を鼓吹し、且つ化粧品につき斬新なる研究を遂げ、化粧顧問として親切丁寧御婦人方の質問研究に應ずべし、今や冬期に入らんとし肌膚の保護に付ては忽諸にすべからざるの時なり、一日遲るれば一日の悔あらん大方の淑女諸君奮つて來所あれ。

●當所は直接來所すること能はざる方の爲めに、通信教授を以て自宅研究の便を設く。

化粧研究所

東京市麴町區飯田町五の五　(赤十字社前)

●當所に於て教授示導すべき化粧科目は左の如し。

一、扮飾術　二、美髮術
三、毛生術　四、脫毛術
五、艶肌術　六、美顏術
七、整容法　八、化粧品の調製法及撰擇法
九、室內裝飾法　十、服裝術

●當所に關する詳細の事は、郵劵二錢封入御申込次第回答す

美人法の新機軸!!

女(はの一)

西村醉夢君著

和歌ト俳句

袖珍洋装美本 紙數三百五十頁 正價四拾五錢 郵税六錢

本書は和歌及び俳句に關する解説、歴史、批評、並びに修辭法を記載し、卷頭には『詩學梗概』と題し、それに就ての解説をしたもので一般家庭に讀まれる目的で編んだものであるから、極めて平易な、通俗なことのみを選び、修辭學、詩學の梗概が窺へ、また和歌と俳句との文學的價値をも分かるやうにしたものである

((内容))

【第一篇】詩學梗概＝●詩とは何ぞや●詩の内容●詩の律格●詩の種類●詩の用語●空想と寫生●詩の生命【第二篇】和歌＝●和歌とは何ぞや●和歌の種類●古歌の風格●現下の歌壇●和歌の書式【第三篇】俳句＝●俳句とは何ぞや●句の制約●俳句の特色●俳句の沿革●最近の俳壇【第四篇】修辭法＝●譬喩●對照●雜種の修辭

東京本町二 振替口座東京二四〇 博文館

見よ◎月經なき女子◎病める婦人

▲勿驚……藥力最精實……効能確保……有効無害……

●本劑は専門博士が學理と實驗より發見せられたる物其主藥は最新唯一の通經藥にて帝國大學病院及各病院にて専用する最良藥なり二三月の月經閉止月經滯り月經不順は一二劑にて必す流下し四五ヶ月又は血塊にても特製或は別製分服用せば安心に忽ち流經す女子十七八歳になり月經なき人は二劑又毎月月經困難は三日分にて通經す



博士賞贊良藥 改良 女月丸

藥價一劑六十錢二劑一圓十錢特製二圓廿錢別製分三圓廿錢送料各四錢

◎肥滿病新藥 (米國新輸入)

子供の折美愛と賞せられし人も年頃になりてよりぶと〳〵肉太りたる爲め上圖の如く醜婦となる人少なしとせず本劑は獨乙ベンツォルト氏の發見藥にて脂肪多き人●ぶと〳〵ふとり●血太り●肉太り●酒太り●水太り●顔赤●にきび●ふき出物多き等輕症一二劑如何程の惡性も四劑分連服せば色は美顔窈窕たる美人となる[illegible]保護する肥滿性の人は試みよ

諸孃姉の福音



定價 一劑一圓五十錢 二劑二圓九十錢 三劑四圓廿錢 四劑五圓半 送料十錢

發賣元 東京々橋中橋和泉町 振替第壹〇六七七番 小宮愛生堂

女(はの二)

秋の色



理想的最新製劑

ちゞれ毛くせ直し **ベント**

本品を一度使用せば如何なるチヾレ毛クセ毛にても立處に直伸す永く使用せば根本的にチヾレ毛クセ毛の有る處を忘るべし

定價 大金九十錢 中金四十七錢 小金廿五錢
送料 市内四錢 市外八錢

最新輸入高等染髮料

志らがそめ 赤毛そめ ヘーヤダイ

大壜金貳圓五十錢 中壜金壹圓 小壜金五十錢
送料 市内四錢、市外八錢

此の二大有効製劑の説明は左の書に詳記せり

最新 衛生化粧 美髮法（えいせいけしやう かみをよくするはふ）

本書の内容
◎しらが、赤毛染の話
◎ちゞれ毛くせ毛直しの話
◎抜毛どめ、ふけとりの話
其他毛髮化粧に關する秘訣
◎毛のなき所に毛の生へる話
◎毛髮の洗ひやうの話
◎毛髮營養の話

本書御入用の方は郵券二錢封入御申込あれば無代進呈す

●發行所 東京本所區外手町八十七番地 深澤國華堂



は歐米各國にて造化の妙工を奪ふの奇効ありとの賞讃好評を博したる秘密藥を當館主が醫科大學醫院在職中深奥なる學理と老練なる技術とを以て專門的に多年苦心研究の後其有効成分を檢明し生毛に關する諸説を參考し有力藥を配合したる世界無比の學理的最良藥なれば其効能の非凡確實なる事世間に有觸れたる技術と學理に暗き輩が山師的に無責任の廣告を爲して販賣する賣藥品の比に非らず左れば普通に醫師の處方する売齊丁幾、レゾルチン、サリシール酸昇汞等の在來の生毛劑や粗惡の賣藥にて効なきとて落膽せず是非本劑を試みよ頭髮、はへぎは、まゆげ、ひげ其他の薄きを濃くしあるべき所に毛なきを生じ禿頭病其他の病氣にて脫毛するを防止し抜毛の再生を早めヤケド、デキモノ、ハツホー、キリキズ跡の禿に生毛せしむる事請合藥價送料共一劑八十錢二劑一圓三十錢郵券代用二割増の事

●●●取次所ハ毎月ノ廣告ニアリ
●取次所ナキ地方ハ直接本舗ヘ注文アレ

三河國碧海郡刈谷町
振替口座東京貳三壹壹
電話刈谷三拾貳番

本舗 醫科大學卒業藥劑士 従七位勳六等 中島龜之丞鑑製

●●大取次左ノ通リ●●大取次附近ノ各藥店ニアリ●●

東京市
本郷六丁目赤門前 瓜生藥局
麹町區紀尾井町三 齋藤藥局
日本橋檜物町十八 龜田藥局
京橋區八官町八 野田藥局
神田淡路町二の四 森田藥局
芝田町四の一二 加藤藥局
芝愛宕下町一ノ二 岩本支店
赤坂田町四の一 竹内藥局
同青山北町五 四井藥局
本所吉岡町廿五 小島藥局
四ッ谷大傳馬町二 永野藥局
神田旅籠町一ノ一 瓜生支店
堺市大寺南門東入 一色藥局
京都市上京區寺町通り石藥師角
京都市下京區五條通り富小路行當り

大阪市平野町二 丹平商會
丸龜市本町 櫻井藥局
名古屋京町三丁目 飯田藤七
同 同 荒川長太郎
高松市片原町 新明藥局
神戸元町一丁目 四村陶吏局
廣島市橋本町 萬代藥堂
神奈川青木七軒町 永崎藥店
仙臺市新傳馬町 櫻井藥局
岡山市橋本町 加藤藥店
弘前市下土手町角 菊地藥店
大津市菱屋町 柴崎藥局
高知 藥局
安江洋物店

女（にの二）

男女 生殖器科 明治療院

●東京淺草七軒町二●

●梅毒痲毒 生殖器障害 神經衰弱 ●婦人科一般 ヒステリー 月經障害 ●診察 午前 午後 ●入院隨時●

竹柏會は佐々木信綱氏指導のもとに清新なる和歌に志ある人々のため添削質疑に應じ又每月一日雜誌『心の花』を發行す入會規則書は郵券二錢『心の花』見本は郵券十二錢を送られなば直に發送すべし

東京神田小川町一 電話本局一一一四

竹柏會

美術



果實



造花

通信教授

東京市四谷區麴町十二の九

二ヶ月卒業遠國の自宅に在て誰でも和洋造花●花かんざし六十種の果實標本等は美麗に出來ること保證す販路は擴大にして年中無休相當收益あり●案內書附製品見本は造花でも果實でも郵券十二錢送れば直に送呈す

美術造花傳習所

第十一回

會長 陸軍二等軍醫正 正六位勳四等 ドクトル 渡邊鼎

通信教授 會員募集

規則要郵券二錢

產婆學講義錄

東京市四谷區內藤町一ほの部

東京產婆看護婦講習會

產婆科六ヶ月卒業 看護科四ヶ月卒業

美術 造花材料

三國屋

關口商店

▼半製品、鏝、打拔類

東京淺草區駒形町十四番地 振替貯金……一一六四二番 電話下谷四〇五一番

(御一報次第定價表進呈)

女子會員募集

能筆は一生の德

本會獨特の特許速成通信教授の方法に依れば短日にて上達すること五十有餘

萬の卒業生の成績に依て明かなり

書者 東京高等商業學校習字教授 稻川雲谿先生及び玉木愛石先生 外講師大家數十名

書者(女子部)小野鵞堂先生

書簡文細字とも六ヶ月卒業

本會員に限り雜誌筆の華毎號進呈す

見本 詳細會則無代進呈

東京本郷區大學正門前 電話下谷三千〇十一番 三千二百十番

帝國習字速成學會

新刊

一戸いせ子女史著 四六判頗美本 正價五拾錢 送料六錢

實驗 家庭料理法

本書は女史が多年の實驗に基きたるものにして其特色は廉價なる材料を用ひたると、料理法の簡易にして料理に心得なき人にもなし得るとにあり

東京本郷森川町

文成社發兌

振替一九四六七番

菊の香



日高嶋助筆



（ほの一）

石鹼一個の代金を節して本書を熟讀實行せば
最幸福なる根本的の美人たるを得べきなり

最新美人法

一冊送料共 金廿七錢 切手代用は三錢を十枚 振替廿八錢

本書は醫學上藥學上の學理と實際と幾多令孃夫人の實驗とより成り幾何人にも實行しやすきを本旨として記述せし良書也

白色法 醫學上より見たる白色法●色白くなる飲み藥●色白くなるつけ藥●實驗有効の白色法●色白くなる簡單なる方法●キメを細かにする法●日にやけるを防ぐ法●手の色を白くする法其他種々

美髮法 髮の毛を美しくする法●髮の毛をやわらかにする法●つやをよくする法●毛のぬけるを止める法●毛をのばす法●ふけをとる法●ちゞれ毛くせ毛うす毛赤毛白毛等をなをす最良法其他種々

美顏法 愛嬌と愉快●顏を洗ふ最良の方法●油の多過ぎる顏と油のたらぬ顏●赤すぎる顏と青き顏との療法●顏を醜くする食物●しわのよらぬ法●齒を白くする法●ニキビそばかすホクロの療法等

治療法 やせる法こえる法●鼻高くする法●聲をよくする法●おしろいやけエボあざシモヤケわきがヒゼン田蟲タコなます等の最良療法●毛をはやす法●赤鼻眉毛のさか毛手のあれを治する法其他

養生法 根本的美人となる平素の養生法●食物と美人との關係●充分に睡眠せよ●寢る時の心得と寢具●運動はかくの如くすべし●醜婦も此の如く常に注意せば亦美人に優る●婦人病と顏色の關係

化粧法 入浴中行ふべき美人法●此の如き化粧品は反つて恐ろべき結果を來す●化粧品の撰擇法●おしろいのつけ方●鼻高く見する法●目を大きく見する法●唇をうすく又は厚く見する法其他種々

服裝法 ●服裝を美しくする法●衣服の材料●衣服の洗濯●衣服の色●衣服の縞●吳服店にて染色縞柄を見る秘訣●此の如き模樣と縞柄とは甚しく美人を醜婦とす●帶のしめ方●前のあわせ方等種々

これ目次の大略のみ、眞に婦人の寶典也。眞に少女の必讀書也。御身の幸福を得べく一日も早く本書を讀め。

發行所 東京神田錦町三ノ二 振替東京一六一八番 學友社



●にきび●そばかす●はたけなどにて御困りの御方は
獨逸皮膚病專門大家カボジー博士の處方によれるカボジーと云ふ特効藥を一日も早く御用ゐなさる事をおすゝめ申します。もし又御望みの御方には小包料共金五十八錢にて一劑宛御分ち申し上げます。
東京神田錦町三ノ二學友社書店內高柳孝子

根治確證 **わきが** 新治療藥

必ず全治し決して再發或は他病に變ぜず速に用て苦惱を脫せよ
丙價廿錢乙價壹圓廿錢甲價特製貳圓五拾錢送料拾五錢

本劑を塗擦すれば主成分は皮膚及び肉の組織に吸收せられ其組織にある毒素を清潔驅逐し惡臭を根柢より全滅せしむる作用を有する最近發見の特種の新劑にして如何程頑固劇烈の難重症も甲價特別製を用ひよ

毛のはへる

定價壹圓卅錢特別製貳圓送料拾四錢本品は原名をベグネスと稱する現今最賞用せらるゝ有力なる最新液にて毛をはやしたき人は早く試みられよ●ぬけ毛落毛を止め生す◉頭などにはげのあるのは見苦しき者也
増はへぎわうすき人●まゆ毛●口ひげ●其他の所に毛なき人用ひよ毛髮

化學製品 **色の白くなる** 溶液

價A印壹圓B印特製壹圓五拾錢送料拾五錢本劑は貴紳淑女粹士間に大高評を博し殊に愛用せらるる最新流行の秘方奇劑にして本劑を塗擦すれば主性分の力に依り皮膚は次第に新陳代謝を盛にし皮膚を漂白するを以て全身次第に白色艶美となる男女交際上最も必用の品なり

月やくをろし

メソルビン此藥は子宮を痛めず如何ほど長き月經とまりも必ず下る二三月位のは壹劑も用ゆればすぐ下る二三ヶ月以上のとまり又は血塊には特製を用ひよ速に流經す本劑は効能極めて烈強なるも毫も身體に害なくたやすく下る、月經不順より起る子宮血の道を全治し古血を一掃す價中劑六拾五錢壹劑壹圓貳拾錢特別製貳圓卅錢參圓五拾錢送料各貳錢

專賣 東京神田區小川町東明館前 **オリエンタル藥舘**

女(ほの二)

婦人技藝材料

営業目録

袋物、造花、刺繍
摘み細工、果實、瓶細工
編物、器具並に材料

東京市本郷區弓町二丁目
倉持商店
電話下谷三五一三、振替貯金口座壹七壹壹壹

此切取を添へ御申越しの方へは美術技藝の栞並に定價表無代進呈す

（○女學世界十一月號）

洋画講義録
繪画講習録

當代一流大家數十名執筆、會費各冊六錢、一ヶ年卒業、規則無料進呈

東京市麻布飯倉四丁目
大日本繪畫講習會

水彩畫を始め油畫木炭畫肖像畫ペン畫等を頗る詳細に講述す毎號美麗なる挿畫數多あり

日本畫の技術と學科とを平易懇切に教授し初學者と雖忽ち上達せしむ毎號着色繪畫多し

洋画材料品総目録
無代進呈

百餘箇の精衛なる圖を挿入したる詳細目録は御一報次第郵税を要せず無料進呈す可し好畫家必携の好冊子也

●子を持つ親 病人ある家人は是非必要特許品

定價●乳兒用九拾五錢●中人用壹圓貳拾錢●大人用壹圓九拾五錢（特別製品各拾五錢上り）

小便袋 ね



送料各拾錢

衛生最良徳用輕便れ小便袋は洗濯の世話なく手數を省き小便は袋の外へ洩れず蒲團を汚す事なく常に清潔なればれ 小兒病人 老人の最も必要にして、おきたちすわり等に毫も差支なきは本品の特長なり（男女の區別あれば御注文の節御注意を乞ふ）

ルーデーサック
十二個 五十錢 廿五個 一圓
六十個 貳圓 送料 八錢

子宮サック
特製 七十錢 二個 一圓廿錢
三個 一圓六十錢 送料 八錢

注文切手代用一割増

發賣元 大阪市北區堂島濱通壹
和泉屋商會
振替口座大阪八三壹〇番



鉛氣ない
白の
高尚な
大學白粉
荒れたる肌も美しくなる
大學化粧水

蘆雁



跡見花蹊女史

霜枯



加藤南山筆


秋風爽やかに亘りて
外出多き時期となりぬ
交際の第一の心得は
容姿を整ふるにあり
氣高き粧ひに
缺かされぬ
「御園白粉」
「御園化粧品」を
忘れたまふな
御園白粉製造本舗
東京芝
伊東胡蝶園
御園白粉發賣元
東京橋町
丸見屋商店

女(への一)



ヴィノオリヤア會社
大英國皇室
撰抜御用品
DIEU ET MON DROIT
VINOLIA
ヴィノオリヤアクリーム
ヴィノオリヤア香水
ヴィノオリヤア白粉
ヴィノオリヤア歯磨
ヴィノオリヤア石鹸
交際場裡に名高き舶來のヴィノオリヤア製品を愛用せば起臥に爽快にして艶麗なり
日本代理店
神戸、クローザー商會
VINOLIA POWDER
倫敦　巴里　紐育

婦人世界

第拾參號
一冊拾五錢
郵税一錢五厘

拾一月一日發行

◎夜店に足袋を賣つた良人の貧乏時代……梅博士未亡人

◎女學生に讀ませる書物と禁ずる書物……三輪田元道

◎小兒病の豫防法……加藤博士

◎顏に似合ふ髮の形……桑島千代子

◎日本一の若い産婆……村田阿栗子

◎結婚前の理想と結婚後の實際……鈴木新夫人 齋藤新夫人

◎蛤御門の戰に遭つた當時……中村母堂

◎五百里の遠國から苦學したさに上京した少女……昇よし子

◎口癖のやうに頭痛がするといふ婦人あり……大木醫學士

◎筋骨を强壯にする食物……弦齋夫人

◎新聞呼賣の貞女……萩原志計野子

◎私の今日あるは我が妻のお蔭……男爵 石黑忠悳

◎我が國の婦人は斯くまで贅澤になれり……村井弦齋

東京京橋南紺屋町十二
郵便振替口座三三六番

實業之日本社

令嬢鑑



池田邦子（横濱植木株式會社長池田謙藏氏令娘）
物集和子（文學博士物集高見氏令孃）
三岡咲子（紳商三岡丈夫氏令孃）

京華高等女學校遠足會







京華高等女學校は十月五日の好晴をトし神奈川縣本牧へ秋季遠足會を催ふし同所なる原氏別邸の庭園にて半日の淸遊を試みたり 上圖は一行が横濱停車場より絹糸檢査所へ向ふ光景、中圖は原氏庭園小山にて淸遊の光景、下圖は同上庭園内の古代建築物前の休息所。


文明的衛生薄化粧料としては、
水晶おしろいが一番よい
のです透明した水のやうですが、
附けるとすぐほんのりと白くな
り素顔の美しいのとしか見えません
で御婦人方に限らず紳士方も
盛んにお用ひになります
………（定價金三拾五錢………二拾五錢）………
特製水晶おしろい
盤町 大和屋

（その二）

正二位伯爵 東久世通禧閣下書　文學士北村忍堂先生閲

米國理學博士 高波武右衛門先生序　古屋鐵石先生著

新刊

學理應用 家庭禁厭術（かていまじなひじゆつ）

迷信にあらず心理哲學の應用で如何に不思議の効能あるかなきか御ためしを乞ふ

（菊大版壹百拾頁 寫眞版木版挿入）價郵税共四十四錢

催民術ヲ授治療所 精神研究會 東京芝區愛宕町一の二 電話芝二一九三四 振替東京二三三五二番

取次大賣捌 東京神田表神保町東京堂

目次

驚天動地

◎逆上を治する禁厭
◎頭痛を治する禁厭
◎頭腦を明快にする禁厭
◎神經質を治する禁厭
◎神經過敏を治する禁厭
◎依卜昆垤里を治する禁厭
◎癪病氣を治する禁厭
◎齲齒を治する禁厭
◎女の經水を縮むる禁厭
◎暑氣に當らぬ禁厭
◎流行病に感染せぬ禁厭
◎船車に暈はぬ禁厭
◎注意力の散漫を防ぐ禁厭
◎狂人を治する禁厭
◎半身不隨を治する禁厭
◎ひきつりを治する禁厭
◎癲癇を治する禁厭
◎食傷を治する禁厭
◎胃病を治する禁厭
◎幾夜眠らざるも眠からぬ禁厭
◎汗をかゝぬ禁厭
◎辛苦を忘るゝ禁厭
◎物忘れせぬ禁厭
◎眼中の塵をとる禁厭

不思議

◎夜思ふ時目を覺す禁厭
◎優等で學校を卒業する禁厭
◎女に外情あるを現はす禁厭
◎子なき婦人子を設くる禁厭
◎男の嫉妬深きを止むる禁厭
◎女の嫉妬深きを止むる禁厭
◎亭主の妾を去らしむる禁厭
◎思ふ女に緣ある禁厭
◎思ふ男に緣ある禁厭
◎緣遠き者に直に緣ある禁厭
◎男女和合の禁厭
◎家内安全にして人に敬愛せらるる禁厭

妙

◎商賣繁昌する禁厭
◎名譽を萬世に輝す禁厭
◎不幸不運の人を開運せしむる禁厭

珍奇

◎貧乏人富貴になる禁厭
◎百日の中に我思ふ事の叶ふ禁厭
◎一生涯美衣美食にて居らるゝ禁厭
◎腸病を治する禁厭
◎便秘を治する禁厭
◎心臟病を治する禁厭
◎肺病を治する禁厭
◎〃熱を去らしむる禁厭
◎眼病を治する禁厭

愉快

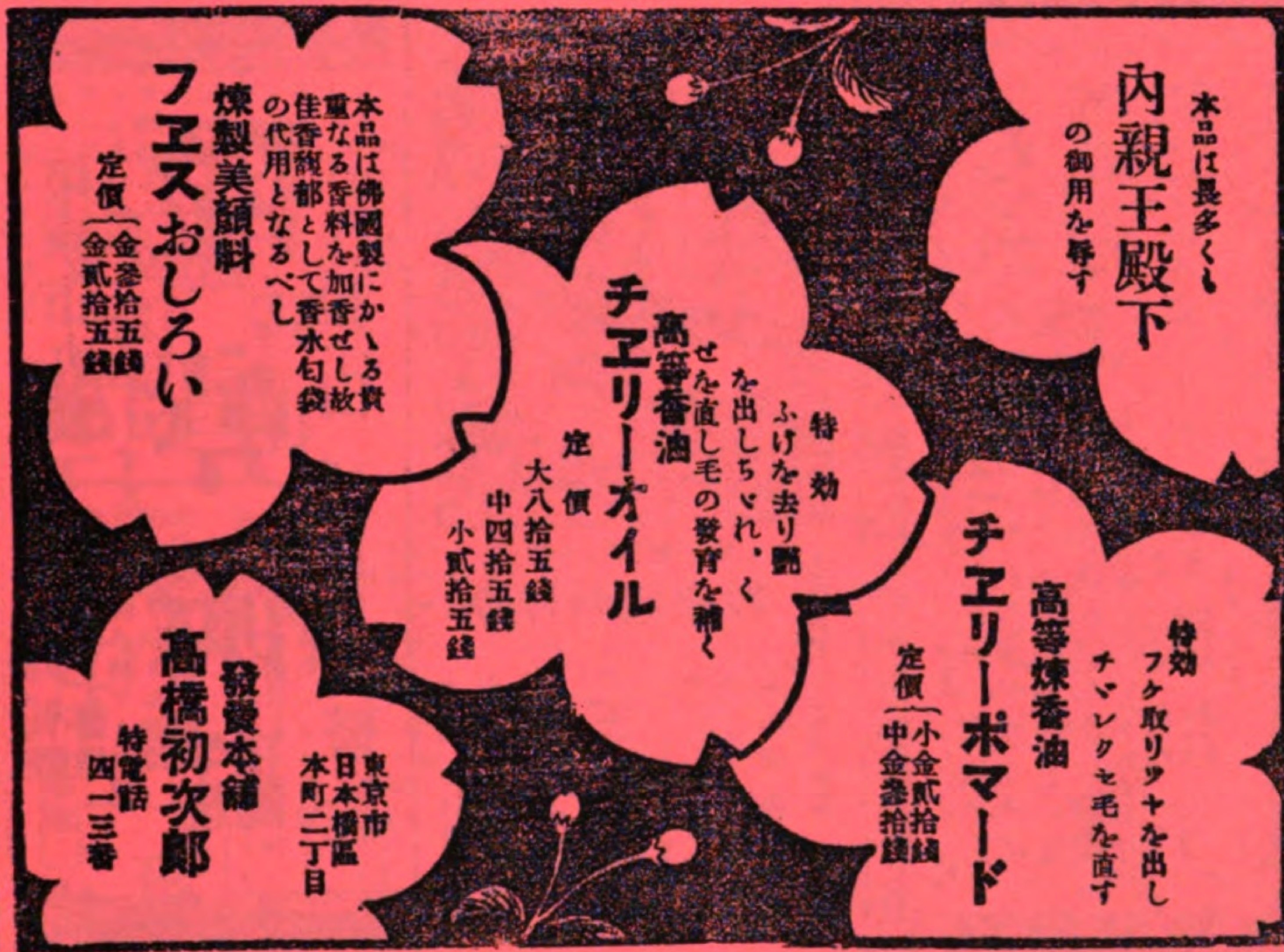
◎大吉事を來らしむる禁厭
◎惡夢を吉夢に轉ずる禁厭
◎無學者大學者となる禁厭
◎年中愉快に面白く暮す禁厭
◎上戸を下戸となす禁厭
◎嫌ひなる者を嗜になす禁厭
◎醜貌を美貌となす禁厭
◎錢を出さずして愉快を買ふ禁厭
◎武官となつて名を擧げる禁厭
◎文官となつて名を擧げる禁厭
◎長居の人を早く歸す禁厭
◎思ふ人を自分の室へ來らしむる禁厭

男女和合

◎逃亡人の足を留める禁厭
◎夜道して災難なき禁厭
◎海川を無難に渡る禁厭
◎方位の祟を除く禁厭
◎生靈と死靈とを除く禁厭
◎一日無事で暮す禁厭
◎色魔除けの禁厭
◎盜難除けの禁厭
◎盜まれし品を現はす禁厭
◎蜂にさゝれざる禁厭
◎蝮蛇に喰ひ附かざる禁厭
◎蛇防ぎの禁厭
◎蟻除けの禁厭
◎たんせきを治する禁厭

惡魔除去

◎喘息病を治する禁厭
◎痢病を治する禁厭
◎梅毒を治する禁厭
◎癩病を治する禁厭
◎黄疸を治する禁厭
◎蛇除けの禁厭
◎蚤虱衣服又は布團を去る禁厭
◎馬繋がずして逃げざる禁厭
◎膽力を大きくする禁厭
◎陰鬱者を磊落者とする禁厭
◎神經衰弱を治する禁厭
◎吃音を治する禁厭
◎噺上手となる禁厭
◎齒痛を止むる禁厭
◎腦病を治する禁厭
◎強迫觀念を治する禁厭
◎歇私的里を治する禁厭
◎神經病を治する禁厭
◎記憶減弱を治する禁厭
◎脚氣を治する禁厭
◎僂麻質斯を治する禁厭
◎頻小便を治する禁厭
◎不眠を治する禁厭
◎烟草を嫌にする禁厭
◎金滿家となる禁厭
◎理想の配偶者を得る禁厭
其他尙百餘の禁厭法揭載


本品は畏多くも
内親王殿下
の御用を辱す
特効
フケ取リツヤを出し
チヾレクセ毛を直す
高等煉香油
チヱリーポマード
定價（小金貳拾錢
中金参拾錢
特効
ふけを去り艶を出しちゞれ、くせを直し毛の發育を補く
高等香油
チヱリーオイル
定價
大八拾五錢
中四拾五錢
小貳拾五錢
本品は佛國製にかゝる貴重なる香料を加香せし故佳香馥郁として香水匂袋の代用となるべし
煉製美顔料
フヱスおしろい
定價（金参拾五錢
金貳拾五錢
東京市日本橋區本町二丁目
發賣本舗
高橋初次郎
特電話四一三番


於内外博覧會名誉大賞及金銀牌受領
元和二年創業
ヒゲタ印醬油
HIGETA SHOYU
THE CELEBRATED JAPANESE SAUCE
TRADE MARK
Patronised by the Imperial Household Awarded First Class and Gold Medals and Grand Prize at the various International Exhibitions held at home and abroad
The Oldest Establishment of its kind in Japan. Founded in 1616 by the ancestors of the present proprietor G. TANAKA Choshi, Chiba-ken, JAPAN
宮内省御用達
ヒゲタ印醬油
千葉縣
田中玄蕃醸造
銚子港

クラスメート





新婚の人





右陸軍步兵大尉　筒井正雄氏夫人楠子

左陸軍大學教官步兵少佐　津野田是重氏夫人菊惠子

於内外諸博覧會名譽賞牌各種受領

專賣特許 連動蓄音器

新案 重函蓄音器

各種



獨逸國ライロホーン、ウエルケ會社東洋一手販賣

舶來ライロホーン兩面音譜多數着荷

ライロホーン新曲譜 正續合本 實費金參拾五錢 送料金四錢

○御不用の蠟管有之候へば便宜御引取可申候

東京市銀座一丁目 長電話新橋九七九 四二〇四 振替口座東京六四二五

東京市淺草區竝木町 長電話下谷九八八 振替口座一九八八四

大阪、博多、小樽





定價表歌目錄御一報次第無料贈呈可仕候

新案特許 喇叭無し重函蓄音器



TYPE MN

YEN85.

三光堂

化粧タオル

色白く艶よくなるタオル

天下到る處に販賣す

製造發賣元 壽 山崎商會 大阪順慶町

郷友、學友、戰友、諸君の應援を祈る。 商會主 山崎壽雄

天長節の御化粧は

「化粧タオル」にて美顔法を行ひ

素顔の艶麗を發揮するに限り升

⊙御入用の御方は至る處の化粧品、薬店、小間物店へ御注文有りたし

如何なる化粧料、薬品を用ひても効なき人はこの化粧タオルを以つて美顔術を行ふべし。奇効壯烈、色を白くし艶を好くし「ニキビ」を治し「シワ」を延し醜顔を美顔に變ずる掌を返すが如し。全國至る處の有名なる各呉服店化粧品部を始め賣薬、化粧品 小間物店、洋品雜貨店等にて販賣す。

定價

(壹號美顔料二百日分付)	金五拾錢	商品見本金四錢
(貳號美顔料百日分付)	金卅五錢	同 金貳錢
(美顔料のみ)	金四拾錢	同 金貳錢

⊙販賣御希望の御店は各地御取引の問屋へ御申込有たし

美人となる遠慮御無用直に試みられよ

女(ちの二)

飲む丈血になる

ボビナイン

病者は藥を飲む前に先づボビナインを飲め

▲總ての病者は藥物的療法を行ふと同時に滋養療法を行はざるべからず、然らざれば如何なる名藥も其効甚だ尠なかるべし

▲ボビナインは以上の目的に最も適合せる滋養品にして歐米にては廿餘年前より貴重なる滋養品として賞用せらる

▲血と肉とを構成するボビナインは生牛肉中に含蓄せる總ての滋養分を最も嶄新なる方法に依り其性質を變んずることなく抽出したる理想的滋養品なり

▲ボビナインが幾多滋養品中傑出せる所以は消化吸收力の速かなることにして如何に胃腸の惡しき人又弱き人にも直に消化せらるべきを以て幼兒の滋養品として牛乳に滴下し用ふる時は其効最も著るしかるべし



大瓶 二圓十五錢
小瓶 九十五錢
送料 一本八錢

▲一 適症 貧血、神經衰弱、産前産後、小兒の發育不良、食慾消失、肺結核

▲一 服用 法はサイダー、牛乳等に混和して用ふる時は尤も妙なり

▲一 各地 到る處の藥舖、洋酒店にあり ●説明書御報次第進呈

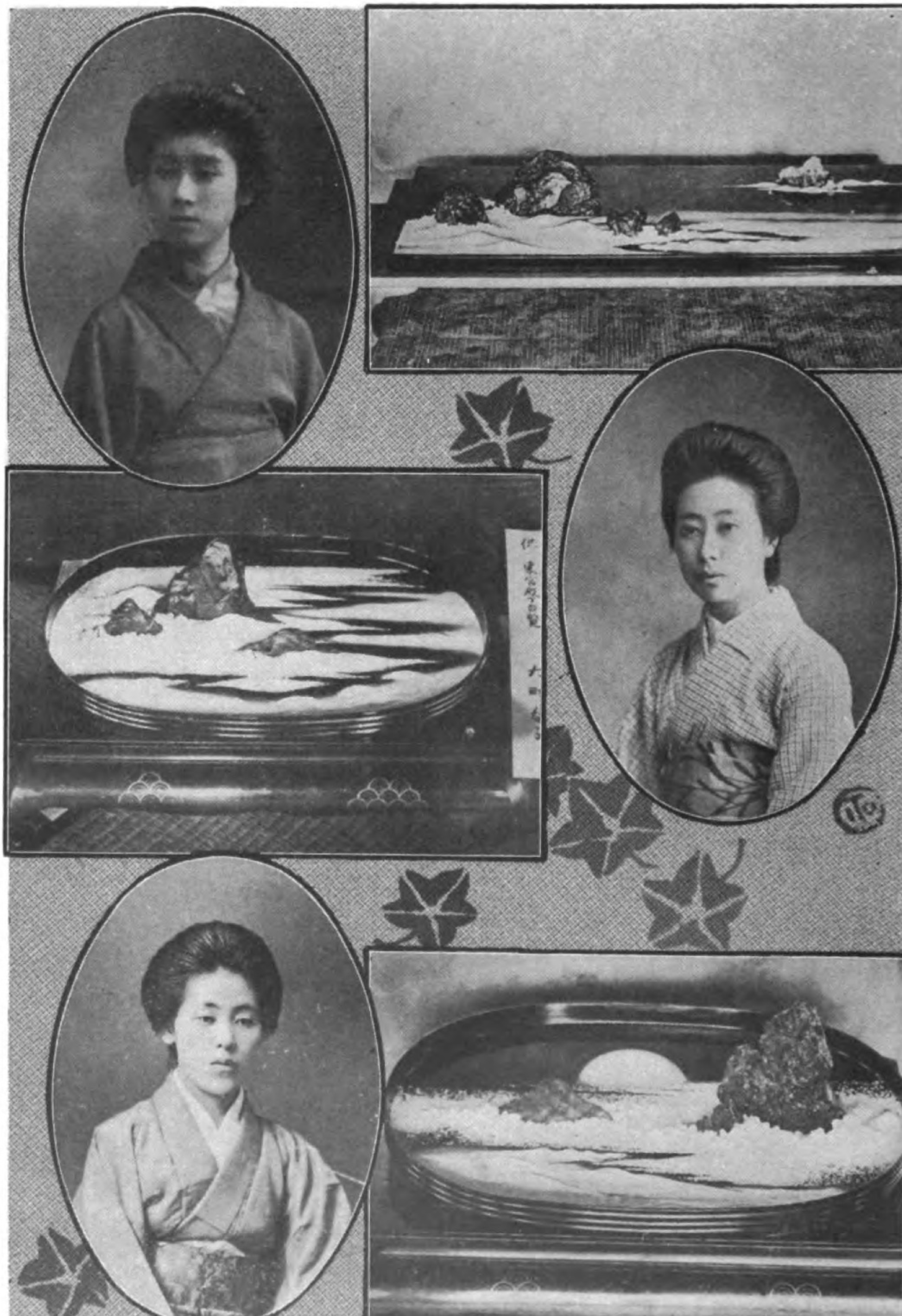
ボビナインは飲むだけ血になる滋養品なり

日本總代理店

横濱市境町二丁目

藥種貿易商 合資會社 友田商店 振替口座東京一九三八番

細川流盆石



圖は細川流盆石教授渡井菊坪氏社中の人々と其の作品にして、上段は大町春子女史、作は「吹上濱」、中段は長岡文子女史、作は「浦の初島」、下段は小林春子女史、作は「緣波浴紅暾」なり

安南の婦人風俗



上段右は女行商人、左は下流婦人の様子、中段は娼友達　下段右は女の米搗の勞働に從事する所、左は上流の娼なり、

化粧香水　プラチナ



八方美人の香水！

世に香水の數は山々あれど悉く一品一効で人の鼻を衝くだけの効能さい持つて居ないが此のプラチナ香水は

◉ハンカチーフに一二滴たらして持てば終日香氣を保ち

◉微温湯に滴らせば乳白の化粧水と變じ

◉顔を洗へばニキビ、ソバカス、吹出物を全治し

◉頭髪に塗抹すれば毛髪を養ひ香氣馥郁香油の代用をするのみならず髪のくせを直し赤毛白髪を防ぎます

故に人は本品を「八方美人香水」と云ふは尤なる次第である

定價壹瓶三十錢▼郵券代用一割增遞送無料

發賣元　東京日本橋横山町一丁目　近江屋　天野源七

電話浪花八六三番　振替口座五九三三番

御婦人用流行帯留

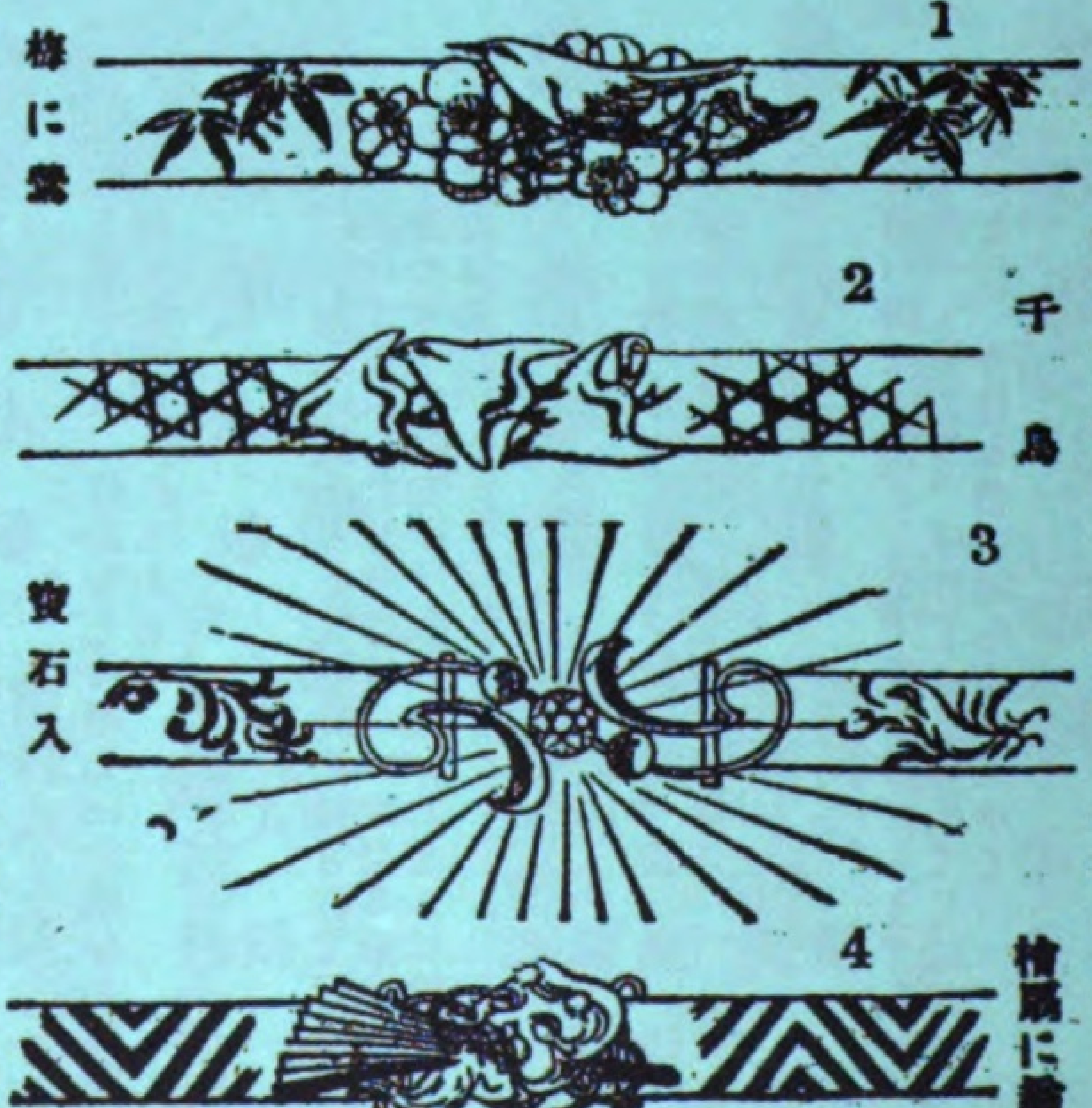
(1) 十八金製金廿四圓以上金廿六圓

(2) 十八金製金十圓五十錢以上金十二圓

(3) 十八金製眞珠ルビー金廿八圓以上　眞珠ダイヤモンド入金五十圓以上

(4) 十八金製金十三圓以上金十五圓

銀赤銅製金壹圓以上金五圓其他各種



遞送料内地十二錢臺灣滿韓卅錢郵券代用一割增

東京市京橋區南傳馬町三丁目

美術貴金屬細工及袋物商　丸屋商店

電話本局二十番　振替口座九五八六

女(りの一)

梅どく りん病 ぢ疾症 わきが 生殖器諸病 神經衰弱症 婦人科

東京淺草瓦町廿八淺草橋通瓦町電車停留場横●朝八時より夜九時迄

中央醫院

子宮病 子なき人 月やくとまりたる病 ヒステリー 血の道

梅どく諸病 りん病消渇 わきが ぢ にきび た蟲等

神經衰弱 記憶力減衰 其他生殖器病一切

▲病狀を記し郵券六錢を送れば其病を速治する專門醫中央醫院々長處方の特効新藥說明書を送る

東京淺草區瓦町廿八番地淺草橋通り瓦町電車停留場横

中央藥院

三四ヶ月の滯りも安全に流經し

月經不順を整へ 不順より發する子宮病、血の道を全治す

月さらへ

月調（げっちょう）

最新錠劑 川本先生の新發見 小野先生實見證明

▲本劑を持藥とせば月經前後に腰或は子宮の痛みなく毒血惡血を下し子血病血の道に罹る憂なし

▲貳錢券送付の方に治療衞生等詳記せる册子を呈す

藥價

五十錠	六十五錢
壹百錠	一圓十錢
貳百錠	二圓
特製四百錠	四圓
同六百錠	六圓

●全國送料無料

申込所 東京市京橋區南鍛冶町三●東藥味調劑所

IVORY SOAP

アイボリー石鹸

Procter & Gamble, Cincinnati

日本輸入品に限り包裝紙に斜に「**アイボリー石鹸**」と記入し一見模造惡質石鹸と判別に容易ならしむ御購求の節「**アイボリー石鹸**」に御注意を乞ふ

◎**產婦人科**　宅診　午前

◎**小兒科**　往診　午後

病室並ニ產室ノ設備アリ隨時入院ノ需ニ應ズ

院長　女醫　鷲山彌生

東京市麴町區飯田町四丁目卅一番地　電話番町（一一二五七）

東京至誠病院

女學世界

十一月號

第拾巻第拾四號



出來さうで出來ぬ事

棚橋絢子

▲正月のお飾りは暮の内

一家の主婦は年中目にも立たぬ詰らない仕事ばかり爲て居つて、その仕事は至つて容易く誰にでも出來さうに思はれますのに、この仕事を滿足に爲し得る主婦の極少いのはどう云ふ次第でございませうか。殊に近頃は家政學と云ふ結構な敎育を受けた婦人が續々出來るのに係らず、却つて昔の婦人より實地の成績が劣ると云ふ不思議な現象もございます。畢竟昔の婦人は家庭の細務を後生大事に自分の責任と心得て居たのですが、新敎育を受けたものは趣味が多方面に渡るので日用の細務はお留守になる傾もございませう。併し家庭の細務が滿足に出來ないでは女の價値が何處にありませう。細事が滿足に出來ぬのはお正月の飾を暮の内に爲る心掛がないからでございます。お正月の飾を暮の内に爲て置かぬやうなものは家事以外のことも滿足に出來る筈はないのです。

▲雪隱で解る主婦の注意

他家へ參つて主婦の注意の度が一番よく分りますのは臺所でございますが、極懇意の間柄でなければ滅多に臺所へ入る場合もありませんから一寸分り兼ますけれども、雪隱へ入て見ますと大抵解るものでございます。隅々に蜘蛛の巣も無く床板のシミや隱しの周圍の汚れが少しも見えず、手拭もさつぱりとしてある家ならば必らずその主婦は手廻しよき人でございます。尤も下女を幾人も使ふ家ならば手の廻るのも當然ですが、子供を抱へ手一つで便所をさつぱりと致して置く主婦ならば他の注意を推することが出來ます。

▲大事にならぬ内

洗濯盥の内外に石鹸がこびり附て木目も分らず、白い物でも洗ふには心地が悪いので先づ盥磨から掛らねばならぬと云ふ風では却々臆劫になります。附着した石鹸滓も直に落せば容易く落るものですからゆすいだ水をあける時、手で中を一寸摩りながら排水して雑巾で周圍をスーッと拭てさへ置けば何時も清潔になつて居ります。洗濯した度に斯ういたせば何の手間暇要らぬことですのに洗濯盥の清い家は少いやうでございます。又多人數の家族で時候の變り目なぞにあちこち着物を着替へます時、又今に着るのだからとてその儘にぶら下げたり、積上たりして置ますと段々納戸が狭くなり、遂に客座敷の方へ道具類を持込で床の間の上まで物を載せると云ふ醜體を演ずるやうになります。脱だ物は直ぐ塵埃を拂つて疊み一寸引出か戸棚へ藏つて置くことは何でもないことでせう。又積んだ着物が曲つて居たり竪横になつて居たりするのは見苦しいものですがこれも一寸の手先の注意でチャンと出來ますし、戸棚の掃除なぞも特別となれば大事業ですが毎日の日課といたせば極容易であります、何でも大事にいたらぬ内に始末して置けば時間も勞力も省けるのでございます。

▲私の仕事は茶の湯の如し

私が毎朝自分の部屋の掃除、顔洗ひ、髪とかしなどをいたす順序は印刷したやうに定つて居りますから時間はたんと掛りません。假令は夜具を藏ふ前に必らず夜具戸棚をはたいて空拭いたします。夜具を入れぬ内にいたせば至つて簡單なものでございます。洗面は溜塗の盥の中へ金盥を入れ疊の上でいたしますが。手の使いやうで一滴もこぼれません。而してこの洗面器、

水差等を收める戸棚もこれらを取出した際缺さず拭て置きます。かやうにいたしますと戸棚の中の何處を探ても塵一つ手につきません。私は何事でも始めにとつくりと順序を考へて置きチャン〳〵と履行しますので、見習に參つて居る者が「先生の朝から晩まで爲ることは丸でお茶の湯のやうです」と申して居ります。

▲內外相待べし

心を正しくするのには周圍を整頓いたすことが必要です。如何に高尙な理想を抱いて居つても自分の居間が引繰返るやうになつて居りましては行儀も亂れ頭腦もごちや〳〵といたし折角の理想を打こはされて了ふものでございます、殊に女は周圍に化せられ易ふございますから先づ足元の整理から始めるに限ります。家の內外をキチンと片付けた時は精神がはつきりとして自信の念を生じ百善の基となるものでございます、內外相待つと申すことは一番肝要でございませう。

▲習ふたことは悉く活用すべし

新教育を受た婦人が家事に疎いの、實用に適せぬのと評されますのは、各自が習つただけのことを活用しないからだと思ひます。私は處女時代に受た教育を時勢の變化に應じて悉く活用して參りました。裁縫は申すまでもなく算盤等も窮境に處しての職業に應用いたし、實業に縁遠き琴曲三絃なぞも敎員となつた際音樂の耳を助けるのに用ゐました。俗曲なぞも唯それのみの修養では餘り活用もしませんでしたらうが。宮商角徵羽の調を心得て耳を養ひましたから大に悟るところがございました。昔の敎育でも工夫一つで結構今日に活用することが出來ますのに時代に適切な敎育を受けた者が寶の持腐れを爲せますのは誠に意氣地なき次第だと存じます。

▲利器を持てるに油斷すべからず

科學の進歩と共に家庭の仕事は日に月に便利な方法を供給され、炊事洗濯等も化學的方法で一氣呵成に片付きますから、薪を切て薪を燃やし、重い釣瓶で井水を汲上げ糠汁で丹精した昔の婦人を考へますと憐れなものでございます、今の婦人は實に昔の婦人の三倍も四倍も仕事が出來る利器を持て居るのです。併しこの利器を持て居るからと申して油斷しては素手で働らいた昔の婦人に負て了います。藥品で洗濯するのも下女任せに爲て置けば地質を痛めること非常ですし、瓦斯竈を不注意に使へば費用が意外に上り掃除を怠れば新竈より惨澹たる有様となります、舊式の燃法でも旨い定則が立つて居るのですから取扱ふ者の技術と注意で結構な利器となり新式を凌ぐこともありませう。何の利器も持たなかつた私の逆境時代に盲目の良人と子供を抱へて敎員を勤め人手を借りずに通しましたけれども竈元も棚もチヤンと清めて磨いた桶類を列べ出勤の留守中誰に臺所を見られても恥かしくないやうに出來ましたのも常に油斷と云ふ大敵と戰つたからでございます。私は理窟だけを人に話すのは嫌ひで、自分がこれまで實行したことを話すのですから私の申すことは心掛一つて皆さんに必らず實行出來ると存じます。

○着實至便の通信販賣

世間に實賣する凡ての物品を郵便にて注文を受け、其爲めに應ずる營業でメールオーダービジネスとて、歐米各都府で盛んに行はるゝも我國では近時是に似寄の事業を、二三の新聞社で代理部として兼業するに過ないが、今度東京日本橋區本町一丁目に開業した博通社は、我博文館とは異名同體で、有力なる各營業家及各專門技術家と協力一致し、本館發行各雜誌を始め世の廣告機關と交通機關を應用して、遠地の需要者に一般日用品を、市價より極めて安く供給を圖るといふ最も斬新な事業であるから、今後地方及海外に在る人々で、中央都府の流行品及び世間で評判の好い品物を買ふには、至大の便利であらう。又同社は精良品なれば多くの場合に同社にて廣告費を負擔し、賣弘め方盡力する方針であるから、製造家の爲めにも多大の便利であります。

二十年前の女學生と現今の女學生

前明治女學校教頭　星野天知

星野氏は我が女子教育界の明星であつた明治女學校に教鞭を執られ、當時幾名の英才を薫陶された精神教育家でございます氏は今日鎌倉で有名な書法會を建てゝ居られますが、記者は其出張所の三田四國町二番地の實修會で此お話を伺ひました。

二十年前の女學生と今の女學生との比較も餘り珍らしくないでせうが、私の實驗を少しお話して見ませう

二十年前の女子教育は極のバンカラでなければ純米國式でありましたから、ゆきの短い筒袖に縞の袴と云ふ壯士風か、眼玉の青くないばかりの、齒が浮くやうな女學生ばかり、美術なるものが分らないで家庭向には緣遠いものばかり出來さうなので教育家も追々心配するやうになりましたが、私は日本固有の武術を科目に置いて內が沈着で外が溫厚な大和魂といふものを女學生に吹込たいと考へ始めたのです。

▲心理學と武術の連絡

私は元來武術に據つて心理に關する研究を可なりやつた方ですから、情操の堅固な態度の溫淑な婦人を養成するのに武術の教育が非常に力あることを、昔の婦人や自分の研究に照して確信して居ました。で先づ純米國式の明治女學校に勸めたところ其校主の巖本君(善治氏)は頗る怡んで、早速私に教授を賴むと言ひましたが、私は實地教授までやる暇は無かつたが、さりとて所說を實効に現はして見せねば成らぬ覺悟があるから、自ら手を下して薙刀と柔術を教へました。

而してこの實習に伴ふて私が心理講義をしましたの

で、生徒はよく武術の意味を了解し精神修養に餘程利益しました。薙刀にしろ柔道にしろ蠻力を振つて敵を倒すために學ぶのではない、自衞の道を覺え膽力を練り、事に臨んで少しも動せぬ大和魂を養ふために學ぶのであつて、この魂が据れば妻たり母たるの節操は自から具はり、平常の立居振舞も靜肅になつて本當の女らしくなるものです。併しその頃の社會には頗ぶる歡迎されなかつたもので、一二度催した會なぞも新聞記者から攻擊を受け、外國人には女が大の男をころりと投げ得られる理由はないなぞと批評されました。ところが今日になつて各學校に大分流行して參り私の理想は實現されたやうな次第ですが、唯惜しいことに今日のは形式だけで腹が出來て居ない。聊か兒戲に近い觀があるのです。

▲今の女學生を觀察した動機

明治女學校を退ひた後も女子敎育に趣味を持つては居りましたが、敎育の普及するに從つて私立學校は追々平均敎育法の制に從はなければならぬやうになり、個人敎育は非常に困難になつて來たのです。昔は豪い生徒を作りたいと云ふ目的であつたのが今日は豪い生徒を拵へては不都合になつた。と云ふのは十中に三位しかない勝れた生徒を力だけに進步させると多數の平凡な生徒のために敎授上不都合を生ずるからどうしても勝れたものを壓へて置かなければならぬ。それで五目飯のやうな、學科をチビリ／＼と敎へて普通敎育と稱してお茶を濁し、餘り生徒の優劣がつかぬやうに爲て置くと云ふ工合です。この場合に徹底した精神敎育法を自分一人で心配して見たところで追付ません、然るに日本の女子が交際の先驅として最も大切な書翰といふものが近年全然忘れられたか、其下手に成つた事は夥しく。一家の主婦として品位を保てぬ程の惡筆に

成って來たのを遺憾に思つて、どうか早く上手にする工夫はあるまいかと數年研究した結果、今日の書家や習字の先生などが夢にも氣の付かなかつた弘法大師の秘傳といふ速成法を探り當てた、さらば此方面で女子教育の一部分に盡力しやうと種々敎へ方を研究して終に今日の習字教授に着手したのです、それで鎌倉女學校や牛込の專修女學校を創立して之を實行し始めた爲め再び女學生を取扱ひましたので計らず二十年前の女學生と比較する機會を得たやうな次第です。



▲昔の物質家が今の思想家

二十年前の女學生は殆んど思想家ばかりと云つても良い位でしたから偶に物質的の女學生があると非常に目立つたものでした。或一女學生なぞは文藝の天才はあつたが奥深いところが頭腦に無いから服裝や髮飾に於ける審美眼は鋭敏であつたが天然に接する力はなかつた。私はいつもこの女を淺薄な物質家として遇して居ましたが、今日では誠に中庸を得た婦人となつて淺薄に見えなくなつた。否淺薄に見えぬのみならず確かに現代の女學校出よりずつと思想家に見えるのです。他に未だ幾人も實例はありますが、二十年間に婦人が物質に捉はれた度がよく分ると思ひます

▲進歩か退歩か

二十年前の女學生は、敎師が一の問題を出すと飢ゑたものが食を求めるやうに競ふて腹へ入れ怡んで咀嚼したから消化が良つて滋養分が身體によく廻つたけれども、今の女學生は敎師が御馳走を列べてサア喰べろ喰べろと勸めても食慾がないし、嫌々喰べるから少しも消化しないのです。二十年前の女學生は一鄕一村の名士の娘で、どうか豪いものになつて父祖の名を續ぎたいと云ふ意氣込のものばかりであつたから、目的を尋ねると各々符節を合したやうに豪いものになりたいと即答したのですが、今の女學生は嫁入道具のために親に勸められたり、友達に誘はれたり或は友達の學生風を羨んだりして入學した位の連中が多いのですから偶々意向をたゝいて見ても返事にさへまごつくものばかり實に浮華〳〵としたものです。併し今日の女學生は如何にしてパンを求めんかと云ふ問題に就ては著しく鋭敏なもので如何にして人物にならんかと考へて居た昔の女學生の氣風とは同日の論でありません。女學生は實に社會の推移の代表者でせう。この現象を敎育と云ふ意味から考へたら退歩したと云ても差支な

いでせうか。今の妻君にお誂へ向の人間が出來るのです。但し腹が据つて居ないのですから一朝變つたことに出遇へば直にヘタ／＼になつて無教育の婦人と選ぶところがなくなるのです。

▲當にならぬ評判

某女學校の卒業生の案外賣口が遠くつて何時までもごろ／＼して居るのは事實ですが、實力が無のに頭腦が妙な方に向上して居るので始末が惡いのであらうと思ひます一寸教師に賴んで見ても却つて普通の女學校卒業生の方が力があるやうで、畢竟理想ばかり進んで秩序的の研究を爲て居ないからでせう。學力の評判も當にならぬものです。墮落の評判も當にならぬものです。先頃八釜しかつた某女學校の墮落問題も醜業婦が警察眼を晦ます策略を顧客の好奇心に投ずる廣告のために此校の通學生となつて居たのだ相です。



▲墮落にあらず本性の現れ

近頃女學生の墮落々々と八釜しく評判しますが、墮

落ちやない、本性の現はれたと思ひます。昔の女學生は前にも申す通り一郷一村の堅固な家庭にある娘が志を立てゝ入學したのですから節操の堅固なのは當然でしたらうが、今の女學生の中には鎮守の祭に村の壯夫と戯れる權兵衞孫作の娘までが虚榮に憧れて入學したのも居るのですから彼等は機會に乘じて本性を現はすまでのことで、女學生になつた爲に墮落するのではありません、矢張良家庭の娘は何處までも結果が良いところを見ると墮落問題も心配するほどのことはなからうと思ひます。

▲乾燥した教育と自然派

乾燥した壓制な教育は現代の女學生に到底行はれぬ寧ろ流行の自然派を基礎として導いた方が有力であると云ふ説もあつて一應尤ものやうではありますが、これを一般に教育の方針とするのは不都合であらうと思ひます。勿論、個人同志が趣味的に研究して見るのは面白い良いことに相違ありませんが、これを小説や議論に堂々と掲げられるのは閉口で、況して教育となると社會の制裁と云ふことも考へなくてはなりませんから、乾燥な教育の必要も起るのであります。某女學校當りでは讀むべからずの小説類を生徒に申渡してあるので生徒は却つてこれを指針にして禁書類を手に入れ戸棚の中に隱れて讀むと云ふことを聞きましたが、これは壓制の惡影響とは申すものゝ兎に角隱れて讀むでほしい處があるのは、制裁のあるためですから、どうしても制裁は必要でありませう。



幼時に受けし勤儉の教育

跡見玉枝

▲多趣味な曾祖父と義侠な祖父

私の一家は聖徳太子から姓を賜はりましてより四十五代つゞいて居りましたのですが、四十五代目に男子の世嗣が絶えまして、おくまと申す娘に奈良の豪家から養子を迎へたのです。此おくまが私の曾祖母に當りますが却々しつかり者で郷里(城州木津村)に響いたものでございました。おくまさんの良人即ち私の曾祖父は非常に多藝多能な蹴鞠なぞは二月堂の石段を蹴りながら登つたと申すほどの名人で、多藝多趣味な爲めに生涯を風流三昧に暮したのでございます。斯樣な曾祖父の子に義侠な祖父が出來ましたので家運が傾き始めました。祖父は私財を投じて新道を作り水路を開通し、村から罪人が出ますと償金を出して赦免を乞ふたり、年中他人の事にばかり働いて居りました。而して祖母が又似た者夫婦でして、宮寺へ詣でた折なぞ憐れな者を見掛けますと、惜氣もなく晴着を悉皆脱いで裸體で歸ると云ふ樣な風でしたから、子女達がお母樣には伴を付けなければ出されないと申した位でございました。夫婦とも義侠慈善を仕事にして居ましたので、豪家と呼ばれた跡見家の財政は傾いてまゐつた譯なんでございます。併し祖父母の名は唯今以て郷里に殘つて居りまして、私共も其餘澤で郷人から敬重されて居るのでございます。

▲跡見家を再興せし伯母

祖父には三男三女がございまして長男は實業家となり次男(花蹊女史の父君)は書道を志して東京に遊學いたし、末男(玉枝女史の父君)は武術を修めるために矢張東京に出で女子も二人だけ東京に遊學いたしました。その内長男は早世いたしましたので、祖父がみまかります時に花蹊の父が歸郷して相續することになり

ましたが、その頃は祖父母の慈善捨財と種々の災厄のために財政が非常に困難になつて居りましたので、花蹊の父は家再興のためには第一に良妻の必要を感じ、百方選擇の上大阪の豪農天下茶屋の娘を貰ひ受けました。この嫁は世に稀れな賢婦人でよく良人の意を體し家のために身を粉に碎いて働らきました。花蹊の父は得意の道で寺小屋を開らきましたが嫁も又書を能くいたしましたので教授の手助をいたし、飲食衣服の節約を嚴重に守つて只管蓄財を勵みました。而して家を再興するには豪い人物を造らなければならぬと云ふのがこの婦人の理想でございましたから吾兒の中で尤も秀才と目を附けた花蹊には殊更心をこめて教育を施したのでございます。

▲蜆汁を御馳走と喜びし幼時

私が幼年の頃父は有栖川宮に供奉して東京から京都へ歸ります途中、宮様御不例のために府中に暫らく滯在することゝなり、父は歸郷する知人に陣羽織、陣笠等を托し委細を家族に傳言するやうに頼みましたところ、その知人が途中で病死いたしましたので、從者が委托品を携へて私の宅へ參りましたけれども肝腎の傳言が明分からなかつたものですから家族はてつきり戰死と速斷いたし、陣羽織陣笠は筐の品と存じて一同悲歎に沈み子女等はそれ〴〵始末を付けることに、いたしましたのは交通自在の今日から考へますと笑止な次第でございましたそれで私は花蹊の家に養はれることゝなり伯母は花蹊の妹を得たやうに喜んで萬事花蹊と同様に愛育してくれまして、私は書を花蹊から學んで居つたのでございます。私は幼時この伯母から勤儉の教育を受けたことは只今以て肝に銘じて居ります。衣類の質素は勿論、日々の食物も蜆汁を珍らしい御馳走と悦ぶ位で、魚類なぞは祭日でなければ一同口に入れませんでした。かやうな儉素な生活の中に藝術を仕込まれましたことは今日に於て多大の益を爲して居るのでございます。

▲年若くして兄の遺孤を引受く

戰死したと思ふた父は一年後に無事で家に歸りましたので私は家に戻り引續き畵を學んで居りました。父は武術の達人で暫らく槍の師範をいたし大の勤王家で天下の名士と深く交りを結び大村益次郎さんなどとは莫逆の友で『今日は大村氏と居合拔を爲て來たなぞとよく申して居りましたこの居合拔は双方お腹とお腹とを附き合せて長刀を引拔くのですから、技は勿論お腹の形も同じやうでないと何れにか怪我があるのださうですが、大村さんも私の父もお腹が布袋のやうに大きうございましたから居合拔の呼吸が至極宜しかつたさうでございます。父は自分の出世の出來ぬのを運命と諦らめ只管私に望を囑し、私の成長を飴引延すやうにまだるく思ふて居りましたが漸く芽を出さうと云ふ年頃になりまして相續人の兄が病死いたし嫂も引續き二人の幼兒を殘して死去いたしましたので年端もゆ



かり、私が孤兒と親とを荷ふために未熟の腕で女學校の書を教ゆる身の上となりました。何にいたせ三歳と二歳の幼兒を抱へて家計を立るのですから痩腕には却々骨が折れたのでございます。それから明治十九年に東京の職業女學校の方へ招かれましたが、待に待て居た父がその前年に歿しましたのは實に遺憾でございました。娘が臨終の際に兒供を官立學校に入れてくれと呉呉と私は頼みましたので私は相當の縁談を盡く斷り一身を犧牲に供して甥姪を丹精いたしましたが、仕合に兩兒とも良い性質で亡き親や私の意をよく奉じ甥は小學から美術學校卒業まで一日も缺席せず非常に勉強いたしまして唯今では先づ相當の地位を得ましたし、姪の方も高等女學校を卒へて良縁を得ましたので私もやつと一安心いたしました。私はかやうに幼時から不自由勝に育ち、犧牲的の艱難を嘗めましたので今日聊かのことにも嬉しく有がたく感ずるのでございます。

▲何へでも手を出して見たい方

私の趣味でございますか。餘り道樂が多いのでよく笑はれますが、一體何へでも手を出して見たい方でございます。ハイ謠曲は健胃劑に少しやつて見たのですし、仕舞も醫者にすゝめられて稽古いたしました私共のやうな座業には食前食後に汗の出る位仕舞をいたしますと餘程胃の工合が宜しいやうでございます扨こんなことでもやり始めて見ますと人様のを拜見する目だけは進みまして上手な師匠に就きたくなると云ふ工合で矢張相應に凝つて了ふのでございます手を出した内で一番物になりかゝつたのは燒畫位なものでございませう。燒畫は明治三十七年に亞米利加の博覽會見物に参りました折、場内で婦人が看客の需に應じてハンケチや椅子の飾蒲團に博覽會場の景色を燒畫いたして居つた盛んな景況を見まして我國婦人の新職業に適當だと存じ二ヶ月程滯在して大略方法を覺え、器械の見本を持歸つていわし屋へ注文いたしましたところ、米國のより工合がよくつて廉價なものが出來ましたそれで先づ宅の生徒に試みさせましたが燒畫には日本畫が

至極うつりよく實に雅致あるものが出來ますので追々好評を得、岡山の女學校なぞはこれを課目に置くやうになりました。

▲燒畫の淵源と應用

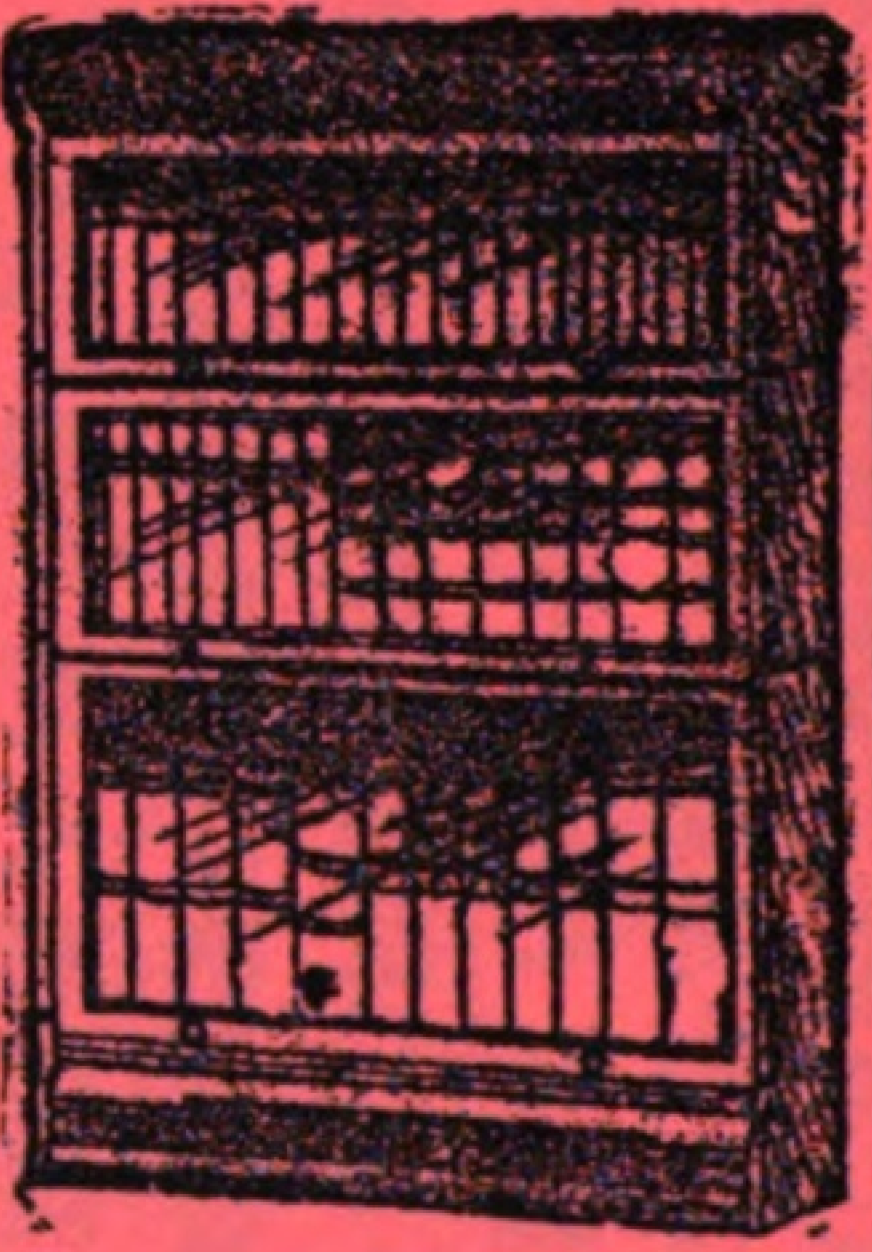
燒畫の器械はずつと昔獨逸で外科用に發明したのを近年米國で工夫して燒畫の器械に轉用したものだ相ですが一體燒畫は餘程古くから支那邊りに行はれたものかと存じます。私は近頃京都東福寺で聖武天皇の御物を拜見しましたがその内に伽羅骨の扇がございまして柄に精巧な山水の燒畫が施してありました。又嘗て岡



山の池田家で紫檀の表裝をした懐紙帖へ精巧な燒畫をいたしましたのと木彫人形の衣服に燒畫したのとを見ましたが何れも筆者は古い支那人でありましたこれらの例で考へますと燒畫は五百年以前から行はれたものかと存じます。淵源や歷史は兎も角今日日本で輸出品や内地の裝飾品にこの技術を應用いたすのは有望な仕事でございませう。木材ビロード等に認めるのが一番容易いので半襟肩掛盆食卓欄間なぞに施して優雅な飾りとなり、少し技術が進みますと日本畫用紙などにも出來ます。

● 最新式 最新形 **本箱!!!**

組合セ本箱（セクショナル、ブツクケース）



總高サ	三尺九寸五分
奥行	九寸四分
間口	三尺
櫻製	金參拾圓
欅製	金貳拾八圓
檜樫製	金貳拾六圓也
段函壹個代 櫻製	八圓也
段函壹個代 欅製	七圓五十錢
段函壹個代 檜樫製	七圓也
荷送費壹組	壹圓五拾錢
荷送費段函壹個	五十錢
地方運賃御自辨	

（一組）

▲歐米諸國に大流行のセクショナル、ブツクケースよりも數等進歩したるものにして其特徴を上ぐれば

▲材料に櫻、欅、檜等を精選し堅牢此上なし

▲形狀優雅にして色彩美麗なり

▲在來の本函と異り硝子戸は上部へ隱沒する仕掛なれば書册及帳簿の出入に便なり

▲壹組の組合せ本箱は積み重ねたる三ケの段函とトツプ（屋根）ベース（脚底）の組合せより成る

▲藏書の増加に從ひ段函の數を増加し之を上部に積み重ね四段五段の本箱と爲す事を得

◎說明書無代進呈

東京市銀座 大通新橋際 **新橋堂書店**發賣

（電話新橋三六七七番、振替貯金二〇〇番）

●村井弦齋著 ▲新刊▼

著者實驗 **痔疾の根治療法**

附 痔疾患者の養生法

定價六十五錢 郵稅八錢

是れは著者が例の通り親切に叮嚀に自家の實驗談を記述したものです

●村井弦齋著 ▲家庭改良の最良指針

増補訂正 **臺所重寶記**

定價金壹圓 郵稅十二錢 同臺灣淸朝卅錢

○臺所の衛生○臺所の心得○臺所の禁制五十條○臺所の器具○器具の磨き方○掃除の仕方○シミ拔きの法○洗濯の法○諸品の貯藏法○魚類肉類の手輕料理○野菜と果物の效能及料理○諸國の名物○臭氣除けの法○水と氷の使ひ方○害蟲除けの法○牛乳味噌等の扱ひ方○漬物の心得○米の擇り方○飯の炊き方等三百餘項あり総て臺所に必要なる智識此中に備はらざる事なし

◉著者の自序に曰く此書の記事は盡く我が家庭の實驗する所にして余は飽く迄も世人に親切ならん事を期すと、然り此の如く讀者に忠實なる書は世に多く得易からず

發行所 東京市麴町區有樂町二丁目 **報知社出版部**

發行元 東京市銀座大通新橋際 **新橋堂書店**

（電話新橋三六七七 振替貯金口座二〇〇）

女（六の一）

醫科大學藥學專攻　藥學得業士金澤巖著

肺病患者の福音

著者肺病全快の經驗と最近の學說に基き親切叮嚀に根治の法を詳述せし物也●郵券二錢封入申込者に無代施本

●東京市下谷區上根岸町　衞生書院

奏効確著
使用簡便

毛はへ藥

最新發見
責任製劑

多年の研究により効驗最確著にして使用簡便且責任ある本院獨得の新秘藥を發見す但往復はがきにて申込次第詳細を報す

■東京 日本橋通四丁目四　公仁藥院

●本法は 女髮結師安部歌子女史

ちゞれ毛くせ毛
二大奇方劑
毛はへうけあい

多年の實驗を經たる證明秘法劑にして是迄の使用者をして悉く滿足せしめたる奇劑なり往復端書紹介詳報す　世濟園

●東京市麴町區三番町六十七

■博文館圖書陳列所・館內にあり

やせる藥

乏血症●脂肪過多●小氣●便秘酒ぶとり凡てふとりすぎて御困りの方に害なく●やせて●中肉美容となる新藥なり試みたき人は郵券二錢送れ詳細報知す

東京市小石川區第六天町一七　池田製藥師

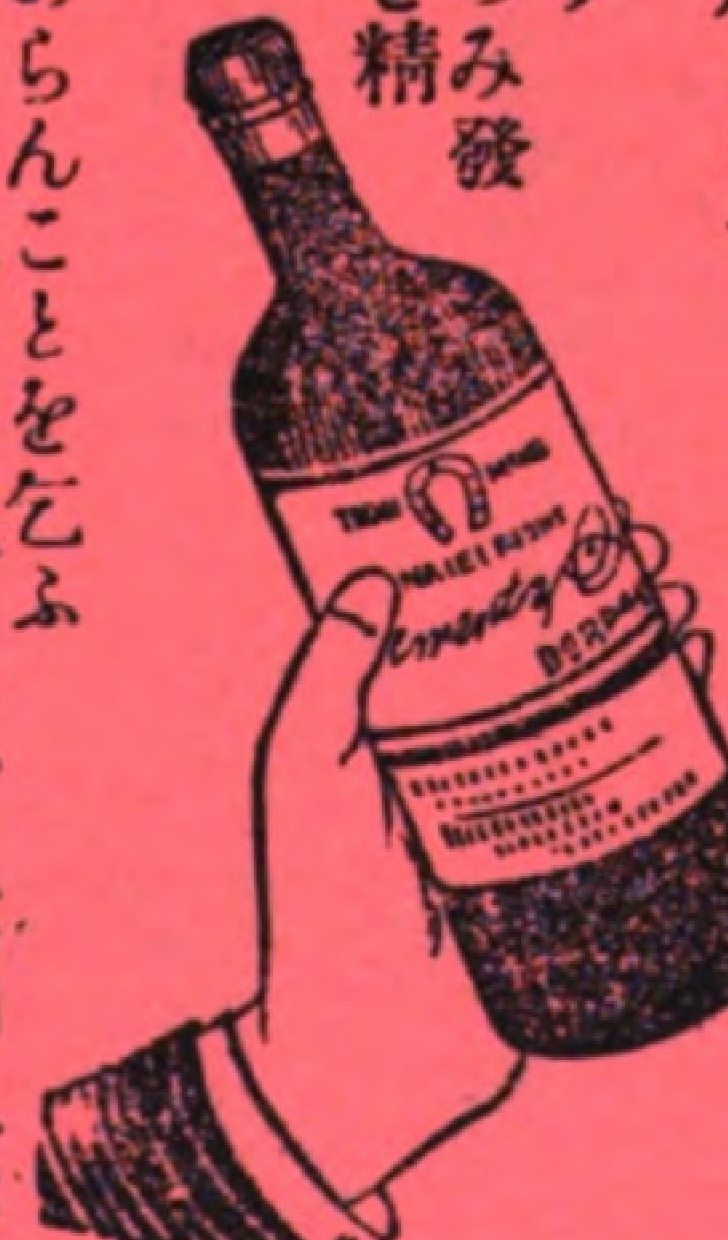
蹄鐵印 シャトーリヨン 白赤葡萄酒

は藥用飲料並に食卓用として御進物に最も妙なり

●至る處に取次店あり

本品は從來赤葡萄酒のみ發賣の處今回更に品質を精撰し最も純粹にして善良なる白葡萄酒をも輸入發賣仕り候に付御愛飲の上御稱贊あらんことを乞ふ

東京市本町三丁目　電本局長一四三五



鈴木洋酒店



●佛國土産の最新白色新劑

色黑き、にきび、そばかす等にて困悶の士女よ本院獨得の文明的新秘法により速に圓滿なる幸福を得られよ如何に其効能の神秘なる論より證據郵券二錢送れ美容のしるべ呈して敎ゆ

愛隣藥院

東京市東兩國小泉町二八

女(ぬの四)

東京市京橋大鋸町　女子文壇社出版　（振替口座東京第壹七貳九番）　賣捌全國書店

女子文壇

一日發刊　十一月號　六年第十四號

女子文壇の內容

●血氣に任せて身體を損傷してはならぬ……女子高師教授　武田錦子

●性欲の抑制……北畠醫學士　●進步せる根本的化粧法　百合子

●外交官の若夫人を訪ふ　記者　●瓦斯を經濟に使ふ注意　よし子

●婦人に出來やすき子供の觀察……文學士　倉橋總三

▼北白川宮兩女王殿下の御平生……

▼早婚と晩婚……文學博士　三宅雄次郎

▼學年で習ふた事は必ず役に立つ……學習院女學部長　松本源太郎

▼新しき婦人の世に立つべき第一の要件……東京女學館監事　西田敬止

●鳥の寢息…河井醉茗　●鐵道線路の草…磯萍水　●沈默せる二人の男…八橋有春　●故鄕のゆきき…山田邦子　●海上五十哩を距てたる絕島の孤兒院…佐々木好母　●解放されたる若き女の男性觀…陽炎　●京都受讀者大會記

口繪　石版畫及寫眞版十頁美麗　◉定價五拾五錢　郵稅壹錢五厘

少女

少女十一月號　一日發刊　口繪挿畫美麗　定價拾錢　郵稅壹錢

●おぢさんいじめ●きゃん子女史●十三でお嫁入する朝鮮少女●女間諜●花子さん大阪見物●明日します●珊瑚の船●外面白いもの澤山

女子文壇第四增刊　今の婦人

▲十一月十日發行　紙數二百餘頁。表紙山中古洞、口畫太田三郎外美

▲定價貳拾錢　郵稅壹錢五厘

女（めの五）

大橋メール、オーダー、ビジネス

內外通信販賣

開業披露

●社會の二大福音

一 遠地の方は當社を利用なされば坐ながら何でも市價より安く御買求が出來ます

當社は歐米各都府におけるメールオーダーに倣ひ自他製作品を問はず社會の有ゆる必用品を薄利敏活に販賣す

二 製造家は當社を利用なされば各自の製作品を最も經濟に販路擴張が出來ます

當社は博文館發行十五大雜誌の如き內外各地に渉り現に百有餘萬の購讀華客を有する偉大なる廣告機關を備ふ

（博）

當社特賣品は引つゞき掲載致します

製品賣弘め望みの方は申込あれ、相互便宜の約定にて取引仕り當社廣告機關を利用して賣捌方盡力致升

女（ロの六）

東京市日本橋區本町一丁目十二番地

博通社

振替口座 東京五十番

電話本局 六百十四番

博通社㊕博特賣品

●創業紀念・破天荒の廉價にて提供!!

純銀側懷中時計

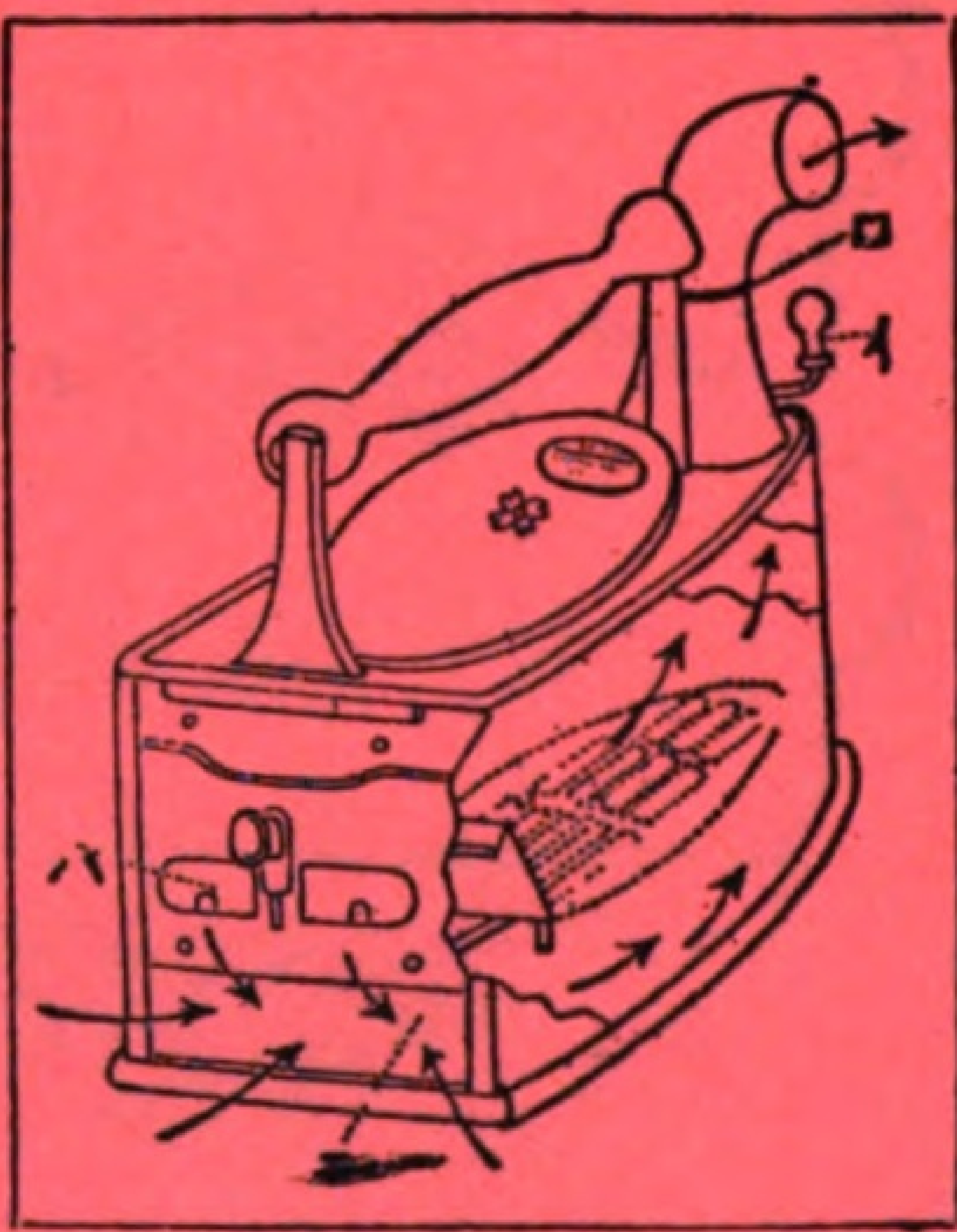


●婦人持純銀側片硝子十三形 標準市價六圓五十錢 特價金五圓
●婦人持純銀側兩蓋付十三形 標準市價七圓五十錢 特價金六圓
▲書留小包送料、內地十二錢、臺樺清朝三十錢

時間の正確は言ふ迄もなく、最新流行形で且つ銀質の優等なる、他に比類なき實用向の精良品である時計の如き貴金屬品は、當社の如き信用を重んずる店より御求為されば、凡ての點に安全である

●早いが勝ち!! 餘り遲るゝと賣切ます

專賣特許 千代田火のし



定價二圓五十錢 特價金壹圓八十錢

高サ五寸九分巾三寸五分
長サ五寸三分重量凡五百匁
▲送料（內地廿錢、臺樺四十錢 清朝五十錢）

一切の織物及び和洋服を始め凡て本器の當る所は、霜の旭に消へるが如く、どんな皺でも折目でも、忽ち跡形なく、奇麗清快いたします。殊に本器は缺點多き在來品と違ひ、溫度は自由に加減せられ、少量の炭火で而も立消なく長時間の使用に堪へ、構造は優美で且堅牢、價格又低廉・眞に經濟と實用と兼備せる、家庭に於ける理想的の火熨である

女(ぬの七)

大橋メール、オーダー、ビジネス

東京日本橋區本町一丁目 博通社 振替口座東京五十番 電話本局六百四十番


最上醤油
元祖
上
開業貳百六拾六年
千葉縣銚子港
宮内省御用達
釀造元 濱口合名會社
電話銚子二十一番
振替口座 五〇二一番
日英博覽會に於て
太平洋博覽會に於て
最高名譽大賞牌受領

程度と時間の不釣合

井深花子

▲自修時間の不足

私が英和女學校と女子學院とで敎へて居りますのは物理、生理、博物、幾何等でございますが受持は高等科の方ですから程度は先づ中學より少し上位なものでございませう。私が敎授について一番困りますのは程度の割合に自修時間が少いことでございます。國語や漢文のやうな注入を主にいたす學科は左程の自修時間も要りませんでせうが、理學の方は敎科書で敎ふるよりは實驗研究の時間が多く要るのですから自修時間を十分に與へたいのでございます。敎場で實驗させて見せるにいたしても學科の多いために一日の內に續いた時間を取ることが出來ませんので徹底した說明をいたすことが難しく、敎ゆる方も敎へらるゝ方も上滑りの感があり誠に遺憾なことゝ存じて居ります。學科の多過るのと自修時間の不足と云ふことは敎員達が度々提出する問題で、何か減ずる科目は無らうかと相談して見ましても、どうも唯今の處減ずべき科目が一つもありませんので何時も泣寢入に成て了ふのでございます。

▲諳記斗りでは効がない

幾何を敎ゆるのに、敎科書そのまゝを說明するだけでは生徒が唯方法を覺える、諳記すると云ふに止まり、幾何を習ふ意味を失ふのでございます。一體女子が幾何を習ふのは專門家になるためでもなく、頭腦を緻密にし人と談話する際に自己の考を順序立てゝ述べることが出來、又他の言ふところを良く咀嚼して聽得ると云ふ風に總てに於て要領を得る婦人となるためでございますから、問題の解答を十分に考へさせて腦力を養

はなければなりません。確定理を諳記いたさせるだけなら何の効も無く寧ろ歴史でも諳記させた方が利益になるのでございます。其他物理でも博物でも開發的に敎へやうといたすには自修時間の必要が益々起つて參る次第でございます。

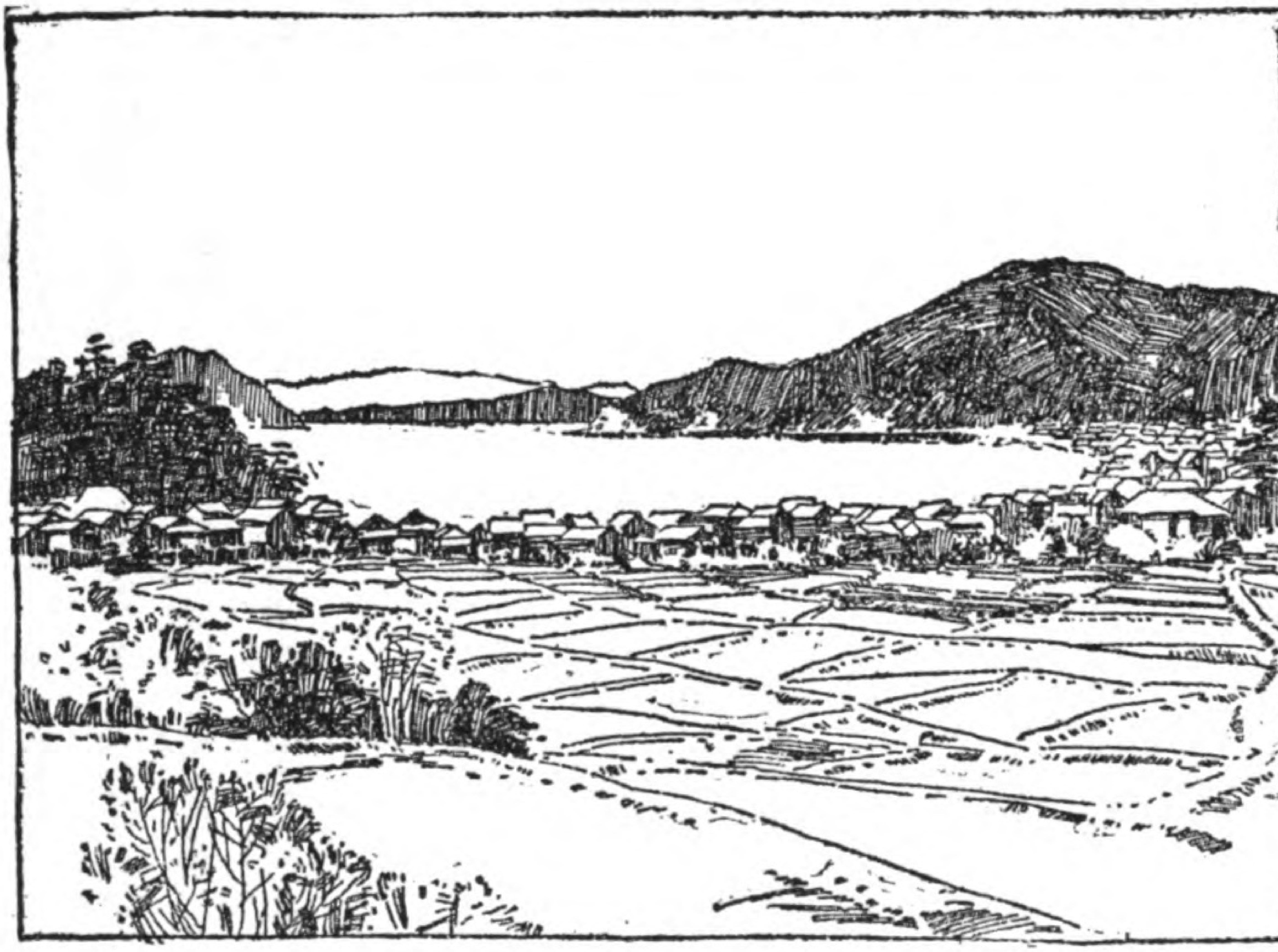
▲米國女子大學の時間割

米國の敎育法を例に引きましたところで直ちに實施する次第にもまゐりませんが御參考までに一寸お話いたしませう。私の學びました學校は生徒の數が大抵四百人、(當今は七八百人位)一級は六十人より百人位でございましたが一の敎場へは二十人以上を入れません。生徒が毎日敎場へ出ますのは二三時間だけですが一學科について二時間づゝ準備時間があつてその學科を研究することになつて居ります。それから規定の科目を學ぶ他にエレクチーブ(生徒各自が或學科を選んで研究する)に當てる時間が卒業まで　三百乃至四百あるのですが、かやうに時間が豊富であります爲に學力の進歩は實に著しいもので從つて活用力も十分に發達するのでございます。

▲敎科書よりも參考書

米國の女子大學生は敎科書より參考書の方が入用でございます。尤も幾何なぞは問題ばかりを集めた本だけを用ゐて參考書は要りませんが、歴史美術史の如きも校内の圖書館に入て調べるのでございます。而して倘不審の箇處は專門敎師について質問いたします。專門敎師の數は却々多く假令ば歴史ならば太古、中古、近世と申す風に各時代に於ける專門敎師が居りますから自由に深奥な講義を聞くことが出來ます。敎師は生徒の研究の仕方について餘り干渉しませんが成績については一々綿密な調査をいたし幾何なぞも生徒各自が

陸奥名勝淺虫



考へ出した說明に一々批評を下し發明力を奬勵いたすのです。敎師は何れも時間と云ふ狹い觀念を去つて熱心にその進步をはかりますし、生徒も時間だけのお勤め主義でなく眞劍の勉强をするのでございます。

▲針の轉ぶ音も聞える靜かさ

女學生か圖書館に幾人入つて居りましても一言一句を發するものなく實に水を打つたやうですから針一本轉ぶ音も鼓膜に響く位でございます。參考書中の要點は各自ノートに記して置ますが時々敎師がノート調べをいたしてその勤怠を試みます。それから圖書館內で或生徒が披見して居る書籍を他生も見たき場合には、豫め　へてある用紙へ自分の名を記してその書籍の間へ挾んで置き用濟の上は廻して貰ふことになつて居りますが、用件でもかやうにして互に無言の內に辨じ合ふ位ですから館內は勿論、入口でも靴音さへ立てぬ

やうにソーッと歩くのでございます。一體彼地では圖書館とか演説、音樂等の會場で談話するものなく靴音までも忍ぶのが一般の風習で、男女混同の席では特にこの公德が行はれて居ります。畢竟異性相敬する習慣からでございませう。

▲一問題の研究時間一期以上

彼地の學校で理科の實驗をいたすのは實に氣永なものでございます。特に動物の發育等については長い時日を惜まず深奥な研究をいたします。假令ば鷄の發生と云ふ問題が出ますと實驗に一期以上もかゝりますので、先づ養鷄をする家から受精した玉子を求め、學校に具へてある孵卵器へ入れて十六時間とか二十一時間とかの經過を試みるのですが、丁度自修時間に孵卵器から出して實驗するやうに時間を豫算して卵を入れ、定めた時間に取出して卵皮を去り發育の度を試驗するのです。この孵卵器は一助教師が監督して卵の出入を司て居りますが、多數の卵を預るので却々忙しく、中には生徒の時間の都合で夜半に卵を入れに來るものもあり睡眠の時間さへないことが往々あるのでございます。

▲文字難

日本の女學生は就學年限の長い割に腦力が乏しく學問に對する趣味が淺いやうに思はれます。彼地では小學へ通ふ位の女子でも目新しい郵券を見ますと直に地圖を披いてその國の位置、都府、山川等を調べ續いて物產、人種、風俗、歷史等をそれ〴〵の書物に依つて年齡相應の研究をして置くと云ふ風で印紙一枚で餘程の智識を得るのでございますが、日本では高等女學校卒業位の女子でもこんなところに心付かぬ者が多く、もつと高等の教育を受けたものでも百科全書を伴侶と

する心掛と腦力は先づ少いでありませう。これは教育法が根本から相異つて開發的の智識がズッと後れて居ますので、つまり文字を覺える困難のために多大の時間を費やしこれらの智識を養ふ時間が少いからでございませう。過渡時代の今日に於ては已を得ぬ現象でございますが、日本の女學生は實に文字のために束縛されて居るのです。彼地では高等女學校生徒で讀書に不便を感ずるものなく、若し不便の場合には字書を引けば直分るのですけれども、日本の女學生は高等女學校以上も進んでも未だ〳〵讀得ぬ文字が澤山ありまして十年餘も教育を受け乍ら自分の思想さへ十分に書現はせないのが通例でございます。私が神戸の女學校に居ります頃、未だ却々雜誌へ掲げる文章なぞは出來ないと申しましたら學校に居つた米國婦人が不思議がつて居りましたが矢張これも文字難の爲でありました。日本の女學生が年限の割合に進まぬからと申して彼地へ參



近江名勝三上山

つた女學生は根氣も能力も彼地の女學生を凌ぐ位で成績も勝るところを見ましても決して彼に劣つて居るのではなく文字難が敎育の邪魔をいたして居ると云ふことが分ります。

▲自然が本當の敎科書

學科の多過る今の女學生に餘り開發的の敎へ方をいたすのも無理かと存じますが、私は出來得る範圍内に於て敎科書以外の研究をさせて居ります。幾何は說明を私がいたさずに生徒にいたさせ、その仕方を他の生徒に批評させまして私が決を取るのでございます、物理は日々目に觸るゝことを悉く問題として考へるやうに奬勵して居ります。假令ば電車内に立つ時運轉が止れば前に倒れるのは如何云ふわけか。ランプに點火する時ホヤを除けば何故に黑煙を發するかなぞと云ふ疑問を一々學んだ元則に照して解決すれば、往く所として問題の材料なきことなく、觸るゝ物として研究に値せぬものはありませんから、是等を力の及ぶ限り考究して後、不審の點を敎師に質問いたすやうに敎へて居ります。私は常に、「自然は本當の敎科書である、自然を敎科書とする心懸さへあれば學校の敎科書なぞ一枚も諳記せずとも宜しい」と生徒に申しますが注入的に育てられた生徒にはこれが餘程苦しいやうでございます。併し生徒は敎科書以外の問題に答へますことを苦しい内に張合があると申して勉强いたして居ります。

▲鐵瓶を漬物の壓石に代へた婦人

女子に物理化學の必要なしと言はれる方がありましたら未だ物理化學を知らぬ人と申すべきでせう。物理化學が明るくなるほど家政を執ることが巧者になり、物品の保存法にも精しく第一手過なぞの注意が緻密になる次第でございます。特に化學は料理、洗濯等萬所

湘南名勝江ノ島



一切のことに應用して經濟法の宜しきに適ひ生理と連絡して家族の衛生注意が行屆くのですから女子の天職に對して一日も缺く可からざる學問でございませう。

併しこれを學ぶものが唯水素酸素を口にするばかりで家庭に活用する心懸を缺きましたならば全く無用の長物となつて了います。高等教育を受けた或婦人が漬物の壓石を探すのを面倒臭がつて鐵瓶を代用したと云ふことを聞きましたが、鹽氣に觸れて鐵の傷むこと位は無敎育の老婢でも知て居るではありませんか。私は生徒に向つて二言目には、貴い時と金を費して學びながらお祖母さんやお三どんに笑はれるやうなことがあつてはなりませんと申して居ります。

▲博物學と品性の修養

女子が博物を學びましても直接家庭の用を爲ぬやうに思はれますが、博物研究の間に天然に親炙した品性

を養はれるのでございます。野邊の摘草、櫻狩、海邊の遊び、山巡り四季折々の行樂にも機に應じて植物、礦物、魚介、昆蟲類を採集し家事の暇に分類や解剖を試みましたなら愛兒の教育に益するは勿論、造化の妙工を窺ふて心靈を清め虚飾に憧れる閑へもいつしか洗ひ去られて了ひます。女子の博物趣味は是非進歩させたいものと存じます。

▲高等教育と世才

米國の女子は高等教育を受くるほど性質も態度も女らしくなりまして、大學に入ります頃は實に女の特性を發揮して立派な主婦の資格が具はるのでございますそれは先天的に家事や交際に熟練して居るところへ高等教育で磨きをかけるからでございませう。毎度申すやうですが、私の友達が暑中休暇に家に歸つて裁縫、料理その他の雜事を一身に引受け旨く切盛するのを見まして、私が「貴女は何時の間にこれらの科目をお學びでしたか」と尋ねましたら友達は笑つて「こんな事をわざ〳〵學校で習はなくつても此前から存じて居ります」と答へました。日本では高等の學科を修むる女學生が却つて程度の低い女學生より女らしき態度を失ひ世才に疎いと云ふ實例も見受けますが、これは家庭組織のない寮舍生活を永くつゞけることや、常識教育の缺けて居る家庭に育つたものに多いやうでございます。良家庭に育つた女子ならば高等教育を受けて凡てに趣味深くなればなるほど世才に長け女らしくなるに違ひありません。(談話)

筑波嶺の裾はかりそむさし野の
　草のはづかに殘す冬枯　眞淵

この川にもみぢは流る奥山の
　雪げの水ぞ今まさるらん　忠岑

多數の子女を育つる母親の經驗

伏見宮御附武官
塚田大佐夫人　塚田つる子

△子供の教育と日々の心配

私には只今の處、六人の子供がございまして長女は巳に他へ嫁し、次女は女學校卒業後に病歿し長男は高等學校へ入學、三女以下は、其々學校に通學し、末の子は、今腕白盛りでございます。申す迄もなく婦人と生れては、良人に事へ舅姑に仕ふるに忠實なるべきでございますが、巳に多くの子供を持ましては如何して健全に優良に我が子を育てゝ行かうかと夫ばかり、心配致して居ります。良人は曩ほど伏見大將宮殿下に隨從して歐米に參り先日歸京いたしましたが、不在中萬一にも、不成績なことがあつてはと、千々に心を碎いたのでございます。

△子女の躾け方の加減

子供を躾けるのに、自由に放任するのと、萬事につけ八釜しくいふのと、何方が好いかと申しますと、それは、何方でも、一方に偏つては好結果を得ません。子供だからといつて馬鹿にして掛つたり、何事も壓制で押し通して行き、嚴格一點張で身動きもしないやうにすることは、只に訓育の目的を達することが出來ないばかりでなく、折角發展すべき子供の身心を害ひ、いぢけた、こせついた、ひがんだ、劣等な子供が出來るやうなことになります。と申して又一も二もなく放任して、一切注意を拂はなかつたら、それこそ放逸無頼の性となり易く、この邊の手加減は、母親自身が十分に會得致して、始終子供達の行動に注意し、時に臨んで訓戒せなくてはなりますまい。例へば、何か子供が惡い事をしたからといつて、その都度つけ〳〵申すことをせず、大抵の所は、見逃して置いて、いつか皆を集めて訓話でもする時、乃至は、その子一人居る時

に、母の膝下に呼んで、穏かに諭すのでございます。私の多年の經驗上、叱言や訓戒は、直接に言はずして時々遠まはしに言つた方が宜しいやうでございます。

△何時子供を訓へるか

子供の訓育も、第一には父母が模範となるやうにして、自然の裡に薫陶を施すといふことが最も大切だらうと存じます。子供の敎育は耳より入らずして眼より入るもので見やう見眞似で様々になります。殊に母親の心は、必ず子供の心に浸みつくものでありますから不斷子供の前で、醜き言語擧動をしないやうにするばかりでなく、陰に廻つても、獨を愼むといふ事が大切で、私など始終それを心掛て居ます。が、いつも自分ながら德の低いのを歎じて居ります。實際躬行して範を子供に示すことは第一利目のある事ですが、中にも父母が、神佛を尊崇し、祖先を敬ひ、天道に對して常に敬虔の念を拂ひ、聖上の發し賜ひし敎育勅語、戊申詔勅を大切に取扱ひ、大祭祝日の時に之を禮拜し拜讀し、祖先の忌日に追善供養の誠を捧ぐるが如き、子供の爲には、極めて良好なる結果を得る事と信じまして私共は、毎朝神棚佛壇に禮拜を怠らぬやうにするのみならず、臨時の注意を怠らぬやうにして居ます。その外訓育の本として、時々子供を集めて和漢の聖賢又は西洋の英傑の嘉言善行や偉人の傳記を話して聞かせるやうにして居ます。

△玩具の選擇

幼い子供に對して、古より傳來の美談英雄の談を話し聞かすことも大切でありますが、又娯樂として、相當なる玩具を充てがひます併し殊更玩具に念を注いで、これもいけぬ、あれもいけぬといふやうに、餘り選擇をしては遣りません。硝子、金石類の尖つたものとか、又は有毒の色素を使つたものでない限りは、子供の好むに任して買つて與へます。併し子供は人工の玩具よりは、天然の玩具を喜びます。即ち室内に在つて、細い玩具を玩ぶよりは、屋外に在つて庭園に戯

れ、又は石を集め、草花を摘み、夏は水いたずらをし土や砂をいぢるといふやうなことを好みます。この自然に親み、自然物を玩具にするといふことは、誠に子供の爲にも宜しいと信じますので、少々衣服の汚れる位なことに頓着せず、却て之を奨勵して居ります。之が爲に人工の玩具には、左程の注意を拂はずに參りました。

〈男女育兒上の相違〉



男の子と女の子とは、生れた時自ら剛柔の相違がありまして、殊更にそれを區別する方法を與へなくとも、男は男らしく、女は女らしいことをしますので、私共は、この自然に逆はずして、養育することに努めて居ります。女の子は、何處までも優美に淑良に禮儀正しく育てますが、男の子は精神さへ確りして居れば、餘り邊幅を飾らせないやうにして居ります。例へば何か用事があつても、女の子なら、しとやかに手を突いて

言葉軟かにさせるのですが、男の子なら、恭しく手を突かなくとも、テキパキ用事を承けさせるやうにして居ります。

△娘の躾け方に就いて

娘の教育は、高等女學校の學問技藝丈では肝腎な家庭の實際に迂なやうでも致し方がありません。これには、母が、幼き時より注意して、家庭の實際を手傳はせ見習はせるといふやうにせねばなりません。私方では凡そ十歳內外より簡單なる裁縫、座敷の掃除、衣物の手傳などをさせて居ります。尤も學科の復習は大切でありますから、凡そ一時間半位は致させますが、その他は成るべく家事を見習はせ、幼き時より手足の勞働に趣味を持つ習慣を養つて居ります。娘は朝の內は學校に出るので忙しく、歸れば暫く休息の爲に、自由にさせますので、復習並に手藝の時間は、夜分となりますやうな有樣です。

△學校より家庭教育

學校は主として智識を授ける所、家庭は主として人格を授ける所でありますから、德育上の事も、學校では、隨分世話をして下さるに拘らず、家庭では、前申すやうに注意して居ります。若し家庭が腐敗し、又は教育に不熱心でありましたなら子供の人格は、自然卑劣になる事は免かれまいと存じます。殊に子供の氣質は、その母より外に細く知つて居るものはございませんから、この氣質に應じて教育することは極めて重大な事と存じます。殊に學校と家庭と氣脈を通じて教育することは、非常に大切なことですから、學校で時々催さるゝ父兄懇話會などには、喜んで出席して居りますが、此程某女學校に參りましたら、母たる方が先生に對つて、姉と妹と喧嘩をして堪りませんから、どうぞ御教訓を願ひますとのこと、是等のことも熱心の餘り申さるゝのですから、父兄懇話會に出席するすら厭はるゝ方に比して、數層上の方には相違ございません

が、私共の考では、姉妹喧嘩の事まで、學校の先生に持出すことは、母親の職責上甚だ等閑な事かと存じます。私共では幸に子供の喧嘩といふことがなく、この邊の心配もございませんでまづ僥倖の次第と喜んで居ります。

△家庭の整理と召使の使ひ方

家庭を整理するには、微細の點迄注意しませんと、面倒が起るものです。どうか家庭の整理法は、



大體上固有の日本風が宜しいやうに思ひます。即ち日本武士道の精神（婦人は貞節慈愛）を以て、それに西洋風の良い所を加味したら好からうと存じます婦人の身を處するに於ても、無論内を治めて、餘裕を以て外に奔走したら好からうと存ます。

召使を使ひますにも、同情を主とし、撫育といふことに努めたらば、召使の方は、主人を親のやうに思つて、必ず間柄が親密に圓滿に參ります。

子供に對する大人の態度

女子高等師範學校教授　安井哲子

此頃私は子供の守をして見まして、種々感じた事が御座いますから、其一二を申して見ませう。

私は無邪氣な人が大好きで、自身を他人の前に有りのまゝ現はす人を好みます。これが即ち私の子供好きな理由でありませう。然るに時としますと、無邪氣であるべき子供が、餘り自分といふ事を意識し過ぎて、大人の顔色で物事を爲す樣なのを見受ける事もあります。そこでかく自分を意識し過ぎる樣になる原因には色々ありませうが、其一つは大人が子供の前で、遠慮なく其批評を他の大人、又は其子供の姉妹などにする事であります、是等に依つて子供の心に如何なる印象が起りませうか、自分の身に引き比べて見ても想像する事が出來ませう。

大人は子供に對して、常に滿腔の愛を注ぎ、成るべく子供の心を善良に導く樣に努めると同時に、子供からは十分に信頼されて、大人の言ふ親切な一言は、子供が直に信用して、之れを實行する樣になりたいと思ひます。かくなれば、子供は常に愛情で暖められつゝ、自分の行動を指導され、又時には制限されますから、誠に心のゝびた、而も不知不識良い方に導かれる者になりませう。

然るに時としますと、大人が子供に對して、同情の足らぬ場合があります。例へば、子供が母親を初め大人を友として、種々の事を問ふたり、又は話したりする時に、大人はつひ多忙である爲めに、心から其子供の云ふ事を聽いてやらず、「あゝさうですか」とか、「さうですね」などと、口先ばかりでやさしく言つて居る事があります。鋭敏な子供は直に其大人の感情に觸れますから、かゝる口先のみのやさしい挨拶では、滿足を致しません。此心狀は種々の實例で見る事が出來ます。例へば子供は其母親や、遊び相手の大人が、他の人と話

をして居たり。

又は新聞などを讀んで居る事は大嫌で、直に之れを妨げる者であります。之れが子供の本性で、大人を自分の友として占領せねば滿足が出來ぬのであります。之れは一方からいへば自利には相違ありませんが、之れを利用すれば、子供の爲めに、大なる利益もあります。

故に子供を無邪氣に愛らしく育てるには、心から子供を愛さねばなりません。吾愛する人、吾愛せらるゝ人のいふ事は心から信賴して之れに從ひ、其人の前には何事もかくす事がなく、有りのまゝに言行し、何事でも吾友として



思ふ事を語る者であります。

次には子供の爲めに惡るいと判斷した事は、直に之れを止めねばなりません。但其止め方は叱る態度でなく、親切に敎ふると云ふ態度でありたいと思ひます。例ば子供が友達を打つた時にそんな事をする惡い子供だといつて叱る時には、其子供は惡人たるの宣告を受けた者で、自分が惡いとはいひながら、不快を感じます、殊に性質の良からぬ子供でありましたならば、意地づくで、他日再同樣な行動を繰返さうと致します。併かくいふ代りに、其子供を親切に抱きかゝへて、「お友達を打つのは良く

ないからおよしなさいよ」と同情的にいひますと、大抵は頷きます。そこで「打つた方に御免なさいとおつしやいな」と申せば、大抵は其通りにあやまります。其後大人は此二人の間に立つて、一緒に仲よく遊ぶ様に導きますと、幼い子供は直に其方に傾く者であります。然るにかゝる出來事があつても親切に處置せず、度々之れを繰返へさして、其子供に意地の惡るい習慣がつき、却々大人の云ふ事を聞かぬ様になりますと、到底かゝるやさしい言葉では言ふ事を聞かなくなります。

我々婦人は、主として子供を育てる役を有つて居ますが、幼い時の導き方で、一方には愛の化身ともいふべき美くしい子供が出來、又他の一方には親の手に餘つて、他人に預けねば教育が出來ぬのみか、終には警察の手でなければ、制御し得ぬといふ様な子供が出來ます。之れを畢竟大人に眞の愛が缺乏して居るか、又は子供を指導すべき正しい判斷が缺乏して居るからで、妄りに厳しく育てたり、又は愛に溺れて何の指導もせず、惡い習慣のつき次第に放任して置くか、どちらかであります。

強盜に對する覺悟

私の所は塾生が百人以上も居りますから、何より生命が大事ですから何んでも好きな物を持つて行かせます。又何處へでも案内して遣ります。自分丈けには平生の覺悟は十分ありますが、未だ家内の者や書生女中抔には何とも申聞した事はありません。夫れですからどんな風にして人を呼ぶの、又は交番に駈け付けるの抔云ふ事は考へた事はありません。しかし強盜が來れば何を奪ひ取つて行かれても宜しいから、欲しい物は遣るから持つて行けと申す覺悟です。平生一通りの戸締りは致しますが、箪笥抔は何時でも錠前を下した事はありません。以前一度賊が這入りまして、私の寢て居た次の間の箪笥の上の信玄袋の中の金時計、櫛、指環、有金等袋のまゝ四百ばかりの物を持て、行かれましたその時は只「スケッチブック」が這入て居たのが惜しかつたですが、是れも災難と思へば致し方なく、結局私は強盜の爲す儘にさせてやる積りで、後に取返す考へ抔少しもありません。（跡見花蹊女史）

女學生に對する教師の苦心

三輪田女學校教頭　三輪田元道

▲劣等生に對して

男女に限らず成績の優等な生徒は教師が力を入れて何處までも發達させやうとする。劣等な者は捨ると云ふ次第でもないがどうしても教ゆるのに氣乘が爲ないのが通例ですが、それでは劣等のものに對して甚だ氣の毒な次第であります。殊に女子は教師に冷遇されると萎縮して腦力は益々鈍くなり、且優等生に對する嫉妬心も手傳つて品性までも害するやうになるものです而して教師は優等生を標準として全級生を導かうとする傾もあるのですが、資性の劣つた生徒は非常に困難を感じますから、教師は常に中間の成績者を標準として導かなければなるまいと思ひます。理窟は先づこの通りでありますが、扨實際に臨むとこれが却々むづかしい。餘程克己心のある教師でなければ出來難いことであります。

▲宗教に關する生徒の感情

修身講義をする際に教師自身が信仰して居る宗教を土臺にしてその方へ引付るやうな口調で話すと、稍もすれば他の宗教に衝突することがある。こんな場合にその衝突した宗教を奉ずる家の生徒は必らずこれを父母に話す。父母は如何に教師の言葉でも信仰上のことには反對を唱へるものですから、その生徒は自然教師に對する感情を害します。特に女子はこの邊に鋭敏で妙に繼子根性を起すやうになる。教師は成るべく宗教に傾かずに天下の公道を基礎として修身講義を爲すべきであるが、これが又實際に臨むと却々出來難いので

あります。

▲生徒の趣味を壓制すべからず

多くの女學生の中には家政學は不得手で作文が尤も秀でゝ居る者もある。かやうな女子は必らず小説などを愛讀するものですが、「貴女は女子の天職たる裁縫や家政學を等閑にして文章にばかり凝つて居るのは宜くない」と敎師が頭から小言を言ひますと、その生徒はこれ程好な文學を制限されるのは實に情ないと感ずるに違ひありません。又手藝にのみ熱中して學問の方に身を入れぬ者に對して叱言を云へば矢張失望するでありませう。各自の天才と趣味に依つて偏倚するのを敎師が壓制したとて直るわけにもゆかず、且何の學科でも上達すれば社會に用を爲すのですから、寧ろ誘導して發達させた方が宜のです。併し一の學藝に力を注ぐのは普通學を修めた後に爲すべきであると云ふことを忠告して成るべく方法を設けて趣味を他に轉じさせ極端に走らせぬやうに注意すべきですが、この手加減が又却々面倒なものです。

▲團體敎育の長所は何か

植物自然の發生を妨げると片輪な花が咲ひたり、時ならぬ頃に實を結んだりするのと同じく敎育家が多數の生徒を一つの鑄形に入れて育てゝは決して好結果を得る道理はないと思ひます。松は松、梅は梅の性格をよく知つてその特性を發揮すべく培養しなければならぬのですが、この個々を知ると云ふのが團體敎育に難儀な注文であります。良い人間を作るには個人敎育に越たものはないのは分りきつたことで、團體敎育の長所は唯共同生活の意義を悟らせる位のものです。併し唯今の處言ふべくして行はれぬことですから、敎師は出來得るだけ個人を觀察して導くより他敎方がないの

です。

▲生徒の家庭訪問

個人を觀察する便宜のために生徒の家庭を訪問して見るのも良いですが一回や二回では却々眞相が分らぬのみならず、その親達は娘の平生の缺點を悉皆かくし話すこともありわざと卑下天狗を爲て大袈裟に惡口を云ふこともあるのですから親達の言を以て直ちに生徒の平生を斷定することは出來ません。親達の話と生徒とをよく對照し



た上でなければ眞相を知り難いでせう。又敎師が屢々家庭を訪へば忙しい家なぞに迷惑をかけると云ふ場合もあつて一寸面倒なものです併し一二回でもその生徒がどんな境遇であるか家庭の空氣はどうであるかだけは確かに分り生徒の性格を推究する便宜は得られるのです。

▲女學生の缺點一二

女子は感情に走り易く何事にも好嫌が甚しいのです。敎師に對しても矢張この

傾があつて、彼先生が好だと感じ始めると何でも彼でもこの先生でなければならぬと思ひ詰め、蟲が好ぬと思ひ込んだ教師には丸で脊を向て了つて、どんな名講義を聴されても耳を借ぬと云ふ風がよくあるのです又出來る課目ばかり勉強して難儀な科目を打捨て了ふ戰ふて見る氣力が乏しい。それから流行にかぶれ易い。

流行と言ても衣服髪飾ばかりでなく友達が繪畫の稽古に往と言へば自分も往たくなる。音樂を始めたと聞けば又眞似が爲たくなつて、家庭の事情も自分の天才も考へずに唯夢中になつて友達にかぶれて了ふ風があるのです。こんな缺點も教師が仔細に注意して竊かに戒めてやれば氣がついて追々直るものであります。

強盗に對する心得

未だ經驗もありませんが、私は決して春日局の前身の樣な事は、假令武術の嗜が有つても致しません。只今では左樣の事もありませんが、十年も以前には選擧の時には毎日壯士がドヤドヤ入り込みまして、中には拔刀を持て威しに來る者がありましたが、鳩山は大事の身體でソンな者と命の取り遣りをするのは惜しい事で、私抔は女の事でどうでもよいのですから、何時も主人に會はせずに私が會ひまして、結局何程か金を遣れば喜んで歸つて行きました。強盗とても結局何か欲しいのですから、何んでも好きな物を持つて行かせます。而して慌てずに能く賊の人相や其他の特徴を見て置いて、其筋の人の逮捕の參考に供します。一度は皆んな持つて行かれた處で、必ず後で取り返す事が出來ますから、惜しまずに何んでも持たせてやります。說諭をして返すなどは迚も駄目です。強盗でもする位の者は殆んど獸に等しいのですから、智識を以て動かす抔云ふ事は出來るものでありません。どんな事があつても決して之に反抗しないで、徐ろに之に處置を付ける積りですそして一方では巡査も置きますし、又店子の内に屈強な若者が澤山居りますから、皆んな鈴を付けて置いて、一ッ押せば火事、二ッ押せば強盗と云ふ樣にしてあります。（鳩山春子夫人）

歐米印象錄

文明國の高等批評

中村春雨

△四季の行樂

日本では春は梅見とか、桃見とか、殊に櫻の花盛が來れば誰も彼も浮かれ、出すといふのが年中行樂の頂點となつてゐる、秋になれば月見、七草、紅葉狩、冬は雪見と云つた風に、四圍の自然と社會とが親しく相交つて行く處に一の特色がある、一體、然かく自然と親むのは東洋趣味の粹とも云ふべきもので、殊に我が日本は、山川風土の美しさから花卉草木の種類の多いといふ事に至るまで、さまぐ\の點から自然の天惠に浴してゐるので、かゝる風流が上下を通じて一の社會的習慣を造るに至つたのであろう、歐米諸國には、自分の經驗した處丈では、日本のやうな芳い匂ひのする梅の花など一度も見た事がない、水蜜桃の花畑などは隨分大規模なのがあるが、此れとて別に花を賞する爲めに、一瓢を携へて出かけるといふやうな風流人に出會した事は無い、桃を栽ゑるのは即ち實を採るといふ實用的の算盤球から彈き出されてゐるのである、櫻なども米國邊りに隨分多くあるが、此れとて果實を採取して、市場に賣り出し、家々の食卓も賑はすといふのが、唯一の目的になつてゐる、櫻の種類も隨つて異つて、色などイヤニ蒼白く、肺病の末期の美人を見るやうな氣がする、成る程、こんな色合の花の下では、日本で見るやうな浮かれ騷ぎをやり出される筈のものではない、だから米國邊では、青春の男女が相共に櫻咲く野邊を散歩する暇があつても、別に振仰いで花の色を眺めやうとするやうな樣子もしない、一見無風流に聞えるが併し花が花だから仕方が無い。

尤も獨逸には、この櫻の花を見に行く場所がある、それは首府伯林市を三里位離れて、湖水に臨んで小い丘が起伏し、春になるとそこら一面白い花に埋まるので、有名な、ヴルデルといふ所である、寒い國だから花の咲くのは五月の末頃であるが、この間は臨時汽車が出る、臨時汽船が出る、伯林滿都の市民は先を競つて見物に出かける、花場所にはオケストラのバンドが聞える、色の紅い櫻酒を賣る商人が雲集する、その酒に醉つて、滑稽な風をして駈け行く男子連にも多く出會する、ナカ〳〵盛んであるが、併し日本の花見連のやうな、下戶も上戶も、男も女も、老も幼も前後忘却して騒ぎ廻るやうな光景は決して見られない、然ういふ點から云ふと、日本の國民は天眞爛漫であるかも知らぬ、併し、此處の花も、イヤニ白い色をしてゐて、日本人には李花が梨花の園に入つたやうな感がある、白雲千里とか、春風駘蕩とかいふ形容詞は一寸と適用しかねるものである。

△觀月と聽蟲の風流はなし

月は西洋の空にも照つてゐる事は云ふまでもない、西洋の詩人にも無論歌はれてはゐる、併し、あの靑白い、陰氣な、淋しい光は、一體陽氣で、快活で、樂天的な肌合の西洋の男女にはあまり好かれてない、殊に大都會などにゐると滿街の電氣燈、瓦斯燈が每夜花やかに照り輝いて、裏通りまで明るくなつてる次第だから、假令中空に明月が懸つても人々の注意を惹く事が出來ない、アークライトのお月樣の近い光の方が美しく、花やかに映ずるのであるから、ワザ〳〵月見に行くなどといふも西洋人の風流は嘗て見聞した事がなかつた。

又自分の居た東部の米國は、土地が頗る乾燥して、濕氣の少い所以でもあらうが、蟋蟀の類が至つて少い、

草原を歩いても、蛇さへもあまり見附からない、日本の秋にすだく蟲の聲など殆んで聞えない、少しは鳴く事があつても、雨の降るやうに千萬疋一時に鳴き立てるやうな例がない、從つて蟲聽きといふ風流なども一向に行はれない、ラッド博士が嘗て日本に來て、蟬の音が音樂的だと云つて、酷く氣に入つたといふ話であるが、それも耳に珍らしかつたから然う感じられたので、蛙鳴蟬噪の國の



秋草

日本人には、あまり耳慣れ過ぎて、音樂的といふ感じが起らないのである。イヤ、日本には今一層音樂的の美妙を聲を發する蟲類に富んでゐるのである。

△紅葉は大陸的

然らばこの頃の、日光箕面、高雄の紅葉などの美觀は西洋諸國にあるか何うかといふに、此れも一寸と見られない、或國は例外もあるが一體に歐米諸國の中心地は、例の

大陸的の氣候で、夏と冬との移り變りが匆忙しい、秋といふ中間の季節は至つて短い伯林などは殊に北地であるから、もう八月頃からリンデンやオークの葉がバラバラと落ちて行く、日本の小春日和のやうな、柔かな、落着いた氣持の美い天氣は一日も無いと云つて善い位である、從つて木の葉も一旦黄ばんでは來るが、直と朽ちて、灰色がゝつて來て、それから一度に坊主となつて了ふ、その上に、日本の楓樹即ち美しい處女のやうな紅尾花の色を見せる種類の樹木は無い、又、あの壯嚴な、神將が黄金の鎧を着て武者振ひするやうな、銀杏樹などは見當らない、イヤ、この樹は日本の珍木であるといふ事を誰か科學者から聞かされたやうである、恰も秋の中ばに、余は世界の公園と呼ばれる瑞西の山間谿谷の美を探りに行つた事があるが、成る程秋色は十分である、併し、黄葉は多いが、紅葉がゝつたものは少い日光の秋、箕面の秋を、この山と水との上に移したら、何んな壯美の景を作るだらうかと思つた事さへある。

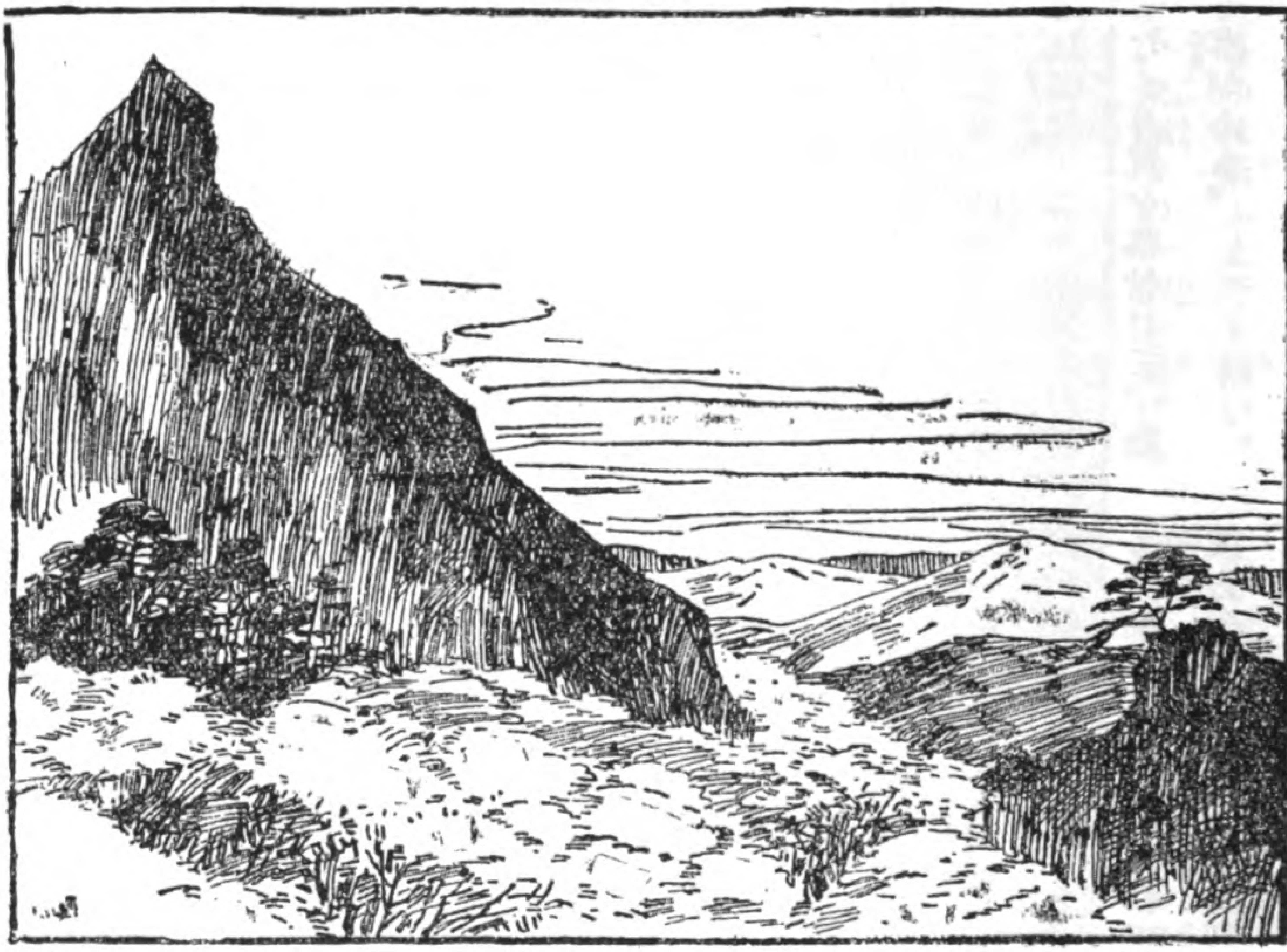
△雪見の風流なし

然らば冬の雪見は何うか？　米國紐育附近や、倫敦巴里、伯林一體に、冬となると酷寒である、雪見酒とか、雪見船とかいふやうなものは絶對に無い、併し川や、湖水が鏡の如く氷結する、その上で氷滑りなどは盛んに行はれる、若い男女が手を叉み合せて、滑靴を着けて、氷の上を卍巴と滑り廻るのは實に壯觀である、イヤ、こんな時には白髪の爺さんや婆さんまで滑りに出て、眞赤になつた額からポタ〳〵汗を滴らして喜んである、小い子供等も大人の中に交つて活潑に滑り歩く、これは別に風流でも何んでもなく、全く一個の運動的興味からで、筋骨を逞くし、血液の循環を善くするといふ衛生上の理由から割出されて來る習慣であ

る。

イヤ、すべてかゝる實際的の興味が西洋の社會の娯樂とか、習慣とかいふものゝ上に附き纒つて來てゐる。

例へば同じ花を賞するにしても、唯花瓶に活けたり、園に作つたりして眺めて居る丈では西洋人は滿足が出來ぬ婦人にしても花をむしり取つて胸に附けたり、頭に翳したり、又はそれで花環、花束を作つて自分のオモチャにしなくては兎角承知



小豆島寒霞渓の紅葉

が出來かねる、匂ひの高い、一輪何圓とかいふ高價の薔薇の花でも、食卓を飾る上に用ひるのである、そして貴婦人等は、これで交際場裡に幅を利かして行かうとするのである。

△カツフエの盛觀

野遊といふ事は米國邊でよく行はれる、男女が一團隊を造つて、サンドウイッチなり、果實なり、紙包の辨當を携へ、小山

を超え、林を過ぎ、歌つたり、騒いだりしながら好晴の一日を樂しく送つて、飢ゑればそこらの廣い野原の上に寢轉げながら持參の辨當を開くといふ趣向である、歐洲大陸になると、カッフエといふものが少し散歩場と定まつた先には必ず二軒や三軒はあるので、辨當持參の必要は無い、カッフエといふのは先づ大規模の腰掛茶屋である、庭前に幾百の椅子、卓子を並べ、客の來るのを待つて給仕が注文を聽き、ビヤー一杯十錢、コーヒー十五錢といふやうな價で、それ〳〵持つて來る、庭には樹木が並んで木下蔭を作り、又一方には必ず奏樂堂の設けがあつて、そこでオケストラの組がいろんな樂を奏する、その音樂を聞きながら、煙草を吹かしたり、笑談を云つたりして一時間でも二時間でも過して行く、獨逸人などは隨分ノンキ千萬で、唯つた一杯のビヤーで、臆面もなく長尻を落付けて、動かうともしないのを見かける事がある。

このカッフエといふのは、大都會の市中にも澤山ある、巴里や、伯林は最も盛んで、あの目まぎろしく繁華な大首府の中に、長い間、椅子へ腰を卸して、新聞を見たり、コーヒーを呑んだり、よくこんな閑人があるもんだと不思議に思へるやうな事がある、殊に、巴里のカッフエは、往來の直ぐ傍に、前の方へ椅子を向けて、通行人に顏を晒しつゝ呑氣な眞似をしてゐるので、一寸と滑稽なやうな氣がする。

△競技の大流行

日本の花見とか、紅葉見とか云つて騒ぐのと對照せられるのは、英國米國ではベースボール、フートボールの競技、佛國や獨逸では競馬や、この頃の流行の飛行器の競爭位なもであらう、日本には無論角力などもあるが唯十日間に限られてゐる、歐米のは季節となると彼方でも此方でも盛んに行はれる、この外に冬となる

と舞踏會などの頻々と行はれるのは云ふまでも無い。

フートボール競技に就いて、米國での一例を擧げると、この方面にかけて、チャンピオン旗を爭つてゐる、プリンストン大學と、エール大學との競技會の當日の如き、男子許り騒ぐのではない、貴夫人、令孃などいふ連中が皆應援に出掛けて來る、それも二十里も三十里もある遠方から隊を組んで汽車でワザ〱來るので、しかも當日は、エール大學の味方、即ち自分の夫の出身學校であるとか若くは婚約した男子が學生の中にゐるとか、その他の緣故のある婦人連は、同大學の校旗の青黑に模して、菫色の衣服を着け、菫の花束を飾つた晃帽を戴き菫の花束を手にして、青黑の旗を揮りつゝ來る、すると一方の、プリンストン大學に緣故ある婦人連は、同大學の校旗の黄棒に模した衣服を着け、黄菊の花を手にして聲援に出かける

修善寺枕流橋の紅葉



といふ勢である、そして勝敗毎に、頗る熱心に喝采したり、聲援を與へたりしてゐる、それで競技者の青年連も一層氣負うて來るのである。

斯る次第で、ベースボール、フートボールの選手中第一流の名聲を轟かした者は金滿家の令孃連から結婚の申込を受けるといふ例も少くない、希臘のオリンピアン、ゲームの月桂冠を獲た勇士が美人の敬慕を一身に集めてゐた古譚も思ひだされるのである。

△社會的の娯樂場

一體男女共に運動熱の高いのは歐米諸國を通じて一般の現象であるが、その中でも、國が新らしく、氣象の荒々しい米國が第一位にゐる、自然、社會的の娯樂物なども、紐育市邊には一番大仕掛なのが出來てゐる例へばヒッポドラムといふ見世物小屋の如きは一萬人以上を容るゝ觀客席がある、そして廣い大舞臺の上に、數十の眞物の馬を引き出し、兵士が鞍の上に飛び乘つて、短銃を放ち、大砲を轟かし、實戰の光景を活現して、見物の魂を奪ふやうな事をやる、するかと思ふと金光、銀色、キラ〳〵として輝き亘る美裝の少女が數百人、肩すり列べて合唱を唱ひ、舞をやり、翩翻として天界の淨樂境を眼前に擴げて見せるやうな藝當を演ずる、誠に素晴らしい見世物である。

近頃淺草公園に新設されたルナ、パークの本家も、實は紐育附近の、コネー、島の上にある、この島は、紐育から電鐵に乘つて、一時間半もかゝれば行かれる、夏の遊び場所である、その季節の土曜、日曜などには人がウヨ〳〵して黑い塊になつて、そこらを動いて行く、ルナ、パークは、白く塗つた龍宮城のやうな門際で、入場料を拂つて入るのだが、パークの中には又いろんな見世物が軒を接して客を呼んでゐる、それを一一見た日には、小建築では足りない惧がある、「月世界

旅行」などいふのは、見物が風船に乘つて、段段月世界へ近づいて行くやうな感を與へる爲め、室を暗黒にし、活動寫眞の作用で、四圍に雲が動いてゐる樣を見せ、又電光をしきりに閃めかしたりして次第に空遠く乘り出したと思はせた頃、月を見せて、それが愈々大きく見えるやうにし、やがてもう着いたと云つて、四圍を明るくし、張子細工の月世界を歩かせる、ギザ／＼した、燒石のやうな中の穴の底へ歩いて下りて、それから又戸外へ出る事に

立田川の紅葉



なるのである、下らぬ仕掛物だが、好奇心に富んだ子供や、婦人方を喜ばせるには足りるものである、その他、「天國と地獄」とか「世界一週」とか、ウオーター、シュートとか、山辷りとか、いろんな物があつて應接に遑がない程である。

最も大袈裟なのは、火事の見世物である、眞物の電車の通つてゐる市街の兩側に、高い家が列んで、いろんな人は市中を通行してゐる、新聞賣、果物賣なども走つてゐる、と思ふと、一方の二階の窓口

から、俄かに女の叫び聲が聞える、烟が吹き出す「ナア、火事だ！」と云つて、大混雜が始まる、消防夫が蒸氣ポンプを引いて馳け來る、二階、三階に燃え擴がつた火焔の中から男や女が、悲鳴を擧げて飛び下りる、巡査が走り廻る、兵隊が出る、漸くの事で消し止める、こんなのが皆見世物である、往々實際の負傷者が出る、隨分と振つた物である。

△演劇とオペラ

併し、一方に、こんな下等な見世物があると同時に、歐米文明諸國の、紳士淑女の趣味の中心となつてゐるものは、オペラと演劇とである。

オペラの俳優は、伊太利や、獨逸邊に優れたものが多い、併し米國は金の力で名優を傭つて來るので、伊太利のオペラの男優カルソーとか、女優テタルジニー夫人とかいふやうな第一流の人々は季節々々に必ず紐育のオペラ、ハウスへ來て技を演ずる事になつてゐる、その給金の如きも大した者で、テタルジニー夫人は一夜、三四時間の出演に對して二千弗を支拂はれてゐるといふ事である、カルソーは一夜、四五百弗の報酬を得てゐる、給料が高い位だから、オペラの席の價など從つて高いが、これは多く金滿家連が交際用のため一季間、四萬弗の五萬弗のといふ大金を拂つて契約をしてゐるので、上等席を俄かに得やうとする事は、紐育邊では不可能である。

紐育には、このオペラ、ハウスは二ケ所ある、而して此の地のオペラの特色として、獨逸のオペラは獨逸語、佛蘭西のは佛蘭西語、伊太利のは伊太利語で唄つてゐる事である、即世界的のオペラが見聞される次第である、此れは一つは、紐育市が、各國人種の雜居市で、一種の世界市であるからでもあらう。

オペラの劇場の建築の立派なのは、巴里が世界第一

と云はれてゐる、國立劇場と共に、國庫支辨の下に成立してゐる、伯林にも、二ケ所王立のオペラ、ハウスと、一ケ所王立劇場がある、年々十數萬圓の保護金が帝室から下る事になつてゐる、日本では芝居の天覽と云へば世間で一大珍事のやうに思つて騷ぎ立てゝゐるが西洋各國では普通の事で、王室や大統領は交際用に、オペラや劇場を使つてゐる。

芝居の一番進歩してゐるのは伯林である、高尙な人生問題とか、婦人問題とかいふものを書いた芝居が續續上演されて、それで可成大入を取つてゐるのは、男子は素より、婦人の趣味が進んでゐる所以であらう、日本では、芝居好の婦人といふ方々も、兎角俳優の名許り口にして、藝題の方は何んなに古臭くても、あまり念頭に置かない、イヤ却て古い、在來の者を喜んでゐる傾向が見えるが、趣味の革新といふやうな事は、婦人の智識が進んで、新らしい頭腦を以て、新らしい藝術を味ひ得る者が續々出るやうにならなければ容易に行はれない事である、英國の婦人の大多數のやうに劇場を食後の腹消化の場所と心得て、唯ハツ〳〵と笑つたり、むやみに泣いたりして、幕が下りたらそれでお了ひになるやうな心得でゐては、芝居道は進む筈がないのである、又米國の婦人等も、兎角、音樂劇が好きで、唯娛樂一邊に芝居入りが流行する、あゝいふ調子で、日本婦人も芝居を見てゐるのなら、俳優に對するいろんな厭らしい風聞が生ずるやうになる、藝術を尊重するといふ精神を今一層深く養つて行くのが、日本の社會や家庭の幸福と意義とを増加し來る所以であらうと思ふ。

先づこれ位で一先づ團圓として置かう。

我子の前途に就ての疑問

平出修

自分はもう四人の子の父である。まだ若い〳〵と思つてゐるうちに、いつしか三十を超えてしまつてゐる仕事の爲に社會へ出て見ると、社會に活働してゐる人の中では、自分等の年輩を、下に二三年上に二三年の人が大分見えて來た、そして毎日の一日が飛ぶ樣にすぎ、毎年の一年が亦飛ぶ樣にすぎて行く、明日からはと思つてゐる間に明日がすぎ、來年からはと思つてゐる間に來年がすぎてしまふ、もうそろ〳〵長女は學齡に近づいて來る、子供の前途も考へて置かねばならぬ。

子を見ること親に若かずとの古語もあるが、果して親は子を見るの明があるであらうか、よし子を見るの明があるとしても、果して其見た處の方針に從つて、敎育し指導し得るのであらうか、此頃、自分が養つてゐる十六の娘の敎科書を調べて見た、高等女學校三年級の用書なる、「女子國語讀本」と云ふのがある、其五の卷に、德富健次郎の「我が家の富」と云ふ一文が載せてある。

「家は十坪にすぎず、庭は唯三坪。誰れか云ふ、狹くして、且、陋なり、と。家陋なりと雖も膝を容る可く、庭狹しと雖も仰いで碧空を望むべく、歩して永遠を思ふに足る」

との書出しである、自分は讀んで喟然たらざるを得なかつた。「歩して永遠を思ふに足る」、あゝ學校と云ふものは、こんな六ケしい事を敎へる處であるのか。開發敎授の、兒童心理のと、矢釜しく云つて居たとて、敎科書が側からそれを破壞して行く樣なものではあるまいか、更に高等女學校の敎科目を調べて見た。數學、理科、裁縫、英語、國語、歷史、音樂、體操、作法、地理、圖畫、修身等の十二科目がある。何たる煩瑣の事であらう。

不幸にも我國民は語學に於て二重の負擔がある、漢字の練習と、歐語の研修とがそれである。此重き負擔

の上に算數學に、珠算と洋算とが二重になつてゐる。その上の所謂普通學である、地理歴史理科の三科と、讀本の一科と、之は併合が出來ぬのであらうか、修身と讀本との間にも、何とかならぬものであらうかなどとも考へて見る。人間の腦力の平均發達が必要であることは科學は證明してゐるが、それは、特殊の腦力ある特殊の子供にも通用する原則であるとも限られまい、茲になると、世の親たるものは、子供の教育と云ふことに就いて、深き迷路を辿らねばならぬ事になつてゐる。

　先づ自分が迷ふのは、自分の子供は、殊特教育をすべきものであらうか、また一般的の養成をすべきであらうかである、女の子に付いて云へば、小學校高等女學校を卒業させ、女一通りのたしなみを教へ、そして結婚の準備をさすべきであらうか、將又、何かの才能に優ぐれた處あるのを、特別に發達させて、それで社會へつき出してしまはうかと云ふこと、男子に就いて云へば、生活をするに便宜な學校を選ぶべきか、或は其天分の特殊の才能を助長させて、それで人間を作り上げてやらうかと云ふ問題、極めて大綱であるが、其の大綱を立てるに甚だ迷ばざるを得ないのである。

　自分は今日の教育制度と云ふものは、平凡な人間を作る樣に出來てゐると思つたこともある、されど又今日の教育制度でも、優ぐれた人はやはり優ぐれて發達を遂げる人もあるのではないかと思ひ返しても見る、小學、中學、大學と、同じ樣に教育せられて來た人の中に、大學卒業後、四五年にして、ずうと延びて行く人と、いつまでも延びずにしまふ人とがある、之を以つて見れば、强ち特殊教育と云ふものを讃嘆する必要はない樣である。さればと云つて、もし此上に最初から特殊教育をしてやつたら、今延びるよりもより以上に延びて行つたかもしれぬと思はれぬ事もない、此考へを基礎として推論して見ると、今の教育制度は、多くの天才殺してしまひつゝあるではあるまいか、自分の子供を今の教育制度の下に托して仕舞ふことは、子供が貰つて來た天分を害なふことになりはせぬかとの結

論も出來てくる。

さて特殊教育をするとしても、先づ子供の才能を發見せねばならぬ、十歳にして神童二十歳にして凡人と云ふ譬もある、早熟はあてにならぬ、と云つて二十歳以上になつてからでは晩くなる、それから子供に特殊の才能があるとする。それを自分が正しく發見し得たとする。しかも其才能と云ふものが、實際上生活上利益の少ない、文學とか工藝とか、音樂とか云ふものであつたとする、さすれば其才能の發展を妨げしめぬ様成長後の生活の方法を豫定して置いてやらねばならぬ。手短く云へば子供に金を蓄へて置いてやらねばならぬ。之が又自分としてはどうなるものであらうか。

更に特殊教育は大なる危險を伴ふものである、今自分の子供に音樂の天分があると思つて、之に特殊教育を施したと假定する、斯う云ふ風の藝術家として立たすには、幾分放縱の生活も許さねばならぬ、それを犧牲にしてまで、天分の發達を希はねばならぬと云ふことになると、親としては所謂行末が案ぜられる、それでも一國藝術の爲ならよいではないかと、之は折にふれて自分も云ふ議論であるが、扨て人間は勝手なもので、その犧牲を自分の子供から提供せねばならぬとなると、聊か躊躇せざるを得ないことにもなる。

且平凡教育にも、特殊教育にも、共通の大問題が眼前に横つてゐる、それは社會が二十年後には、どんな狀態に移り行くことであらうかと云ふことである、今日の社會今日の自分の考へで立てた方針が、果して二十年後にも變ることなく、變らずしてしかも差支なくやつて行けるものであらうかどうであらう、問題が茲へ來ると自分の頭腦は暗闇である、又空虚である。

あゝ我子の前途、世の親たる人が等しく抱くべき、沈痛なる心懸りは實に此一語につきてゐるのではあるまいか、自分は世の父たり母たる人の、かう云ふことに就ての意見を汎く聞いて見たいと常に思つてゐるのである。

不利益なる東京の郊外生活

佐治實然

△近郊生活は寧ろ敗遁生活

年々人口が增加する爲に、東京は郡部にまで膨脹して、今日では其處にも空地がないといふほどになつて來ました。其れと共に地代や屋賃が騰るので、商工業上巳むを得ぬ家庭の外は、京橋日本橋、麹町の如き目抜の都會生活に堪へなくなつて、多くは山の手、又は郡部に居住を構へるやうになりました。其の中には郊外生活と稱して、諸事不便なるに拘はらす、都塵を避け得た積りで自ら得意になつてゐる家庭も尠くないやうです。で家政上の立場からして此種の郊外生活と、銀座、日本橋の如き都會生活とを比較して、その利害得失を少しく考へて見たいと思ふ。

私が平常主張する田園生活は、空氣がよくて、水は清く、人は醇朴で風俗の正しい、といふ所にあるので斯ういふ生活ならば大に贊成である。ところが東京を中心として、其外廓に住居する家庭に就て見ると、決して田園生活でもなければ、郊外生活でもない。寧ろ場末生活とか敗遁生活とか稱した方が適當かと思はるゝのが多いのです。

△家賃の外は總て高い

昔は場末だと稱せられた小石川、牛込、四谷、赤坂、麻布等の如き所謂山の手でも、今日では家賃などは却々馬鹿に出來ません。そこで新に移住せんとする者、若くば軍人、官吏、教師、其他總て勤人といふ樣な人は、勢ひ山の手の場末か、又は郡部の新開地に居を構へて所謂郊外生活を爲すといふ風になりました之れは經濟上の問題と、一つは空氣が良くて雜踏しないだらうと云ふ考へからでせうが、然し實際と想像とは殆んど反對の現象を呈して居ます。

大抵の人は、山の手の奥か郡部に住んだならば、第一に家賃が安くて、萬事經濟に上るだらうと想つて越して來るのでせう。ところが住んで見ると、安いのは唯一つ家賃だけで、其他の日常品は總て日本橋神田邊よりも高上りになるのです。

△小使帳が證據立てる

假に四十圓位の月給取りの家庭を標準として申します。今まで日本橋の裏通り位で十圓の家賃で住んで居たのが、今度は大久保か淀橋邊へ越して七圓の家へ入つたとしませう。家賃に於ては三圓安い。けれども往復の電車賃を差引くと結局同じ事になる。そして不便なだけが損になる。單にそれだけならばまだ宜いが、さて日常品の購入れを小遣帳に就て比較すると非常な損失を發見します。一寸お惣菜を拵へやうとしても、或は不時の來客があつた時でも、神田日本橋邊の繁華な土地であると、大きな店が澤山あるから、魚類でも肉でも乾物でも、安くて新らしい材料が直ぐ調へられる。然るに郊外の邊鄙な土地になると、第一材料が悪くて高いばかりでなく、少々氣の利いた獻立をしやうと思ふと、半里も隔れた料理屋へ使を走らせねばならぬ。加之早速の間に合はなくて、無法な代を取られる。其他米でも味噌でも、酒でも薪炭でも、呉服小間物、雜貨類でも、總べて市内の大きな店で買ふのと、郡部の新開地で買ふのとは、確かに二割方違ひます。是等の日用品で一日二十錢づゝ異ふとしても、月に積ると大きいものになります。

△空氣も野菜も水も悪い

又場末や郊外は百姓家に近い所だから、魚は高くとも野菜位は安いだらうとは何人も想像するところですが、それが又案外で却て高上りになります。と云ふ譯は附近の百姓が一旦市内の市場へ持込んだ物を、八百屋が更に逆輸入して賣るからです。偶に新らしい野菜物を分けて貰ふにしても、東京近在の百姓はなかなか狡いから、八百屋の値段よりも高く賣附ける。

宮城南面櫻田濠



即ち畑の野菜を眺めてゐながら、安い物を食へないのです。

次に郊外は空氣が良くて閑靜だと云ふ人があるけれども、それは十年前のことです。此節では大小の工場が到る所の近郊に出來て、加之に山の手線だの、甲武線だのといふやうな電車や汽車が往來するから、場所によつては京橋界隈よりも却て騷々しい所があります。よしや猫の額ほどの庭園や空地があつたにしても、工場の煤烟を浴びせられたり、汽車の轟響を聞かせられたりしては、名は郊外生活でも、其實却々さうではない。唯だ下町の複雜した所に比べると、夏は幾分か涼しいでせうが、其代り蚊が多いから、決して住みよいとは言はれません。それに市内であると水道があるから、飲料水に心配はないが、郡部になると總て掘井戸で、それが所によると非常に水の質の惡いのがある。是等も亦た市外生活の不利益なる一點です。

△人氣も善いとは言はれない

市外の田舍に近い所は、人が淳朴で人氣が好いだらうと思つて越す人も隨分あるが、それも間違ひです。郡部や場末の新開地は所謂寄集り者ばかりだから、甚だ人氣が惡い。そして市中生活であると、裏長屋住ゐの外は、近隣との交際が比較的疎遠であるが、新開地に住むと近所同士直ぐ知合になつて、互に口を利くやうになる。それが却て感情を害し合ふ基になつて、陰口、讒訴、猜疑等、好ましからぬ暗闘が起つて、遂には家庭の幸福を呪はれるやうな事にもなる。

恁う比較して來ると、所謂郊外生活の利益ともいふべきは、唯だ家賃の一點のみで、其他は悉く不便で不經濟です。故に近來好んで近郊生活をする人の多くなつたのは、畢竟家事經濟に迂遠なる人々の虛榮心に基くことと思はれます。即ち新婚の若夫婦などが、郊外生活といふ何となく風流らしい名に釣られて越すのと、今一つは烏渡した門構への家に住みたいといふやうな點から、場末が繁昌し出したので、實は甚だ不經濟なやり方です。

△市内に居て經濟な暮し方

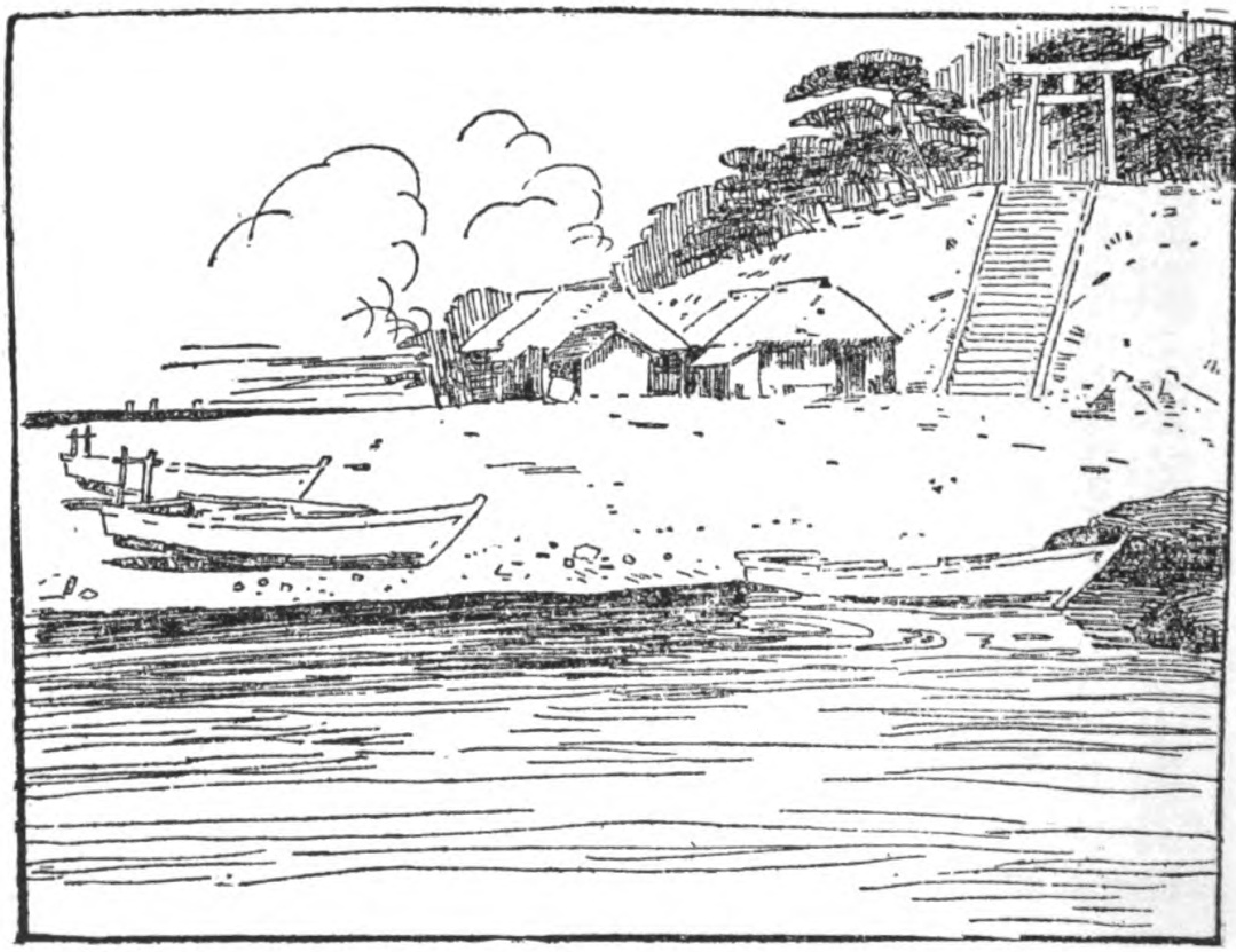
月收百圓以上もあつて、樂に生活の出來る者ならば山の手の屋敷町に居を構へるもよからうし、それ以上の財産家であつたならば、又山海の勝地に別莊を建てるなり、如何樣にも理想的の生活は出來ます。けれども二三十圓乃至四五十圓位の收入の家庭では、憖つかな郊外生活なぞと氣取込むよりも、市内に在つて簡易生活をした方が何れほど經濟に上るか知れません。

で中流以下の家庭を標準として、その生計方を述べて見ると、場所は何處と限らず、成るべく通勤所に近い所が宜しい。例へば京橋界隈に勤める人であるならば銀座の裏通り、檜屋町、彌右衞門町、弓町、日吉町といつたやうな路次を入つた所で、二間位の家を借りたらよいでせう。子供の無い夫婦者だつたら、二階借りしても間に合ひます。兎に角月給の五分の一以下を家賃の標準として、日用品は總て現金制度で買つた方が二三割方安く上ります。

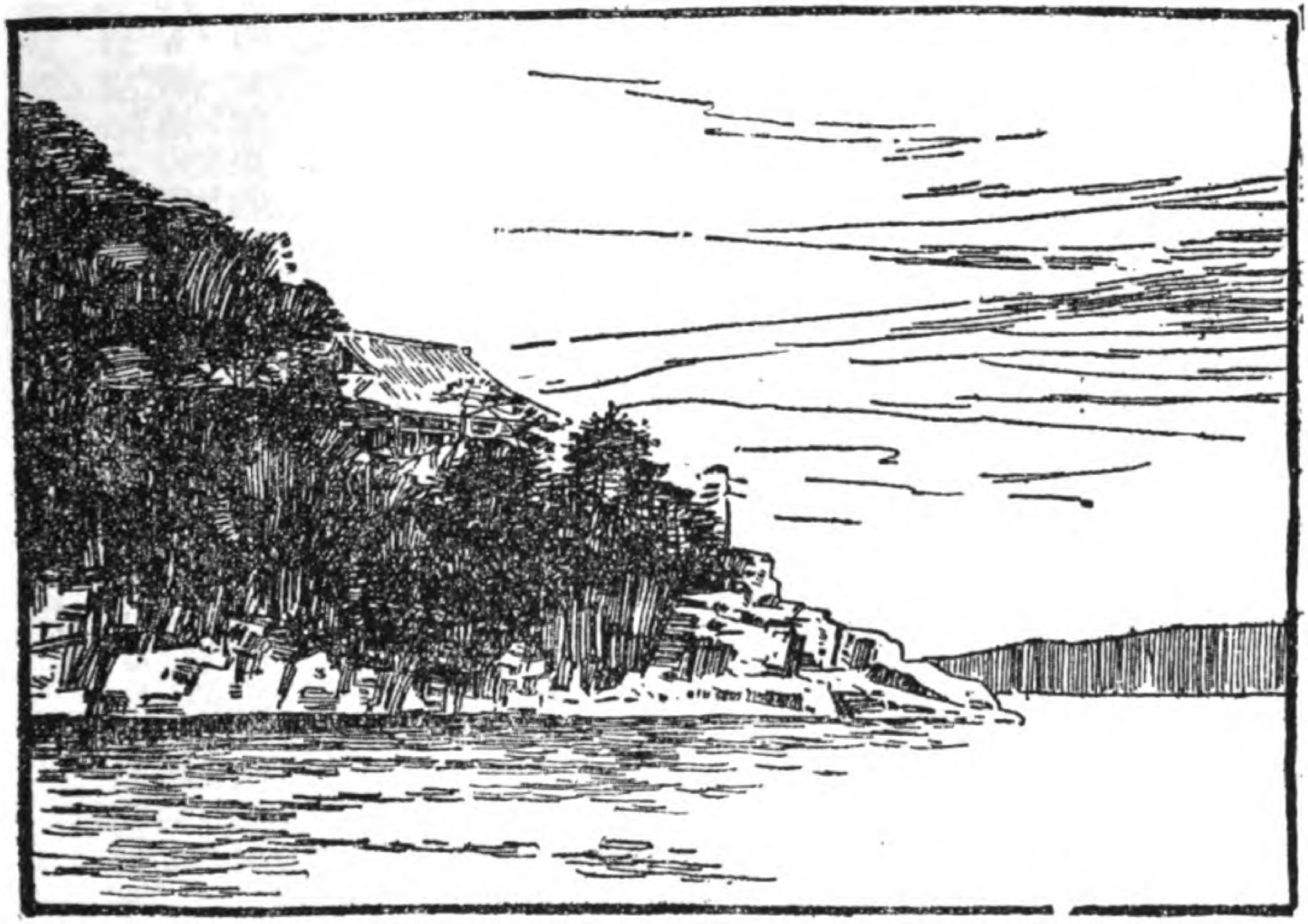
△日用品の徳用な求め方

それも普通の御用聞に廻つて來る商人では駄目です、先づお惣菜物であつたら、細君自身手近の大根河岸なり魚河岸なりへ出向いて行つて、彼の附近の大きな店で買ふと、物が新らしくて格安です。又鰹節や乾物類でも日本橋邊の大店へ行つて、疵物と稱するのを買ふと、普通一圓で二本位の鰹節が五本もあります。それは外見が少々醜いけれども、中味は少しも變りがないから、家で用ひるには甚だ徳用です。此外椎茸でも、干瓢でも干魚でも貝類でも、日本橋邊の大きな店で買ふのと、私共の附近（麻布笄町）で通帳で取るのとは非常の相違です。是等は寔に聊かな事のやうであるが、之を月につもり年に積ると非常に大きいものになります。市内の簡易生活で一年三百圓位で暮せるものなら、場末の郊外生活になると、同じ生計方をしてゐても、どうしても四百圓以下ではあがりません。然るに此頃の若い細君、殊に女學生上りの婦人は、籠

房州白濱海岸



琵琶湖名勝竹生島



や風呂敷を持つて自身で惣菜物を買ひに出る事を、何だが氣耻かしいものゝやうに思つてゐる。近所の手前八百屋でも魚屋でも、通帳で取るやうでなければ肩身が狹いものゝ如く考へてゐる。一寸足を運べば二三割も安い物が買へると知りながら、それをせずに飽までも奧様然と構へこんでゐたがるのが、今の婦人の病癖です。それ故前にも申す通り、百圓以上の月收ある家庭なら、下婢を雇ふも可からうし、郊外生活も必ずしも惡いとは申さないが、五十圓内外の收入の者ならば、前述の如き小さな虚榮心を除き去つて、今少し眞面目に經濟いとふ事を考へ、毎月幾らづゝでも貯蓄するやうにせねばなりません。それにはなまぢつかの郊外生活よりも、市内の簡易生活がよいのです。

世の常の色ならめやはさかの山
　もみつる秋の出まし所　　眞淵

初時雨ふりしはかりの跡見えて
　梢のみこそ色つきにけれ　　景樹

婦女界

十一月號

◎子女を惡化しつゝある我邦の家庭…菊地大學總長

◎日本の女子は此點を改めねばならぬ…井上文學博士

◎婦人の發狂は如斯き夫に多し…吳　醫學博士

◎國民道德に就いての注文…下田文學士

◎舞姫　靜の性格……戸川殘花

▲十三歲から赤貧の中で二人の弟を敎育した苦心　島貫夫人

▲車夫や立ン坊が喧嘩の仲裁までした繩暖簾時代　神谷夫人

▲滿州で馬賊の襲擊に遭ひ奇計を以て免れた實驗　井上泰子

▲死を決して六人の劍客と仕合ひたる當時の感想　古登子

▲馬を飼ひ鍬を磨き薄給の夫を助けた當時の追懷　益田夫人

▲放蕩の男子に嫁し矯正せんとして失敗した經驗　きぬゑ子

▲子供の泣き癖と其矯正法……岸邊福雄

▲手の人と頭の人との相違……上野學士

▲下田歌子女史と安井哲子女史の面影

▲外交官夫人の身元調べ　―お產の前後

▲御飯の食べ方季節料理　―婦人の內職

一冊十五錢　六冊九十錢

懸賞文藝
和歌、俳句、短文
繪畫、習字、笑話
等の募集詳細誌上に有

東京神田　同文館　振替一三五

女(その一)

明治四十四年 當用日記

▽**賣捌所** は各國各地の書籍雜誌店及紙類文具店到る所にあり

博文館發行の當用日記懷中日記は今に至つて多くを言ふに足らざるなり今や日本全國に於て二百萬の人士は既に之が體裁と內容とを熟知し且つ親しく座右の便に供し大に重寶せられたれば玆に重ねて大呼するの要あらんや然れども朧を得て蜀を望むは人の常情なり博文館日記の需要をして層一層ならしめんとせば**編纂、印刷、製本**の精を期せざるべからず四十四年度は此點に就て**遺憾なき計畫**を以て近く市場に顯はれんとす希くば倍舊の好評を賜はらんことを。

當用日記は卷頭に皇室皇族の御繁榮歷代の天皇大祭祝日日曜表等を色刷として揭ぐ

附錄 ●金錢出納錄●雜錄●知己人名簿●諸統計表●米價換算早見表●諸稅則摘要●郵便電信諸規則●新式萬年曆●徵兵規則……

紙數各五百四十頁

((當用日記定價))

大形（菊判）
上製（柏來洋紙總クロース金文字入）▲正價五十五錢 郵稅十四錢

中形（四六判）
總革製（柏來洋紙總革製金字入堅牢美本）▲正價金八拾錢 郵稅十錢
特製（柏來洋紙脊皮美製金文字入）▲正價金五拾錢 郵稅十錢
上製（柏來洋紙總クロース金文字入）▲正價金卅八錢 郵稅十錢

小形（菊判中截）
上製（柏來洋紙總クロース金文字入）▲正價金三十錢 郵稅八錢

發兌元 東京日本橋

販賣用電話 本局二六二〇番

懷中日記

博文館發行

懷中日記卷頭には皇室皇族の御繁榮歴代の天皇大祭祝日日曜表を色刷として掲げ新形は背面に他の二種は胸部に鉛筆挿を設く

趣向
體裁

（當用日記） 日々欄には過去同月日の重要歴史、七曜、干支及び詩歌俳句等を上欄に錄し天氣、寒暖、發信、受信及び摘要の記入欄を其傍に新設す尙各月の初めには其月中に行ふべき事項を豫記すべき欄を新設し、每日記入欄には細罫を付し秩序ある記錄たらしむ
附錄としては紙數十二頁の補遺、金錢出納表、收支一覽表、友人住所錄、農家年中行事、某醫學博士の衞生心得及び內外の最新重要統計數十頁を載せ卷末には日常必須の諸規則を網羅せり

（懷中日記） 每月の初に當月の行事、食品月令、遊覽案內等を揭げ日日の上下欄に內外名家の格言を揭げ其他七曜、干支、天氣、寒暖を付記し卷末には當用日記の如く日記補遺錄日常用の事項諸稅則及最新重要の統計表等百頁を付す

▽**取次希望**の方は御申込次第精々御便利に御相談可仕候

((懷中日記定價))

新形 ▲正價金貳拾錢 郵稅貳錢
（舶來洋紙頗美本總クロース金文字入紙長形携帶至便）

上製 ▲正價金拾八錢 郵稅貳錢
（舶來洋紙頗美本總クロース金文字入紙數三百〇六頁）

並製 ▲正價金拾貳錢 郵稅貳錢
（舶來洋紙模クロース表紙金文字入美本紙數三百六頁）

紙數各三百〇六頁

附錄
◎雜錄◎統計表◎利子早見表◎諸程規則摘要◎郵便諸規則◎徵兵規則大要◎年齡早見表

本町三丁目 **博文館**

振替貯金口座 東京二百四十番

新案

明治四十四年

ポケット日記

A、B、C……三種



紳士淑女用

●本日記の特長は何れも特製總革を用ゆ其手當りの滑かにして三方金緣を附したる、共に見ざる逸品たり。又製本の堅牢なる、日常携帶に至便なる紳士、淑女用として優美高尚なる日記なり。

●本日記は何れも薄手の舶來用紙を用ゐ、ポケット用として携帶至便なり、尚前記三種を調製し發賣せり各種亦特殊の特色を有せり。

●附錄=金錢收支表、郵便規則、税法、年齡表、補遺記事欄等の如きは日常座右缺くべからざるものなり。

A號……(厚形)
總革製三方金緣舶來紙薄手
美本紙數四百四十頁函入り
(記入欄一日一頁宛)
正價金五十五錢
郵税金四錢

B號……(薄形)
總革製三方金緣舶來紙薄手
美本紙數二百二十頁函入り
(記入欄一日半頁宛)
正價金四十五錢
郵税金四錢

C號……(薄形)
總革製三方金緣舶來紙薄手
美本紙數四百四十頁前後季
二冊差換函入(特長普通手帳兼用)
(記入欄一日一頁宛)
正價金六十五錢
郵税金四錢

◀東京 博文館 本町▶

婦人の高雅なる趣味

佐々木信綱

×

我が國の文藝のうちで、或は趣味の上から見、或は教養の上から見て、女子にとつて最もふさはしいものは、和歌であらう。

凡そ、文學藝術の何はあるけれども、おしなべて一般の人士に、高雅なる趣味の源となつて、現世の生活に齷齪する吾人の心に、いつまでも變らない純なる慰藉となるものは、詩歌に若くものは有るまい。繪畫も音樂も、勿論よいものではあるが、その慰めが一時的で、殊に音樂の如きは、特殊的といふ點があつて、特別の才能ある人でなくば、眞に之を解することが難い。かつまた、文藝といふ本來の性質としては、素よりいづれに優劣は無いけれども、繪畫音樂等が、一方に技藝に接觸して居るのに比して、詩歌は文字に關係して居る。殊に和歌の如きは、同じく文字による小說などに比すると、一層世界的の性質を持つて居る。これらの點は、一般の教育上から、自ら和歌の他の文藝に勝れて居る點である。

何故に和歌が女子教養の具として適當なものであるか。次にその主なる點を擧げて述べて見よう。

×

第一には、古典的性質といふことである。こは前にも一言いひ及んだが、和歌に於いては、特に著しい性質である。和歌は、今更繰返し言ふ迄もなく、國民的文藝として長い歷史を有して居る。古代の我が國の文明、我が國の文學は、和歌を全く離れては語り得ないと云うても過言では無い。和歌の集として傳へられた萬葉古今以下の諸書は、いづれも我が文學史上に於ける、貴重なる古典である。日に月に新らしい方へと進んで止まぬは、社會の勢である。和歌に於いてもまた、徒らに陳腐な思想、題目を繰返してやむべきで無

いのは固よりであるが、これとは問題を別にして、凡そ教養といふ點から見れば、社會には、一方に舊を棄てゝ新に赴く勢があると共に、絶えず古代に溯る必要が有る。古典の研究は、人心をして高尚ならしめ、徒らに現實に走る殺風景な弊害を脱して、一種餘裕ある生涯にあらしめる教育の上に、大なる効果のあるものである。而して和歌は、自らこの性質を持つて居る。何人も和歌によつて、自らこの教養を爲し得る事が出來る。

×

第二には、和歌の趣味が高雅で、かつ優美で、ことに女子に適して居ることである。高雅とか優美とかいふことは、女子性情の美所であると共に、また益々これを助長せしめねばならぬものであるが、和歌の趣味には、自らこの特質がある。此點が、和歌が女子の教養の具として適當で、また必要なる所である。和歌の教養によつて、この女子の長所は自ら發揮せられ、益々養成せられ行くのである。

×

第三には、和歌の趣味の細やかな點である。和歌は、自然人事の微細なところに美を求めて行くことを、長所として居る。こは教養の具として、人の趣味性を養ふ上に長所とすべき點であると同時に、女子のこまやかな性情に適し、またいよ〳〵そを發達せしめて、微妙なる性質を養はしむるに最もよい。細やかな人の心の美しさに感じ、隱れたる自然の趣に歎じ得る人の心は、如何にも望ましいものではあるまいか。殊に婦人に於いてさうではあるまいか。

×

第四には、これと共に、和歌が婦人をして同情の念を養はしむるに與かつて力あることである。同情といふものが、人間の性質に於いて必要な、かつ貴いものであることは、言ふ迄も無い。和歌によつて自分の情

を涵養せしめ、他人の情を了解し、以て同情の念を養ひ得ることは、殊に和歌の爲に特筆すべきものである。

×

第五に、これらの長所があるに加へて、和歌は一般女子の文藝として、入り易い特長がある。もとより專門の業として見れば、決して容易なものでは無いが、ある程度までは普通の敎育ある一般の婦女子に於いて、心がけさへあらば、さほど困難なくこれに入り立ち得で、多かれ少なかれその人々各自の特有の境をつくり出すことが出來る。特長を發揮することが出來る。これつまり、文藝として多くの一般性を持つて居る點である。



（塩原十景の内）

×

勿論、和歌は文藝であるから、これを純粹の敎育的立場から見たらば、多少の缺點は有らう。その缺點として數へらるるものゝうち、まづ第一に、戀愛の歌の多いこと。こ

れに就いては、素より抒情詩たる性質からして止むを得ないことであるが、よく其長所を取つて弊を避けて行くことこそ、寧ろ敎育家その人の任務であつて、其爲に和歌の長所を捨てることは出來ぬ。第二の非難は、優美を主とする極、剛健な氣風を失ふやうになりはせぬかとの點である。固より大體に於いて、和歌を以て所謂剛健の氣を養ふことは困難である。これまた同樣に、敎育家の手腕に待つて、短を斥けられねばならぬ。

×

以上、和歌の敎養上の功に就いて述べて來たが、更に悉しく考へるに、たゞ他人の和歌を讀み味はふと、それのみならず自分で作るとがある。完全なる和歌の敎養といふ點から云へば、素より兩方を備へたい。他人の和歌を讀み味はふ力が無くば、自分でも固より作れぬ。また自分で作るだけの力が無くば、他の作も十分こまやかに味はひ得ぬ。併し敎養といふ點から之を見ると、よしや自分で作るに至らぬ迄も、まづ他の歌を十分に味はふといふ方から養ひたい。かの德川時代の有名な敎育家の貝原益軒は、その著なる文訓の中に、

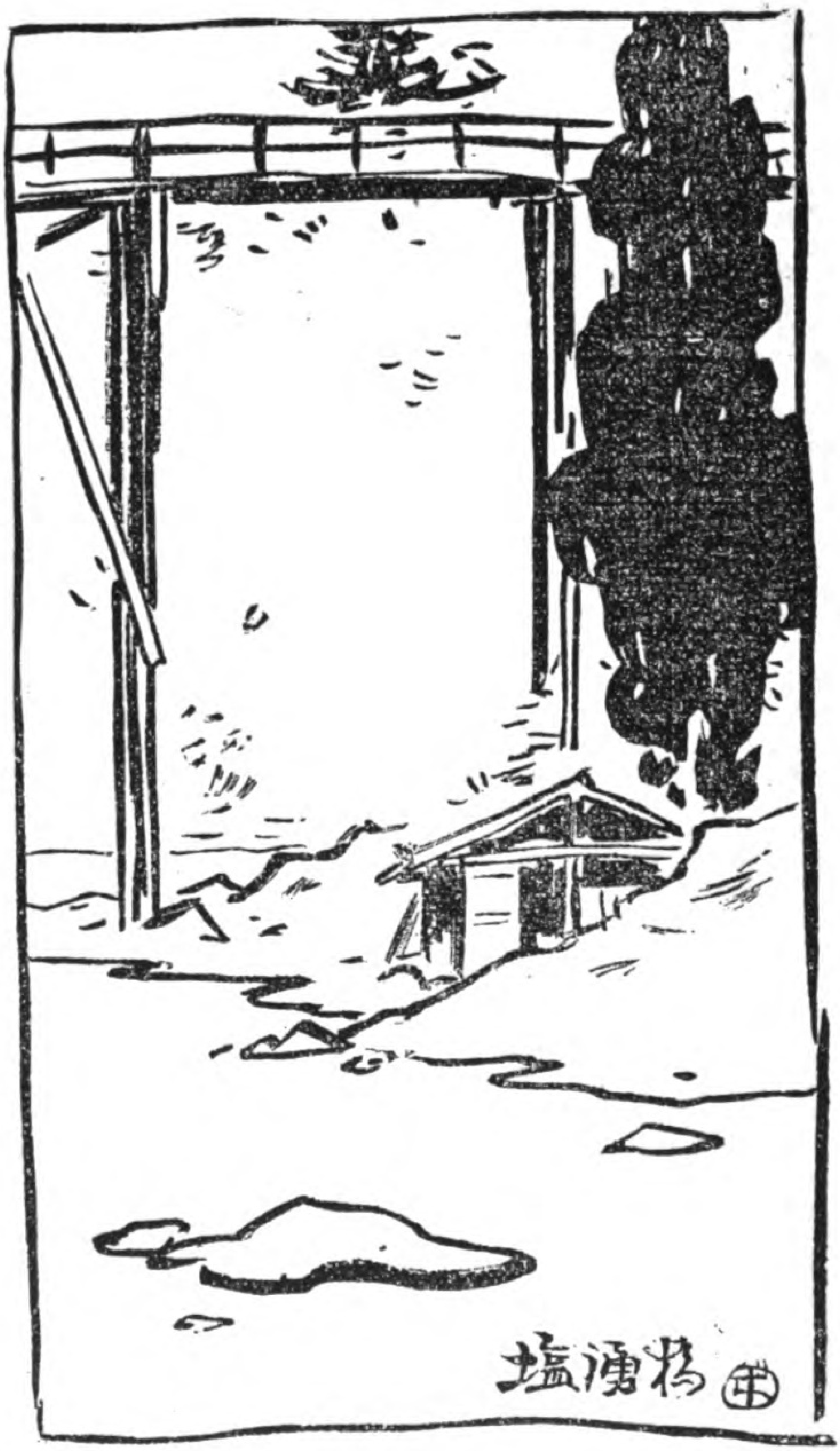
「その才器ありて詩歌を作らむは、まことによし。その器にあらずしてなまじひに拙なき詩歌を作り出して心を苦しめむよりは、古人の作れるよき詩歌の、その時とその事にかなへるを吟せば樂くみ深かるべし」

といひ、古人を引ひて、

「俊頼も、折ふしにかなひたる歌を詠するは、よむに勝れりといへり。俊成も、折ふし面白き所がらなどになまじひの歌よまむよりは、時にあひたる古歌を吟じたる面白しといへり」

などいつて居る。是も確かに一種の眞理がある。和歌を敎ふるにつけて、殊に女子敎育上には、この趣味性の敎養といふことを主として敎へたいのは自分も同感であるが、自分は其處からして、また自ら和歌を作り出でることをも敎へたいと思ふ。自分が作るといふことは、他人の歌を味はふといふ上に、大いなる効果のある事である。

さらば上述の如き和歌の教養を女子教育に効果あらしむるには、如何にすべきかといへば、その精しい具體的の案に就いては、今述べる折で無いが、その主なものとして氣付いたことをいへば、第一に、高等女學校の國文教育に於いて、今すこし此點に注意し、或は教科書に今よりは多く和歌を入れるとか、或は作歌法を教へるとかし、第二には、各家庭に和歌を行はれしむることにつとむる事である。斯くの如くにして、女子の趣味性を開發して行く結果は、やがては國民全體の趣味性の發達と成つて、大なる文學または文明の精華を咲き出でしむるに至る素因となると思ふのである。（終）



（鹽原十景の内）

初冬の料理

しらぎく

◎火曜日

お天氣はよいけれ共大層寒いので鼻の上に羽織をきたので母樣に笑われた

今日は威勢のいゝ魚やの聲がする極新しいといふので鯛を片身と牡蠣を取つて置く

今日の獻立は

1、鯛のふか〳〵　2、鯛の塘やき　3、牡蠣卵むし　4、八ッ頭うま煮

1、は先づ鯛の身を骨より離し皮をすき取りて身計りをよく擂り椎茸をよく洗ひて細かに切り銀杏を少し加へてよく交ぜ煮出しに醬油を加へて清汁に仕立てたる中へ右の擂りたる鯛を匙にてすくひ入れ一煮立ちしだる時椀に盛る口、へぎ柚子。

2、は鯛の切身を串にさして味醂醬油をつけて燒き玉子を鉢にとき三四遍かけて文火にて燒く

3、は牡蠣をよく洗ひ卵を割りてよくかき立て味醂と鹽にて味をつけ大丼の中へ牡蠣を入れ三つ葉銀杏等を具合よく竝べ其上より玉子の溶きたるをかけ針生姜をまき蒸籠にて蒸す（これは食す時小皿等にとり別けて食す）

4、八ッ頭を適宜に切る初め湯出て煮出しにて煮詰め柔く成りたらば味醂、醬油、酒を入れて鹽梅しよく煮込む柚子を擂り下し上よりパラパラとふる、

◎水曜日

昨夜京都の兄上から松茸を送つて下すつた父樣はじめ皆の大好物、ほんとに難有いこと、肉やが來たので牛の引肉を誂へる

獻立は

1、煎り松茸　2、牛團子吸物　あしらい三ッ葉　3、松茸浸し物　4、オムレツ

1、松茸をよく洗ひて石づきをとり程よく切り、鍋を燒きてザッと煎りつけて汁を捨て醬油少しと柚のしぼり汁を入れかき廻して皿に盛り胡椒を振りて出す

2、牛の引肉を少し取り、鹽を少し加へて小さく丸め置き煮出しに醬油を加へて鹽梅しよく煮立て團子を一つ宛入れ生姜の搾り汁を少し加へて椀に盛る（團子の浮上るを度とす）三つ葉は一寸程に切りさつと湯出て共に盛る

3、松茸の莖計りを短册に切り目笊に入れて沸湯をかけてよくしぼり小鉢に盛りわさびの擂りたるを上に置き三杯酢を掛けて食す

4、前の引肉の殘りを鹽胡椒にて味をつけ置き卵を割りてよくかき立て（一人につき一つ半位のわり）燒鍋にヘットを引き玉子を少しづゝ入れ右の肉を中に入れ片端を折り返して包み杓子にて上げ皿に盛る

◎木曜日

今日はお祖母樣の御命日なので庭から草花を

切つて来て上げる赤い鶏頭や女郎花の黄紫苑の紫色などが配合よくいき〳〵して居る

午前中五目飯を拵へて佛様へ供へる

飯を常より稍固に水加減し味醂を加へてたき上げ別に酢へ鹽を加へたる物を作り温き飯を平たき器にうつし熱き處へ酢をふりてよく交ぜ團扇にて扇ぎさます

蓮根、くわい、椎茸、よまき隠元、干瓢等適宜に調理し右の飯の冷めたる時交ぜ鉢に盛り上に浅草のりを焼きて細かくもみたるをふりかけ針生姜をそへる（精進なれば玉子を入れず）

さて今日の献立は鰯のよいのを取つて置いたから一つ鰯を土台にして見た、

1、鰯フライ　2、鰯うづ巻き吸物

3、鰯うの花ずし　4、茄子金柑煮

1、鰯の頭を取り骨をぬきて鹽胡椒を振りメリケン粉をつけ玉子の中に入れ更にパン粉の中にころがしヘツトにて揚げる

2、鰯を前の様にして皮をすき身計りを庖丁にてたゝき擂鉢にてよく擂り粉の大なる葉をよく洗ひて爼の上に置き前の魚を薄くぬりつけ小口よりくる〳〵と巻き糸にて三所計りしばり熱湯に入れてよく湯出て取出し小口より三分程の厚さに切りせりを適宜に切りて前の渦巻と共に通例の清汁に仕立てる

3、鰯を前の如くして（但し皮を取らず）鹽をふり暫く有て酢につけ置く卵の花をよく布巾にて水気を搾り煮出し少々醤油味醂にて味をつけ冷めたらば鮨の大きに握り前の魚をのせる

4、小さき茄子のへたを去りよくあくを出し湯出て笊に上げ醤油味醂にて煮つけ飴を少々入れて又煮詰る甘くして味よし

◎金曜日

今朝田舎から姉やが久しぶりで来た名物の栗を沢山持つて来て呉れた年寄りの[illegible]かつたらうに毒の事な、今夜は止めて頂くと言つたので小さい弟は大喜びでくつつき廻した

魚やが来たので平目と貝の柱をとる

献立は

1、栗きんとん　2、貝の柱吸もの

3、平目キヤベツ巻　4、栗飯

1、栗の皮をむき、ゆでゝ渋皮をよく取り、砂糖鹽味醂にて味をつけ半ばをつぶしてよく〳〵擂りて餡の様になし前の栗を入れてよく和へる

2、貝の柱をよく洗ひて水を切り三つ葉を適宜に切りて共に通例の清汁に入れ椀に盛る。

3、キヤベツの外皮を去りあとを一枚〳〵にむきてよく洗ひ湯出て水を切り置くさて平目を三枚に下し皮を去りてよくたゝき鹽胡椒をふり前のキヤベツの葉にて一巻づゝよく包み味醂醤油に煮出しを加へて煮詰る煮たらば注意して皿に取り跡の汁へ葛粉を薄くときて入れ煮立てて前のキヤベツ巻の上よりかけて出す。

4、栗の皮をむきて渋皮をよく去り米をよく磨ぎて味醂醤油を程よく入れ栗を共に入れてたき上げる、

◎土曜日

けふは土曜日なので御昼には妹や弟が学校から帰るから一寸した物を拵へる

1、ヤマトシチウ　2、車海老天プラ

1、牛肉の細くきりたるを鍋に入れて裏表とも返して燒き湯をたして暫く煮別に人參、ジヤガ芋、玉葱等を細にきり右の鍋中に入れて又よく煮込み和らかに成りし時醤油と砂糖と入れて味をつけ葛粉を水にてときソロ〳〵と入れてよくかき廻し生薑の搾り汁を入れて食す

2、海老の皮をむき背わたを取りメリケン粉を少しかたく溶き海老の尾を持ちて三匹位一緒にして粉をつけ胡麻の油にて揚げる

皆ヤマトシチウがお氣に入つてさしも澤山拵へたのが皆おしまひに成つた骨折甲斐が有つてほんとに嬉しかつた

晩餐の獻立は

1、ビーフステーキ　2、信田卷

3、隱元胡麻和へ　4、栗うま煮

1、牛肉を長サ二寸巾一寸五分厚サ四分位の大切にし兩面へ鹽をふり置き燒鍋にバタを溶し右の肉を入れて打返し〳〵燒く之を皿に取り跡の鍋へ湯少しとバタを入れてかき交ぜ其汁を肉にかける

2、信田まきは油揚を二つにきりざツと湯出て水を切り袋の様にへぎ置く、

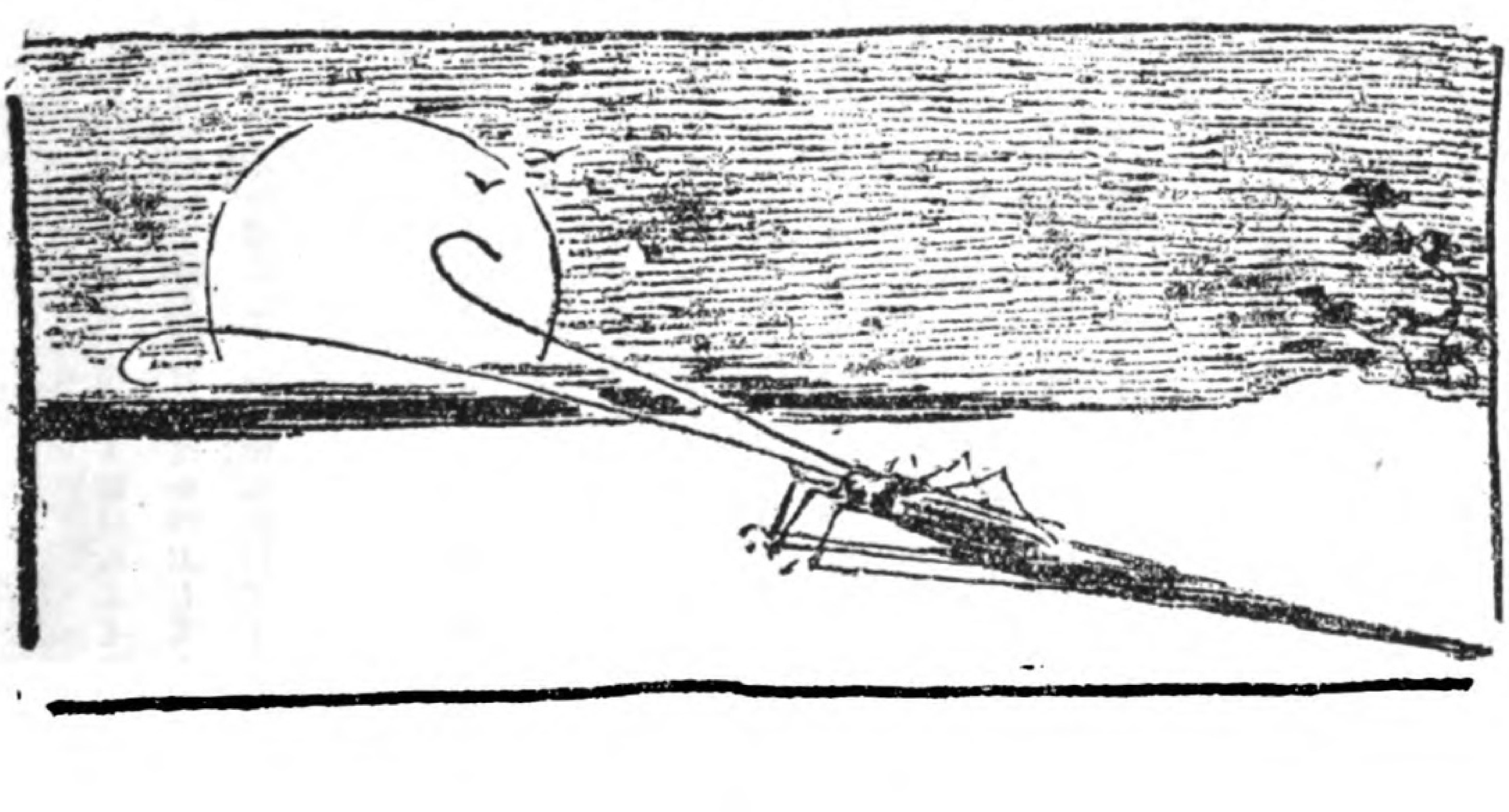
別に人參、大根きくらげ等を細かに切りて味をつけ前の海老を細くむしりて共に油揚の中に入れて口を折り干瓢にてしぼり煮出し味淋、醤油にてよく煮込む、

3、よまき隱元の前後を切り細く切りて鹽にて湯出軟くなりし時笊へ上げて水をきり黑胡麻をいりてよく擂り味淋、酢、醤油を入れてゆるめたるにて和へる

4、栗の皮をむき澁皮を去りてよくあくを出し鍋に味淋、鹽、砂糖を入れて栗の上へ汁のかぶる程に成し文火にて氣長に煮詰る、

鹿の音は遠き隔れり中空の
　月のあはれや打そはるらん　有功

しめやかに鹿ぞ鳴なる妻待と
　山のふもとに立やぬるらん　永好



浪人の妻

松かぜ

午砲がうつた。吃驚して針をおいて立ち上つてお膳だてをする。良人に丈昨夜一人前殘して味噌漬にしておいたお肴をやいて、有合せのお菜豆で濟ましておく。

「あなた御飯でございます。」

机の前へ横になつて、讀みさしの書物を手にしたまま、うつとりとして居らつしやるのを起して、お給仕しながら自分もいたゞく。

「あの〇〇先生をお尋ねになりまして？。」

「ふゝまだ行かない」

「〇〇先生てどんな方でございますの？」

「俗物さ。今一寸勢力はあるが人の世話なんか親切にするやうな男ぢやあない。」

「でも叔父樣が折角紹介狀を送つてくだすつたのですから、無駄でも一度うかゞつて御覽なすつたら？……」

〇〇中學校で校長と衝突辭職されてから半歳にあまる浪々生活、初めの間は知己や先輩の紹介狀を以てあちこち奔走されたが時節柄思はしい勤先もないので、どうせなるやうにしかならないと、此の頃はどこへも訪問もされない、著述をするとやら仰るけれど、一向なにが出來る樣子も見えぬ。

故郷の姑樣へはもう五月といふもの、一圓のお小遣も送らない。さぞや不孝な嫁だと惡く思つていらつしやるだらう。でも、其の送金はおろか、明日のお小遣、月末の拂にさへ差支へる昨日今日、氣の狹い自分は、安き心もない。此の月も既に半ばすぎた。少しばかりの貯蓄もすつかりつきてしまつて、實家でこしらへてもらつた着物も一枚二枚とだん〲に減つてゆく。ああ、この月末!!。明日にでもふいとよい勤先が出來れ

ばよいが……。そんな夢のやうな事あてにして居たら次第〳〵と手もとがつまるばかり。ほんにどうしたらよいだらう。女の職業なんて生意氣な下卑た事のやうに思ふて居た問題がしみ〴〵と考へられる。とはいへ盜賊捕へて繩とやら、かう焦眉の急にせまつてから、何をしやうもありはしない。こればかりはとつておいたあの丸帶とお召の重ねと思ひきつて手放してしまはうか。

今の場合よい着物きて出歩かうのなんのといふ氣は少しもないけれど、折角母樣がお心盡してこしらへてくだすつた嫁入り仕度、滿三年とたゝぬ今日、なくしてしまうのはあまりに申譯がない。こんどおいでになつて、あの着物はと若し仰つたら、何とお返事が出來やう。

富めりとにはあらねど、贅澤さへせねば、衣食するにあまりある家に生れて、慈愛深き父母のもとに不自由しらず育てられた身は、今日の苦勞を夢にも豫期しなかつた。質屋へ通はれたり、負債をされたりする奥樣のことを聞くと、身分不相應な生活をするだらしのない方とばかり思ふて、結婚後一年あまり、良人からきまつて頂く月々のものゝなかから、少しづゝでも貯蓄する自分は、なか〳〵の經濟家で、生計に困つて人に助力を乞ふやうな不面目は終生しないと思つたものを。

「羽織をだしてくれ。」

聲にビックリ我れに歸つて立ち上つて箪笥へ手をかける。

「どちらへ？」

「一寸そこまでゆく。」

「いつていらつしやいまし」と送りだす良人の後姿、心なしに悄然として、いつやら從兄の勉さんが馬鹿だつて金をもたせりやあ悧怜さうに見えるさ。僕のやう

に貧乏すると、偉くても意氣地なしに視られるとこぼして居た言葉が思出される。

少ししめのこして出てゆかれた戸をぴつしやりたてゝおかうと下駄ひつかけて庭に下りると、戸外は神無月小春の空うらうらとのどかな好天氣、お向うの生垣の茶山花二片三片香もなくちつて其處にねむる猫の脊に止まる風情、何となき詩趣をおぼえる。といつて歌考へて見る心地もしない。考へたとてどうせ想も言葉もまとまらぬうち思はすぐ生活問題に立ちもどつてしまうもの。晶子さんなどは家をもたれてからいつも生計問題に苦心して居られる樣子だが、それでもあゝして澤山の秀歌や、創作を絶えずして居られる。偉い方だ。明治の鬼才といはれるジニヤスを以て生れた方と自分のやうな凡愚と比べものにならぬはあたりまへの事だけれど、私は其の雜記帳で「日常生活はわたしの生活のほんの一部です。…生活の全部ではないのですから、なにもくよくよとして許り居りません。わたしの生活の他の部分、即ち精神生活の上に、なほこれにまさる苦勞もあり又日常生活の氣苦勞などは影の消えたや



うに忘れる事の出來る樂みも多いのです。」といはれた其の潤いお心もちが羨ましい。私のやうな氣の狹い平凡な女は、家庭の經營は私の生活の全部、少くとも大部分なので、その日常生活に不安を抱いては精神的生活の妙趣を味ふ心の餘裕をもつ事が出來ない。否、このさきなほ一年も二年もかういふ不安な生活がつゞいても、良人に同情深い快活な顏色を以て接し、かはらぬ希望や勇氣を以て、家事を取り扱ふ事が出來るかどうかと云ふ事さへも疑問と思ふ。

「大層靜かだね！」まあ何時の間にか實家の母樣。

「オヤお母樣よくいらつしやいました。」

「近くまできたから一寸よつて見やうと思つて。何かい。三郎さんはお留守かい」

「ハア少しさき出かけました。まあどうぞおしき遊ばして。」

長火鉢の向側へさし出す座ぶとんにのつてお煙草一ぷく。

「でやつぱり勤先はきまらないの」

「えゝ矢張りどうもこれならばと思ふ處がないと申しまして。」

「困るね、男はどうしても呑氣だよ。父樣なんかもやきもき思はんでもいゝ。あせつてつまらなく身をおとすより、落着いて時をまつさなんて、平氣でいらつしやるけれど、いつまでもそんな事いつてちや、第一お前が可哀さうだし、私も心配でね、今日は一つ早くどうにか處置をつけるやうに、お前はなんにも云ひ得ないから、私から話して見やうと思つてね。」

「いろ〳〵御心配をかけまして。……」

「學士といふ肩書もあるものが、夫婦の糊口をし得ないなんてあんまり意氣地がないぢやあないか。そんな位なら、憤つて前の處をよしたりなどしなきやあいゝのに。氣位が高くて手腕がなくては一生困る事ばかり

たよ。才氣がない。氣位の高すぎる。濟まない事だが自分もしば〱さう思つた。とはいへ他の口からさういはれて見れば妻としていゝ氣持はしないそんなに仰らないでもよさゝうなものを母様もあんまりひどひなさけないと心に思つてだまつてると母様はまた「あの此所へくる前お前をほしいといつた醫者があつ



たね、お前が醫者はいやだといふからよしたがあの人は此の頃日本橋で開業して大層さかんにやつてゐるさうだよ。今の世の中はどうしてもお金がとれなきやあだめだからね、お前もお醫者さんの奧さんになつた方が幸福だつたらうよ。」貞節、婦德、それを敎へてくだすつた母様がまあ何といふお言葉だらう。可愛い娘の苦勞を見るいとほしさにお眼が眩んだか。痩て

[illegible]多いのです。」といはれた

[illegible]

[illegible]なくても濟むから少しでも
お餞の都合のいゝやうにと思てもつてきたのだから。」
あつき母の御情ありがたく頂いてしまつた。わたし
は到底弱き女である。

ぶく。

「[illegible]やつぱり勤先はきまらないの」

[illegible]

[illegible]しられる位の事で、何の面白
い事もありませんわ。……」
何といふ失敬な手紙だらう。東京でよい口が、[illegible]
なら、田舎まで辭を卑うして頼みはしない。[illegible]
く可否問題はとにかく、長く浪々生活を送る餘裕なき
事も打ちあけてたのんでやつたものを、これが女學校

時代姉様々々とほんとの姉のやうに私にたより、私も眞實の妹のやうに保護つて可愛がつた其人の手紙とは

おちぶれて袖に涙のかゝる時人の心の奥ぞしらるゝ

口惜しさの涙ははら〳〵と頰を傳ふた。

眞實の母や親族からこんな待遇を受くるは何故。今に良人が歸られたら、お留守に母がまゐつてかう〳〵申しました。從妹はこんな手紙をよこします。どうぞ早くお身を定める手段をとつてください私の着物も殘り少なくこのさき永くこのまゝではどうしやうもございませんと泣てせまつて見やうかしら。……否、否、否。

緣定まつて實家を離るゝ前夜、父の御前にひざまづいた時、順境に處して良妻たる事は何人にも出來る。女は逆境に立つてあく迄も良人を助くる不撓の志をもたねばならぬ。男子の困る時、どうにかしやう、どうにかせねばならぬと思ふても時至らず志を得ざる時、連れ添ふ女から不平や愚痴をいはれる位男子の志をいためるものはない。さういふ時滿腔の同情と赤誠を以て良人を慰め、良人に仕ふるのが女の道であるぞと、御慈愛深き御顏おごそかに、おさとしくだすつた其の時、私は嫁してゆかば良人の爲めには水火の中もほゝゑんで、おゝ、ほゝ笑でくゞる決心をしたではないか。

なほ多くの未來も希望もある今日のこればかりの苦勞に愚痴や不平を洩らすやうで、此のさき幾十年、せちがらい世に、無資産、孤立、腕一つでたつてゆく良人と、どうして苦樂を共にする事が出來やう。良人が不治の病を得て何等希望なき身となられやうと、老朽また期待すべき未來なき人となられやうと、屈せぬ勇氣、かはらぬ愛、滿足と微笑をもつて仕へてゆくのが妻の道である。

それよ、私は、世才乏しく、世に時めき得ぬ夫を恨むよりも、心せまく淺はかな女を見すて給はぬ夫のやさしさを感謝せねばならぬ。

御嶽昇仙峽の紅葉





今様 枕の艸紙

磯ちどり

○氣味あしきもの

夜見たる井戸の中。闇に汲みたる水も氣味わろし。狂人の物見すえたる。夢見て高らかに笑ひたる笑聲、きては雨降る夜などひとりゐて、遠縁の女の死になる事などの思ひ浮ぶるに、肌に粟いづる心地する。急に戸じまり堅くし、ふしどに入るに、火點しては反て物の姿なども眼に入りて寝難ければ、寝衣着の體半さしいでゝ火消し、眼かたくとぢて、夜具引かつぎてあるに、その死顔のすぐ我頭の上に來つる樣覺ゆるも氣味わろし。されど眞晝には同じ事思ひでゝさまで恐ろしくやはある。など其夜さ程におぢ怖れけむと思ふもをかし。また汽車にのりたるも氣味あしく、女ばらは生きたる心地もせず。さ申すは、さる頃より衝突いと多くなりて、乘る者心元なく、旅する砌は父母の御顔もこれにて見納にやと思ふもいみじく、箱の内にある限は神の名念じ手に汗にぎりける。漸う無事に着きぬれば、ほと息つき我家へは「汽車無事」と電報打ち我身は氣の疲れにて二日程寝たるもげにあしき癖とや言ふべき

○物足らぬ心地するもの

下司らしき事ながら辨當の菜の少なさ。俸給の減りたる。さにはあらで増へたるにても税金のみは物足らぬ心地ぞする。袴はきたる女の後姿は腰の邊いと物淋し況して脊のひくゝ物々しう筒袖きたるは、前より見ても後より見ても今少し飾あらまほしくこそ覺ゆれ。後姿は脊高き女の胸高に帶しめ、腰のあたりより下の細く溶くるが樣に衣着なしたるぞよき。

幼き折の事なり叔母等の來て玩具呉れたるに我身のみ其數にもれたる。姉の物もらいたる羨しさに一寸見せ給へなど言ふに、惜しがりて見せざる。日頃の負けぬ氣に「見する位は見するとも」など言ひて爭ふ。物音に打驚きいで來たる母に事の筋きゝ打和むるに、譯もなき口惜し涙出でゝ、姉には我物二度とは見せじなど泣きながらいひたる折もあり。

　貧しき人は歎くめり、いつも〳〵物足らぬとて

〇それと悟らせたきもの

世辭言はるゝぞ誠と思ひて、我事自慢したる。猫に藥のます折。

夏など男も居ず、冷飯多く殘りたるに、此上炊ぎても腐りやせんとも思ひ、また例の無精の心よりして、炊がでありたるに、幼兒のさる折に限りてをどろ〳〵しく打食ひ櫃の中空しくしたる。今一つとて泣出したるをいと眞面目なる顏して「大食は毒」など言ひて叱りたる。女親は食はでありたる。さてもそれと悟らせたき物也。

急の用ありて外出せむと思へる折、人の訪ね來たる、近々しからぬ人には流石にそれとも告げかねて苦しけれ、時計など度々見、それと悟らしめむとすれど向はいとゞ落附きて煙草のみ、此所の眺はよし、靜なる御住哉など語り、夏ならば扇打ひろげて、はた〳〵と我身打あふぎたるもわろし。

　況して新婚當時の若き二人の、いざ連立ちいでむとせるに人來たるはいかゞ。たゞ花に嵐の樣覺えて、男の君は話も上の空にし、自づと嘆息もいづるに「如何せし」など客に問はれたるもいみじ。

　禿げたる頭は笑はるゝもの哉されど夏は蠅も止らでいと涼しかるらむ。額より禿げ上りて、上なる方は廣廣と空地になりゐたる。年寄らば我事あし樣に言はれても腹立つまじと思ひしに、幼き者等の「藥鑵」などと笑へば、いみじく怒る。さるを藥鑵より湯氣が出るよと打囃せば、傍なる者さへ笑ふにぞ、禿げにし人は、首うちふりつゝ、「末恐ろし、今の幼兒の口惡なるは」など

明石の浦の明月



打言ひたるもをかし。酒飲まば赤くなり、艶々しさは青き筋さへ、げざやかに見ゆ、されど頭垢と云ふものあらねば、掃除あしく、箒の楼になり塵づきたるよりも清々しけれ。

我母の申し侍り。今は在さぬ帝の頃、頭いたく禿げたる男の藏の中に寝ね侍りしが、我夜盗人の忍び込みし物音にふと眼覺し．怪しと思ふ窓より首つき出せしに、外に待ち居たる盗人の一人、小聲にて「藥鑵から先か」と申しゝとなむ。さても誠の話にや。

○先遥かなるもの

南極探檢の門出。來年の事。若くしてかけたる保險いづれも先遥なり、中にも保險はその初、言葉巧に勸められてうかと諾ひしが一度掛けし後は、其餘りに遥なるに厭はしくなり、何故かゝる愚なる事をせしと後悔し果てはうち斷ることもをかし。

源氏初めし日も先遥か也。されば源氏の事、かれやこれと言ふ人の讀みおはせたるも少し。多くの者は、

桐壺、帚木のあたりよみかぢりためる。されど菊にも師の君と崇めらるゝ人は、涙出づる思して終止讀みたる。古き世にはさる山鳥の尾の樣なるもの作る暇もありけめ、今樣は讀む暇さへなき、またさるもの一々讀む要やはある、

○病は

咽喉の病、眼の病は同じ病の中にても心きゝたる樣に覺ゆ。春の日の陽炎立つ頃、美しき女などの色白きが眼紅くして絹綃にて押へ、派手やかなる傘にさす日影をさへ厭はしげにしたるはいと艶なり。

日頃身體健なるものは、時には病して見たき事もあるよ。されどさる人に限りて少し齒にても痛まば、我世の終になりたらむ樣に打騒ぎ、痛し〱と、訴へ、物など打毀して怒るなり。

また不如歸などに讀み憬がれたるからに、病ならば胸の病ならまほし、と我心にも思ひ、人にも話したるもをかし。なべて胸の病は詩人文學者に多ければ、身體瘦せたる人の天才氣取りたるが、我にも其素質ありなぞ、そを唯一の己が天才の證據の樣に言ひなしたるはかたはらいたし。

大人たるにてもさあるはあれど幼き者の病みたるこそげにいた〱しき物の限なれ。理も覺えぬに、夜半より熱出だし初めてうちもだへたる。また生れて間もなき子の火のつきたる樣に泣くに乳含ますれど、打もくはへず、抱けば足ふみはり身をそらせて、ひた泣きたる、若き親ならば周章まどひ、我身もさしぐみ「如何せん」など夫にたづぬるに、男もせん術知らず、醫師の許使馳らせ、待つ間も辛げに、おど〱とし、時時「良き子、良き子」など言ひて、泣く子の額撫でたる。

ヒステリー、ヒポコンデリーは今更めける女の病にこそ。さればこの頃の醫者は何とも名の知れぬ病を、みなヒステリーと申し侍る。笑ふまじき處にて笑ひ、泣くまじき事に落涙せば、はや立派なるヒステリーにしてかゝれば『妻は神經病也、精神病のお隣なれば何

を申しても關はず』と心ゆく許り人の事惡しく言ひても咎むる人もなく、「當世ヒステリー物語」としたるもをかし、されど野菊樣の床しさはさる御病の樣にてもなき、それならば昔風の血の道にや。」それにひき代へて、千代子の君こそ中々今樣のヒステリーなれ、理もなく、、、燃ゆる思や、、、五位樣や若樣に憬れませば——されど人の事は書かであらむ、妾も其病と云はるゝやも知れねば——

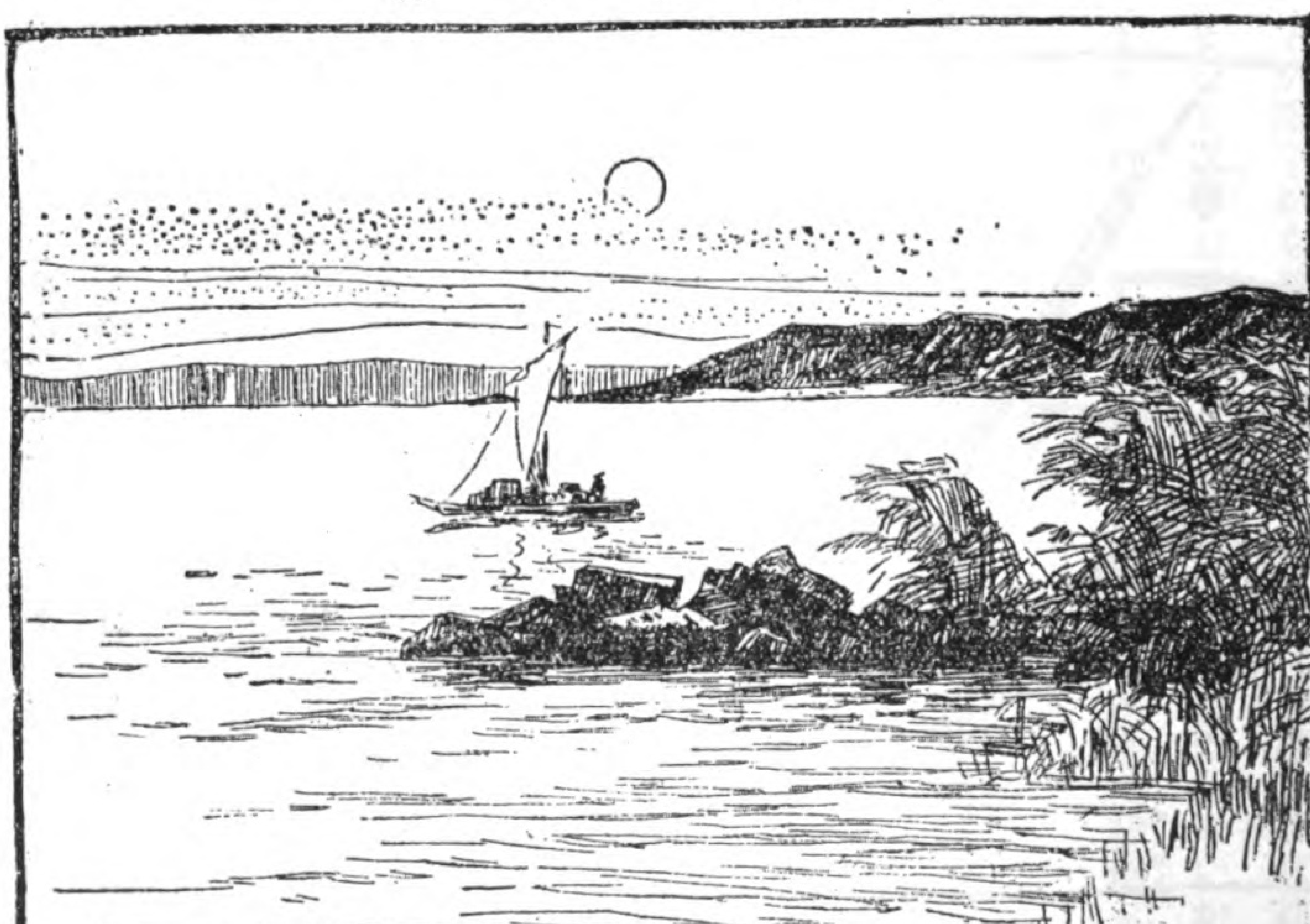
病ならぬ病は。戀の病、財布の胸痞は物入れても皆返しためる』潮風樣の脊柱カルロスと申す病はいと珍しく、餘り反身になり給へるに當りし、佛の罰にや、いとをかし。

○快よきもの

早き流を舟にて下る。新しき洋書の紙切る。新しき袷初めて着たる、すべて新らしきもの皆よし。

○大なると小さきと

鳰入江の月



ソマトーゼ飲みし人と飲まぬ人と。男の氣と女の胸と。春の花と秋の花、四季咲の薔薇等の春の程は大きく咲きたるが秋ともなれば只豆の樣になりて咲きたる我主には見放され花棚の隅の方に押しやられたるも哀深し。若くて望立てそを人に語りしに「さても小さき望よ」と笑はれし男の、四十五十になりても其願の半だに遂げ得ざりしが、今は其望さへ餘りに大なるものとして人の笑ふ樣になりたる。何となく秋の花にも似通ひたるも侘し

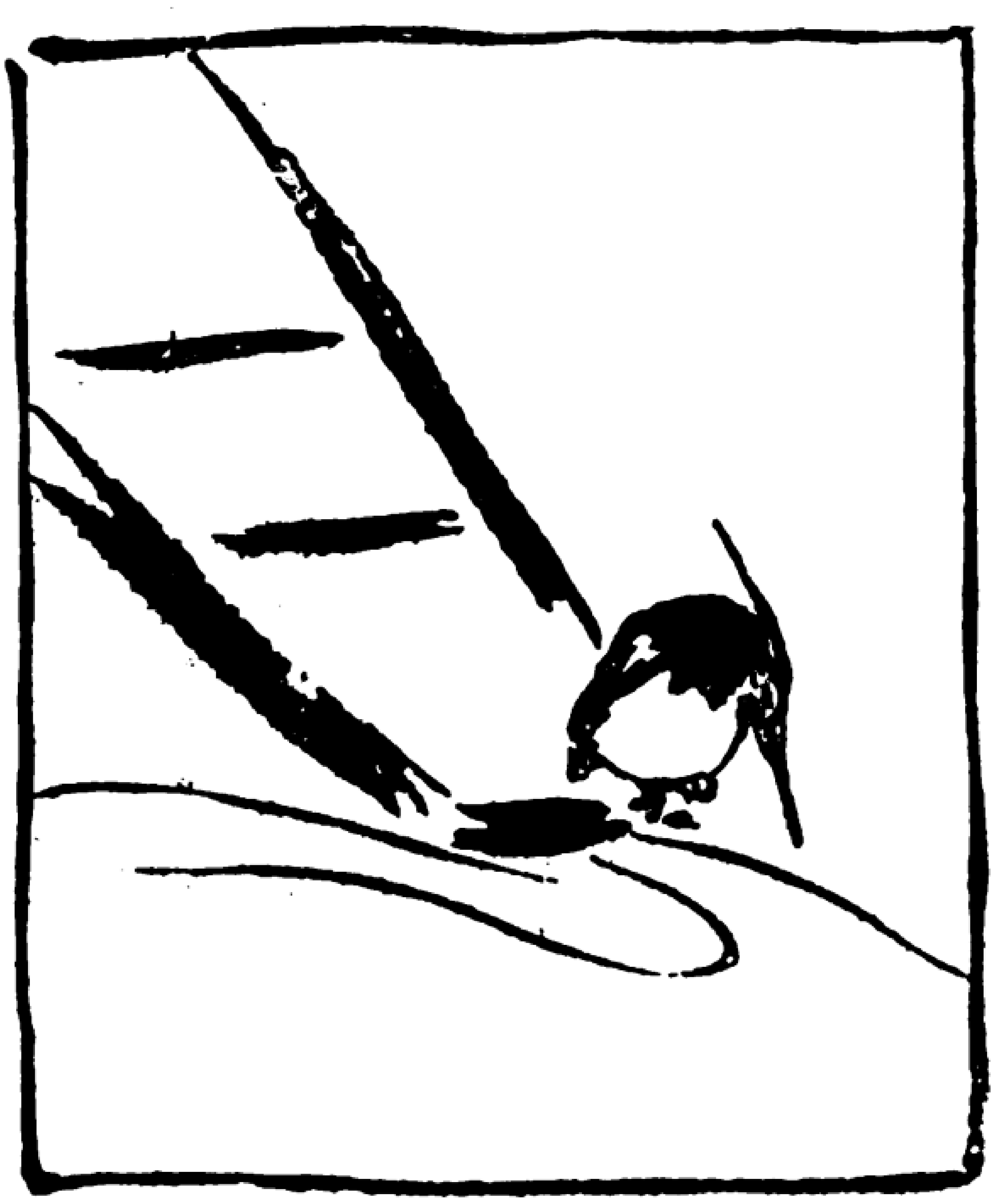
○物見眞似するもの

欠伸、稚兒の仕草。貴婦人申し侍る者も一と物見眞似ぬるもの也、こは外國の流行なりと云ひて何にてもあれ新らしき風したる。猿も人の仕業よく見眞似ぬる也。さてはポケット論語より初めてポケット菜根譚はさる事ながら、カードもいと多く見似ねたれ、英語カード、獨逸語カード、化學カード。

其他源氏眞似たる田舍源氏、不如歸の歌、日本の飛行器。いづれも見眞似たるものによろしきはなし、枕の草紙まねびたる磯千鳥の巧ならぬはげに理にこそ。

＊　＊　＊　＊

書くべき事盡き果てもはやかゝれずなりたり、此草紙は心のまゝを、人には見せじと思ひて、つれ〴〵なる里居の程にかき集めたるにて耻かしくも書きつゞけけめ、今は何をか書かむ、我頭こそかくべけれ、此反古は今樣なれば、はづす枕の枕紙にこそし侍らむいざ束髪の根のくづれぬ内に……



結婚後の三年

若葉

△船出

求婚、見合、結納、仕度、當局者の自分は殆どあやつり人形になつて一昨日いよ〳〵華燭の典を擧げ、今朝良人に連れられて此邊へくるまで夢中に過した此の一月の經過をぼんやりと思ひたどりながら船まつ暫時を廻漕店の二階の欄干にもたれて紫匂ふ沖の島々ほんのりとあけ行く瀬戸内海の朝景色を見わたし、かすかに聞ゆる歎乃に耳すまして居ると、

「奥様、船が參りましてございますどうぞお仕度を」と後で女中の聲、

「オヤさう、ぢき乘るのですか」と云ひながら振りかへるとさつき船の様子を見にゆかれた良人と實家の兄様とが階下から昇つてゐらつしやる。奥様と呼ばれてすまして返事して居るのを兄様に聞かれやしないかときまりがわるいから後向になつてコートきて紐結ぶにかこつけてうつむいて居る。

良人は店の若者が指揮して革提や毛布を運ばせ、「仕度はいゝかね、忘れものをしないやうに」と仰つて、さきに下にゆかれる、自分も絹ショールまいてオペラバック提げて、つゞいて下りて、玄關で千代田草履はいて居たら表へから〳〵と俥の音。嬉しい!!!　姉様御夫婦だ。

「今出帆る處?　マアまにあつてよかつた。」いそいで俥から下りられる。

「早朝くから恐れ入ります」と御挨拶したら義兄様は「お天氣でいゝ都合だつたね、おめでたう」とニッコリなすつて、さきの男連のなかへ加はられる。姉様と自分とは、一二間遲れて無量の感想を二人ともなんに

も云はずならんでゆく。

うつむき勝の自分の衿もとを見て「少しよつてるのね」と人の見ぬ間にソッと姉様は白粉のむらをなほしてくださる。

「變でせう今朝暗いうちにお化粧したから。」

「イエ他はいゝの。オヤ裾綿そきてきたのね、船の上が寒くないかしら。」

「大丈夫ですわ澤山きてるから。」

「ソゥ寒かつたら羽織でもなんでも出してぢき着た方がいゝよ。旅へ出ては體が何より大事だから、よく氣をつけてわづらはないやうにね、そして來年の夏は早くお歸りまつてるから……」姉様は眼一ぱい涙ぐんでいらつしやる。

幼うして母上に遺された自分は母の愛母の情をこの姉様からうけた。他家に嫁かれて後もつい近所なので、一つ家に住んだ昔とかはらず、羽織一枚たつにも常に姉様に御相談して助力をかりた。今度の自分の結婚についても、そも〳〵緣談の初まりから、綿帽子きるまで姉様は娘を嫁入らせる母親にもまさる注意こまかにあれこれを世話してくだすつた。其の恩愛深き姉様と今や相分れて山河遠き旅程に上らねばならぬ。自分の喉は大きなかたい塊で閉ざされた。

不意に鼓膜を貫ぬく汽笛の音びつくりして見ると、さつき二階から一抹の煙淡くのぞんだ天津丸は、黑い大きな船體を棧橋の際にあらはして居る。

乘る人、送る人、降る人、迎ふる人、入り亂るゝなかに自分は船中の客となつて、良人とならんで甲板の上に立つた。朝が早いからお見送りに及ばぬと斷つておいた光子さん、よし子さん、オヤ靜江さんもきてくだすつた。

「マア皆様恐れ入ります。」

「御きげんよう。」

「有りがたう皆樣も御きげんよう。」再び汽笛一聲長く響いて、御きげんようの聲がくりかへされて、船は徐々に棧橋を離れる。

名殘を惜しむ白いハンケチ、赤い振りの袂、それもだん／＼遠ざかつて、なつかしい姉樣、兄樣のお姿は小さく／＼、山、森、砂濱、二十年來朝な夕に親しみ來つた景色は淡くかすかに。



かくて南海の磯邊波靜かなる朝だ、自分は住みなれた故山をあとにして新婚の旅に上つた。

波枕しづけき瀬戸内海の朧月夜、やさしき良人の御手にすがつて、蜜の如き新婚の愛のさゝやきを放恣にせんその爲めにはあらで、神の御心のまに／＼緣結ばれた妹と脊が、浮世の航路に船出して新らしき、家庭を作るべく、良人の任地京都に赴く

爲めである。

△新　居

お晝御飯しまつて、此の間から細引のかゝつたまゝにして居た大行李あけると、婚禮前の忙がしいなかから姉樣が、あれもこれもと取り集めてくださつた小ぎれ類や、自分が忙がしいおもひして縫つた長襦袢や下着などが出てくる。

藪鶯の音をきゝながら日向のよい實家の居間の窓ぎはで紅入友禪擴げて空想に耽つてほゝゑんだ其の折の思出もなつかしく、其の豫想にもまさりて情深き良人の愛に浴する今日この頃の身の上も嬉しく、恍惚として擴げたる疊みなほしたりして居ると「ガラ」と格子のあく音。オヤお歸りかしら、部屋一ぱいちらかして居てどうしたらいゝだらう。

「今日は御用はございませんか。」アラ米屋だ人を馬鹿にして、わ…でもまあよかつたお歸りまでに早く片附けてしまはう。

それから大忙でせつせと片附けたら熱つて馬鹿にあついから羽織をぬいで今行李の底から出しておいた友禪羽二重の腹合せ帶をしめると、なんだか俄かに輕くなつてせい〳〵する。久しぶりにふだん帶しめた、後姿を柱かけの鏡にうつして見ると地色の褪紅色を白でぬいた百合の花がお太鼓のまんなかへ出て、いゝ恰格に結べて居る。ぬぎすてた羽織片づけて時計を見ると正三時。もうお歸りに間もあるまい。鐵瓶の下に炭一つつぎたして昨日大阪土産に頂いた福おこしを菓子器のなかへ入れておく。

もうだん〳〵あつくなるから菓子器ももつと夏向きの瀨戸のしやれたのがほしい。でも今月は隨分器具費を使ふから來月にしよう。

お床の櫻だつてあんな瀨戸の筒になげ込みぢやあま

り風情がない。いゝ恰好の籠へ天地人のまね事でもしておきたいのだけれども……

それでも宿屋から引きこして來て數日間を思へば、これ丈にでもよく調ふたものだ。道具一さいかい集めたつもりで、御飯をたくと火をとる十能がない。お客様があると煙草盆がない。ニユーマダムどんなにまごついたか…まあ〱此の頃は一通り夫婦が寝て食べるには差支へないやうになつてお客様に茶菓を出す位には困らなくなつた。それでもまだ〱欲しいものがたんとある。臺所道具だつて鍋釜七輪フライパン丈ぢやなんにも出來ない。瓦斯のストーブ、石油焜爐なんてそんなハイカラなものはいらないけれど天火にパイ皿スチユー鍋位は揃へておきたい。さうしたら四五人位のお客様なら自分の手料理でも一寸した御馳走は出來る……。オヤ戸があいた此度こそお歸り。いそいでお出迎すると、沓ぬいで帽子わたしてにこやかに書齋に入られる。後に從つてお召かへのお手つだいして洋服片附けてお茶を入れて粟おこし召上りながら自分をジロ〱見てどこかかはつたやうだと仰る。

「羽織をぬいだからでせう。」

「さうだ、道理で若くなつたよ。」

「ホ…それよか貴郎お湯は？」

揃へてさし出す手拭シヤボンをもつて湯殿へいらつしやる。それからお歸りまでが御飯の仕度時。今夜は何にしやうかしら。昨夜のやうに一生懸命手間かけてこしらへてもお口に合はないと悲しくつて涙が出る。姉様が初めのうちは良人の嗜好もわからず隨分心配してこしらへても往々失敗するけれど少し馴れると無頓着にしてもお皿へつけたものが殘るやうな事はなくなると仰つた。自分も早くさうなりたい。お料理もお料理だけれど、京都のおさかなにも困る。瀬戸内海の鯛食べ馴れた口には何處の魚もまづいのだとは云ふけれ

ど。京都の人はあんまりひどい。鱧やなんか私の目には煮てもどうかと危まれるお魚を「お作りにおしやすたらどうどす」といふ調子だもの。また鱧でもあるまい肉でカツレツでもしておかう。

そして早く御飯しまつて今夜の散歩はどこがいゝだらう、四條通りを祇園へ出て、歸りにも一度都をどりが見たいけれどたゞ美くしいといふ丈より外の興趣に乏しいものを幾度も見たがつたら子供だつてお笑なるかしら。

△世話女房

都踊や祇園の夜櫻やめづらしがつて浮れあるいた其の春もくれ鴨河の柳三度枯葉を散らし、二度新綠を紡つて、閑雅幽邃の都に平和なる我が家庭は、三年の春秋を過した。マダムとして我が生涯も既に新婚の夢あたゝかき花嫁時代を過して、母の時代世話女房の時代となつた。

前髪やたぼに苦心した髮も今は大かた手束ねの蠻カラな束髪にして、紅白粉のたしなみもと絶え勝ち、たつた一人の子供位で、かう意氣地がなくてはと思ひながらも、梅田樣の奥樣のやうに流行に浮身やつして社交場裡の花と呼ばれん野心もなく、ゆか子樣のやうに、子供を女中に委せて茶の湯の會や歌の會に出歩く風流心もない。新式の家具を買ひ入れて試用したり、料理法の新著述を參考して、かはつた料理をして見て、八の失敗から、二の成功をさぐる努力さへ面倒になつてたゞ經驗と習慣をたよりに、着物の洗いはり、仕立なほし、子供の世話や食事の世話にあくせくして、たゞたゞ現狀に甘んじて同じやうな生活法をくりかへして日を過してゆく。まだそれほど老こんでしまう年でもないのだけれど、境遇に化せられ易いものが、京都といふやうな因循な土地に、變化に乏しい、競爭者のな

い事しばかりして居るから、こんなのだらう。同じ年でも、國の女學校卒業後、東京の高等師範を卒業して此處の女學校で教鞭とつて居られるはま子さんなんかお姿ばかりか、お心まで若くつて元氣のいゝこと、レツドやピンクの匂たツぷり。角帽の書生サンに振返られさう。自分なんか鼠だか黒だか日一日とくすんで年よりくさくなるばかり。



この頃の小説を見ると婚後三年五年と經るまゝに妻が女房くさく世帶じみてくるのを中年の男子がいやがつて若い花やかな女に心を移すとふ筋が大變多い。あれも社會の一裏面を描いたものであらうが、舊をいとひ新を悦び、華を愛し實を疎むのが男子の通性なら自分などもソロソロ女房くさがられる時がきたかも知れない。が、私に言はせれば‥‥

小說といへば以前はよみはじめると御飯たべるのもいやな位耽つたものだが、此の頃はよむ事も少なく、よんでもそんなに夢中にならなくなつた。あながち家事に忙殺しられる爲めではない。二人比久尼やプロータンハーとやローマンチックな戀物語に流した涙がなくなつて、讀む瞬間僅かに同情をよせる丈の興趣すらも浮ばなくなつた爲めである。

此の樣子でゆけば今に自分自身の運命の沈不沈をも第三者のやうな態度で受けられるやうになるかしらんまだそこまでは前途少しく遠いけれど、とにもかくに隨分かはつたものだ。故鄕を去る時濱へ送つてくだすつた三人も、みんな今は人の妻。結ふ丸髷の形は一樣でも心はいろ〳〵異つた傾向になられた事であらう。同じ牧場で同じ樣な服粧して、同じ師の君から朝な夕に學んだ三年の睦びをちり〳〵ばら〳〵に別れた舊友二十餘人、今何處にどうして居られる事やら。オ、ツウツウさつき置文がきて居たはず、讀んで昔の友の消息を知りませう。

△たまき文

◎

君は筑紫に我れは越とや、一つ窓に睦びし友が、立ち別れての雲井の遙けさを歌ひし其れにもまして、東北樺太北海道に、西南朝鮮臺灣に、さては太洋遙き西の國までも、八重の潮路遙けく立ち隔てまゐらせての昨日今日、たゞ〳〵皆樣の御安否おぼつかなう、この間母校の同窓會に集まりし同級三人せめて雁の便をだにと思ひたちてたまき文はじめ申候、つき〳〵に御起居の有樣委しう洩らさせ給はゞ嬉しかるべく候。

行きめくりこのたまき文なつかしき
筆のかず〳〵のせてとく〳〵こそ

とく〳〵こそ歸りこよと祈りつゝ同期卒業生のうち碌々

として故山をまもる。

まき子
よし子
さき子より



意氣揚らぬ貧乏世帶の世話女房。またの日も、またの日も、口にする事は米價の高低。手にもつものは鍋、釜、庖丁、硯も筆も埃にまかせて火鉢だいて詩想ふた冬の夜を、こほる手に針もつて、鋏もつて人の衣ぬふ此の頃の身の上、生きた詩を味はうて居ますとのみ申上げて置きませう。

浮世小路　ため子

◎

はてしなき其の思
出にあこがれて
今日も暮しつ獨居のまど

語るに友なき田舎居のつれ〴〵に、げに昔は戀しきものよな、戀ひしみ戀ひし折り柄の環文、いと〳〵な

二伸卒業の記念に植ゑし校庭の槙は緑いや濃く立ち栄え居り候。校長様は相變らず日夜母校のため御盡瘁。山木先生は、去川十年の職を辭して當地の富豪太田氏の（老主人）夫人となられ候。

◎

たまき文、絶えて久しい皆様の御消息、まあ嬉しい事、私も何か面白い御報告がしたいけれど、ねつから

つかしうしづの小田巻くりかへして拜し申候。

なつかしき皆様にも、いよ／＼御きげん美はしく御榮え遊ばされ候御様子、何より嬉しく存候。私、この頃は山里の淋しさにも馴れて、以前のやうな不平や煩悶もなく、菜園や花畑いぢりて、心安き朝夕を送り、身も心もか弱き身には、かゝる境遇こそ相應しかりしと、平凡質朴なる山間生活を厭ひし昔の心を恥づかしう思ふやうにさへ相成り候へば、何卒御安心遊ざされ度候。

人狂う名利の巷よそに見て
　こゝ深山木の我が世安けき

とう／＼泣寢入りと笑はれ申候はんか。

奥の山里　しづ子

◎

「郵便!!」

「オイどこからきた？」

「あなたにはございませんの。妾ばかり。」

「なんだ、手紙見て笑つたり考へたり‥‥おそろしい永い手紙だね。」

「獨りの手紙でないのですもの。」

「環文だつて。女は暇だと見えて餘計な事をするね。」

「餘計でもようございます。これが一番樂しみなんだから。」

「一番樂しみだなんて亭主の棚卸し會なんか御免だよどれ、おれが代筆してやらう。」

エー私事も此度ミストレスのタイトルを得て、ホームに對する理想を實現する身と相成候へば、まづ家庭改良の第一階段として、臺所を改築して、文明的家具を備へ、かつまた、出でゝ、社交界の團體に活躍する地位をも作りたしと存じ候へ共、如何せん良人の月俸僅かに五十圓下女を廢して不便きわまる野蠻的臺所に自ら薪水の勞をとり、同僚夫人達の會合にさへ缺席

せねばならぬ體たらく、何とぞ御同情給はり度候。と
でもかくかね？」
「ホ…いやですわそんな事いつた事もないのに。」
「云はなくても思つて居れば同じ事さ。」
「戯言ぢやありませんわ。皆様まじめでかいていらつしやるのですもの。」
「なに少し破格があるのもいゝさ。かいて次へだして廻すのだらうさあかけたよ。」

新家庭にて　花子代筆

◎

未開の新開地にかくれたる富を探らんの野心止めがたく、波濤を越えて此所朝鮮の民と相成候ひしより、はや二年あまりを過し申して候、主人は商用の爲め時時内地に參り候へど、いつも留守居役の身は、淋しき夕ぐれなど、相變らず　禿山荒野を望んで、うたゝ望郷の念禁じがたく候。成功を焦つて數度失敗の結果、天下とても一攫千金の儲はなきものと諦めての今日此の頃、試驗の練習に一分を惜しみし身が、二錢まけろ、一錢しかまかりませぬの長談判にあたら數時を費して、呑氣な鮮人のお相手致居候有さま、御想像の上御憫笑遊ばされ度候。

たゞかゝる境遇にありての慰藉は子供の成人に御座候、長男潔長女やす子いづれも至つて健かに、やす子も此の頃はかあちやん、とうちやんを申すやうに相成候、日に丈のびて智慧づく子等を見て、其の行末を思へば、我が身の今日の辛苦はものゝかずならず、いかにもして此の子を立派に育て上げたきものとのみ、すべて他の望みはすてゝ、切に〳〵日夜願はれ申候。

おろかさの親に似よとは思はねど
　敎へおかるゝなでしこの花

其の歌の意をしみ〳〵思ひしり申候。

朝鮮にて　まさ子

愛らしき小禽



子爵母堂　三好梅子

△可愛らしい鳥

紅雀は籠で飼ふ小鳥の中で、最も小さなばかりでなく、多くの鳥の中でも、ハンシングパーッの或種を除けましたなら、恐く此の鳥より小さな鳥はないのでせう。かく小さな上に、毛色が紅をつけたやうに美しく又其の聲が玉を轉すやうに澄み渡つて居ります故、自然人に可愛がられるのでせう。

△氣持の和ぐ鳥

此の鳥は、至極温順で、二番三番ばかりを一つの籠に入れて飼ひましても、互に相爭ふなどすることなく一つ留木に押し合ひ犇し合ひしまして少しの隙間でもありますると、直ぐ其間に割込みなどして遊び戯るゝ有様、丸で繡眼兒おしのやうであります。だが繡眼兒は、時々ひどく爭を初めることがありますけれど、此の鳥は、互に意地の惡さうな顔付もせず、紅葉の新芽のやうな嘴で、ツン／＼嬉しさうに咄し合つて居りますので、側で見て居ても、眞に氣持の好いものです。

△飼養上の注意

一體此の鳥は南方の暖かな土地の產でありまして、支那の廣東地方には、澤山居るさうです。あちらでは八九月の頃、網で此の鳥を捕るのださうですが、其の頃此の鳥は幾萬羽となく、群をなして居りますので、其の美しいこと、何と形容して好いか、言葉がない程美しいといふことであります。何に致せ、暖かい土地から來たものですから、此の鳥を飼ふにつきましても寒中の手當など、能く氣を付けて遣るのが肝要であり

ます。

△色と聲の美しき鳥

さて鳥を飼ふ娯楽は様々ありますが、先づ大體鶯や繡眼兒や、頰白、駒鳥などのやうに、聲を賞翫するのと、瑠璃や、菊頂や、鷽や、尾長鳥などのやうに、毛色を賞翫するとの二つが、その重なるものでありませう。紅雀は全く此の二つのものを備へて居ります。なぜかと申しますと、此の鳥の毛色の婉麗なることは、皆様の知らるゝ所ですから、之を略しまして鳴く聲に就いて、一通りお話致します。

△紅雀の鳴き聲

此の鳥の地聲は、チイ〱と澄んだ聲でありますが自然と熟して優しい囀りとなります。耳を澄せて能く聞いて居りますと、其の曲節は、さながら金絲雀に似て、さまで複雑でありませず、又繡眼兒にも似て、さまで冗くありもせず、又頰白にも似て、さまで喧しくありませず、又駒鳥にも似て、さまで高くありませず、いと涼しき一種の調子でありますから、私は、此の鳥こそ、色と聲との美を兼ね備へたものだと存じて居ります。

△一筆示しまいらせ候

鶯は「法法華經」と聞え、頰白は「一筆啓上仕候」とのやうに聞えます。それで紅雀はどう鳴くかといひますと、私は「一筆示しまゐらせ候」とのやうに鳴くといひたいのであります。それは其の聲が、如何にも愛らしき女性の聲であるからであります。ですが何分にも身體が小さいから、從つて聲の細かい點に多少の難はありませうけれど、又其の細かい點が、何とも言ひやうのない愛くるしい所と思ひます。

△紅雀と少女

此の鳥は鶯や繡眼兒のやうに、朝々摺餌を拵へる手數はかゝらず、黍や粟の粒餌の外、青物や水を少し

づゝ違る位でありまして、至て無造作に飼ふことが出來ますから、お嬢達逹の慰みかた〴〵之を飼ふことにしましても、格別學校の課業や家庭の行事に差支が出來るものでもなく、却て自然物の趣味を養ふ助けともなりますし、又其の如何にも優美にしまして女性らしき所に、多少學ぶ所があらうと思ひます。併し其れは其れとして、私は此の鳥の愛くるしい所が、何となく憐れで堪りませぬ。

化粧の心得

こゝには下女と腰元との化粧の心得を申します腰元と申せば、常は格別、奥様がお出ましになります際は、自分の身じまいを随分手早くすることが何より專一で、左様な際には、白粉は先づ中薄にして、鼻と口元ばかりを少し厚い加減に塗り、又首筋はなるべく薄い方が柔和く見えて奥ゆかしく見えます。右の化粧法はなるべく手早くしませんと、奥様の身じまいが濟んでも、腰元がぐづ〳〵としてゐるやうではいけません手早く衣服を着て、待つて居るやうにとしてあります。それから下女の化粧法、先づ下女方と申せば、主に下の女中衆で斯ういふ人は、常に水づかいが烈しいから自然と力技も多いので、手足が粗て指は太く、何處もかも太つてまゐりますから、平素水づかひをしたら、必ず微温湯の中へ手を暫時く浸けて、よく乾いた手拭で拭いて置く方がよろしい、但し夏冬共に、決して熱い湯でするのは禁物です、それから化粧をするには、白粉を掌にて取分けてそれを白米の泔水よりも濃い加減にして、萬遍なく顏に塗ります。十分に抹きましたら、今度は手拭で眉をそつと拭き去り、決して眉に墨を引いてはなりませぬ、以上は若い下女の化粧法でありまするが、若し又中働などゝ申す少々年齡のいつた者の化粧は白粉を花の露に混ぜて、恰度白米の泔水ほどの加減にして、それを湯上りか熱湯を遣つた後で、用ひますがよろしいので、それから紅粉は指頭で付けるより、手拭で唇に薄く付けると、小皺が見えずにうつすり見えます。(奥村繁次郎氏)



秋晩

子供の幼い間の眼の注意

醫學博士　山口秀高

△生れた時の眼の洗ひ方

子供が生れた時に最も注意すべきことは、眼に不潔物が入つて居りはせぬか、淋毒が入つて居りはせぬかといふことです。若し淋毒でも入つて居るのをその儘にして置く時は、重ければ眼を潰すし、さうでなくとも必ず眼を惡しくするのです。而も出生の時は、幾等か不潔物を被むることは免れないから、之を消毒する爲に、出生と同時に洗ふことを忘れてはなりません。之を洗ふ最も簡單なる方法は、沸立てた湯を程好く冷して、脱脂綿に浸し、之を眼縁を明けるやうにして次第に流し込み、後で綺麗に拭き取るのです。不潔物などの格別入らぬ時は、それ丈でも宜しいが、今少し注意するとすれば、淡い硼酸水などで洗ふのです。尚一層安全な方法は、クレーデ氏法と言つて、二プロセントの硝酸銀を差すのです。これは國に依つては法律で定めて、産婆に致させます。獨逸などがそれで、日本などでも亦斯くする事になつて居ります。普通の不潔物なら、左樣のこともないが、母に淋疾性の子宮内膜炎でもあると、餘程質の惡い病眼になるからです。殊に生れた時に膿でも附いて居ると、醫師の診察を要するから、十分注意して見ねばなりません。

△子守雇人より受くる惡疾

既に生れて後は着類、玩具、其他の子供に觸るゝものは、何でも清潔にして置く事が肝腎です。出來る丈乾かして置き、汚くなつたら綺麗に洗つて又乾かすことを怠つてはなりません。これは褓姆、産婆、産婦、その他子供の世話をやく人の、等しく心得べきことです。それから世間では餘り氣にも留めないやうであるが、子供の眼に直接强い光線が入ると、網膜に變化を起して、眼を痛めるし、又冷い空氣に觸れさすなども

眼を悪るくするから、直接太陽の光線に觸れさせたり、冷氣に當てたりしないやうにしなければなりませぬ。又眼科醫の實驗上、子供の眼の悪るくなる原因は、乳母、子守、下女等の雇人より傳染するのが非常に多いのです。慢性の眼病のあるのを何の氣なしに雇ひ入れ、終に子供に傳染して取返しのつかぬことになるのが澤山あるから、子供を持つ人は、先づ雇人の健康を見てから雇入れることが肝腎です。

△自分の眼を侵す病氣

やゝ長じた子供に就ていへば、子供が傳染病などに罹つて居る時は、能く眼を悪るくします。例へば痲疹を病むとか、疱瘡を病むとかすると、その毒が眼に入つて容易ならぬことになるから、母親などは十分の注意が要ります。又角膜に小い腫物があることを發見したら、直に醫者に見せねばなりませぬ。子供に多いのは腺病性の角膜炎で、非常に危險なのです。それから子供が二歳以上にもなると、小膿疱疹といつて、顔のまはり、鼻の所、眼の兩側などに小い膿んだ腫物が出來ることがあります。此の膿汁が眼に入ると、之れも危險だから、必ず醫士の診療を受けねばなりません。又腺病性の子供には、矢張膿んだやうになつて、睫毛の根が抜けるやうになることがありますが、これも矢張り危險です。

△眼を甜めてやる危險

併し統計上失明者は多く何に原因するかといへば、其の過半數は出生の時に質の悪い不潔物を眼に受けた者ですから、出生の際は殊に注意を要します。そして此の眼疾は、眼のまはりが腫れるから、水で冷し、又脱脂綿で傷のないやうに膿を拭ひ取り、油斷なく取り代へねばならないが、この場合に於ても明けない眼を無理に力を入れてあけてはなりません。

其他母などがよく子供の眼を甜めて遣つたりするが、これも至つて危險です。その爲に子供が終に失明した事實は度々あります。

談叢

朝鮮の動物と内地の動物

▲朝鮮と日本とは昔は陸續きであつたから、朝鮮の動物は大抵日本へ來て居る。象も犀も朝鮮から日本へやつて來た。無論今は居ないが象や犀の骨を日本で掘り出したから古代に棲息して居たことが分る。虎の骨は未だ掘出さいないが、之も恐らく日本へ來て居たであらうと思ふ。然し之等の動物や鶴は朱鷺と同じく日本の土地が適せないので、自然と日本に居なくなつたのである。尤も象や犀などは今日では朝鮮にも居なくなり、虎や鶴も追々居なくなる樣子だ。朱鷺と言ふ鳥は日本の白鷺に似て羽が赤い。此鳥は日本にはまう居ないが朝鮮には澤山居る。

▲日本に居なくて朝鮮に居る主なる動物は、虎、鶴、朱鷺の外蝎、狼、針鼠位のものである。蝎と言ふ虫は蜘蛛に似た虫で、非常の毒を持つて居るから、一度此虫にさゝれると忽ち其毒が身體に廻り、一命を落すに至るのである。それで蛇蝎と言ふ熟語が出來たのだ。狼は朝鮮に居るのが眞正の狼で、日本に居るのは實は山犬であつて眞正の狼ではない。針鼠は今日本には居ないが、昔は居たのである。



▲日本に居て朝鮮に居ない動物は、猿、鹿、山椒魚である。山椒魚は支那には居るが、朝鮮には居ない。其他牛でも馬でも豕でも日本のものと朝鮮のものとは種類が違ふ。熊なども餘程形が違う。日本の熊も元は大陸から朝鮮を經て日本へ來たのであるが、日本へ來て形が變つたのである。朝鮮は大陸と接して居るので今日でも大陸と同じ形である。如何いふ點が變つて居るかと言ふと、日本の熊は顔が細長くて胸の月の輪が大きいが、朝鮮の熊は顔は丸くて月の輪が小さい。要するに日本と朝鮮とは島國と大陸との相違があるので、動物も自然島國式と大陸式の相違がある。（理學博士石川千代松氏）

婦人と時代の推移

△時代の推移に伴ふて、人の氣質の變遷することは何れの國も同じやうでありませうが、日本などでも丁度源平時代には西國の武士は弱く、東國の武士は非常に強く、一以て十に當りましたが、維新の頃には却つて西國の武士が強く、關東の武士が存外弱かつたやうに、日本婦人の氣質の變化はまた餘程多いやうでございます。上代の將校の妻は軍陣に從つて夫を扶けた位で非常に強く、例へが神功皇后の征韓はいふも更なり、雄略天皇の皇后なども天皇の猪狩に御伴ひ遊ばされた程ですが、平安朝時代に至つては又甚だ弱くなりまして、却

つて文學に長じ、優美になりました。美術的であつた平安朝時代の婦人の氣質と、上代の婦人の氣質とは、其社會狀態、生活狀態と共に少なからず異つて、殆んど同人種では無い程でございます。

△そして婦人の思潮の變遷は、更に武家時代、封建時代と明治の今日とは又大變化を來しまして、智識の發達は著しく、短日月の間に、長足の進歩を致しましたけれども。それと共に武士的氣性とも云ふべき外柔内剛と云ふやうな精神は、進歩よりも寧ろ却つて退歩して參つたとは一般の定評でございます。其所へ、泰西思想の流れ入るに從つて社會は婦人問題に對して餘程注意を拂つて參りまして、英國婦人が參政權を要求するに暴力を以てまでも迫ったり、或は婦人開放問題などと云ふことが諸方に起りまして以來、更に婦人の權利若しくは義務に就て、世人の着目は一層熱心に研究的になつたやうであります。此の風潮は何處まで漲つて參りますか、殆んど渦まる所を知ることが出來ないのみならず、又た是れに全然逆行することは出來ない趨勢であらうかと存じます。

△一方から申せば、婦人も亦時勢の推移に伴つて勇進奮闘致しますのも、或は惡いことではございますまいが、然しながら參政權の要求とか、解放問題など餘り極端に行つては如何なものでございましやうか。上代は暫らく措き、爾來極めて消



極的徑路を辿つて參つた日本婦人の頭へ、かゝる急激な歐米の思潮の變化が堤を切つて入つて來ましたならば新舊思想は衝突錯雜混亂して、日本婦人の思潮に如何なる變動を來しまして、如何なる惡果を來しませうか、眞に料り知ることが出來ないのでございます。實に我國體は勿論、社會の風俗、習慣、歴史の順路を履まず、秩序を破つて俄にかゝる思潮の渦中に入るのは決して利益ではありますまい。されば私共は、秩序を紊さず、正い徑路を辿つて、相提携し、互に勵み合ひ助け合つて、歩調を一にして進まなければなりませぬ。今後は益す婦人問題も複雜になるに從つて、大いに波瀾のあることゝ考へますから、偏に有識者の指導を仰がなければなりませぬ。(下田歌子女史)

巡遊中の所感

△佛跡巡拜の目的にて先づ印度の孟買に着いたのは昨年十一月上旬でございます。それから汽車又は印度馬車で御佛の靈址を巡禮致しましたが、有名なるアソカ王の圓柱、佛塔、佛洞などを見るにつけ、荒れ廢た裡に其の昔の偲ばれて、唯々御佛の功德の弘大なのに涙を溢しました。殊にラシュンユールにあります釋尊が說敎遊ばした址などは實に難有いもので御座います。この巡禮中には、英國政府から土人の爲に設け

てありますパツカートルと申す木賃宿に泊つて、自ら炊事を致したこともあり、旅の新年をカルカッタに迎へましたことなど、誠に趣味の深いことで御座いました。

△二月六日ポートサイドに着きまして、馬耳塞で日本より來られた九條男爵夫婦と會合して佛蘭西の南部を旅行し、モントカーロの火山で有名なシシリー島、希臘のアセンス小亞細亞に入つては使徒ポーロの天火に打れたダマスカスから、耶蘇の靈地なるパレスタインの內地に入り、有名なゼルサレムヨルダン河等を巡禮致しました。佛の遺跡が婆羅門宗の遺跡となつたと同じく、この地も亦モハメット敎の靈地と化して居ります。そして佛の遺跡の荒廢てゐる如く、この聖地は交通の便が開けて俗化して居ます。

△それよりカイロー、羅馬を經て、倫敦に入り、ハイドパーク附近に一軒家を借入れ、約四箇月滯在して慈善事業等を視察致しました。中にもバーナード孤兒院は男子五千人、女子三千人を收容し、誠に盛んで、少からぬ參考となりました。又棄兒院は、四五十年前まで、育兒院の門外に凹き所を作り、子を育てることの能わぬ人は爰に棄て置けば院で育てる習慣であつたとやら。之も當時はなかなか盛で、怎いふ孤兒中からも澤山立派な人物を出して居るさうで御座います。兎に角英國民が是等慈善事業の爲に投ずる金は年額五百萬圓に上ると申します。



之に對し私等も大に奮發致さねばなりますまい（本願寺裏方大谷籌子）

談話の際の心得

△多勢の前で談話を成功さすには話し上手と云ふ事が要件になつて參ります。幾ら心得ばかり心得て居つても、云ふ事がハツキリしないで何も主旨が徹底しないでは困ります。面白く人に聽かして而して云ふ事が善くわかるには、何しても話上手でなくては不可ません。併し話上手と云つても決して輕い調子でつらつら遣ると云ふ意味ではないのです。此れは畢竟男の方の雄辯とやらに當るのでございませう。

△話題に就いて厭ふ可きは、人の批評です。次に自分又は自分の夫の職業上の事です。それから或る夫人に晩餐に招かれた時、其夫人に對つて他の晩餐會の御馳走を非常に賞めるとか、又容貌が自慢の主夫人に他の夫人の美貌を過賞するなどは、自然比較するやうに當つて面白くありません。

△又此頃の西洋人にならひ時々珍客に引合す爲めに友人を招待する事があります。之には個人の宅に於ても又倶樂部に於ても致しますが、其の時は初めから終りまで其の珍客に附き纏つて我れこそ此の珍客と懇意であると皆に見せ附けるやうな人がありますが、これも不都合でございます。全體珍客は

總ての人に紹介したいのでありますから、其邊をよく心得て、成るべく多數の人を代り〴〵に引き合せる樣にすべきであります。殊に個人の宅に招かれた時分には、自己で長時間專有する事は主人に對し非常に無禮に當ります。併し珍客をして手持不沙汰にせぬ樣に一同で注意歡待したい事は勿論であります。（鳩山博士夫人）

標準美人の體格

▲美人と云ふものは顔面の樣式の美しいばかりでは可けない。身長も胸も手も脚も肉附も皮膚も總べて體格全部の適度の比例が取れて居なければならぬ。例へば手の比例は、右の肩の關節から左の胸の乳房までの距離と上膊の長さと同じく、左の胸の乳房から臍までの距離と前膊の長さと同じく、臍から股の關節までの距離と手の長さと同じであられればならぬ。脚の比例は、右の股の關節から左胸の乳房までの距離と上腿の長さと同じく、股の關節から同側の乳房までの距離と上腿の長さとが同じであられればならぬ。若し之が適度でなかつたら美人とは云へない。此美人の標準に果して何處の女が最も合格するのであらうか。日本美人の研究に就てはベルツ博士が最も能く努た。博士は日本の婦人を二樣に區別した。一は薩州型で一は長州型である長州型は面長の鼻筋通り口元締つた美人で薩州型は顔が扁平で鼻低く脣の厚い醜婦である。此說には自分も贊成である。



▲之は餘談であるが、女の容色には一生の中に五度の變化がある。即ち女が母の體内を出てから俗に云ふ當の時代迄は肉體の輪廓が完全に至らぬので、如何に美しい女でも未だ艷ではない。三十前後になれば肉體の輪廓は全く完全するから容色の美は絕頂に達する。三十四五から四十二三までは、社會上の經驗が積み、交際應接等の辭に老けて來るので、精神美の極點に達する。之と同時に身心を勞して容色は多少衰へて來る。四十二三から五十四五までは皮下の脂肪が生じて皮膚が緊縮するから、盡きに衰へ掛けた容色の美は再び艷麗となる。然し其の時代の容色美は何となく淋しい美しさで、是れ人生の夕映期で凋落の一歩手前である。其の後は老衰して了ふ。（ドクトル富士川游氏）

夫に對する第一の同情

▲私も世間の歷々の方のやうに、學問が出來たり何かしますなら、何もこの樣に齷齪いたしませんが、然う云ふ力はありませんから、切めて家の事でも一生懸命に働かなければならないと思つて、女中と一緒になつて何でもします。世間の奥さん方の中には、百圓の帶を買つたとか、御自分の髮の飾

がいくらだとか、年中御自分の服裝などの上にばかり、浮身を窶して御在の御方が隨分御座います。それアヽ出來る方は何でもなさるが宜い。併し私などはそんなことは迚も出來ません。成程百圓の帶位誰にしても買はうと思へば買へぬこともありますまいが、それは自分の力で買ふのでせうか。幸ひに財産があるとか、特別の技倆があるとかして他人の力を借らずに買へるならば、何も云ふことはありませぬのです。

▲けれども世間の多くの夫人方は、夫の汗水流して働いたお金で、それ指環、それ時計と、身分不相應の贅澤をして被居る。それだから一朝夫に死なれた場合には、直ぐに困つて、サア明日から何うしやうと云ふことになり、果は親戚や知人にまで迷惑を掛けると云ふことになるのです。そんなことが何うして出來ませうか。普通の婦人に生産の力の無いのは已むを得ませぬが、せめて消費を節するだけが、妻が夫に對する同情の第一とすべき處であらうと思ひます。夫を助けると云ふ點は、これより上はないと思ひます。又夫に對する同情が深ければ、何うしたつて、贅澤などは出來ません。私などこれでも出る處に出ると、隨分高襟に遣るのですが、貧乏世帶を持つて居ながら、さう〳〵内も外も高襟に遣つてゐられません。（目賀田男爵夫人）



菊花培養の趣味

▲私しは一體が早起きで日の出ぬ先に床を離れるので、庭園の趣味を養つて運動消閑の樂しみにしやうと思ひ立ち、十五年許りの前に朝顏を培養を始めたが、朝顏は春の彼岸から秋の彼岸までの樂しみで、春冬二期は手を明けて遊んで居ればならぬから七年許り前から菊作りとなつて、今では東京唯一の菊花觀賞會である秋香會中にも相應の菊花を出品する樣になつた。一概に菊作りといつても、中菊の狂ひ物、上方風の大輪の切花など、その種類に依て栽培の方法も多少違ふけれど、東京では上方風の大輪は餘り流行せず、中菊の狂ひが盛んに行はれて居るから、自分も此の中菊の方を手に掛けてゐる。

▲私しの持つて居る菊の種類は紅では小倉山、古今の譽、白では美如玉太古の英、黃では秋山榮、黃金の光、薄色では雲井の雁などであるが、同じ薄色で今度實生から青山の錦といふのを取つた。これは秋香會の二三等品にも向かうと云ふので、少しは自慢物である。私しの處の地花壇は、五間が二つ、三間が二つ、鉢數は尺五が廿五、尺二が十、二尺が二つ、豫備が二十五あるが、是れだけの數を手入して好い花を咲かせやうとするには、年中掛つても尙は足らず、夜業までもしなければ

間に合はぬやうなとがあるけれども、その多忙のが又一つの楽みになる。

▲菊の花を好く作るのは唯培養の仕方一つで、培養の方法が足りなければ花の狂ひが悪く、且つ力が無いから、如何に好い種であつても見られたものでなくなる。それに葉も亦大切で花の狂ひがよく出ても葉が上つたりしたのでは名花とは言へないのだから、その苦心は並一通りのことではない。花の狂ひには季節があつて、十一月十日に開けば その十五日が狂ひの眞中であるといふやうな關係があるから、花を觀賞するにも其の季節に應じなければならぬ。それから實生の菊から新規の狂ひを作るのも楽しみであるが、これが秋香會に出て某の何と極まつて銘がつくまでには、其の培養の勞力は一通りでは無い。其代り愈々之れが新花であると決定して多くの人の觀賞に上つた時には又人一倍の樂しみとなる。（立川勇次郎氏）

紐育の交際季

紐育人は十月初めに風に送られて、滞又苗の各避暑地から歸つて參り、夫れからソロ／＼交際期の仕度にかゝります、一體彼地では人の娘が十八歳になるまでは學生として質素な風をさせて居りますが、其年になると特に娘の爲めに自宅に會を開いて、父母が娘を紳士淑女に紹介いたし、娘はさうして



社交界の人となりますが、それでも日本のやうに母親より立派な服裝はさせませぬ。一體彼地の習慣として一家の主婦が一番立派な裝飾をします。で娘を持つ母親は秋になると自分の仕度から娘のから中々忙がしい。夜會服は普通一揃ひ三百弗から五百弗位で出來ますが、其の上は際限が無いので、ローネックのレースなどは一ヤード何百弗と云ふのです。そして又た型や色の流行が年々種々に變はつて行つて、スカートの襞が少なくなれば、其の年は誰れも彼れも其の通りにしなければならず、其の上和服の様に仕立直しが利かぬので、一々新調せねばなりません。實際に交際季に入るのは秋期紐育のマヂソンスクワイヤーガーデン其他近郊に一週間開ける馬觀せの日からです。其日は富豪や馬好きの人々が平生貯へて居る自分の持馬を其會に出して優劣を較べ賞品を貰ふので、此日は前日来趣向を凝らして仕度した秋の着物を今日は晴れと着飾つて觀に行くので、人々は馬を觀に行くのか、着物を觀せに行くのかなどと悪口を申しますが、兎に角それほど種々の色彩をした花の樣な人々が集まるのだとお察し遊ばせ。其年の流行は殆んど此日七日間に現れるので、誠に其日は美しいなんど申す許りも御座いませんので、又其行列を近傍からワザワザ見に參るのです。（今西糸子夫人）

國語漢文の豫備試驗を受けた記

櫻子

私なんぞは力も不十分ですし、その上學校の方にも可なり用事が多いのですから、中等教員の試驗なぞはとても駄目だらうと思ひましたが、それでも何か一つ目的があれば少しの時間でも無益に過さないし、忙しい内にも常に希望をもつて愉快に仕事が出來ると思ひ立つたので、今年初めて受けて見ました。

試驗は八月廿四五日の兩日と決定して居たのですが、御存じの水災の爲に二週間延期となり、御陰樣で大助りでございました。

こゝに一寸試驗の樣子を記して見ませう。初日の問題は下のやうなものでした。

設問

（一）鎌倉時代ノ文學ノ概況ヲ記セ

（二）左ノ語ヲ註釋セヨ

（イ）校倉。盤渉調。縣召除目。直會。牛[illegible]ノ[illegible]

（ロ）抽象。概念。人格。散文詩

（三）左ノ名目ヲ說明セヨ

音便。擬聲語。助數詞。副詞句。修飾語

（四）周宋ノ諸學派ト之ニ屬スル學者トノ名ヲ擧ゲヨ

（五）平安朝時代ノ詩文集數種ヲ擧ゲヨ

作文（普通文）

吾が幼時

注意｛設問及ビ作文ヲ通ジテ四時間トス
　　　答案ハ問題每ニ毛筆ニテ別紙ニ認ム可シ

これだけが第一日の分で御座います。問題の取り方が下手なのと場馴れぬのとで、胸ばつかりどき〳〵して後であゝもしたらこうも書添へたひと思ひますが、それでも四時間で一ぱいでございました。

受驗者はずゐ分澤山ありました。其の中には今年で三度目だなんて吞氣さうに笑つてゐた男の人もあり昨年豫備には合格だつたが本試驗で失敗したなんて話して居た人もありました。

年の上から申せば私共はこれからなのですから、幾

年かゝつてもする積りで居ります。

翌日の問題は

解釋

(一)故時賴朝臣は康元元年に頭おろして後忍びて諸國を修行しありきけりそれも國々の有樣人の愁など委しくあなぐり見聞かんの謀にてぞありけるあやしのやどりに立よりてはその家ぬしがありさまを問ひ聞きことわりある愁などのうづもれるを聞きひらきては我はあやしき身なれどむかしよろしき主をもち奉りしいまだ世にやおはすると消息奉らんもてもうでゝ聞え給へなどいへばなでう事なき修業者の何ばかりかはと思ひながらいひあはせてその文をもちてあづまへゆきてしかじかと敎へしまゝといひて見れば入道殿の御消息なりけりあなかまかまと永く愁なきやうにはからひつ(増鏡)

(二)秋風にこゑをほにあげてくる船は
天のとわたる雁にぞありける
この度はぬさもとりあへず手向山
もみぢのにしき神のまにまに
紫の一本ゆゑにむさし野の
草はみながらあはれとぞ見る(古今集)

三番は論語、四番が孟子で、五番はたしか唐詩選だと思ひました。その他は八大家文の内から出たのでせう、應用的のが一問御座いましたが、三番以下は皆句點や解釋を附して試驗官に返しましたから、文章は諳記して居りません。

此外に第一種の志願者には復文があつたそうですが、或方から拜借して居りますから、お目にかけます。

復文

司馬光カツテ晁無咎ニ語リテ曰ク吾レ人ニ過クナル可シ但平生ナス所ハ未ダカツテ人ニ對シテ言フベカラザルモノアラザルノミト劉安世光ニ一言以テ終身之ヲ行フベキモノヲ問フ光曰ク其レ誠カト安世ソノ從リテ入ル所ヲ問フ曰ク妄語セザルヨリ入ルト(原文六十字)

復文はすゐ分むづかしかつたと皆さんの御話しですが、兎に角閲漢の受驗者は成る可く多く廣く博讀して

置く方が得策の樣に考へられます。

平生女學校にでも奉職してゐる方ですと、多少の御經驗もあり、御働きの場所が廣い丈けに、種々御便利もありませうし、參考書だつて手近に澤山ありませうが、何しろ私共は子供相手の忙がしい境遇ですし、何かと思ふに委せない事情もあつたりして、自信のある程の準備も出來なかつたのが遺憾でございます。結果はどうなるかまだ分りませんが、兎に角たゆまず致す積りで居ります。



準備の事を申して見ますと、講讀の方は出來るだけ七月迄に致しました。三崎町の國語傳習所なんぞも此爲めに便利な樣に存じます。八月になつて休みに入つてからはもう諳記物を專心に致しました。

參考書は皆樣がよく仰しやる樣に試驗官の人の著書を成る可く見る樣に致しました。今迄の問題集や受驗者の經驗談などの冊子にも一應目を通して置く方がよいやう

です。一ッ橋の教育會の講習なども餘程有益だといふ評判でございます。

その上此頃の新聞雜誌等にある時代の文學風潮論などに目を通して新熟字といつた樣な物に注意し、又支那文學史、日本文學史、文學概論、有職古實なども、知名の人々の著書が澤山ありますから、これらも一應讀んで置くと好都合でございます。

婦人で上野の圖書館に入場する人が、此二三ヶ月間は非常に多くて一日三十人を下らなかつたとかで、之れが悉く敎員志願の受驗者であつた事は借り出す書物に依つてわかつたさうですが、皆樣は隨分御勉强なさつたものと見えます。

孩兒の泣き方の鑑別

長野市の或る小學校の先生は長い間小兒の泣き方を研究して泣き聲を聞き分ける相で其方法が却々面白い

▲先づ生れて半年位の孩兒は(一)涙を出さずに悲しげに力なく泣く時は空腹の時であるから乳を與れると直る(二)けたゝましく高い聲で泣くのは腹か耳かの痛む時で、腹痛の時には兩足を縮めて力を入れて泣く(三)欠伸をしい／＼泣く時は睡いので、靜かに頭を撫で脊を叩いてやるとすや／＼と眠る、只もう無暗に激しく泣き叫ぶ時は何か氣に入らない事があるのだから、靜かに慰めるが一番だ。

▲是が生れて一年位になると其泣方が非常に違つて來る(一)睡くなつた時は眼を細くし多少濕味を帶びて泣き出す、又腹の減つた時には眼を開けたまゝ少し節を付けて泣く(二)又涙を出さずに頭を左右に動かして泣くのは退屈泣きで、頻りに涙を流して中位の大きさで泣く時は身體が惡いか痛む時だ(三)身體を顫はせ急に肝高い聲を擧げて泣く時は物に驚いた時だから、小兒の面を掩ふて靜かな處に連て行つて遣る。

其他身體を活潑に動かしながら大きな聲で泣くのは小兒の發育上非常に有益な泣き方であるから十分間位其儘にして置く方が可い、一概に制するのは宜しくないと云ふのである。

饒舌家

大原綾子

弓様また二三日御引籠りださうですね。ほんとに困りますはね、さうお弱くては先程義雄さんが見えまして、

「濱町の叔母様またいけませんよ。此度こそは名醫の御來診を煩はさなくては。」つて被仰いましたの。さう伺つては私も、直様羽の生えた自動車でも飛ばして、腕限りの御治療申上げなければならないのですが、お生憎なものですね、一郎が一昨日から發熱致しまして、ジフテリーの氣味だと申のでせう。驚きましたは。でも早速血清の注射を致しましたので、大分宜しうございますが、今明日は何程呑氣者でも一寸家を空け兼ねますもの。ほんとに仕方がございませんのね。何れ近い中に、親しく拜見致すとして、先づ早速頓服として、この清涼劑を郵便脚夫に持參致させます。其効能顯著、如何なる名醫も三舍を避けること請合

一體まあ如何なすつたと云ふのでせう。庭の海棠雨に惱める風情とでも申のなら、それこそ一層趣があるでせうが、あの八疊の御居間の眞中に重ね蒲團にお顏を埋めて、

「御飯も欲しくないの」「牛乳も嫌や」

「用があれば呼ぶから、彼方へ行つておいでよ」なんて、まるで何處やらの、ダダッコの御姫様が、小間使をお困らせ遊ばす樣な事、仰せられましたがどうか、其邊までは義雄さんからの、御注進がなかつたので、一寸分り兼ねますが、何しろ、餘りお惱み方が過ぎるぢやありませんか。少しは大人におなり遊ばせよ。初丸髷に手拭かけて旦那様のお歸りを納戸へお隱れ遊ばした昔ぢやあるまいし、もう貴方今年は廿三と云ふお年ぢやありませんか。おやこのお醫者様理窟を申ちや駄目ね。

「齊様は怪しからぬ方ですのね。二日もお家をお空け遊ばして。大事な大事な奥様を鼠が引いたら如何遊ば

すお積りなのでせうね」つて先刻も主人に話しましたのよ。しますとね、

「何に弓さんが泣いたり吠えたりして、本氣で騷いで居るんだもの齊君大喜びさ。鼠に引かれる樣な奧樣なら、誰が置いてき堀にするものか」

なんて大笑ひなのですよ。全く男は氣樂ですはね。何も女許り氣苦勞して男は氣樂にする樣つて、神樣は被仰つたわけぢやないでせうけど、少とこの陽氣に花でも見にお出かけ遊ばせよ。そして貴方も散々遊でお上げなさいよ。左樣云ふと何時も

「私には、どうしても其樣氣になれませんもの」と被仰るけれども、それがお氣が小さいと云ふんですよ。其處をすつかり齊樣に見ぬかれて、お仕舞ひなすつたのですもの。ほんとに、焦燥のね。そして一晩も二晩も、睡ずに案じぬいて、やつと御歸りと思へば、

弓さん、又かい、一日や二日居なくたつて、まさか死にやしないぢやないか。そんなに心配なら、腰巾着につれて行かうか、なんて極り文句そ、聞かされる丈けで、ほんとに埋らないぢやありませんか。

男ですもの、それ位さばけて被居らなくては、頼もしくないは。

ほんとうに。弓樣。宅へ居らつしやらうものなら、それこそ弓が〳〵つて、弓さんの御賣が始まつた樣。

オイもうよし給へよ。堪らないよ。如何も變だ〳〵と思つて居たら、此樣大きな、贅肉が出來たぢやないか、耳に。

なんて先日も道敏が申ました位。

私なら大威張りよ。家に居ればこそ自分の夫、一寸外へ出ればもう社會の一員。彼方からも、此方からも、引張り凧の大人氣、大したお腕」位で、威張つたものなんですけれども、張り合ひがないのね、官吏などは。奧樣これ位に御期待遊ばされて被居るのも、一向に御存じなしの內辨慶ではね。弓樣取り換へて差しあげ度い樣ですはね。

其處は、錚々たる實業家に限りますよ。御自分の會社どころか、日本は愚か、世界の舞臺に乘り出さうと

なさる方の奥様ぢやありませんか。せめては、東京中位にお眼をおつけ遊ばせよ。そんな御家の中の八出一間がまゝにならないで、果ては御病氣なんて、旦那様の御顏にも係るぢやありませんか。御顏も御顏も素顏ならまだしも、大事な大事な舞臺顏を、代なしに遊ばしたらまあ、どうなさるの。

舞臺顏と云へば此度お芝居へでも參りませうよ。一郎が直りましたら。齊様の御退けにならない中に出掛けませう。私がお誘ひするんですもの、かまひやしませんは。貴方は新派がお好きでしたのね。本郷座にしませうか、寄り木が大評判ですもの。日外は面白かつたのね。本郷座と云ふと思ひ出しますは。弓様が不如歸で猟狩りからもう御泣き出しなさるのですもの。そして翌日一日お頭痛でお困りになつたぢやありませんか、もう四五年になりますのね。お茶の水御出になつた年でしたのね。あれから本郷座へは參りません様ぢやありませんか。一つ若返つて若溪橋畔を振動させた當時の弓様になつて、寄り木見物に出かけませう。そして御歸りには宅へ御泊り遊ばせな。態と御宅へは電



話を掛けずにね、翌朝まで。齊樣驚愕りなさるでせうよ。乾度宅へ電話掛けておよこしになるは。其時何と云ひませうか、まあいゝは、それまでに考へませう。散々お氣を揉まして上げませうよ。大丈夫ですは。叱られやしませんは。若しお叱りになればそれこそ却つて面白いぢやありませんか。

「夫婦と云ふものは趣味が一致しなければ、家が圓滿に參らないものですつて、家事の先生に敎づたのですもの」

とか何とか云つて濟まして居らつしやいよ。大丈夫ですは。怒られるのは私許りよ。弓樣を叱る樣な齊樣ぢやありませんもの。

「綾女さんは苛いね。音なしい弓を連れ出しては碌なことを敎へないて。弓はお影で段々人が惡くなる」

なんて乾度私の處へお小言が飛んで來るのよ。左樣すれば猶いゝは。日頃の御病根さらりと斷つて差しあげませう。如何しても私は弓樣の御醫者樣に出來上つて居るんですはね。

イヤナニ決して左樣御贔屓に與らないでも御病氣は休み〱にして頂きたいものですは。左樣繁昌致しますと體の方が續きませんもの。

先日ね吉岡さんへ伺ひましたのよ。ホラ例の奥樣でせう。一つ二つ御話してゐる中に

「貴方機をお織りになりませんか今時。でもまさかに呆れるぢやありませんか」つて被仰るんですの。

「廿世紀の都では電車に乘つて、デパートメントストーアーに參ります」とも云へませんはね仕方なしに

「イヽエ如何いたしましまして。不器用でございまして少つとも存じません」と音なしく申上げましたのよ。しますとね

「まあそれは御不自由でせうね。只今は何の彼のと申て糸を勝手に組みまして、勝手な名をつけて、高いお價値で賣つて居りますさうで、機のことなど知らないものは飛だ馬鹿な目に逢ひますよ」左樣でございませうとも。御尤樣でと伺つて居りますと、段々火の手が盛になりましてね

「先日も宅の親戚の嫁が、高貴織とか何とか申すんださうで求めて參りましたが、一反貴方十八圓だそうですの、買つて來るものも來る者ぢやありませんか。生糸が一反分如何程かも存じませんのですもの。ほんとに若い者は仕方がございません。何程織賃が高いつて知れて居るぢやございませんかッ。」て私がまるで叱られて居る樣なんですの。終に、「貴方などもお若いから御氣をおつけ遊ばせ。飛んだ馬鹿な目に逢ひますよ」と御親切な御言葉に難有涙をこぼしてゐますと、



「鄕里の方では今時の皆樣方の樣に數學とか理科とかつて堅つ苦しい事は少しも教へませんけれども、其代り機や、糸取りや、お裁縫や、刺繡などはもう大抵の家では仕付けますので、家内中の着物は皆、その主婦が織るのでございますよ。買ふなんて人は餘程の意氣地なしの樣に申されますので。」

成程、依つて以てこの奥樣有がたい御時勢にも係は

らず手織を召して、カラーットン〳〵を遊ばしては、御主人樣と御自分樣のをお織り遊ばすのかと、ほとほと感心して伺つて居りますと。

「貴方、一寸お出で遊ばせ。只今織りかけましたのを御目に掛けませう」

何處まで難有い仰せと恐入りながら、長いお廊下をお後に從いて參りますと、日當りのいゝお離座敷。

「さあどうぞ。これは主人の着物に致しますので」

謹で拜見致しますと、まあこれはしたり、

「あの御主人樣は亡者でお出で遊ばしますので」と云はふとしたのをやつと堪へて、

「あのお染めになりますので」と漸々切り拔けましたの。其筈ぢやありませんか。白木綿が御主人の着物なんかね。それも貴方まるで帶心見たいなんですの地がよくて。亡者だつて氣のきいたのは肩張らしてしまひますは。それを黒の御紋付に遊ばすのですつて。

「とても町の物などは、お用ひになれませんでございませうね」こうして何から何まで御自身で遊ばしましては、でも御大抵ぢや居らつしやいませんこと。私共はほんとに意氣地がございませんで」こんな事申上げ「早々御暇申ましたのよ。此上一寸織つてお目にかけませう、なんて難有き仰せを下し置かれませうものなら、それこそ大變ですもの。

歸りに車の上でつく〳〵考へましたのよ。何樣も何樣も路行く人の數々が、生糸の價格御存じない方許りで、揃ひも揃つて勝手な名をつけたお召物を、難有がつてお召し遊ばして居らつしやるのですもの。斯う意氣地なしの奥樣方やお孃樣方許りでは、東京中の女が殘らず次官樣の奥樣のお弟子入りを致さなくてはなりませんのね。弓樣如何です。少しお出かけ遊はせな、お氣の鬱々遊ばす時は。斯う云ふ面白い事もあるのですもの、氣保養ですは。

氣保養のことを申せば先日日比谷の音樂聞きに參りましたのよ。芳江さんと二人で。芳江さんが彼樣にお綺麗でせうて　それと列んで此樣肥つちよがお出掛けになつたのですもの、その目に付く事つたら。さすが

の私も少々極りが惡うございましたは。歸つて早速帶を解いて見ましたのよ。あれ丈けの人に見られたら少しは身も減つたでせうと存じましてね。所が一分だつて痩せやしないぢやありませんか。ほんとに見られ損でしたは。

丁度樂隊も濟みましたし咽喉が渇いたので、松本のお茶でも飲まふぢやありませんか、と云ふので、山吹の澤山ある所ね、彼方まで行くと變な書生が「イヨーステキツ」て云ふんでせう、「オヤ恐入りますねつ」て云つて遣たんですよ。太分



品位にかゝわるとおもひましたが、この位な事は言返して遣らないと人が馬鹿にしますからね、すると芳江さんが極り惡がるつたつて一通りぢやありませんの。ほんとにお可笑しうござんしたよ。

左様〳〵。弓さん御存じでせう。郵船の茂田さん。あの方の奧樣に御目に掛りましたは。芳江さんが、お色の黒い、小さい丸髷を頭に載せた變なお婆樣に（四十七八よ）馬鹿叮嚀にお辭儀なさると思つたら、それが茂田さんの奧樣なんですつて。芳江さんがそりや大私淑なのですよ。會社ぢや何でも飛ぶ鳥落す程の御權勢だと申ぢやあ

りませんか。それで御家ぢやそれこそ極端な拜妻者で居らつしやるんですつて。何處へ御旅行遊ばしても、「歸へつてこれぞ妻君に送る、又仁ならずや」の折箱一つとは違ひ、大したお土產ですつてね。

そこで身を要なきものに思ひなした廃人が其原因那邊にありやと探つて見ましたさうですの。しますとその奥様——小さい丸髷のよ——それは下役の奥様方にお行き届きになる事痒い處へ手が届く様ですつて。旦那様がまたお船に乘つてお出でになる頃から、暑さ寒さの御見舞ひから、航海中の留守見舞まで御自分でお見立てなすつて、それ〳〵御心付け遊ばし、其上若し病人があつた、不幸があると聞こし召さうものなら御自身お出掛け遊ばして、御丁重な御言葉まで頂戴するんですつて。喰ひ付きたい様な半襟や反物に、加ふるにこの御言葉と來ては、如何な女も隨喜の涙袖にあふれる理ですのね。それで茂田さんの御人望も御權勢も外で上かつてゐるお頭の、お家で下がる理も至極御尤。芳江さんのお話にひたすら感じ入りましたわ。

「男が何程腕があると申しても、女の力がなければ名はなせませんはね。私は如何したつて左様思ひますは。」て其日の芳江さんの氣焔と申したら大變でしたの。

奥様も斯うなつちや奥に腐つて許り居られないぢやありませんか。少し眞中へ出ませうよ。

弓様見たいに雙葉の上の出來損こないの様に——お怒りになつちや嫌ですよ——嫌やに堅苦しいかと思へば、嫌にお氣が小さくて、一週間も重き枕にお惱みとあつては、光君もお手の付け様がないぢやありませんか。

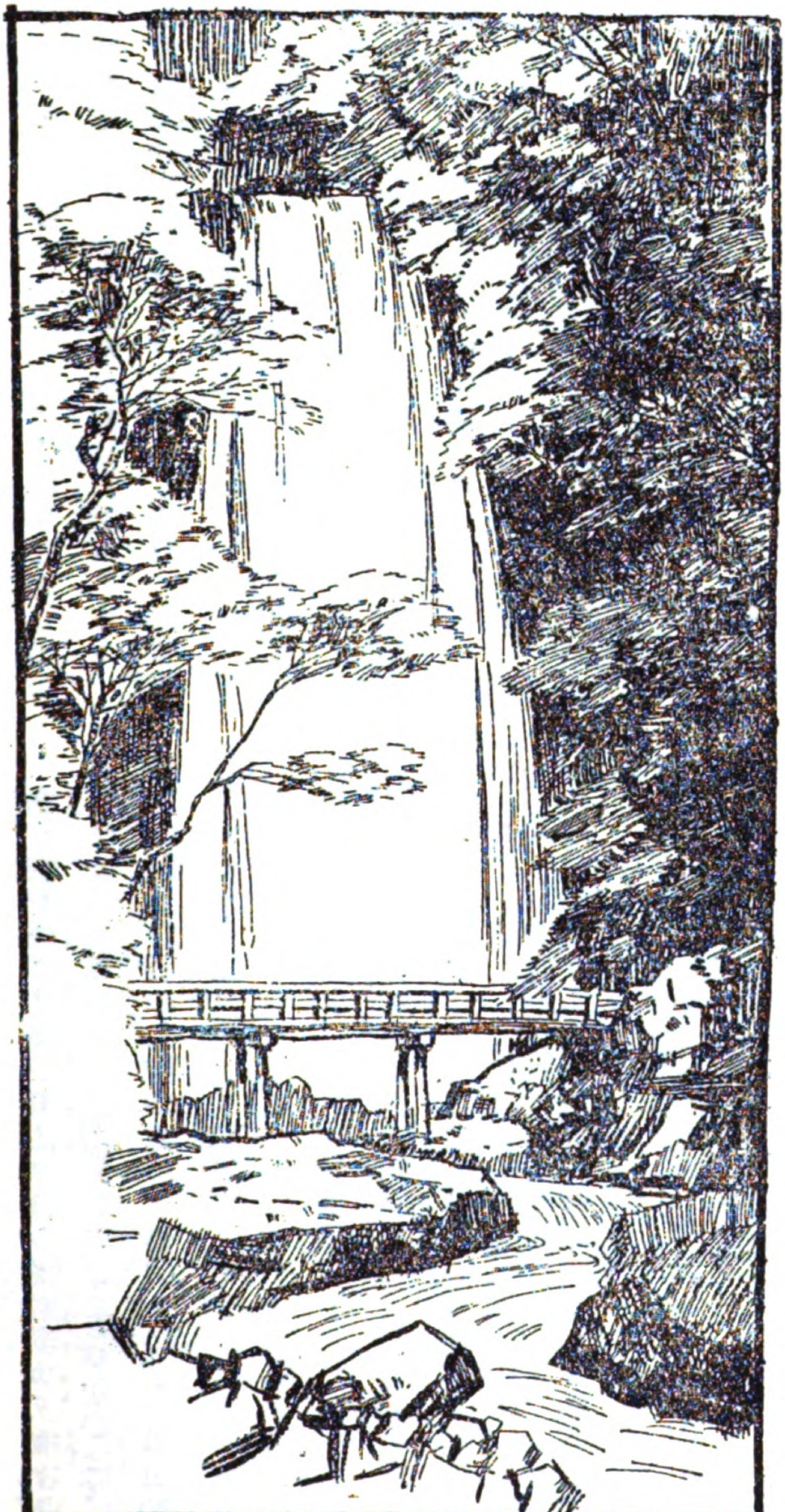
其際に茂田様の奥様をお習ひ遊ばせよ。それこそ旦那様の舞臺が何處まで延びるか知れませんは。そこで齊様も成程弓さんもエライ者だつてわけで、早速弓様大明神になさるでせうよ。堪まりませんね。この上弓様を擔ぎ上げられては。御當人様は御滿足でも側の者が中てられますは。まあ〳〵我慢しませう。大事な大事な從妹の弓様のことですもの。

ほらそれで家内安全、武運長久となつたでせう。我ながら驚きましたね。お藥の効力には。以後この女醫先生の御處方に限るでせう。

一日も早く御床上げなさる樣に祈つて居ります。イエ決して御赤飯が頂きたい譯ではございませんので。

あゝこれ丈け饒舌たら、いとゞ薄い脣が摺り減つてしまつたでせうに、今日はまあ脣の代理を筆が勉めて呉れて、助りましたは。ほんとに厄介な奥……イ、エほんとにお優しい、音なしい、お元氣で、考へ事など遊ばさない誠にお宜ろしい奥樣で。左樣なら。

箕面の紅葉



母親の嫁穿鑿

名なし草

××日

目がさめたので枕元の時計をみると五時、直に起てそつと雨戸をあけ露深い庭におりたつ暁の空清くはれて幽かに殘る下弦の月、冷々と秋めく風が身にしみた。朝の受持例の通り。母樣はきのふよりもお快いとのことうれしい。

朝飯しまつて、髪を結はうど鏡臺持出した處に、そつといらしたのは姉さま。

「私ねえ、母樣も彼樣によくおなりなすつたし、餘り用もなくなつたからけふでも一寸歸らうかと思ふの」

私何だか急に淋しい氣がし乍ら

「そうねえ、でもお天氣が少と變よ」

「大丈夫でせう、降た處で……」

と姉樣は窓から、曇りそめた空をみあげてらつしやる。きのふ久々で結た丸髷の、鬢のあたり少しはつれて看病疲れか痩のみえる肩すつきりと、世なれた二十八の奥樣振、平生にと下した博多の帯の後姿がけふは殊に上品にみえる。と私は茫然したが

「ぢや姉さま、あとは心配なさらないで、けふは一先お歸りなさいな、義兄樣も良ちやんも如何に御不自由か分らないわ」

「良一はもう學校が始まつたらうしね、それぢや母樣によく申上て頂戴な、又日曜には參りますからつてね私も一寸髪を……」

姉樣に鏡臺を讓つて、私は病室に入つた。

「あのね母さま、姉樣が、けふは一先歸りますつて」

「かへるつて？」と一言。

「えゝ、横濱だつて義兄樣一人で困つていらつしやるでせうよ、良ちやんも淋しいでせうし……」

「そりやそうだけれど。……眞に嫁にやつた娘は賴みにならない。そのくせ嫁位世話のかゝつた娘はないがねえ」

と仰有る。そりや姉樣位母樣のおせわになつた人は、

ないだらう、十八の春にお嫁にいらしたから死ぬ程の患ひしたり、良ちやんの生れる時だつて、いはゞ母様の看護で母子の命が助かつた位だと、義兄様が仰有たつけ。

併し思へば親として子の世話は當然の務である、又いくら我子でも一旦嫁入つてはもう思ふやうには使ひかねる筈。姉様にしてみれば、一家の主婦だもの、さうさう家をあけておく事は出來なからう。

「でもね母様、相良の家に喧しい兩親がないからいゝんですよ、難しいお姑さんでもあつてご覧なさい、とてもかうして姉様を引留てなんどおかれやしません、義兄様一人きりだから、姉様も自由にかうして看護も出來たんですね……」

「あゝそりやさうさね、私もお蔭でかうして助かつたから……お前さへゐてくれゝば姉さんがゐなくつてももう差支ない、その内には起られやうからね」

と仰有た。快くなつたとはいふものゝあのやつれやう、これがまア、丈夫な肥つた私の母様だつたかと思ふ位。

「僕はどうしても、母様がもう一人他にあるやうな氣がしてならない」

と、この夏歸朝なすつた兄様の仰有つたも無理ではない。

部屋にくると、一糸みだれぬ黒髪の艶かさ、姉さまはもう身仕度していらつしやる。

「あら、直？」

「いゝえ、でも仕度して丈。母様にさういつて？　さう、それからね婆やに俥を云つて頂戴な」

「はい、でも姉さま、お晝からになすつちやどう？」

とつひ引とめてみたが、歸心矢の如しと云たやうな姉様はつひにおきゝなさらない。

仕方がないから、俥のくる迄を母様のお部屋に、歸る姉さまをもてなし心に、お茶を入れて到來のチャム入かすていらを切る。

兄さまもよんでお出、と母様が仰有るから廊下傳ひ書齋を覗くと、兄様と四郎さんは頻りに何か廣げて論

をしていらつしやる。見るとポール、セザンヌの自畫像だ。私はお構ひなしに。

「お茶を入れました、いらつしやいな母様の處へ。」四郎さんふりむき樣

「お茶菓子あるの？」

「ほゝお生憎さま」

「お茶許りぢやつまらぬ、婆やに何か買せやうか」

「えゝご隨意に姉樣が之から歸るんですからご馳走なさいよ」

「歸るつて、よしきた、けふは僕が奢る。」



椅子から飛起ると兄樣笑ひ乍ら

「四郎のご馳走ぢや怪しいもんだね、兄さんが奢らうか」

戯談でもないらしいので、私は氣の毒になつたから

「兄さま迄本氣にしてらつしやるわ、あるんですよ、むつちに」

二人共、「なアんだ」

四郎さんは

「ひどいね姉さんは、兄さんが出さなからうものなら、僕の懐が痛むところだつけ」

「少位痛んだつていゝわ」と憎まれ口をきゝ乍ら三人

で病室へ

「どうしたの、お茶が苦くなつてしまひましたよ」

と茲に姉樣の静かな姿。

「驚いたよお姉さま、菓子がないなんて僕に買せやうとするんだからね」

云ひ乍らいきなり兄さんは一つ頰ばつて

「これならコーヒーか紅茶がのみたいね、そんな苦い茶なんかより」

「どうせね、未來の外交官なんかにはお口にあひますまいよ」

と云てやる。皆呆れていらした。

姉樣は帶にはさんだ懐中時計をチラと、パチンと蓋して

「ねえ兄さま。あの高木さんのお話どうなさるおつもりで」

兄樣のお眼は電のやうに母樣から私の顏を走つた、莞爾して

「どうするつて、僕はまだ要らないから……」

姉樣はつと母樣をご覧なさる。と

「いつ迄もいらないつて云てゐられないからねえ、私もいつ又どうなつて死ぬかも……」

「はゝそんな事あるものですか、もう大丈夫です、まあ僕より先に極めなければならんせんせいがありますからね、幸さんももう丁度いゝ年ですから」

なんていやな兄さまだらう。

「それから四郎が大學を出て旨く試驗でも通つてからの談にしませう」

「おゝ大變、四郎さんが外交官補になる迄まだ五年もありますわ。それで兄樣のやうに一度ですめばいゝけれど」

皮肉なことを云ふと四郎さんにこ／＼して

「あゝ僕は五年ちやきかないね、落第する、その代り姉さんだつて佛語がペラ／＼迄には何年かゝるか分らないね」

と直ぐ私しへ憎いことをいふ

「いゝんですよ。どうせ私は外國語が出來なくつても

日本語さへ」

「まあこの人達は、大きな姿をして寄るとさはるゝ喧嘩ねえ」

と姉様は呆れた顔。兄様笑ひ作ら

「いゝさ何年かかつたつて、その内には僕ももう少しどうかしてるでせう、實際今から妻なんぞもつと遣切ませんよ、まあまあ當分母様に面倒みて戴くのです」と事もなげな。



若やかな二十五の法學士がその秋直に外交官補、翌る夏から大使館に五年の外國生活、今外務の本省詰となりて、參事官の兄さまは敏腕の評判とか、それきく嬉しさは早く相當の夫人をと母様姉様躍起となつていらつしやる、が、ご本人一向呑氣な態度で、數ある縁談を何のかのといつも茶化しておしまひなさるが併し....。

兄さまとて熱あり情あり、金釦きらめかした春や昔の若やが姿、初花衣床しくも包む、お胸に人しれず、刻むだ思ひのなかからでや。

暮れゆく夕のライン河畔、遠く思ひを故山に馳せて……と、感情高いお音信の底に秘めたる無限の情緒を
あゝ妹は朧々に……。
「姉さん、もう何かないかねえ、バナヽはなくなつたかしらん」
不意に四郎さんが云て、のこ〳〵立て行てしまつたのんきな弟。
「眞に高木さんのお嬢さんはいゝんですけどねえ、外交官の夫人には似合ですわ、美しいし交際振は鮮かだし……」
「惜しいねえ、きめて丈もおいたら？」
と母様は寝床の下から紙包をお出しなさる。先日も拝見したが、幾度みても美しい寫眞。
稍反氣味にすらりとした、笑を含むだ洋装の、ボンネツトを洩てこぼるゝ黒髪、鮮かな眉、潤たるやうな愛嬌の眼元、妬い程美しい、それよ學習院の出身でお年は私と同じ二十三。兄様は快然と
「僕のやうな貧乏書生には不似合ですよ、それ程才色兼備なら、もつと地位の高い人に嫁たらいゝまあ僕はもう少し呑氣にしてゐます、幸さん、お茶をもう一つ」
と兄様は縁談をお茶に外した。
「でもね兄様、猶よく考へて下さいましな、兎も角寫眞は置て參りますから」
「置て行たつて仕様がないよ、僕は何度云れても同じなんだから」
姉様は思ひきれなさうに母様を眺め乍ら、
「ぢや又……母さま、又參りますからね、お大切になすつて……」
と立仕度。四郎さんどこからかのつそり出てきて、
「いよ〳〵お歸りですか、僕送つてあげませうか」
「いゝえ澤山、又いつかのやうに包物を待合室になぞ忘れてこられたりしちや大變だから」
かくて姉様は俥にのり移つて
「それでは母様をどうか、幸さんも大抵ぢやなからうけどね。兄様、眞によくお考へなすつて下さいまし、母さまも心配していらつしやるんですから……」

幌の内からくつきり白い細面をみせて、姉様は會釋なすつた俥は秋風の中を勢よく走り去る私は茫然たちつくした。

×

銘仙の絣に包むだ高い姿を柱によせて默然とゆく雲み送る兄様、美はしい三十の男盛を、何を望んで獨身と人は怪しまう。人こそしらね……歸朝なすつてまもなくのこと、卓子の抽出底深う、チラと見た面影はありしや昔み覺えの人をそのまゝ……。



忘れもせぬ私には三歳上の姉様であつた。當時熊本に轉任してしまつた相良の姉にもまして懐しく腕白盛十四の弟などは殊にお姉様お姉様と慕つた者であつた。亡い父様の親友の遺愛孃。優しい方、親切な方、そして美しい君。夕暮などはよく兄様の部屋に集つて、兄様とその君とは詩の話などなさる。兄様つひ時間を過して

ば、母様からお小言戴かれる事があつた。其樣時その君にお顏少し赧うして、お聲低うお詫なさるのを私は記憶てゐる。

兄様はその秋の受驗準備で東京に居殘り、私は弟と房州に避暑した。その夏期に何事が起つたのか、秋風が立ても蟲がなき初ても、懷しいかの君は再びわが家へ來まさずなつた。細やかな優しいお姿も、あゝそれきり見ない。

何故、と尋くさへ母さまはゆるし給はぬ。兄様も——それ以來一度も——人の名を口になさらぬ。

思へば春の夜の夢にたちし、俤人であつたらう。あくる初夏、前途の光榮を祝福せられて、橫濱埠頭萬歲聲裡に、兄様は故國をあとになすつた。

さこそは異鄕の旅の朝夕、人しれぬ追懷の淚もあつたでせう、今にして私は秘められた謎を解き得たやうに思ふ——。あゝ唯その面影をのみ友にして、兄様はいつまで獨を守らるゝのであらう?

追へばとて空しいその面影・・・

あゝ併し、私は兄様のお心を世に嬉しい事と思ふ。さく花をめづるも暫し、ちりての後は再顧みず、時と處に隔てられては、身に負へぬ悲しみも薄れて消てしまひ易い。匆忙たる人生に春なつかしい夢を偲んで、ひそむ寂しみを忘れ玉はぬ、この五年間の兄様のお心を、得がたい誠と身にしみて嬉しい氣がする、めゝしい執着と笑はゞ笑へ——人は兎もあれ、妹許りは、嬉しくも痛はしくも陰乍らお察しゝてをりますのに、打明て下すつたら、兄様一人にのみは泣かせ参らすまいとそれ程に思ふ妹を、淚しらぬものと思召してか、私は隔てがましい兄様が恨めしいやうな、お氣の毒なやうで・・・・。

今も今とてお側にゆくと、物思はしげな瞳をなさり乍ら、つと雲からお眼をはなして

「秋海棠がよくさいたね」

籬のもと、敷石のほとり、淡紅濃かな斷腸花、中に交つて白萩もやがて露と溢るゝであらう。

「秋になりましたね」

身にしみていふと
『あゝ、これから追々氣持が快くなる』
とお聲の爽かな。
風さや〳〵と木立をゆるがして、遠く〳〵鐘がひゞく。
『上野の鐘だね、あゝ昔はよくあれをきいたつけ……』
微笑を含むて、眉あげて、兄様は思はず空に――。
北へ北へと、雲が早い。物しめやかな一日は雨ともならず夕ざれて、庭のそこかしこに蟲がなく。

△松茸の蒸物　土器又は焙烙に鹽をふりて松茸を並べ銀杏、海老、穴子などを取り合せて並べ　上に少し鹽をふり、蓋をして蒸燒にする、又小さき松茸を丸のまゝ玉子の黄味を塗りて蒸燒にしてもよろし、又茸山にては松茸の生えたる所に薪を載せかけて燒き、生醤油にて食す、又酒蒸にするには初酒少々にて酒煎りにし、更に新らしき酒を打ちながら蒸すなり。



赤坂豐川稲荷社

妻としての幸福な私の境遇

濱荻女史

長男ですかもう貴女明けて十一になりましたの、眞實に月日の立つのは早いもので御座いますね、一昔といへば隨分長い樣ですけれど、私の此十一年有餘の春秋は眞實に幸福で御座いました、今ではもう四人の子の母ですもの妻としてのみならず、より重い責任のある身却々、うつかりしては居られません、ですけれど私は其責任の重いため心まで老い込みたくはないのです暖い日には庭に出て大人げもなうミット片手に子供の相手になつて、ボール受けてやつたり、雨の祭日など女中迄集めて、かるた取りやピンポンで大騒ぎも致しますれば、たまにはお出で下さる昔のクラスメートと共に、思ひ出多き寄宿舍の窓で唱つた、古い唱歌、オルガンに合して、唱つて見る事も御座います、私はかうして何時迄も賑かに暮したいと思ひますの、ですが私は、どちらかといへばブライトの方ではありません、學校に居ります時分でも、皆樣が食後の運動時間に其頃流行したダンスのおさらへして被入る仲間外れとなつて、靜な裏庭の花壇に、只一人、ぢつと淸い花の香を味ひつゝ、何とはなしに居るのが好きでした、「まあ澤さん、又此處に？、花守して被入るの」と、お友達に見つけられては、笑はれ致しました、今でもやつぱり繁華な都會よりは靜な田園生活の方が、趣味深くていゝだらうと思ひますわ、併しそれも住んで見なきや、どうだかわかりませんけれどね、まあ、どう致しましても私はツーレザーブドとでもいふ方なのでせう、え、私の理想？、理想てつのも鳴呼がましいですけれど、さうですね、牡丹の花の濃艶よりはよしや人目に立たずとも淸楚な野菊。房江の樣なレデーに女の子を育て見たいと思ひますわ、こんな風ですから私には他家の奧樣方の樣に、派手な交際ぶりに良人の職務を助けるといふ樣な、立派なマダム振りはとてもな

いのです、せめては内顧の憂のない樣にと、只そればかりが私の、希望です、學問なら器量なら何處へ出しても恥かしからぬ、旦那樣に、私の樣な、不肖な者は眞實にお氣の毒でなりませぬ。それでも親切な良人は少しも厭ふ風もなく、愛して下さる勿體なさ、其お情を身に泌めて片時も肌身放さぬ此リング、思ひ出せばもう一番、被仰る迄もなく記念の指輪ですわ、御覽遊ばせ、此裏に二人の頭字FとSとが組合せて彫て御座いませう、是を手づからはめて頂て樂しいホネームンに旅立つた先は今でも何となくなつかしい心持のする京都です、鴨川の清き流れ、優しき姿の東山、何れか私の胸に響かぬものとてはありませんでした、先づ御苑の中の皇居を拜し、其他清水智恩院など、名所舊跡遊覽の、樂しさ歷史上のお話などしながら高い石段登る時手を取つて、頂いた恥かしさや、其頃は既に五月の半でありましたけれど、彼地は格別に、比叡山おろし身に泌む夜寒の歸るさ、御自分の外套ぬいで私に着せて下さるお心づくしなど、私は死でも忘れません、

え、何ですつて、そんな事當り前だつて、そりや或はさうかも知れません、けれど私が花恥かしき美人ならば、それこそ、どんなにして頂いても罰は當りますまいけれど、こんな醜い私ですもの、立派な良人に對して恥かしいぢやありませんか、私は何時も鏡を、見る度にせめて心を美しく磨いた玉の光もて良人の親切に報いねばならぬと思はぬ時とてありません、もう／＼如何なる事情がありませうとも此身と心を捧げてつくしまする、え〻命がけですとも。

忘れもしませぬ去年の春、卒業十週年のクラス會に集つた方が十人ばかり、其昔袖を連ねて母校の門を出た數の三十餘人あつた其中で、可惜才色むざ／＼と無き人の數には入つた方が三人、未だオールドミッスで育英に從事せらる〻方が二人、破鏡の嘆きに世を拗者の御不仕合な方が二人、他は皆それ／＼花爛漫のミッセスばかり、久しく御目にか〻らぬ方でも少しも御變りなく、却つて御若くおなりなされた樣、それは／＼皆樣御立派なマダム振り、處女時代が花の蕾ならマダム

は正しく美しい實を結んだ、そしてしつとりと落付た重みある品格供はつた時代でせう、流行物づくめに、今を時めき給ふ信子様を筆頭に、お俠で押し强い茂子様は御得意のドクトル令夫人でゴム輪の御抱へ車これ見よがしに横付になさるし國文が御上手で御歌の天才であつた弘子様が商家へ御嫁きになつたといふ事は聞て居りましたが、まあ、御目にかゝつて驚きましたわ、お品のよかつた御孃様が今では意氣な下町風の丸髷姿眞實に見ちがへましたのよ、有名な辯舌家の小雲岳德子女史は御心よい御良人とお姑様を煙にまかしておしまひなさるとか、其外御子様多くて困る方又無くて家庭の寂しさを喞たるゝ方御良人の御身持苦勞したまふ方だの、色々御話し承つて見れば十人十色却々見かけ通りに行くものではありません、噂はそれからそれへと果しなき其中に、女は何が幸福だといつたつて情愛厚き良人を持つに優るものはあるまいとの結論でした、其指折りの中に數へられたは春野



様と私と外に二三人奈野様は芳子様理想の赤門出の文學士、財産はお有になるし、家庭の係累はなし、御良人は柔しい方だし可愛い御子様三人と樂しいホームを作つて御いでになりまする、御旅行が好で何時もスケッチの優美な繪葉書よこして下さる女らしい方私の良人は學位こそありませぬけれど、豐富なる學識は、決して今時の新進の學士や何ぞが足許へも及ぶことではありません、あら御自慢だつて、いゝえ是は私の手前味噌では決してないのです、まあさう思召すのならさうとして置きませう、何ですつて、私さへ偉い人だと思つてれば家内安全だからつて、まあ隨分ね、ですが私は全くさう思つてますの、だから子供にも始終さう言つて聞かせて居ります「お父う様は澤山の兄弟があつたから中學卒業後はお祖父様から學資出して頂かずに、獨力で高等商業へもお這入りなされば洋行もなさるし、今の身分になられたのです、お前達もお父う様のやうな心掛がなくてはなりませんよ」とね・・・其上私の良人は人情に厚く柔しいんですから、何誰にでも信用せられ、頼もしがられるのです、皆様から眞實に貴女はお幸福ね、と羨しがられるのも無理もないでせう、オヤ御馳走様だつて、まあませつ返へさずに聞いて、下さいよ、私は眞面目に御話して居るのですもの新家庭時代には御料理を始としお客様の時など、隨分失敗が澤山ございました、けれどついぞ叱言一つ言はれた事はありません、收入は全部御渡になるし、子供の教育から家事一切擧げて私に委せて下さる胸の廣さ御互の信書の開封は勿論如何な事にでも二人の間に秘密といふものはありません、私たるもの感謝せずには居られないでせう。

日露戰後良人は株式熱の餘波を受けて、折角今迄經營して來た事業が失敗に歸し、今迄多少あつた財産も何も皆無となつてしまひました、私等は更に元の裸一貫で再び、社會と奮闘せねばならぬ事となりました、世の中の行路といふものは決して平坦なものではありませんね―、併し又此曲折波瀾あつてこそ樂しみも多いといふのでせう、もしもありまゝ無事でありました

ならば、餘に平凡に過ぎて自然と趣味を外に求め、私等は富の増すに從ひ、何時とはなしに奢侈になれ、子供等にも如何なる弊害を與へたかも知れません、そこで神は私共を戒めて一の暗示を下されたので御座いませう、私等はたとへ有形の財産は無く致しましても無形のハツピネスは決して永久につきるものではありません、今迄に得た諸種の經驗は私の様な者でも處世上或る一の好レツスンを得ました、これから私も大に世話女房となつて働くつもりです、物質上に不足はありましても私には何よりも何よりも貴い良人の愛があります、まだ其上に、黄金白銀にも換がたき可愛い可愛い子寶があるではありませんか、此頃では女中も一人雜誌一つゆつくり見るひまもなく、終日忙しく暮しても情け厚き良人のため、いとしさ限りなき我子のためと思へば少しも不足に思ひませぬ、私は此幸福なる境遇を大に滿足致して居ります。



秋一週間の獻立

こほろぎ

◎月曜日

昨日今日の小春日和の心地よさ、見渡す限り黄金色して豐かに實つた稻穗の間をぬふて行賤が男の鄙歌も長閑なり

一、松茸土瓶燒き
二、鯛のおろし和へ
三、茶碗蒸し　四、枝豆の煮染

一、松茸の石突を取り、鹽水にてよく洗ひ、土瓶の中に入れ弱き火にて蒸し燒きになし手にて細くさき、柚酢をかけて出す。(柚を割つて汁をしぼり布巾にて漉し一寸醬油をおとす)

二、鯛の身をさいのめに小さく四角にきり、一寸鹽酢につけおき、後ち大根おろしの中にまぜ合し、酢醬油をかけ、小鉢に盛りミヂン生姜をかける。

三、鯛を切身となし、鹽をふりて暫くおき一寸燒く
栗を燒きて皮をむき、味淋と砂糖にて一寸下煮す
ぎんなんも茹でて皮をむき煮出し鹽にて味を付ける
松茸を鹽水にて洗ひ薄く切り茹でたる三つ葉と共に醬油にて洗ひ用ふ
皆程よく椀に盛り玉子一、煮出し二の割合にて醬油味淋にて味を付けたるものをつぎこみ蒸籠にて十五分間蒸し玉子の上に澄みたる汁のたまるを度としておろし蓋をして熱き中に出す

四、莢の前後を切り一寸茹で醬油に酒少しを加へからき加減に煮染める

◎火曜日

一、ベーキマシルーム、
二、鰺三ツ葉清汁
三、金糸薩摩芋、四、すり芋の酢

一、中開きの松茸の笠を鹽水にてよく洗ひ、牛肉をよくたゝき、すりて裏漉となし、セルシユ、鹽、コセウと牛乳にて味を付け、其の笠につめて天火にて三十分位燒く、(之は何の肉にてもよし)附合として人參、ジヤガ芋松茸のじくを小さきさいのめにきり、鹽茹でとしてバタにて一寸いため牛乳と鹽コセウにて味を付け西洋皿にもる、

二、鰺を三枚におろし一寸鹽をあて暫時して洗ひ、ざつと燒く。茹でだる三つ葉を一寸位にきり、椀に盛り、かつを節と昆布にてよき煮出しを取り、醬油にて味を付けたる汁をさす。

三、薩摩芋を一寸位に切り、千六本にて鍋に酢を三勺ばかり入れ、同時に芋を入れて焦げ付かぬやうにいり、少し煮えたる所に味淋白砂糖を入れ、柚を山葵おろしにておろし振りかけて能くまぜ、芋の透通りたるを度として鍋をおろし、皿に盛りて海苔を燒きてもみ掛けて出す。

四、山の芋を皮をむき、山葵おろしにておろし、一口位づゝにちぎりて小鉢に盛り、酢醬油をかけ、海苔を燒きてもみたるをかけそれにミヂン生姜をかける、

◎水曜日

けふは鰯が澤山にとれたとてしきりに賣りにくるからそれでも買つておく
御隣の秀雄さんが山から取つて來たからとて糸すゝきの美しいのに女郎花、野菊、などをそへて頂く自然に山に咲た花はことに色が清く美しいやうに思ふ
けふの献立は

一、鰯の摘入と豆腐のすまし
二、鰯田がく、三、松茸飯、

四、つまみ菜浸し物、
一、鯛の骨をぬき庖丁にて叩き少しの鹽と薯のおろしたのを魚肉の量の十分の一程と煮切味淋煮出しを少々入れてよく摺り眞薯をなし、沸騰したる湯の中に杓子にて小さくちぎりて茹で上げて皿に取り、豆腐と共に汁の實とする、
二、唐がらし一二本をよく摺り、そこへ味噌を入れて又よく摺り、裏漉となし、味淋にて少しゆるめたる味噌を鯛をくしにさして兩面よく燒けたる處へ杓子にてよくつけ、味噌か少しこげる位もう一度燒く
三、米一升五合に松茸百五十匁位細かく裂きて醤油五合味淋五勺位の割にて水加減して炊きまぜながら器に移す、
四、つまみ菜を茹で煮出しと醤油を合せたる汁に浸し花鰹をかける、

◎木曜日

夕方から例の御客様にて今までの算段ががらりと變り、臺所は大まごつき、大急ぎで魚屋に下女を走らして見たけれど、あいにくもうこれだけといふて、大きくも無い鯛を片身と車えびがたつた三つ、どうも仕方が無いから少し取つてあつた、すゞきと合せて先づ左の如く。

一、鯛と松茸の清汁、
二、すゞきの黄身蒸し、
三、鯛のさしみ、
四、海そうめんと蝦の酢の物、
五、あわびの甘煮、
六、いり松茸、
七、栗の含煮、

一、例の昆布と、鰹節とのよき煮出しを取り、醤油をさし、味を付けて煮立ちたる處に鯛の切身を入れ、煮へたらばすぐすくひ上げ其後に松茸のうすく切りたるを入れ、一寸煮る間に新菊を入れる、
二、すゞきを大きな切身となし、暫時鹽をしてよく洗ひ、蒸し器に竹の皮をしきて魚を入れて蒸し、蒸せたらば玉子の黄身ばかりをよくかきまはし、小さきはけにて兩面にぬり、又一寸蒸す。
干あんずを茹で、あく引砂糖にて（あく引砂糖はさとう百匁に水一合位を入れよく煮て其中に玉子の白身を少しおとして、あくを取る）煮込みたる物と盛り合せる、
三、は例の通り
四、は干した海ぞうめんをよく洗ひ、暫く酢につけおく、蝦は鹽うでとし、剝たてきき、殻よく絞り、甘酢をかける、（味淋五勺を煮つめて酢をさし醤油を一寸おとす）
五、鑵詰のあわびをざつとゆでこぼし味淋醤油中々になしてよく煮込む
六、松茸をさきてラード油にていり、取りあげて他の鍋にうつし、醤油を加へて箸にてまぜ松葉を五六本しいた皿の上にのせて出す
七、栗の皮をむき茹で、水、五合味淋五合とあく引砂糖とをなしちやく〳〵に入れてくづれぬやうによく煮る、

◎金曜日

けふは旦那さまは宴會にて御留守なれど、大阪から健一と時子が遊びに來て居るので子供だちの好きな物をこしらへる

一、ジャガイモの味噌汁
二、栗の醤油きんとん
三、ボイルドフイッシュ
四、玉子豆腐

一、ジャガイモを山葵おろしにておろし、布巾にて軽くしぼり、其中に片栗粉をほんの少しまぜ、手にて適宜にまるめ、普通に仕立てたる味噌汁の煮立ち居る處に入れて煮る、ジャガイモと思へぬ程おいしい

二、栗の皮をむき、あく引砂糖に味淋と、水と少しつゝ入れて暫く煮そこへ薩摩いもの蒸して裏漉にしたるを入れ、少しになくなるまで煮ておろす時に醤油を少し差まぜる。

三、ひらめを切身となし、鹽蒸とし皿に盛りて白ソースをかける白ソースは鍋にバター大匙一ぱいを入れ火にかけてメリケン粉一杯を入れよく／＼煉り牛乳一合を少しづゝ幾度にも入れて煮鹽コセウにて味をつける。

四、玉子一杯、煮出し二杯中の割としよくまぜて醤油味淋にてからき加減に味を付け、大きな鉢に入れ蒸器にて蒸す、蒸せたらば金杓子にてすくひて皿に盛り、くずあんをかけて出すあんを煮出しに醤油にて味を付けくずをときて入れる。

けふ御八つに焼食とんをこしらへる。

先つ白玉粉八十匁、水二勺さたう四十匁、新粉二合位の分量にてよくこれて蒸しますまたこれて片栗粉の中にとり、少しづゝ手に取り、平たくのばして中にあんを包み形をなほして玉子焼きにごまの油を引きて、上を一寸焼く。

朝鮮の新料理

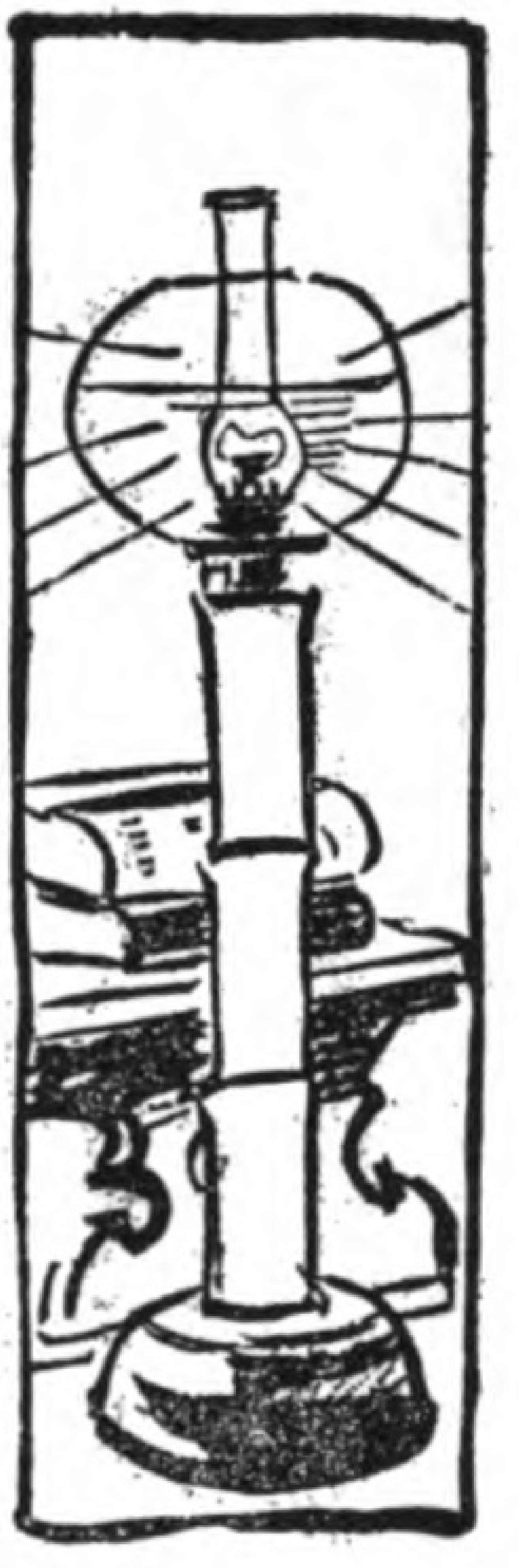
朝鮮人の食物は和洋食と同様いろ／＼の種類がある、例せば第一が特別食で、之は日本で云へば會席料理に當る譯である、第二は普通食で、之は萬人の通常食ふ所のものである、而して第三か僧侶食で、之れは我邦の精進料理に類するものである以上は常食であるが、此外に間食物がある、菓子もあれば果物もあり、餅もあれば麺類もあるが、其種類は日本なぞと大變に違ふ所がある、一寸會席料理の品に就ていへば日本の乾海苔と、牛肉のコマ切れに白胡麻をかけたもの、日本の柏餅の様な形に造つて搗き上げの餅へ蜂蜜を附けて食ふもの、其他鶏肉へ大根を細く切り込で煮たもの、豌豆のつゆ、大豆入りの甘飯、ゆで玉子の切り重ね、魚肉類、豚肉類寄せ鍋等を始めとして外に漬物、果物類など數多ある、此中漬物には三種の別があつて其第一は實漬とて蕪根、大根、柚の類を實に漬けたものにて頗る旨し、次の第二は味噌漬けにて其品は大根なり、而して第三は鹽漬けにて、之れには菜漬け、切乾漬けの類ありて、其中へは共に薑、蒜を加へ、且赤唐辛を多量に入れる又是等の料理には必ず果物が伴ふのであるが夫れには生栗を白くむきて積取れたるものと、梨の二者を附けるので、之は年中保存してある譯である、又時によりて柿を添へ又斯る席で飲む酒を見るに最上等は黙冠酒と称して、一見葡萄酒に似た品であるが、之は支那の老酒に均しいから或は支那から輸入されるのかも知れぬ、要するに朝鮮料理は日本料理の粋を極めた様なシャレた品はないけれども割合に淡泊として旨い。

▲茄子の刺身　茄子の蒂を取つてやはらかに煠で板の上に載せて杓子か何かで十分押平めて水分を取り細く庖丁を入れて山椒味噌か芥子酢味噌で用ゆると格別の味のあるものである。

▲鼈甲漬　古い糠味噌漬の茄子を鹽出しをして小さく切り味淋に漬け三週間ばかりすると色も透明になつて鼈甲の様になり味も奈良漬以上になる。

▲初夢漬　花の落ちたばかりの若茄子の蒂を切つて掛鹽で漬け一日ばかり經過した時、芥子と砂糖とを適宜の醤油に加へたものに漬け代へ二三日の後用ゆる。

▲粕漬　鹽漬にした茄子を出して天日で乾し味淋の粕に鹽を加へ中に摺れ合はぬ様に並べて漬け置き一週間位の後に用ゆる。



學期末の裁纉室

夕ほし

笑つて騒いで過せしその日は、もう一年の過去の繪卷に葬られた。

學期の終りが近づくと共に、一年で卒業の選科のみはやがて來む別れを豫期しては、各自、母校の御自慢に辯論の花を咲かせたストーブのほとり。

「潮風さんに師事してお出で遊ばす方は違ひますね。」

と、いつも岡田さんに冷かされる、「心より心へ！」流の雄辯を揮つては皆樣を煙に卷いて了ふ村木さんも此四五月は甚だ以て意氣消沈の至り、向陵寮歌を合唱しては、突然、音樂の先生に扉を排されて、吃驚、肩をすぼめる癖のある、一高崇拜黨の代表者とも云ふべき澤さんも、此節はどうしたのかお得意の「あゝ紅よ、紫よ」、もさつぱり聞えませぬ、けれど、けれど所謂、雲雀の如く生きたしと願ふ若人の集りですもの、老人の意氣沮喪とは雲泥の相違、外側のみ燒けし麥のわらにも例へやうか、機會あらばパッと燃えたし、黑髮なぶる微風よ、汝が戀しといふ風情。

おきまりの、正午遊歩時間に、端なく話題に上つたのは、家政科の內田さんでした。いつぞや御紹介申した、大會社々長の令孃、內田信子さんです。

發言者は近眼鏡の中田さん、一體中田さんは何所からどう密偵して來るのか、まさか平家ならぬ禿童を、繰り出してゐるわけではあるまいけれど……。

「內田さんね、いよ〳〵良人が決定つたんですと。」

物いふ時に嘲笑を眼のまはりへ漂はすのが、近眼鏡のために隱れて見えない、こゝ中田さんお正月から、とう〳〵かけてゐらつしやいますの。

「あれぢやあこんな賢母良妻主義には不向ね、矢張り

目白の英文科へ自轉車で通學つて、そしてあのほ、、、、。」とは浦月さんの蔭口ですけれど、なにもね、おへつついの前へ踞んで、紫矢絣の糸織の、薄色縮緬の袖口から、指環のはまつてゐる柔手を出して、吹竹でお釜の下をプー〳〵、近眼鏡の曇りに、おこげのオムレツを食べさせられるのぢやあるまいし、廂髪の下へ、よしや鼻眼鏡をかけやうと、落ちさへしなつきやあ：…をつと中田さん、御免あそばせ、でもね、ちよつと、あら淺草式だつて？　では、君！　といふのは日比谷式ですか、そんな事はどうでもようござんす、極內々のお話しなんですけれどね。

昨日、村木さんを歸り途、柳原伯爵のちやうど御門の前で、目白の附屬へ轉校なすつた大石さんにお目にかゝつたのよ、全然、ラシクなつた風姿に、忽ち中田さんの近眼鏡の御批評なの、それがまあ振つてるぢやございませんか。

「その昔、アマゾンの練習に、表情を極度にまで、實現させやうと、努力した結果よ。」

だなんで、何だか嘘らしいことね、カルタを取るのに掛けてからもうそれが癖になつて、といふ依田さんの方が眞實かも知れない、とにかく中田さんの近眼鏡は短日月間に能く、全校に鳴り響いてゐるんですから、參觀にゐらしつた方は選科裁縫室の戸棚によつた方へ特別、御注目下さいまし、しかしそれは、もう此、三月限りなのですよ。

「恐れ入ります、內田樣のハス……、高尙なる理想の實現！。」

と浦月さんは、一寸口を結んで、素知らぬ風に下を向いて、肩の所を五分、尺度でくり越して、上げのヘラをしながら、フヽヽと笑つた。

「ほんとうに。」

依田さんはどこまでも堅い、眞面目になつて問ひ詰めるので中田さんも亂れた、廂をかきあげた。

「實際ですとも？　そんな浦月さんみたいに、幾度、人をかつぐやうな事はしなくつてよ、それがね――。」

と、馬鹿に延ばして、

「大珍聞なのよ。」

「怪しいわ、ソロ〳〵。」

と、村木さんが、茶を入れやうとする、委細構はず、中田さんは、折々、身體を動かす毎に、光る眼鏡を氣にしながら、

「露崎先生のお媒介なんですつて。」

驚いたでせうといつた風に、ニヤ〳〵鼻へ皺をよせた。

「ぢや、祿のお俸給は分り切つてる。」

と、浦月さんは、自暴らしく、衿付けのヘヲをグツと通した。

「あらつ通しヘヲなすつて！犀の目玉が馬の目になる折角の赤い縄がお切れ申すと、二世も三世も恨まれてよ。」



と、妙な節をつけて、藤村さんが可愛い眼で浦月さんの手許を優しくにらんだ。

露崎先生つてのは、選科及び、家政科受持の裁縫の先生で、お顔の割に非常に眼が小さい、矢鱈に癪の起るのが癖なので、でもお嫁さんのお媒介をするのが大好きだとかで、先達も○○の理事をなすつてらつしやるお父様を持つ浦月さんの妹さんに、お住所や、お姉様の浦月さんの事を、い

ろいろと聞いたさうな。

「馬鹿々々しいわ、誰が塵の目のお世話なんかで嫁くものですか、私妹に、此後、必とそんな事に返事しちやいけないつてようく、さう云つて置きましたの、岡田さん、貴女もお妹さんにようつくさう仰有つてお丶き遊ばせよ…いくら下田女史の二代目をしやうたつて…ね。」

浦月さんの奇警な終の一句で、確に先生の心の奥はよめました。何でも根ほり葉掘り、透徹した根柢を認めねば止まぬ依田さん、流石、宮様でない丈はお氣がついたと見えて、

「法學士？」

理學士といはなかつたのが見付けものだつたよ、云はぬ計りの顔つきで、

「矢張り、銀行員か何かなんでせう？」

と、岡田さんがいふ。

お父様やお母様が、他所へゐらしつて、お土産のあすつこといふのはあるけれど、おむこ様の當つことは是如何に、と聞きたくなる。

「イ丶エ、イ丶エほら何誰でしたつけ、あ丶さう、御島さん等なのよ。」

と、どこまでも中田さんは落ちつき拂つたもの。

「えつ、海軍？」

浦月さんは飛び立つばかりに叫んだ、胸の轟き抑へ得ぬといつた調子。

「あ丶御島さん海軍でしたの、内田さんはね、陸軍なのよ、〇〇公使館の武官附なんだとかつてお話なの。」

「いやあだ、ぢや如何したつて、その巴里社交界に雄飛せん準備？　野心？　さうかも知れなくつてよ、どうせ日當五圓の貸馬車にだつて、乘つて横付けたい三越の店頭、といふあ丶した人だから…。」

浦月さんの胸の轟きはパッタリ止む。

「でも内田さん佛語がお出來になつて？　あのおん口元から…。」

と、徐々と村木さんが揮ひ始めた。

「そりやあ御流暢にきまつてる…でせうよ、あのお

ん口元ですもの。」

と、浦月さんも村木さんと同じやうな言をいふ。

實は、內田さんの口元が一寸妙な——貧窶といつた口付きなので。

些の缺點にてもあれかし、我いかでか暴露すべきと、八方から白眼まれてる內田さんこそいい面の皮だ。

折柄、廊下で扉を輕く叩た。

耳さとい依田さん、

「はあ何誰樣、御遠慮はご無用でございますよ。」



「お開け遊ばせ。」

と浦月さんが云ひ加す。

さと入つたのは、紫紺の袴に白リボンの鮮かな、時計の紐とすぐ分る佐々木さんでした。

十里も離れてゐる○○から、毎日汽車でお通ひなさる往き歸りに市內電車や歩くので四時間は費すとのこと。

冬——今頃、割杰りのある日なんか、もう學校を出る時に薄暗くつて、汽車から下りると女中が、停車場まで提灯を持つてお

迎ひに來でるんですつて……ハイカラな皮包みのヴイオリンを大抵の日に抱へてらつしやるんですよ、音樂の先生に、ヴイオリンを課外に敎へて戴くんです。時節柄いへば政友會といつた地位の人で、政府の家政科と、國民の選科との意志を始終どうかしてゐるんですが、とかく家政科と妥協しては選科の方へ、後足で砂をかけることが間々ありますの、緣は異なもので、中田さんとは大の仲好。

「あのう卒業式後に慈善市を開いては如何といふ議が起りましたのですが皆樣御贊成下さいますか。」

皆樣は、敵國からの交渉をうけるやうな態度で、誰か返事をするだらう位の考でゐる。

「慈善市と申しましても、手袋とか帯留とかさういふ物を造へて戴く時間さへ割愛なすつて下されば結構でございます、其他のことは總べて、、、あちらで致すさうですから、どうぞお否なら御用捨なく仰有て下さい。」

皆樣が何とも云はないので、佐々木さんは仕樣ことなしに靴の先で、ミシンの踏臺を動かしてゐる、針がとつてあるので音はしない、ふと山木さんのお休みに氣のついた佐々木さん、

「山木さんお休みね、如何なすつて？え中田さん。」

「いかゞですか、存じませんことよ。」

他の皆樣に氣を兼ねて、中田さんは、わざと他々しい扱ひをする。

あの出過ぎ者の内田さんに相違ないと直ちに心に浮んだ浦月さんは、

「内田さんぢやなくつて？」

と、思はず口走つた。

それと察した如才ない佐々木さんは、

「イヽエ何誰が云ひ出したといふ理由ではございませんのよ、そこはよく御承知遊ばして……皆樣何とか仰有つて頂だいな、お否ならお否、御贊成なら……。」

「佐々木さん。」

と、扉を一寸程あけて、すぐまた閉めた政府の委員か。漸く佳境に入らんとする慈善市の贊否は、その場は有耶無耶、佐々木さんの出て行つた後で、皆樣は忌まいましさうに顔を見合せた。



途上見聞記

千曲野

○本郷通の夕映

或る日の午後五時頃所は本郷赤門前の通り。時刻が時刻ですから、駒込邊に家を持つてゐる役人、若い男女の學生、車を勢よく走らす人、さては伊太利の詩人マリネットをして『銃口を出でし彈丸の如くはためき乍ら飛び行く自働車はサモスレエクの勝利の女神よりも美なり』と讃美せしめた自働車などの往來に、さしもに廣い道路も一方ならぬ雜沓を極めて居る中を行く時、ふと前を行く女學生の言葉が耳に入りました。

一人の女學生『昨日ね、兄樣が、僕など一高の生徒が町を歩くと、怎麼人間でも道を彼方から避けて行く柏葉の徽章の威力は大したもんだらう、…斯ういふんでせう、だから私言つてやつたわ、それは蠻殼で汗と垢とで臭いからだつて』

連の女學生『好かつたわね、汗と垢の臭氣、眞個にさうかも知れないことよ。』

二人はさも痛快さうに笑つてゆく。

街燈はぼやけた光を放つてゐます。

秋の夕空は、澄んで高い。

○芝公園の松籟

芝公園の松蔭にて、

貧しき母親『あゝ、暑い。…お前達休んで行かねえかい。』

大きい子『俺あ、もう暑くて〳〵、歩くのが厭になつちやッたあ。』

小さい子『腹が空いちやッた。何んか喰ひてえなあ、おつ母。』

母親「……」
大きい子「お前、一錢持つてるなあ。……兄やの一錢とお前のと、それからおつ母に一錢出して貰つて、お菜にする豆を買つて喰はねえか。」
小さい子「うん。おつ母いゝかけえ、豆を買つても、……。」
母親「何に言つてるんでえ。……おゝ、暑い、暑い。
二人の子「好いぢやねえか。なあ、おつ母。一錢與んろよ。」
母親「……」
世にはみじめな親子がございます。

秋の日比谷公園



〇電車內の新智識

朝割引電車に四ッ谷見附から乘りました。砲兵工廠通ひらしい男、士官學校や砲工學校へ行く軍人、牛込小石川麹町あたりの學校へ行く男女の學生で、空席もない程でした。

右側の腰掛けには海老茶袴の女學生が三人並んで居りました胸に徽章をつけてゐるから△△女學校の生徒なのでせう。

一人は小山內薫氏の「夢見草」といふ、三四年前に上梓された美文集を讀んで居りましたが、本村町あた

りへ來た時「貴姉、それなあに……鳥渡、拜見。」と他の一人が話しかけました。

「これ!?」斯う答へ乍らそれを渡すと、

「あゝ「こやま、ないくん」さんのね。」

○秋の紀尾井町

或日私が紀尾井町通りを赤坂見附の方へ歩いて居りますと、三人の子供を連れた三十位の品の好い奧樣が通られました。

奧樣は頻りと三人の子供達に訓して行かれます。

「あの、男さんでも誰れでも、書生部屋へなんぞ遊びに行くものぢやありませんよ。書生つて者はお父樣が御飯を喰べさせてお置きになるのですから、乞食みたいなものですものね。宜う御座いますか。書生なんぞと遊ぶと成長つてから乞食になつて了ひますよ。」

食客する人は氣の毒だと思ひました。

○葵橋のパラソル

外濠線の電車が葵橋で停つたとき、中形の派手な浴衣を着た二人の女學生らしい女が、私の隣の空席へ來ました。二人とも十八九でせう。一人は稍肥肉な方で、褪紅色の地に百合の花を織り出した夏帶を締め、他の方はパッとしたメリンスの花模樣の帶。お揃ひのうす淡黃色のパラソルを持つて、髮はいづれも束髮で二人は何か低聲で面白さうに熱心に語つてゐる。

山王下へ停車した時、新形の洋服を着た廿七八の色の淺黒い男が乘つて、女學生の向ひに腰を下しました。

褪紅色の帶の女は、それとなくその男を見てゐましたが、軈て「隨分ヴアングウね。」

斯うメリンスの帶の方へ低い聲で申しました。

「えゝ」と上眼で男を見て「さうだわね」とこれも低聲で言ひました。

この對話を聞いて、私はどんなに驚いたでせう。ヴアングウとは醜男子といふ女學生間の隱語なんですもの。白晝、公衆の中で女が男を批評するとは、あきれたものでございますね。

奥樣の品さだめ

濱千鳥

×

旦那樣は何處へ御勤めですか、目の細い一寸ハイカラな女中さんに聞いても存じませんとばかり、けれど察する處あまり多くの御收入もない樣ですね、よくわかるつて？。だつて御生活むきなんぞ隨分御經濟なんですもの、奥樣御顔立はよくはありませんけれど、七難かくす色白の上にお身だしなみがよくつて髮の毛一本お亂しにならず、薄化粧に頬紅さへさして居らつしやるんですもの、一寸御美しく見えますわ、髮？大抵はお髷ですけれど此頃は太輪の銀杏返しよ、たまには髱の澤山出た束髮にもなさいますの、御年齢！ そうね．二十八九か三十でしやうけれど一たい派手づくり、大きな渦卷の浴衣なぞ御召しになるんですからね．お二人の御子持ちとは見えませんよ、此奥樣勝氣で見え張り、御出ましの時は御宅に似合ない身なり遊ばすのよ、何時でしたか私が通り迄買物にと門に出た出合頭にお目にかゝつた時なんぞ、明石の單衣に鹽瀬の帶、まあ何處へ行らつしやるのかと思へば、半町もない歯醫者までゞすつて、ホ、、、どうも驚きましたわ、奥樣の御實家の方が御身代がいゝとか、始終奥樣は「此樣な處へ來るんぢやなかつた、もつといゝ處へ嫁かれたのに」と悔んで居らつしやるとか、誰かのかげ口で一寸‥‥それかあらぬか旦那樣と御談しの時なぞ少しも御優しいところはなく、切口上でパキ／＼と、聞く旦那樣も只フン／＼、嫁は臺所から貰へとはよく云つた言葉ですわね、御生國は何處ですか御言葉が變ですのよ。

×

旦那樣は或商店の支配人、此御近所で女中さんが御內儀さんと申上るのは此奥樣ばかり、御年齢は四十四五、何時も前髮の少さな丸髷で衿付の着物に腹合の帶

をひつかけ、粋な下町風ですの、その上やせぎすでいいお姿ですから、一寸見たばかりではどんなサバケた方かしらと思ひますけれど、實際は大進でごく〳〵野暮な方なのですよ、眞面目で質素な經濟家、讀書の趣味等と來たら皆無、毎日お取りになる二種の新聞にもお目をお通しなさらない位ですから何か申上ても、へエそうですか、そんな事がありましたか、等とすまして居らつしやる、イルミネーシヨンをイリフネシヨン、探海燈をてん海燈等と仰つては「やー母様可笑しいなあイリフネシヨンだつて見つともないや」と十三歳になる文雄様に笑はれるのは珍らしくない事、ですから私が十八世紀といふ尊稱を奉たのよ、口が惡いつて。これは私の性分よネ、けれど正直ないゝ方經濟はそりやお上手ですよ。

×

色は淺黑いけれど目鼻立の揃つたお美しい方、いつも癖のないお毛でキリツと束髪に遊ばして…ミツシヨンスクールの卒業生ですつて、熱心な信者ですのよ御年齢？御總領が八歳におなりですからね二十七八で居らつしやいましやう、二つ位お若く見えますよ、エー三人の御子持なか〳〵大變ですわ。

さすが明治の教育を御受けになつたゞけあつて快活なサバケた奥様、始めて逢つた人にでも十年の御なじみの樣に親しくなさいますの、いつぞや私が始めて伺つた時なぞ

「まあよく入らしつて下さいましたのね、どうぞ此方へ〳〵こんなに取ちらしまして…サアお敷き遊ばせ私も失禮いたします。きよや紅茶でも入れてね、私はもう此通りのガサツ者行儀がわるくて困りますの、失禮ですが何校の御卒業？アラ仰つたつていゝぢやありませんか、お生花は池の坊で居らつしやいますのサツパリしていゝお流義ですのね、私なんぞ駄目ですのよ、サア貴女澄さんお一つ召し上れな、當世の方なのに遠慮なぞ遊ばすものぢやありませんわネ…これでも今朝森永から取つたのですよ」と兎角人をそらしなさら

ない、御暇申上れば「私ね何誰でも入らしつて下さると異實に嬉しいんですの、その代り御歸しするのが大嫌い、ですから私宅へ入らしつたら少しはゆつくり遊ばして頂戴よ、ね、もう一時間位およろしいでしよう、又何かおしやべり致しませうよ」と、萬事が此通り、顔つきや手まねで色〱のお話しを面白くなさいますの、ですから此奥樣の御側に居ると三時間位夢の間に過ぎてしまひますわ、旦那樣は會社員。



×

くつきりと色白の丸顔、睫の長い二重まぶちの御目が又なく可愛らしくつて、モスリンの上品なお浴衣なぞお召しになりますと羨しい程お美しいのよ、いつも丸髷の束髮に銀の横ざし淡泊りと、此春旦那樣は帝大踏見を御卒業になつたばかりですつて、

の秀才學士で居らつしやいますの、御夫婦ぎりでお老人はなく二人の下女をお使ひになつて樂しくお暮しですわ、風涼しい此頃の夜お庭に向つた十疊の御座敷で・旦那様の尺八に奥様のお琴睦じく合奏せて居らつしやるのよ、ハアお歸りですの、澄さんお暇でしたら入らつしやいなと」庭境の枝折戸から奥様が聲をかけて下さるのを幸參上つては合奏せて頂きます、眞實に妾の様に優しい奥様、スヰートホーム!!何の羨しかろつて？　そりや私だつて滿更ね…けれどいくら羨んだつて及はぬ鯉の瀧のぼり…儚なき空想は描くべからず…アラ、

×

御夫婦とも洋行なすつたゞけあつて何から何まで西洋風、毎月三四百圓はかゝるさうですよ、旦那様は或商館の支配人でつぷり肥えた立派な方、奥様はね、ミツションスクールの卒業生でスラリと丈の高い方、髪はいつもS髷ですの、男二人女二人のいゝ御子持ち皆奥様が御自身に染めて仕立て御着になるんですからね、隨分大變ですね、エー洋服よ、皆さま眞實に御可愛らしいのよ、御夫婦とも草花が大お好き廣御庭に一ぱい丹精なすつてゞすの、毎土曜には親しい方々を御招きになつて談話會をなさいますが、此時だけは奥様も御洋裝でね、きつと讃美歌を御うたひになりますのよ、實にいゝ御聲よ、尤も在校中は獨唱で有名だつたのですからね、さすが花の都の巴里で修業なすつたゞけに活潑で人扱ひは馴れたもの、却々の敏腕家ですからね、奥様の勢力はそりや大したものですわ、ホヽ、ホこれも西洋風なんでせうけれど、オホヽヽヽヽ、又しても惡口ばつかりもういゝ加減にしましようね、まあ！私のマダム振りは如何かと仰るの？ホヽヽヽいづれ御目にかけてよ、其内に…御笑ひ遊ばしてはいやですよ。

女（なのこ）

太陽 第拾六卷第拾五號 增刊

日本民族の膨脹

△日本民族は膨脹して休まず。開國進取の國是は着々充實しつゝあり、形體に於ても實質に於ても。

△南に臺灣に伸び、北に樺太に伸び、今や韓半島愈よ我領土となり、島帝國は躍進して大陸の一角に確實なる地歩を占めたり。

△大陸膨脹は日本民族の新生面也。然れども偶然の新事實にあらず、舊事實の復活也。侵略に非らず、其膨脹は公明にして正大なり。

△此民族は亞細亞の平和、文明の指導者たる必然的の使命を帶び、太平洋圈の勇壯にして仁俠なる主人を以て自任せり。而かも時には黃禍の巨魁と見做され、時には白禍の陋劣なる手先きと見做さる。

△不幸にして此膨脹民族の眞相は、未だ十分諒解せられず。外人は勿論、日本人亦未だ不思議にも自覺するもの多からざる也。

△世界に於ける我民族膨脹の分布地理的現狀は如何、其政治的、經濟的勢力は如何、新舊の殖民地は如何にして經營せられ、現狀は果して何の狀ぞ。新領土、新勢力圈內に於けるの公私の實生活は果して何の狀ぞ。

△間斷なく膨脹する民族は、間斷なき新負擔、新責任を負荷せざるべからず。我民族の現狀は果して能く此負荷に堪ふるや。殖民としての我民族の能力、眞價は如何。之に對する政策は如何。

△凡そ此等の疑問を各方面より研究し解釋せんとするが本卷の所期たり。惟ふに現代我國民に取り、此以上の適切なる、趣味ある、而して活きたる研究題目他に之あるを知らざれば也。

十一月十日發行

正價金三十錢
郵稅(本號に限)四錢
洋裝四六判二倍大
紙數二百五十六頁
口繪寫眞版豐富

東京日本橋本町三丁目 博文館 振替口座東京二・四番

女子大學講義

日本女子大學校內
櫻楓會編輯

入會の絕好機

新學期開講

會費一ヶ月
金五拾錢
二ヶ年修了

▽月刊雜誌「家庭」と共に毎號、雲上高貴に奉獻の光榮を有す△

最低の費用を以て最も短期間に秩序的に女子處世上切要なる一般の學藝を修得せんとする婦女は本講義に據れ

會則附內容見本申越次第送呈

科目及講師

△實踐倫理　女子大學校長　成瀨仁藏
△教育學　慶應義塾幹事　石田新太郎
△心理學　文學博士　福來友吉
△兒童研究　東洋大學講師　高島平三郎
△家庭物理　高等師範教授　後藤牧太
△生物學　理學博士　渡瀨庄三郎
△衛生學　醫學博士　三宅秀
△生理學　醫學博士　大澤謙二

△法制經濟　宮中顧問官　奥田義人
△社會學　法學博士　浮田和民
△文學研究　文學士　鹽井雨江
△童話傳說　文學博士　芳賀矢一
△和歌作法　三宅龍子
△其他家事、料理、裁縫、園藝、自然現象研究、英文學等科目として諸名家の有益なる講演隨時掲載す

何時入會しても講義初號より配本す

▽會員には清新にして趣味豐富なる月刊雜誌「家庭」無代配本△

發行所　東京小石川區久堅町一〇八　精美堂　電話番町九三二　振替口座東京二八三八

文章世界　第五巻第拾四號

十一月一日發行

和漢文學の新研究

全一冊洋裝菊判
紙數二百四十頁
口繪寫眞版豐富
正價　廿錢
郵稅　二錢

本誌は日本文學と漢文學との重なるものに就いて、現代知名の文學者諸氏の爲せる前人未發の新見解、新解釋を收め、以て、古典の價値を新たに天下の讀者諸君に語らんとす。書目凡そ三十、執筆者は、島崎藤村、岩野泡鳴、相馬御風、窪田空穂、楠山正雄、水野葉舟、吉江孤雁、會津八一、正宗白鳥、西村渚山、內藤鳴雪、笹川臨風、久保天隨、田山花袋、其の他諸氏。

右の研究記事の外揭載要目左の如し。

誌友の應募小品十數篇。
諸家の小品、長詩。
數十頁に涉る新書簡文話。
文壇の現勢を說ける長論文。



博文館

東京日本橋本町三丁目

振替口座東京二四〇番


第五巻第十五號
菊判紙數百廿八頁
正價拾錢　郵税一錢
少女世界
（口繪）
◎おし花……柴崎美方
◎運動すゝ……岡野榮
○寫眞版四ページ
（記事）
●お伽小説 鶯塚……巖谷小波
●天皇陛下の御製……佐々木信綱
●少女訓話 かげ口……小林第三女學校長
●手帳の中より……沼田笠峰
●お留守番……黒田湖山
●雀の學問……與謝野晶子
●少女小説……松井ゆり子
●朝鮮史談……武居芳成
●少女劇 花たば……あふひ
●水戸少女大會……記者
●四國地方少女講話會
外に面白くて有益な記事が澤山あります
東京 本町
博文館
十一月一日發行

幼年畫報 第五巻第十五號 増刊 十一月十五日發行

カア〳〵烏



小波作 春汀畫

正價拾錢 郵税五厘

極彩色石版十六頁
二色刷活版十六頁
寫眞版四頁



カア〳〵烏カア烏。クロ〳〵烏クロ烏。お宮の森でもカア〳〵烏。お寺の屋根でもカア〳〵烏。日の出ぬ内からカア〳〵烏。日暮の頃までカア〳〵烏。アレ〳〵カア〳〵烏がなくよ。さア〳〵起きよと烏がなくよ。坊ちやま起きませ烏が鳴くに。今朝來た畫報のカア〳〵烏。はんとに樂しいカア〳〵烏。





東京 博文館 發行

前橋の共進會

千喜羅

坂東太郎の大河が悠然と市の西を流れて居ます、赤城山は東北に巍然と、眼ひのまゝに裾野を廣げて居ります、其裾野遙に足尾の連山が見えます、少し西に寄つて聳えて居りますのが榛名山です此の中腹には有名な伊香保温泉が有りまして、市から鐵道馬車が澁川と云ふ町迄往復して居ります、澁川町から二里で温泉場です、暑中になりますと貴顯紳士や、令夫人令孃方が避暑に見ゆるので、大變繁盛致します、彼の不如歸の浪子さんの滯在せられたと云ふ旅館の千明樓は今も相變らず盛で有ります。

榛名の山脈より西南に妙義の奇拔な山影が夕映の空に鮮に屹立して居る樣などは全で油繪の樣です。

榛名と妙義の山の間遙に丸い山が黑煙を噴いて居るのが見えます、是れが有名な淺間山です、此の淺間山の噴煙の甚だしい時などは當市迄灰の降る事が有ります。

市は東西南北共一里餘で、人口四萬餘、市の中央を廣瀨川と云ふ川が西から東に向つて流れて居ります、其川水を引いたのが市中到る處に小流になつて居りますから、泥溜りの樣な臭氣などは決して致しませぬ。自慢の樣ですが實に清潔な土地です。

群馬縣廳は舊城址に置かれて有りますから、縣廳は利根川堤に沿ふて有るので、年々洪水の爲め堤が崩れて危險だと云ふので、河中に蛇籠を積んで堤を築き崩を除く樣にして有ります、老人などの話を聞て見ますと、三四十年前迄は今の縣廳の後の川原は[illegible]はしい松原で有つて、狐などは晝狩に行つたとの事です、縣廳の前通りに物品陳列所が有ります、直に桐生足利伊勢崎などの織物が飾られて有升、縣廳の前を少し北に行きますと、市の公園地です、其公園は矢張利根川堤に沿ふて有るのです、堤には櫻の大木が並木をなし、かつ公園一體に澤山櫻が植えつけて有りますから、花の時には隨分見ものです。堤に佇んで赤城榛名妙義の山影を仰ぎ、利根の大河を眼下にして際涯なき平原を見渡しての眺めは實に雄大です。

公園地内に市の共有で臨江閣と名づける立派な建物が有ります、昨年近衛師團演習の行はれた時、畏れ多くも皇太子殿下の行在所になつたので、もれ承るに殿下にも眺望よきこの臨江閣は非常に御意に召して、色々難有い御言葉さへ賜はつたとの事です。

此市は海にも遠く山も遠いので、地勢上非常に風が吹きます、上州の空風と申しまして有名なものです、自然の風景の力か感化するのでせう、人氣は大さつぱで誠に男らしく、こせ〳〵と拗れた嫌味らしい處は大體に少ない樣です。隨つて婦人の氣風も優美で、温順と云ふ樣な風には乏しい樣に思はれます、此の地の俚諺に上州の空風に嬶天下と申しますが、或は其言葉が當つて居りはせぬかと思はるゝのです、然

し其も大いに譯が有るのです、此地は生絲業の盛な地ですから、お師さん達が朝未明より夜にかけて、座繰絲を取るのです、景氣のよい時は一日の賃金が七十錢位になるさうです、なまなかの男子はとてもお師さん達の働きに追ひつかぬとの事ですから、夫れや是れやで自然婦人の勢力が有るのでせう。

夫れに今一つ上州の長脇差と申しまして、國定忠次など申す俠客が出た位な土地柄ですから、今以て其弊風が殘つて居つて、其徒が市内にも有るさうです、舊暦四月の八日赤城山神社の例祭には、同山で大賭博が行はるゝ習はしだとて、大雨を侵して博徒狩の大捕物が行なはれた樣な有樣で是れは如何にひいき目でも好い風習とは申されませぬ、實に心苦しく思はれます。

此の市は元厩橋と申したさうですが、何時となく前橋と云ひなす樣になつたさうです、此の市の民は過半以上越後から三國峠を越して、清水峠を越えて出稼に來た人等が其まゝ永住する樣になつたのださうですが、矢張自然の地勢が感化するのでせう、越後氣風はなく皆關東否上州氣質の俠客肌の人が大部分を占めて居る樣です、此の地は人氣は荒いが物事の判りが大そう好いとの事です、此地で空威張りでも致そうものならお仕舞です、おだやかに相談すれば何事でも存外相談相手になつて呉れ、何となく締りとした所が有つて頼もしい處が有ります。

物價は他市街に比して餘り高くは無い樣です、家賃も八疊二間六疊二疊四疊に玄關勝手位で七八圓位です、此の位の家になりますと大概庭の二三坪はついて居ります、青物などは至極廉價です、魚類は稀に遠いので水戸や東京方面から參りますが、隨分高價で代價の割に美味く有りませぬ、肉類は豚肉が一斤十八九錢より二十錢位、牛肉が三十七八錢より四十錢位です、日常生活は蠶業に從つて纏まつた金が取れる故か餘程進んで居る樣です。

市の生命は繭絲取引です、先づ停車場からずつと本町にかゝりますと軒を並べて格子戸の家許りで、何も店には賣物は置いてない靜肅な町です、是れが四九の市日になりますと、皆格子戸を開けて繭糸賣買で活氣が滿ちて人の山をなすのです、此の本町通りでは上等の繭糸の取引を致します、市の北端なる才川では玉繭玉絲の市場が有つて、矢張四九の市日には本町同樣大變な人出です、田舍から風呂敷包を背負つて出て來るお師さん達の、商の駈け引をするのを見て居ると實に上手なものです、馴れたものです、秩父や伊勢崎地方への取引は此の才川の市場でするのです、才川町、細ケ澤町、隨分長い町ですが、何れも商賣をしてない家はないと云ふてもよいのです、他の商をする家はほんの數へる程です、始めて此の地に來た時は、實際驚きました、而して市中少し淋しい町に這入りますと、必ず座繰機械の音がして居ります、市の一毛と云ふ處に交水社と云ふ大きな社が有りまして、日々其取つた絲を集めて仕上げをして、横濱に出すのです、座繰絲の本場は即ち此の前橋市です。

物産としては繭絲より外是れと申す物もないです、縣の産物としては夫れは他に色々有ますが、此の市としては先右の繭絲位です、利根川の香魚は大いに都人士にも誇つて居るのです、畏れ多くも陛下の御膳の料にも上るのだそうで、特に御生洲など北橘村の木曾神社の眞清水湧く清い池に嚴かに柵が廻らして有つて、夫れを守りの役人さへ御差遣しになる位ですから、懸直なし結構なものです然し價の高いにも驚きます、一尾が三十錢から四十錢位致します。　風俗は何しろ蠶業生絲國ですから派手な方で、先づ全國を通じて一等の部に入るでせう、どんな在方の者でも五七圓位な傘をさして、絲織が漲くて銘仙位なのに變り色の襟をつけたのを着て、桐生産の博多の帯位は必ず結んで居ります、一寸氣の利いた婦人になりますと、寶石入りの指輪の二本や三本ははめて居ます、本年は一府十四縣の聯合共進會が此市に開かれましたので二萬餘坪の敷地には立派な建物が立ち、觀覽客は目下毎日一萬以上といふ事で、關東平野の秋の風物を占めて、なかなかの賑はひです。一寸景況の一斑を記しますと、



◎會場

會場は三所に分れて居ります第一會場はその主で、清町にあります、二萬餘坪の地に農業、蠶絲、林業、鑛業、水産、染織等の館に分れて居ります、第二會場は參考館、第三會場は馬匹の共進會です、兎に角關東東北一府十四縣の聯合共進會で頗る大規模のものです。

◎餘興場

共進會々場内には夜間のイルミネーション華壇の秋草丹塗の臺灣館を始めとして妙義山の奇巖を擬したる噴水などあり、又餘興としては鋼索鐵道、不思議館、電氣館、晩馬、活動寫眞等いろ〳〵あります。

衛生顧問

糸左近

注意＝「にきび」「そばかす」の療法、月經に關する事、肥ゆる法、痩せる法、毛生藥の調合法、丈を高くする法、若白髪の事などは今まで何十回答へたか數知れぬことなれば、今回は之を省きました。次に或る醫師の住所や賣藥の効能に關した問は御免を蒙ります。他人の住所番地を一々記憶せず、又賣藥は大抵左程の効も無いもので、之を誌上に素破拔くことは出來難いからです。次に郵券封入或は往復葉書を以て直接に答辯を御求めあつても應ずることができません。前以て御斷り申しておきます。

（肋間神經痛の原因療法）■私は昨年の冬から胸より肋にかけて痛みを發し、肋膜炎では無いかと思ひ、診察を受け候處、肋間神經痛だとの事にて、爾來色々治療致し候へ共今に全快致さず候が、元來本病は如何なる原因より起るものに候や、又其の療法を御教へ下され度し（朝鮮にて四國女）

■胃病、子宮病、腎病などの氣味ある場合、或は感冒、或は骨盤の病、或は外傷、或は心臓病などから誘ふものであるが、中には何の原因より來たのか分らぬものもある療治は迚も素人の出來るものでは無いが、御參考までに一寸申せば第一に原因を除くやうにし、局處には温泉療法が大に効がある。劇症には芥子泥を塗り或は水で冷し、或は按摩法を施されねばならぬ。又、コロ・ホルムやエーテルを塗る方法もある内用藥としてはフエナセチンやアセトアニリードなどであるが、之は劇藥であるから醫師の監督を受けなければなりませぬ。

（肺結核と飲酒）■私の夫三十八歳は一昨年の暮頃より肺結核に罹り、病勢は進んだり退いたりしてゐますが、甲醫は好な酒なら飲んだ方が宜いと言はれ、乙醫は一滴でも口にしてはならぬと申され、素人の私等には如何取計つて宜しきか困り居候、何卒先生の御意見を伺つて決したく候、如何に候や。（羽前の湯殿女）

■小生は甲醫に賛成致します。元來肺結核に罹ると精神の興奮するもので、為に寝床に入つてからも種々様々の事を考へ、容易に眠られぬものである。然るに酒を適度に用ふると、雑念を散じ、又早く眠りに就き、而も熟睡し易いものだ。古諺に「健全なる身體に健全なる精神宿る」とあるけれど、肺結核は此の例外で、不健全なる身體に健全なる精神宿り、結核者は大抵意志が強くなり、勉強などしてはならぬと勸めても却々容易に止めぬものである。然るに酒を飲むと其の意志が弱くなり、悠然寝ころんで暮す様になる。之れが本病者の最も善い攝生となるのである。

（破傷風は治らぬものか）■私の姉は産後破傷風に罹り、哀れ三十二歳を一期として黄泉の客と相成り申候、所が私も亦今や姙娠中、されば産後に若しも本病に侵されば

せぬかと取越苦勞に堪へず候、一體破傷風は不治の病に候や、若し然らずば如何なる手當を致す可きものに候や伺ひ度候。(飛驒の一位局)

■分娩の節は熟練なる產婆を雇ひ、防腐消潔を勵行せしむれば決して破傷風に罹る憂はありませぬ。若しそれでも罹つた場合には大至急に名醫を招き、血清療法を受くれば殆んど百發百中全治するものである。然れども時期遲るれば効が無い、返す〴〵も一刻を猶豫してはなりませぬ。

乳線炎と哺乳　■今年六月男兒分娩し、間も無く乳腺炎に罹り、切開せねば全治せずと申されしも、恐ろしき儘に唯塗布藥のみを用ゐ居り候が、それでも神の御助にて今は殆んど平常に復し候、これでも哺乳は母子に害有るものに候や伺ひ度。(四谷の愛子持女)

■乳腺炎の病氣最中でも疼痛の甚しからぬ者は哺乳せしめて差支無しと說く醫師もある位、況んや平常に復したる今日に於ては何等の差支無し。但し乳嘴及び其の周圍を清潔にして哺乳せしむ可きは言ふまでも無い。

烟草中毒の治療法　■夫二十八歳は時々烟草の爲に眩暈卒倒することがあります、斯る時は如何に處置す可きものに候や。(濱洲にて好煙者妻)

■先づ微温湯を飲ましめ、それでも治らぬ時はタンニン酸半瓦程を水半合程に溶し、之に砂糖を混ぜて數回に分服するのであるが、今一層の妙法は烟草を斷然手に取らぬのである。又、漸減療法も多少の効はあるが、兎に角慢性中毒になつては容易に治らない。

千里眼に就いて　■此頃新聞紙上等にて熊本の千里眼女千鶴子が不思議なる透視力を有せらるゝ由、私も其人の如くになつて見たう御座いますが、練習の結果は何人にも其力を得らるゝものに候や生理上より御說明下され度。(芝區の懷敎女)

■小生は之に就いての研究が無いから深遠な說明は出來ませぬ。併し小生丈の考を述べますと、人間には嗅感、味感、視感、聽感、觸感以外に今一つ透視的の感覺があるものなれど、此の感覺は最も發達し難いもので普通人には殆んど無いかの如くに見ゆる。然れど練習の結果は何人も發達し、遂に千鶴子の如く、否其れ以上にも發達するものに相違無い。都て感覺は練習に依て大に發達し、盲者が觸感で色を識別するに至ることは何人も知つてゐる事實なれば、透視的の感覺が果して人間に在る以上は、練習して發達せぬ道理は決して無い。然れど此の感覺に限らず、他の感覺でも一時に總て働かしめると何れも强い感覺が起らぬ。例へば何物かを見て視感を働かしめてゐる場合に又何物かの音が聞えて聽感を働かしむれば、視感も聽感も共に强く働かない。千里眼女千鶴子も透視をなす場合には一室に獨坐瞑目して可成他の五感を働かしめぬやうにするを見ても證據立てられるでせう。たゞ千鶴子も人なり我も人なり、千鶴子の爲し能ふ事は我に爲し能はぬ事はないと思ふ。

偏頭痛の原因療法　■私は今春より時々左側の頭痛が甚しく、療治を受くれば其時は止みましても、又日ならずして痛み、或は又時には療治を受けずに止むこともあります、

醫士は之を偏頭痛病だと申されますが、元來本病は如何なる原因より起るものでせうか、又其の根治法を敎へ給はり度。(肥後の困り女)

■原因は身心の過勞、或は胃病、或は月經の故障等である。療法は第一に其の原因を除くやうにするが肝要である。原因を除かずして如何に藥用しても何の効も有りません。唯發作時には頭部を冷し、或は薄荷を塗り、或はエーテルを點滴する位の療治は素人でも出來るけれど、内服藥等に至つては醫師の診察を待たねばなりません。

常習便秘の攝生法　■母四十七歳は常に便秘勝にて四五日目に少量の便通ある位に候が如何に攝生したらば普通人の如くに一日一回の便通あるやうになりませうか。(若狭の親愛女)

■便秘の原因となる可き事柄即ち不運動、心配事を避け、他の病有らば眞先に治療し、食物は果物蔬菜類及び澱粉を從來よりも多く食し其の代り肉食を減じ、規律ある運動法を實行し、腹部はフランネルを以て温包し、時々其の腹部を按摩する事が甚だ効がある。然るに右の如く實行せずして唯便通藥を用ふるのは却て腹を傷める基となります。

グラウコームとは如何　■母五十八歳が二三年前より眼力段々衰へ、時には左程で無いことも有る所から、色々治療を受くれども、其の効無く、今年六月大學病院の診察を受け、病氣に就いての質問致し候へども、如何にも御役所風にて何事も御答へ無之、唯グラウコームであるとの仰せ、グラウコームとは我國で何と譯し居り候や、又不治の病に候や、及び攝生法や點眼藥などを敎へ下され度。(小石川區の心細き女)

■グラウコームを綠内障と譯します。可成早く手術をすれば全治することもあれど、多くは一生視力が復舊せずして終るか、或は失明することもある。攝生法としては暗室に靜に臥ておて便通を整へるやう注意せねばなりません。點眼藥は色々有るけれど、素人療治をすると飛でも無い間違を來すことあれば、御敎へ申す譯には參りませぬ。

船醉の豫防及治法　■私は渡船に乘りても直に醉ひまして、其の困しさは何とも斯とも申されませぬ、何卒此の豫防法及び療法を御示敎下され度。朝鮮に行かねばならぬ女)

■鞦韆の如き運動法や遊泳術などを稽古しておき、乘船の前日位よりは可成流動性の食物を避けて濃稠物を用ふるやうにし、(濃稠物とは水分の少き食物の義)愈々乘船したら甲板の上か又は船の中心に位置を占め、鼻の周圍に麝香の如き芳香を塗つて船の臭を紛らし、且つ酒を少し飲んでるが宜い。それでも尚醉ふときは炭酸水でも飲んでるのであるが、重いのになると醫師の手を煩はさねばなりません。

耳垢を除く法　■八歳の男兒は如何なる譯にや他の兒よりも耳垢が多く溜り、それが爲に耳が遠くなつて小さな聲では中々聞えませぬが、鉗子の耳で垢を除つて遣れば殆んど普通に聞えます、何で斯う溜るのでせうか、又垢を除るには如何致したら耳を傷めずに能く除れますか、御敎へ下され度。(伊豆の心配女)

■何か耳道に故障が有るかも知れませぬから專門醫に一度診察を乞はれよ。若し何等の故障も無つたら唯垢を除きさへずればそれで宜い。併し管で除くのは耳中を傷める憂があるからスポイトに微温湯を含ませ之にて洗はれよ。大抵垢は除けるものである。

夜盲症に八目鰻肝

■鳥目即ち夕暮より見えぬやうになる眼病に、八目鰻の肝を生で食すれば甚だ効があると俗に申しますが果して効有りませうか。(大阪の男愛讀生)

■然り、効がある。八目鰻に限らず鷄の肝臓でも差支無い。肴肝油を服めば一層効がある。

鬱憂と娯樂

■弟二十二歳は某學校の試驗に落第し、剰へ許嫁の婦人が約束に背いて他に嫁したる以來、鬱々として樂しまず、時には自殺を企つることさへ有之候て、藥用も致し候へ共更に効無く、或人は遊蕩でもさせて大いに娯樂を與へたらば宜しからんと申候が、果して斯る野卑な療法より外に道無きものに候や(故家思ひ女)

■素人の方は遊蕩的の娯樂を以て鬱憂病を治されるものと思はれるけれど、之は大なる誤解で、却て病勢を重くし、取り返しの出來ぬことがある。可成は相當なる病院に入院せしめるが最上の策なれど、然う出來ぬ事情有る場合には、靜閑なる處に心身を安靜ならしめ、榮養の食餌を與へ、高尚なる慰藉を以て精神を樂しましめ、精神病に經驗ある醫師の診察を受けられたいものである。

ヂアスターゼと鹽酸

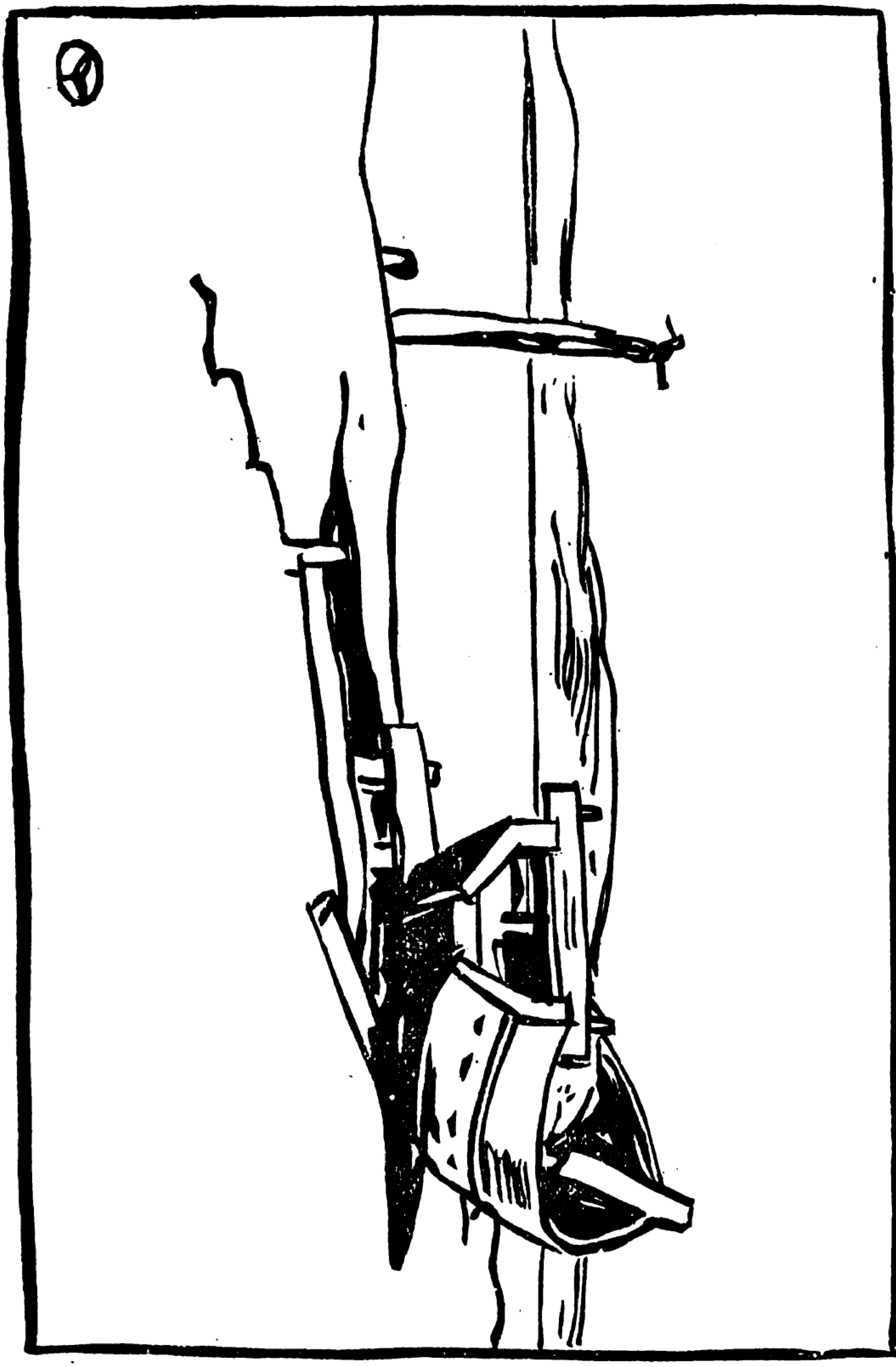
■私事胃弱にて或る醫師に診察を受けたれば、其の處分に「含糖ペプシン三、〇ヂアスターゼ〇、六」右分三包一日三回食後一包宛と有之、其後自分で右二藥を買ひ求め、自分で調合し、食後々々に服用致し居り候處、學校の生理科受持先生の申さるゝには、ヂアスターゼは酸類に逢ふと其の効を無にす、然るに胃液中には鹽酸が分泌するから何の役にも立たぬ云々と、併し斯の先生の申さるゝ通りならば醫師が之を用ひらるゝ道理無き筈、就ては先生の御説明を承り度。(某高女の疑問女)

■ヂアスターゼが酸類に會へば其の効を無にするとの説は御尤なれど、ヂアスターゼを食後直ちに服用すると、胃液中の鹽酸が働かぬ中にヂアスターゼの方が先に其の効力を働かすから、矢張植物性の食物を消化せしむる藥力を奏するものである。去りながら斯る消化藥を常に用ゐてゐると、それが習慣となり、遂に藥力を借られば食物が消化せぬやうになる。故に攝生を嚴守して胃を強固にする工夫が肝要である。

イヒチオールの効能及用量

■イヒチオールは皮膚病に効ありとの事果して眞實に候や、又皮膚病中の何々に効能ありや、及其の用量等を詳しく御示教を乞ふ。(大阪の疑問女)

■消炎劑及び表皮再生劑の目的を以て表皮糜爛、火傷、凍瘡、濕疹、色々のかぶれ、癩病、皮膚瘙痒、赤鼻、脱毛などに外用し、其外神經痛、僂麻質斯、痛風、子宮内膜炎、淋疾等にも外用す。用量は皮膚病にはラノリンと混じ十％位の割合で用ゐ、子宮内膜炎などには五％即ち倔里設林と混じて綿球として用ふ。併し素人の方は輕い皮膚病に用ゐ試みるは宜いとしても重い皮膚病や子宮病等には手前療治をせぬが安全の策である。



小春

品性の修養と衣服の趣味

香谿女史

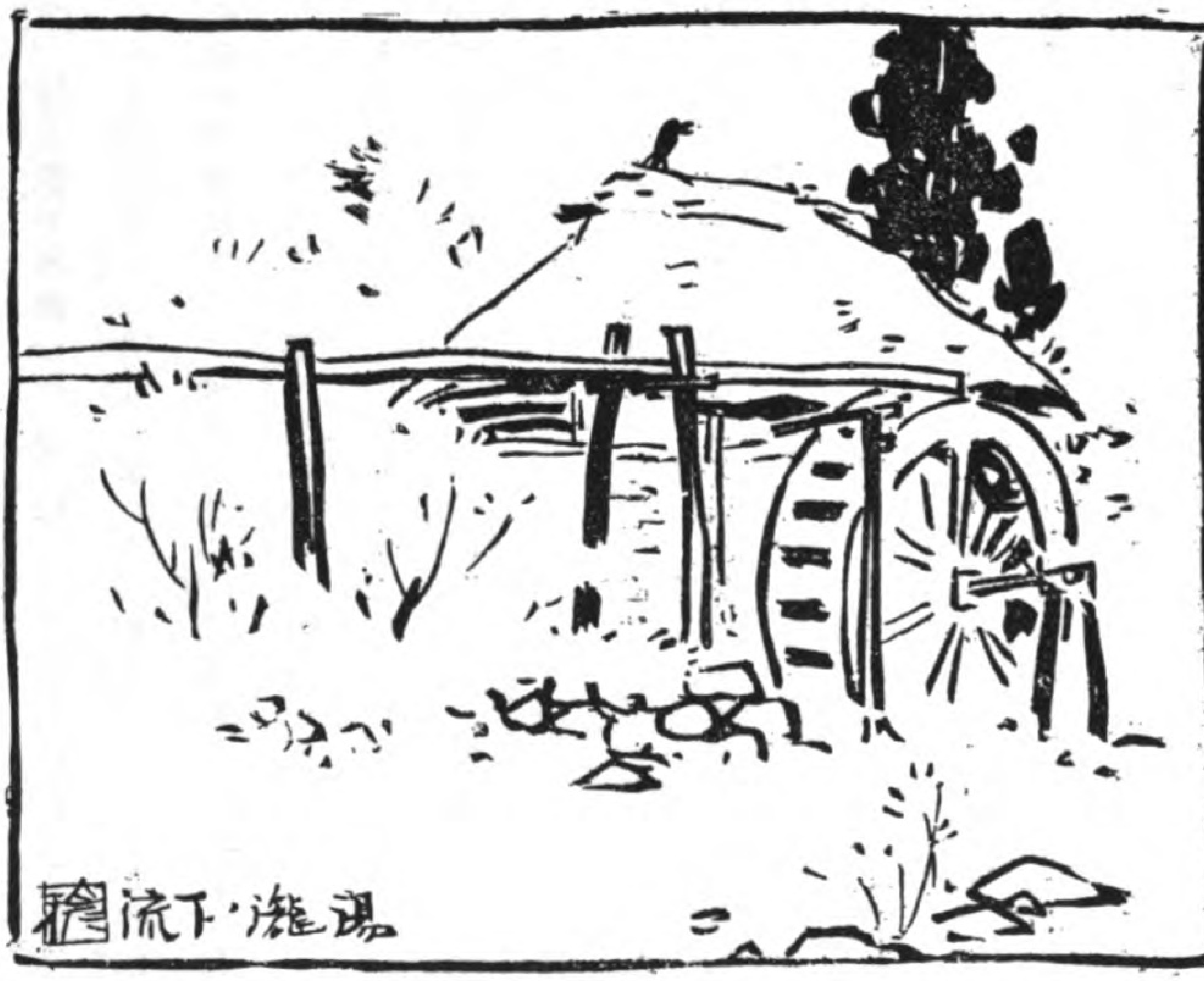
▲道徳美と謎模様

日光の廟を拝見した節ではお腹が一ぱいになつて肩が張るやうな氣がいたします。何處も此所も至れり盡せりの結構は息をつく隙がございません。それで十分といふとはよくないとあつて、逆柱を陽明門にわざと立てあるのだと申しますが、服裝についても私どもは頭から爪先まで五分の隙のないと申ことを理想といたして居るのではございません。良く取合せてある品物の中に粗末な物を旨く用ゐてあるのは中流生活に望ましいことゝ存じます。底至りの裏小袖式より却つて精神的の難有味を感ずるものでございまして先づ道徳美とでも申すのでせう。又同じく精神にうつたへて美を感ずるのでも謎模様に謎のやうな意匠を凝したほど詰らぬ者はあるまいと思ひます。それがために全體の調子が美しくなる次第ではなし、大模様なら又面白い處も出來ませうが、目を散て頭を捻らなければ謎の解けないやうな意匠を妙に遠慮して江戸褄なぞに附けたのは、こせついて嫌な感じがいたします。花柳社會の婦人がひいき筋の紋散しを見え隠れに附けるのは必要あつての上でせうが、彼の華手がき（土佐畫に文字をはめたもの）などは頭腦の説明が要り過て割合に引立ません。その他歌の意を現はすなぞもほんの或場合だけは面白味を感じますが、衣服には人間の大きく而して美しく見える工夫をいたしたう存じます。又世に澁い好みと云ふ方の側がございます、これは何も彼も見飽た中年以後寧ろ老年の御方々が身も心も裝飾の點には執着のない解脱した心理の顯昭でございまして、千の

利久居士がつとめて和色（茶色）を衣服に用ゐたと申のもその邊のことだと申ことでございます。これを生半かな若い者などが眞似をいたしますと所謂何處かに生臭い處が出ます。而して心と一致いたしませんから何か人の目に障りましで例の無邪氣でない我慢したやうな骨の折れた服裝になります。

▲ふき

雲の上方の御召物や（十二一重などの類）昔の御殿姿はよく釣合の取れた高尚な風俗でございますけれども、もう過去の美術として見るより外致方がございますまい。吾々の今用ゐて居ります物もそれと同樣で室内閉居の時代から少しも變化して居りません。否それよりも降つた點が多うございます。昔は被衣、角帽、袿衣端折は外出の用意として今よりも注意してあります。普通の女の道中姿を見れば浴衣を外套にして手拭を帽子にして居ります。今は頭部はいかなる場合も室内に在と同樣切一重のせません。外套も毛織物の裏付で、中部のくゝりが在りませんから重量が肩へのみかかり、浴衣の外套に劣ること數等でございます。かやうに威用意の點が昔より劣つて居ります。丁度煤掃の時は一寸の間物が收まらないのと同樣で、維新の一變調を天下の煤掃と見ますと、禮樂風俗等の上に外し離しになつたまゝ忘れられて了つたやうな處もございます。何かと不足の出るのも當然でございませう。唯この頭裾ふきの細くなつたのは大昔に歸つて良いことゝ思ひます。太いふきは近古僅かに流行したものゝやうで、藤原時代から師信春章などの畫に至るまでも未だ裏は出て居りません。ふきが見えなければ從つて切地も立派なものを付けぬやうになりませう。もう領國時代のやうに金満家が自分に制限されてお金のつかひ道に困るといふこともありませんし、良い絹絲はいく



（鹽原十景の内）

らあつても輪出が出來ますから裾廻しの方は我慢をいたしたいと存じます。併し結構な表の地や染が痛むやうなものを附ては却つて不經濟ですから先づ甲斐絹とか平絹位が宜しうございませう?。羽二重縮緬をつけるのは特別の場合だけにして、一體和服の缺點と申のは一番この裾の處で椅子に腰をかけた時は殊に形が出來ませぬ。一寸動いても不美術的に崩れて困ります。近頃スカートのやうな腰卷が出來ましたが工合は如何でせうか。

▲惜しい伊達の長襦袢

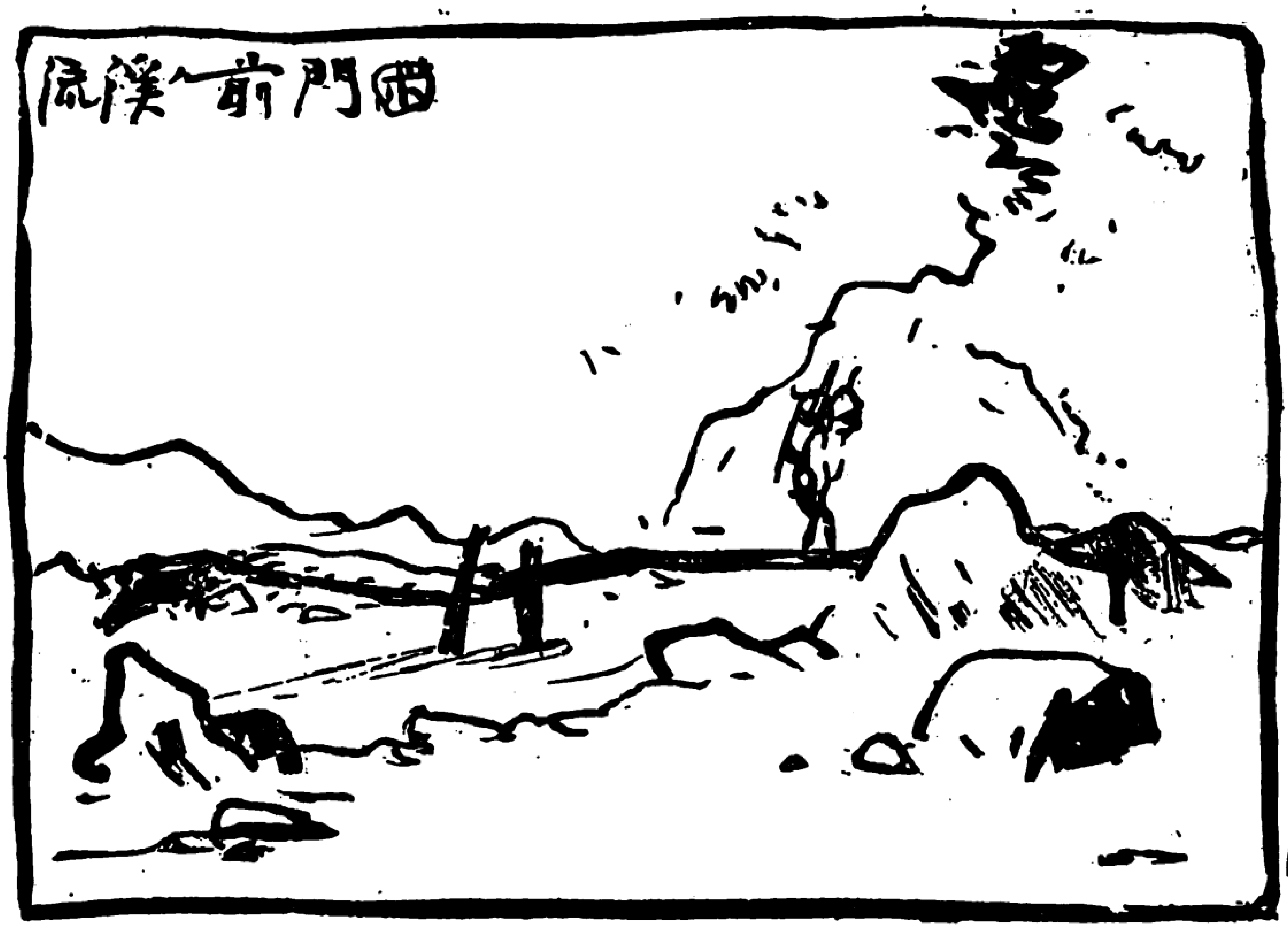
お話が遠廻りですが、先日仲働の目見えに來た女が甲斐絹の傘をさし、軟らかい着物を裾長に着て天鵞絨の空氣草履を履きまして撒水の道路をピタ〳〵と惜氣もなく歩いて歸る姿を私が見て居りました。田舎出の者なぞは東京の風俗を見間違へてこんな眞似をす

るのでございませう。又は誰も同じ人間だから精力次第、運次第で奥様お嬢様位のことなら己れにも出來やうと云ふ平等な方面にばかり心が上り、人々の果報の異つて生れて居る現在の身の程の區別を忘れきつたなりふりであると熟々氣の毒に思ひました。

その裾を土に引くのが勿體なくはないであらうか、如何に電車があればとて東京の往來は一足あるけば灰土が跡からお供をして居ります。私共がよその家へ上れば郡内の座蒲團、コブランの敷物の上にと坐らなければならぬと思ふと可成下駄も土に遠い高い物をはきたく、裾もキツヽと上げたくなりますのに折々この仲働のやうなのを見かけます。それにつけても昔の風俗の用意のあつた事を考へられます。かの裾ふきが出ない頃の昔には乾度二寸が三寸或は五寸位も白い脚布（白絹又は布を毛ぬき合せにしたものにて、ふきの處々に鐵をぬひつけ、裾のまくれるを防ぐ）が出て居て衣の裾はその上の處まではしより上げてございます。能樂の女姿にその味があると思ひます。而して端折りは途上だけの事でしたから今とは餘程趣が變つて居ります。二枚三枚と太い裾を重ね着するやうになつて來てから不便を感じて裾をくるりと捲つて長襦袢を澤山出して歩行するやうに餘儀なくされたのでございませう。これはピタ〳〵走きより輕快ではございますが野卑には相違ございませんから再び流行することはございますまい。一體長襦袢と申すものはかやうに人目に觸れるところから美しい品で拵へたのであらうと存じますが、前述の如く他所で競爭的に着物をきかへることが無くなり、裾を端折ることが廢れては當節のやうに長襦袢を華美にする必要もなからうかと存じます。人目に觸れぬ物は無地で淸いのが何よりで日本の上流方のものは殆んど西洋と同じく白ばかりでございます。長襦袢に金を掛て見たところで舞臺の上

の役者ではない、脫だところをアッと云はせる用意は眞面目なものにはいりません。先づ偶に湯治場の女中を驚かせる役に立つ位のものでせうが、畢竟年齡の制裁や華美の世評を氣にするところから美に憧れる自然の情をひそかに長襦袢に現はして滿足するのではないでせうか。下にきるのは勿體ない美しい長襦袢をさ。だ。過た女が着てゐるのを見る度に熱々日本婦人の年齡制裁の煩はしいことを感じます。德川末世を除いては何時の時代の風俗を見ましても只今の長襦袢位が丁度普通衣服の模樣であつたのですが。ちと極端か知れませんが紋付の裾模樣のいやに遠慮した縮まつたものより見た目が骨が折れず、色や形を自由自在に染出した友禪の長襦袢は只今でもいつそ上に着た方が宜と思ひます。日本に古くから居られるガーデナ夫人が四十何歳といふお年の時でしたらうか、未だ築地にお出の頃でした、桃色の上着を召した半身を窓から出して編物を

(圖原十景の内)



して居られたのを見ましたが、本當に畫か詩に見るやうな趣があつたのです。若し日本婦人であつたら嘸惡口を言はれることでございましたらふが年齢と色彩に制裁のない風俗は範圍が弘くて天眞で良と思ひました。私共でも卑しく不快に見えぬ限りは我慢した無理な色を使つて汚くしないでも宜からうと存じます。

▲夏羽織

鈍色づくめの調子も夏は少し裏目が變るやうでございまして、年齢と色彩の束縛を幾らか免かれる氣味がございます。日本婦人が聊か世界的撰擇を自由にすることの出來るのは夏季でございませう。併し近頃はこの幸福な夏季にまですねた流行が侵入してまゐりました。それはあの女の夏羽織でございます。後室や老境の婦人が飾りをさける羅物とは違つて鬱苦しい思ひをして長襦袢的に立派な帶をかくすのは何の爲でせうか。一揃の衣服の他に少なからぬ費を夏羽織に仕拂ふ旦那様方にお氣の毒で無意味な流行ほどうるさいものはありません。尤も單調を破ぶるための新案としては一寸面白い趣向かも知れません、それならば紋紗か其他の羅布で透しましたら、風なくて花の姿が動搖ぎ流るゝ水に月影を見るやうで餘程美術的であらうと想像致ます。經濟がゆるせば爰の邊まで思ひ切つてやつて見度う御座います。

▲帶

大昔は極めて帶が細く只紐といふだけのことであつたやうです。よく畫に見ます筒井筒の子供なぞは男女とも附紐ばかりでございますが衞生には良いのでせう東山義政公の時に一幅の八つ割の側が出たと申ますが思へば今は幅廣になつたものでございます。夏は生絹の帶を用ゆるのはその時代から見えて居ります。又女

鈐秘傳抄に帶の幅廣過ればはしたに見えて賤しきものなり又少さ過れは腰許あらくおよそ二寸五分たるべし（中略）帶も糊の強さは宜しからず、下げ帶なぞは格別なり、それも軟かなるをすべし云々とございます。萬治年間の帶は幅二寸五分、三寸と云ひ又延寶の末頃歌舞伎者の上村吉彌が唐犬の耳垂たるやうに結びしより流行するとか唯變化の形が肖物に見えますが畢竟只々廣くなつて來て身幅一つぱいになつて了ひました。併し當今は餘程帶の心が薄くなつて幅も幾らかつまつてまゐつたやうですが未だ丸帶は却却お荷物觀がいたされます。一尺何圓と云ふ幅廣な錦を、半幅前三尺、後二尺だけ見せてあとは疊んで了ふのも西洋服に比べるとつまらぬことゝ思はれますが、どう變化いたしますものやら――。今少し軟ら

（關東・十景の內）



かく結んだ方が容姿に面白味が出來て宜しからうと存じますが、矢張乘物で後を壓へ附けられますから紙細工のやうに平らになつてまゐりましたのでせう。かの挂下帶は締め工合と云ひ量といひ丁度良加減ですから新らしいものを求めたいと存じましたが、子供用の外頃合な切地を賣て居りません。八寸も九寸もある帶の上から羽織を着た後姿は全く味ひがございません。羽織下帶としてあの位な幅に織つた色々の柄の物を賣てくれましたら便利でございますが、並幅をわざ〳〵切のも惜まれますし、模樣もそれに合せてありますからつひ〳〵帶に締められて了ふことになります。併し模樣は段々はつきりした物が用ゐられてきました。衣類の縞や色に暗色が流行する普通服は唯これが爲に生命のあるやうな感がいたします。衣服と帶の對照は無論誰でも心を用ゐますが正面に向つた時は襦袢の襟との對照が肝要になつてまゐります。矢張餘るうるさくない方が宜しいやうで、極の對色か極の和色でございませんと、半襟、着物、帶、帶留とかう別々の陳列を見るやうになります。數のないものが取合に困る時は襟でも帶でも帶留でも無地に限ります。昔の娘風俗は襦袢の襟袖は緋無地か緋鹿子に定めてあつたのもつまり配合の經驗からでございませう。學生方は白やクリームが上品で宜しうございます。その他腰帶の用ゐかたも大分變つてまゐつたのですが書物を御覽になれば分りますから略します。

▲纒りのつかぬ取合せ

いくら美しい物でもとり〴〵な特色を現はして雜然と列んで居りまする商品陳列所へ入つて眼が散々する樣に少も快感を與へません。手の込んだ友禪の重合ひにごた〴〵した織模樣の帶では模樣同士が喰ひ合て了ふ丈で他目には何の美感も起りません。今迄は唯普通

服は唯金さへ掛てあれば立派であると云ふ目的で出來て居りましたから他所行は縮緬、朱珍の帶と先づ物質を先にいたしますのでつい取合の柄より品質に慾がついて雜然として了ふのでございます。左程に原料に貴いものを用ゐずとも西洋婦人が一つの立派な百合を帽子に挿めばあとの飾りは何處までもこの百合を助けて、或は對し、或は邪魔にならぬやうに意を用ゐてありますのが羨しいのです。和服はこれが却々困難でございます。



（鹽原十景の內）

▲唯和やかな心持になりたい

餘り配合のことなぞ申上まするど贅澤三昧と間違はれ易うございますが私の考は隱れたり細か過たりして案外無駄なお金を費ふよりはもつとうるさ

くない飾り裝されない簡潔な風俗に還りたいので、早く申せば德川中世頃と廿世紀をつなぎ合せるのでございます。紬でも木綿でも地質は身分まかせにして、春の野のやうに、新緑の梢のやうに、はた秋草の千ぐさの中を分行く心地に、又白砂青松のほとりにあるやうに唯和やかな心持に現はれたいと思ひます。昔時の世は絹糸は內地で使用するだけで有り餘つて居ましたから糸によりをかけ丈夫向に縮緬に織つて諸大名の女中達までが平常着にしたのでせうが貿易の開けた今は絹物を使用するうへにその覺悟さへ變ましたら一家の收入を着倒しにすることはございますまい。畢竟敎育が屆いて常識の者が充ちませば高貴でない者が不相應に豪奢に耽ると云ふことはなくなりませう。世界を三度とお廻りになつた軍人の方が獨逸婦人は野暮過る譬今はそう斗りでもないが、佛國婦人は華美過る、英國婦人のみ何時も無難に且褒められるのはこの過不及が甘いからだと申されました併し學生時代廿歳前の女子は何國も殆と一致して質素にしてあるとの事です。

自分らはもはや人生の花の三分二を過してあとは青葉枯葉の世を經ればよいのですから今迄の親や主人の惠餘の品を用立てゝゆかなければ經濟が許しません。それ故實行の範圍が極僅かの部分だけに止りますが、これから新時代を造る方々は我々よりは新調なさる場合が多いのです。お嫁にお出の方は昔より女の手廻りの品が殖えて居りますから衣服だけもせめて舊時代のかくれた不用裝飾を省いて活用の出來る方面にお用ゐになるやうにと御參考までにつまらぬ考へをお答へいたしました。又女學生方は夏期休業の御暇にでも良い物撰びでなく、花やかな方面ばかりでなく、この過渡時代の不自由な處や不調和な形なぞを注意されるやうになりましたら自から新時代の風俗が完全いたしませう。御相談相手には母上も姉上も御出でせうし世間の目にふれゝば學者も藝術家も手傳つて下さるでせう。而して商人は需要品を考案して賣るやうにならうと存じます。

秋季

運動會の記

池田百合香

樂しい秋の運動會

語りつぎ云ひ傳へてまちわびし、運動會の當日となつた。小春の空うららかに晴れ渡り、一點の漂ふ雲もなし、仰げば品高き富士姫は、ほゝ笑み顏にうち迎へ裝へる純白の衣には、朝日が添つて白銀に、美しう輝く、立田姫の織り出せる秋の錦は、黃金に眞紅に木々を飾り、美しう燃えたち、小枝を渡る小鳥の聲々も、けふをよろこびうたふかの樣におもはれて心よし。

運動場の一隅より、高く四方に張つた萬國旗は、そよ風にひるがへり、我級の、二日程、學科を休んで迄作り上げた、大時計と、大寒暖計、周圍を黃金色の菊花や緑杉の葉もて裝ひ、時計の振子の處に同音を取つて絹帽の紳士を書き門内の小山の松の樹の上、高く飾つたのが、殊に目だつて嬉しい。

三三五々打つどふ友々の顏は喜びの色滿ち〳〵て、心持のせいか皆樣のお聲まで活氣を帶びて居る。

「岡さん今日は、一生懸命にしませうね、もうこれが學生としての終りの運動會ですからね。」

「芳子さん、貴女何係？　え〻、記錄？　羨しいわね私準備係よ、忙がしくて見るひまもないでせうと思ふと、ほんとに嫌になつてしまつて。」

「あら澄田さん、準備の方がまだい〻でせう、記錄は身體を動かさないから、樂に見えるかも知れまんが、手がだるくなるでせうよ。それに後で文を作つて、校友會誌に出すのですもの、なか〳〵つらい役ですわ。」

と云と、「それはさうと、優勝旗はぜひ四年が取るように、一生懸命にしませうね、皆樣も其お積りでせう、あ〻私こんな事して居られなかつたに。叱られて仕舞ふオホ〻〻〻。」

成績は六位七位でも、此級の覇權を握る澄田さんは私達にこう云つて、さも忙がしさうに、職員室にかけてゆく。

後見役つて、「澄田さんの活動も御大さうなものね。」と山村さんがいふ、一同思はず苦笑した。

さしも囀づり交はした人々も、第二の鈴に驚き靜まりかへる。運動場に集つた三百有餘の全校生徒、都の君達の樣に頭に蝶とひらめくリボンもなければ、振りの袂をこぼるゝ紅の花も見えず。質素質素の敎訓のもとに、固く定められた筒袖に、今日許りは、と漸く許されて、髮にかざし白垢の白菊點々と風に匂ひ、床しい氣風示す。



秋姫の問ひ來て、
空高く氣澄し、
山を染め野を染め、
風の音さわやか、
こゝろいさみ、
肉も亦をどれり
いざやともに、
手を取て遊ばん

（二）

山の端の月影、
庭の瀬の蟲の音
露の玉きらゝに
雁かねぞ身しむ
こゝろ澄みて、
胸も亦さえゆく
あはれあかき、
燈火ぞこひしき

勇ましい運動會の歌によつてたのしき會はひらかれる。

天高く打出す砲の音に、花ならばつぼみの少女子が

袴の裾もかるく、かけいで、我劣らじと競ふ業の、をかしくも興ふかい。●

樂隊のマーチにあはせて演ずる一年の、ベビーダンス、輕くとぶ姿や握手の手つきの、小さいだけに可愛らしい。時計の針の進につれて、わざも移りく\て、やがて午後にとなれば、來賓席も運動場をとりまいた參觀人席も立錐の地なきまで見物人で滿された。

賞品授與所の隣に出した卓の上で一生懸命に書いて居たが、あまりつかれたので、筆もつ手を休めて本三の抽籤競爭を見る。ブドンと高くひゞく砲の音にバラバラと走せてゆく。水の一杯入つた、バケツをもつて來る人、椅子をもつ人、箱車引く人、何でも御用と記した前掛をして鈴ふりながら來る人、人參や大根さげる者梯子かつぐもの重いのや輕いの、いろく\の姿して、決勝點めがけて來る樣は、丁度滑稽活動寫眞でも見るやうだ、なかく\おもしろい

一着だれ　二着某　三着何某　と記すいそがしさ。皆樣おめでたうといふと「オホヽヽ、ありがたう」と笑ひながらゆく。

岡さんに代つて頂いて、級の赤十字競爭、洗濯競爭に出たけれど、組む人がわるかつたので、殘念三着だつた。

此度はいよく\優勝旗競爭バスケットボールで、中に入れたボールの數によつて、優劣をきめるのださうだ。

勝敗一に此擧にありだもの、皆一生懸命に入れる。あられとぶボール、落ちる、ひらふ、投げ入れる。今一つ入れやうとする時、一分間の笛がなつたので、殘念だがやめた。

「一體私の方いくつ入つたのでせう。」

「廿五よボールドに書いてありますの。」

「あら三年が廿六？　二年が十九、三年が廿三、技藝一年が十九、二年が二十一？　まあ惜しい事ね、たつた一つの違ひで、優勝旗を三年にとられてしまつて。」

「だつてね、三年ではば笛がなつても入れた方があつた樣ですもの。」

「實際無理もなのですもの、三年は幾度も練習して居ましたが、私の級は、先生が、練習させて下さらないのですも、それで敗けたのでせう。」

「えゝさうよ、今になつて仕方がないわ、上級だから妹に、一歩ゆづつたと思つてあきらめませう。」

敗戦の口惜しさに、彼方でも、此方でも不平たら〳〵。「三年はね、優勝旗もつて、グラウンドを一週するのですつて、こゝの前通つたら、皆でおめでたうの連發しませう。」例の澄田さんの發起みな大贊成なのだ。



鐵色地のドンスに、大きく金糸で刺した、名譽ある我が校旗は、さわ風にひるがへり、三年級の先頭に捧げられる。後に續く人々も、意氣頓に高り、喜びの色、面にあふれ、凱歌のマーチに、運動場を一週する、彼方でも、此方でも歡喜のこゑみちみちて敗けた級は喜しくない、殊に我級は、上級といふものが、單について居るので無念の心むら〳〵と起つたと見え、彼方でもおめでたう、此方でもおめでたうこれぢあまるで、お目出度うを賣る様なものだ、中には口惜しまぎれに、紅白

の旗、(旗體操に使つたもの)を、ふりたてる方もある皆さんも、もう少し落ついておつしやればいゝに、真心から出た言葉でなく怒氣を含んで居るから三年級の心持になれば、決して嬉しく思はないだらう。きつと感情を悪くしたであらう。」

コチロンとカレドニアンする時には、卒業の姉君達も打交つて浮き立つ様な樂隊のマーチに、今までの、憂の雲も跡なく晴れて、樂しく愉快に舞踏する。

一番終りが綱引。此度こそはと、固くちかひし四十餘の人々。三年と四年は、源平に分かれた。一二、一二の掛聲勇ましく、先生方も赤白の旗を打振り〱熱心に應援して下さる。あゝ、立つてはいけません、しやがんでしやがんで。一二、一二、しつかり、も少しも少し。二度位置を取り替へて三度のうち二度とも、我級が勝つた。この綱引に先の不名譽を僅かにそゝひだ友の顔は、玉なす汗を宿し、袴の裾は塵まみれ。

「嬉しかつてね勝つて。」

語り合ふこゑ〱、皆様のお腹の蟲も、靜まつたのだらう。

樂しき一日の陽もはや西山に傾き競技も、こゝに全く終りを告げたので、君が代の歌にめでたく、閉會したのは四時を過ぐること三十分。

樂かりし今日の運動會よ。愉快なる秋の一日よ。

秋の趣味、豊かなる田舎

秋姫の恵の露に染め出せし唐衣、紅に、黄に、美しう着飾る木立。朝露に、しつとりぬれた草葉をふんで寄宿の花壇に立てば、きのふより咲きいでた、コスモスは赤に白に桃色に美しう匂ふ。

富士の白雪朝日でとけて、溶けて流るゝ其水の、岩間より湧きいづるを手にうけて、顔洗ひ、口すゝぎ、冷水摩擦して彼東に向つて深呼吸すること十數回。

身も心も洗ひ淨められたやうで、すがしうこゝちよし。太陽は今上り、朝ぎりに包まれし、河むかふの家家も、おひ〱はつきりとする。あつちこつちで鶏が鳴く。平和な田家の朝景色、遠慮なく表はれる。

學校では、此フライデーに催されるといふ修學旅行のはなしでもちきつて居る。

「樂しんで居た修學旅行ね、靜岡へ一泊ですつて、もつともつと奮發して、京都奈良あたりへ行きたいのね。」

「でもねいくら學校で許しても、△で許さなければ、行かれないのですもの」

「なぜ許さないのでせう、もうこれが、終りではありませんか。靜岡なんかつまらない。費用がかゝるたつて、生徒の自費だから、よさゝうなものですにね。」

「一泊だつて、やつと許したとかよ。」

「靜岡なんか面白くもない、行くのよさうかしら。」

一泊？ 嬉しいわ。どこだつて、をしまひだから、私よろこんでゆく。」十人十色噂とり〳〵。

放課後親しき友と手を取つて校門に立つ。仰げば高く、よべば答へん芙蓉の峰や、東の方薄雲なびく箱根の連山や、街道の松、見下ろせば田には殘されし、僅かの、稻穗に交つて、點々と立つかゝし、も見ゆ。かり干されたる稻はこゝかしこに、みのり豊かに見ゆ。寄宿のお山には、實なくわれたる栗のいが打散り枝に殘りし柿の實は、三つ四つ赤く熟した。向ふの畑道を、草かご肩に、聲高らかに語らひゆく野少女は、今日のつとめををへて、樂しい家路につくのであらう。駄馬つれゆく馬子のうた聲も、追々遠ざかりゆく。木の枝で百舌鳥がなく。

あゝ限りなき秋の趣きよ。豊年の田家の秋よ。平和なる田舍の秋よ、眺めて恍惚たること暫時。

此夜月は沖天に高く、冴え渡り、文よむ机の上にさしこむ。自習後親しき友どちうちよつて、さま〴〵のものがたり、語る前途の目的よ、理想よ。

「もうこうして共に學び、共に起きふし、へだてなく語るのも僅かの間ねえ。」としんみりと嘉代さんがいふ

「どうぞ永久に變りますまい、變られますまい親しい此九人の交りは。」たとへ身は山河幾千里へだつとも。」

折しも聞える、人員點呼の拍子の音。

月は冴えに〳〵、蟲はあはれにすだく。さらば安き夢路につかん。（終）

手輕に出來る子供の洋服

和洋裁縫女子共立會　松江美佐子

四五歲男兒用折衿スイッツ



出來上りの圖

本號には四六歲の男兒として適當な形を記載する事と致しました。此服は、六歲位まで用ひます。そして二三歲の時には殆んどターリツポンの見えぬ位に着せて置き、丈の短かくなるにつれて、下のズボンが見えるやうになつて宜しいのでございます夫故、クーリズボンも共切れで拵へて置きます。地質は、秋から冬へかけてネル、ナル、薄ラシャ、若し三歲位ならば、カシミヤ、ビロード等も用ひます。色合は紺、花色、オリーブ色、鳶茶等夏ならば、白、水色、白茶色等の麻、縮、ケンドン類を用ひます。そして外出着とするには、折衿、胸當で、帶、袖口、及び立衿の各所に、テップ或はウヤメラ等の飾をつけ尚一層上品にすれば、右の各所を白色の切れ地になし、主の地質を、花色其他の濃い色に致しますなら至極立派なものになります。尚裁方には帶も取つてございますが、これには皮帶の方がしやれて居ります。用布は二尺巾七尺五寸要します。尚胸には碇の刺繍などを致します、併し夏物は度々洗濯をしますから縫箔は致しません。

形紙の拵へ方

形紙を拵へるには先づ、左の印の說明に注意をしなければなりません。

一 ●　●　●　かやうに並ぶ三つの穴は、縫の目標の印。

一 ●●●　近く三ツあるのはツナの印。

一 ●●　かやうに二ツの穴あるは、ギャザの印。

一●　又一ツづゝ各所にあるのは、ヒダ、山等の印。
一V　切り込は合印です。

右印の内、第一と第二、即ち、地の目たての印とアナの印は、切れを裁つまで必要な印で、他の印即ちヤナダ、ヒダ合印等は、縫ふ時に必要な印です。

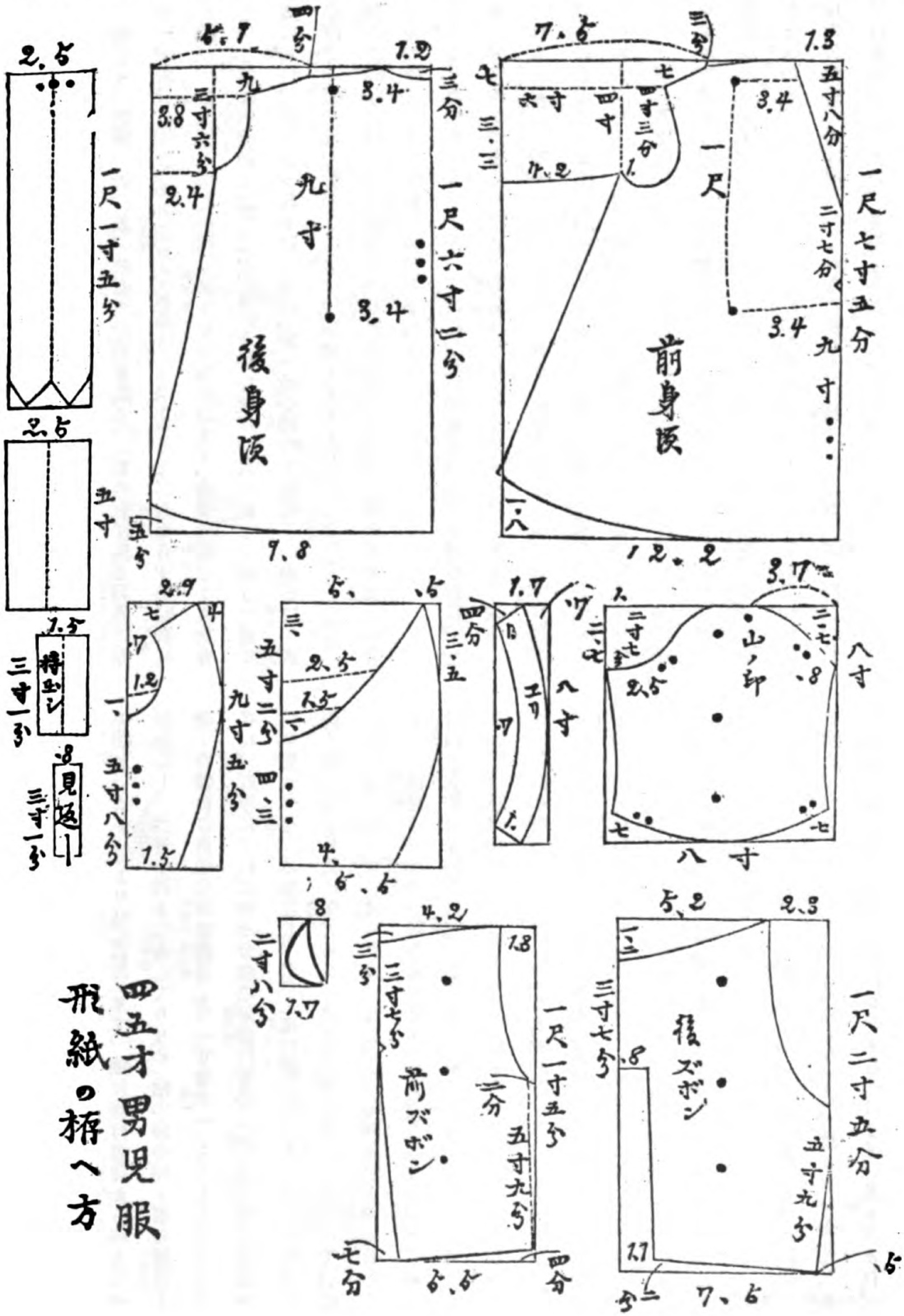
これが解りましたら、形紙の拵へ方にかゝります、これは、先づ左圖の通り、寸法通りの四角な形を拵へ、次に所々を圓く、或は斜などに裁ため内に、眞直の所へ、地の目縦の印、及びアナの印をつけて置きます。夫れより、各所の形を寸法通り、拵へるのでございますが、總て、圓味をつける所は、圖に倣へて、無理のないやうに、自然に致します、かくして裁ち縫いましたなら、縫方に必要な印、即ち、袖に山の印、ヤナダの印、身頃に、ヒダの印、前をあける切込の印、ズボンの切込の印等を落ちのないやうに錐く穴をあけて置きます。

△切地に形紙を宛てゝ裁つ心得

右の通り、最初は二尺巾の切れを二ツ折として、先づ、前身頃及び後身頃の形紙を持ち、其のアナの印のある所を、切れの輪の方に宛て、前身頃の巾の足らぬは後で足す事として他を形紙通りに裁ちます、夫より矢張り二ツ折のまゝで、袖の地の目たての印を見て其の通り正しく裁ちます、次に前身頃の足しを取るのですが、これは、はぐ縫代のために、形紙よりも四分だけ廣く裁ち、二分の縫代ではぐやうに致します、次に二尺巾を廣げて、先づ巾二寸五分の帯及び袖口切れを取ります、次に、圖の通り折衿及胸當てはアナで取り、其他は地の目をよく見て正しく二枚づゝ裁ちます、尚、折衿其他を白地に致す場合には、二尺巾を二ツ折にしたまゝで、前後身頃、袖、及び前後のタヽリツポンを裁てば宜しいのでございます。かやうにして裁ち終りましたなら、針をぬかぬ内に、チョーク或は白墨で、各所の印（但しアナの印と地の目たての印を除き）を悉く切れに移して置きます。夫れより形紙を取りのけ、今のチョークで付けた印を、下の切れにまで通るやう、白糸二條で又印をつけます。尚前身頃の足し切れは、二分の縫代ではぎ、こてにて割り、形紙通り正しく切つて置きます。

縫方順序

先づ第一に、袖の袖口の方に、印から印までギヤザ縫ひをなし、夏物ならば袖口切れよりも、二三分長いだけにちゞめ、兩端へ殘して袖口を縫ひつけ、袖下を袋縫ひに致します又、冬物即ち地質の厚い場合には、袖口の丈だけにちゞめて、これと縫合し、袖口から、袖下までつゞけて縫ひ、兩縫代を割り、袖口は中から表へ折つてまつりつけます。夫れより折衿、胸當てを拵へます、これは、若しテツプ或はウナバラ等の飾りをつける場合には、折衿の端から、四分入つた所に一本つけ、次に二三分間をあけて、又一本つけます衿にも同樣二本つけ胸當ては、袖の縫箔をせぬ場合には前の見ゆる所へ、三本位、テツプをつけます。



四五才男児服
形紙の拵へ方

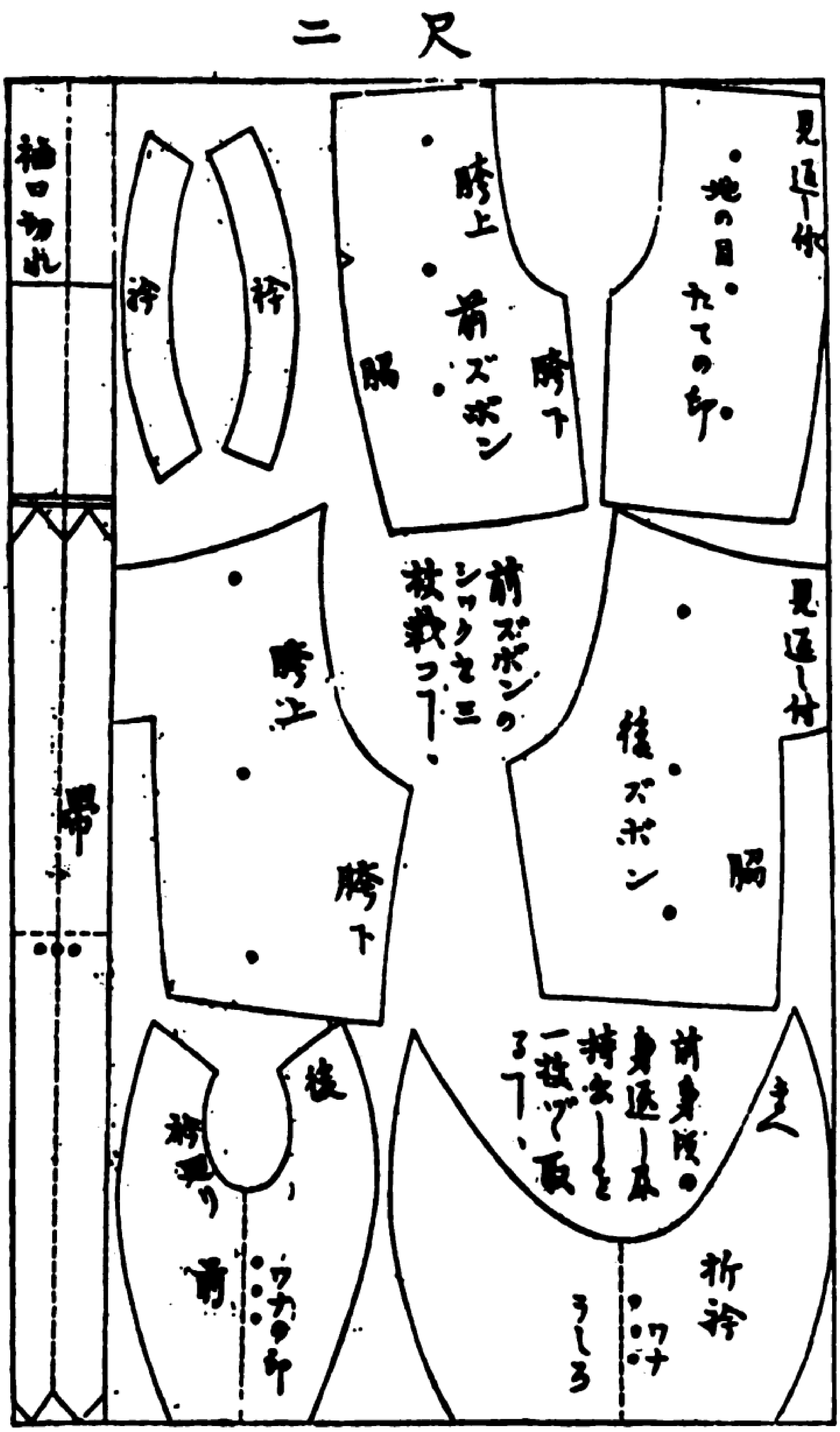
尤もこれは付けぬ共宜しいものです、この場合には袖口へも飾りを付け帯も共切れならば付ける方が宜しふ御座います。

夫より、折衿、衿、及、胸當ての裏を裁ち、（此の裏は表と同色になす）折衿及、胸當ての外廻りを裏表合してぐるりと二分足らずの縫代にて縫ひ、表へ返してこの所へ飾ミシンをかけます、衿は同じく裏表合し、これは内側の方、即ち丈の短かき方を縫ひ、表へ返して折りは表の方に向け、飾ミシンをかけ、次に、表一枚を持つて胸當ての表の方へ縫ひ附け、折りは、衿の方に向け、両端も正しく折つて飾ミシンをかけ、裏はまつりつけます、尚帯も共切れの場合には、巾一本の出來上りに折りをつけてぐるりと飾ミシンをかけます。

夫より身頃にかゝります、これは、先づ前後身頃にある印を山に、一寸三分の所をつまみて下まで假縫ひをなし、ミシンは印の所まで縫ひ、何れも正數巾着とヒダと致します。かやうにしますと、ヒダの爲に肩が不揃になりますから、肩の端から、衿肩の端へ物指しを宛てゝ正數裁ち切ります。それより前の眞中の切込の所まで即ち二寸七分だけ切りあげ、上前に見返し、下前に持出しをつけ、じやつの前のやうにとめて置きます、夫れより、前後の肩を合して三分の縫代にて縫ひ、縫代は割り折衿をつけます、これは、先づ折衿の後の眞中と、身頃の後の眞中と合し下前の方よりしつけをかけ、別に折衿の裏と同じ切れにて斜の切れの巾六分位のものを揃へ、これを折衿の上に宛てゝ、三枚一緒に縫ひ、折りは身頃の方に向け、見返しを放して表から押へミシンをかけます、次に見返しは身頃へまつりつけ、次に脇を縫ひます。これは、若し地質が薄ければ、袋縫ひになし、厚ければ二度縫ひ、又は鏝にて割るも宜しふ御座います、夫より袖を付けます。袖は袖付の印から印までギヤザ縫ひをなし、袖付のあきに合してちゞめ、袖の山の印と肩の縫目と合し、袖下の縫目は身頃の脇の縫目より一寸位前へ、ちらしてつけます。此縫代は、叮寧にすれば巾七分位の斜切れでつゝみます、夫より裾を二寸五分位折つて平ぐけをなし、（但し假に縫ひたるヒダのしつけは解きて、開く事。）夫より腰に帯どめをつけます、帯どめは、共切れで羽織の乳の如きもの、丈は帯の通るだけになし、これを両脇の丁度腰骨のあたりへかたく縫付け、此中へ帯を通します。尚此帯は、上の方へしめて居るのは誠に見苦いもので御座いますから、成るべく下の方でゆるくしめて置きます。最後にホツク、即ちかける金具をつけます。これは先づ衿に二ツ、折衿の付け仕舞ひに一ツ、尚折衿の後の所に一ツホツクをつけて、立衿の付け際に貫ぬき止めをしてかけます。尚、胸當ての裏の方へ紐をつけ、丁度お腹のあたりでゆるくしめるやうに致します。と、胸當てが前へ飛び出すやうな事が御座いません。

出來上り圖にある通り、前へネクタイを付けますなら見返しの所も隠れますし、至極愛らしく見えます。

夫れよりクーリツボンを揃へます。これは、先づ前後の腰の切り込みの所まで巾出來上り七分位の見返しをつけ、飾ミシンをかけ、夫より前の股上の、六七分上つた所にシツクをつけます。此シツクは、先づ三





二尺巾七尺五寸の布を以て四五才男児服裁方、

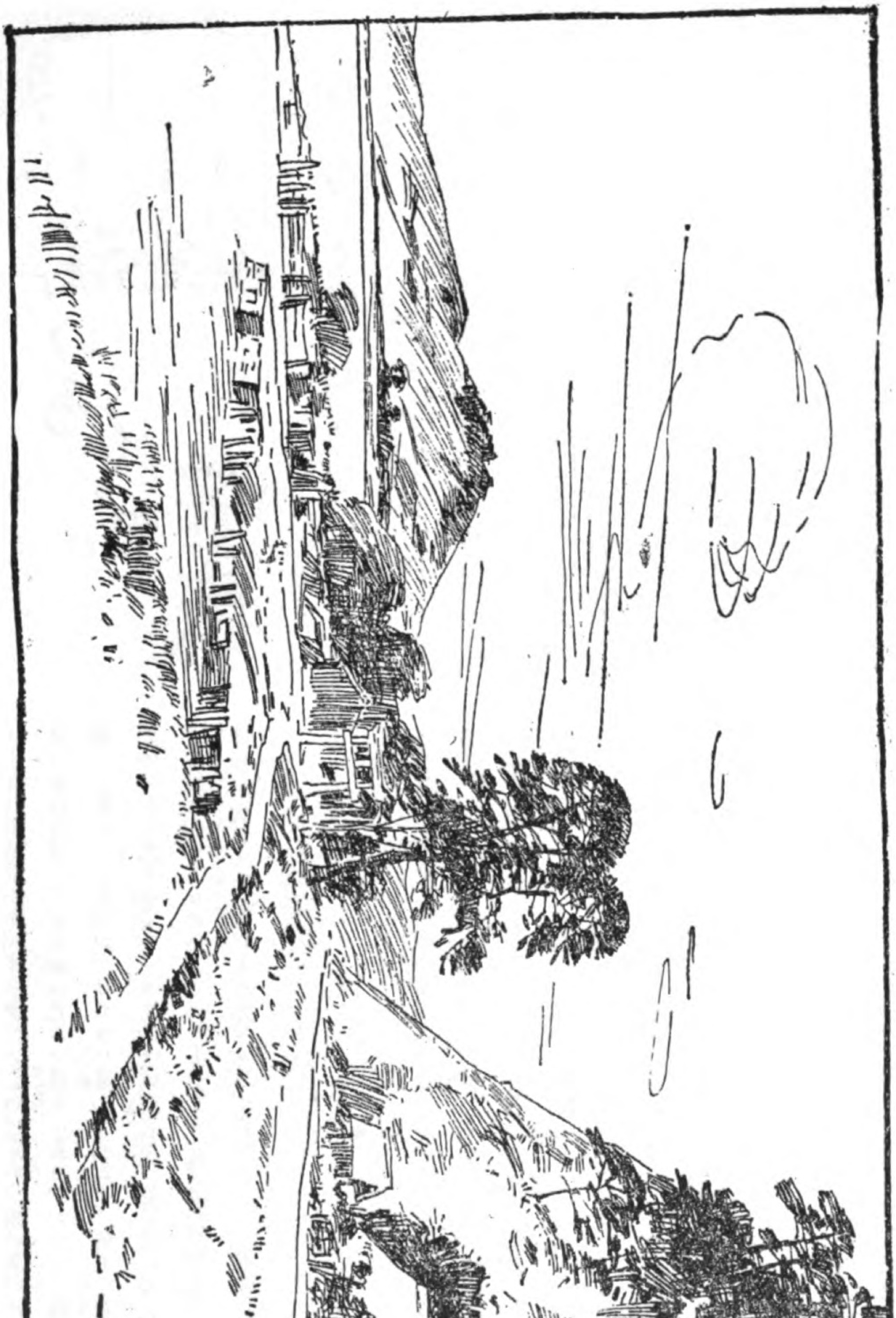
枚の内の二枚を持つて外側をぐるりと縫ひ、表へ返し、次に表一枚を持つて、前ヅボンの下前の表の方へ宛てゝ縫ひ、折りはシツクの方へ向け、此處へ裏の方を綴じ付けて表からぐるりと飾ミシンをかけます、夫れより今一枚のシツクは上前へ下前と同じく六七分上つた處へ縫ひ付け、裏へ見返しとしてまつりつけ、口の方は表から飾ミシンをかけます、夫れより、前後の脇を縫ひ合し、（見返しをつけた所から下）折りは前の方に向けて、飾ミシン掛けます、此ミシンは、見返しの飾ミシンと區別の立たぬやう眞直にかけます、此時、前の見返しの所を後の持出しの上に重ねて、正しくとめミシンをかけます、夫より、前の上下前の股上を合して、シツクの所をのけて、その上下を、シツクを縫ひたる時と同じ縫代にて縫ひ、折りは上前へ向けて、表から飾ミシンをかけます、此飾ミシンは、脇と同樣シツクの飾ミシンと區別の立たぬやうにかけます、次に後の股上を袋縫ひ、又た一度縫ひにして鏝にて割り、兩方へ目立たぬやうにまつりつけ、次に前後の股下を合して、夏物ならば袋縫、手厚い地質ならば、後の股上と同樣縫にて割ます、次に腰裏をつけるこれは、前後共ヅボンの形通り、巾一寸五分の切れを拵らへ、丈は、ヅボンの巾だけになし、前後共、先づ表の方へ縫ひつけ、折りは少し深目にヅボンの方へ向けて折り、見返しを放して飾ミシンをかけ、次に兩端及び下部に折りをつけ、ヅボンへ正しくしつけをかけて表からミシンで縫ひつけます、最後に裾を七分程折つてミシンをかけ、股下の縫代を少しあけてこれからゴムテツプを通し、適宜にしめて用ひます。尚これは兩脇へ一ツづゝ四ツ横にホタンの穴をあけ、前後の眞中は一ツづゝ二ツ縱にあけて穴かゞりを致します、そして肌着にホタンをつけてこれを吊るすやうに致します。若しもヅボン吊を用ひますなら、兩脇をあけずにずつと縫合し、前をあけて、シツクの代りに長い見返しと持出しをつけてホタンでかけるやうに致します。

注意

右之通り記して置きましたが、尚はお解りにくい所があれば、お答へも致しますし、尚形紙の御入用な方には、本號記載の形紙に限り、說明書をして代價郵税共十七錢でお頒け致します、若し形紙だけで解りにくいと思はるゝ方には、切れにて製したる縫上りの雛形をお頒け致しても宜しふございます、代價はクヽリヅボン共三十錢ヅボンを除けば二十錢でございます、（郵税は二錢）申込は本郷駒込追分町三十壹女子共立會

正誤

九月一日發行本誌に掲げたる「土耳古の奇風俗」の記事は在土耳古中村商店主山田寅次郎氏の談となしありしも、同氏は目下大阪東區心齋橋山村商店に居らるゝものに付正誤す。



秋晴



いろ〱の實驗

物を美しく觀ること

千葉　戸村登志子

よく皆さんは水彩畫や油畫や、或は寫眞を見て恍惚たる美に打たれるでせう。さて其れを離れて實物の風景や人物を見ると、さつぱり感じがないのに驚くでせう。是は何ういふ譯でせうか、何故自然は繪畫の樣に美しく感ぜられないでせうか、又どうしたら感ずる事が出來ませうか。之に就いての私の實驗を話しませう。

完全といふ事については、人間の小さい技術よりは、造花の妙を極めた自然の方が遙に勝つて居ります。その完備した自然から、人間は美のある一角を取つて之をカンバスの上へ再現するのです。すると之を見る人の視線は限られたる其一部へ集中して、一層深く美を感じます。此原理を直接に自然に應用するのです。眼をあげて其處にある何物でも一つ、帽子なら帽子を見ます。帽子の形といふことに就いて見ると、帽子としては其處にある帽子程眞なるものはない。或は其の色彩を見る。又は其れを成して居る線を見る。調和を見る。かうして進んで行くと、帽子の美といふものが、はつきり浮んで來ます。何でも實在のものを繪畫として見るのです。さすれば此度其處に美が涌いて、今迄醜かつたものでも、つまらないと思つたものでも、捨て難い趣が涌いて來ます。是は音樂にも文藝にも應用する事が出來ます。(宮)

木耳の人工栽培法

信濃　恒子

木耳は三杯酢や、茶碗蒸に入れますと、齒切れ宜しくお美いものです。人工栽培は大抵の木に出來ます。薪にしても餘り役に立たぬ柿の木や桑の木を、秋季二三尺位の長さに伐り取り、皮が少し焦げる位に燒き(燒くのが秘傳です)日蔭の濕氣ある處へ、倒に立て掛けて置けば、翌々年からドン〱發生致します。此間に雜菌や苔が發生しますから、是れは忘れずに取り捨てないと、勢力を徒消致します。又自然に發生して居る木を、伐り取り來り交ぜて置きますと、一層好成績を得られます。丁度好適の季節ですから、お試めし遊ばしませ。そして澤山出來ましたら、私御馳走を頂きに伺ひます。(宮)

衣類の疊み直し

東京　とみ子

衣類は疊んだまゝ長く納つて置きますと、折癖がついてそこから折り切れのする事があります。是を防ぎますには、暇を見て月に一度位づゝ疊み直すのです。斯う致しますと、第一時々空氣に晒されますから、蒸れ氣味に成る事が無く、又其の時に氣の附かなかつた汚點や黴などを見付けて、それ〴〵手當てをする事も出來、その上疊み直す度毎に折目の位置が少しづゝ變りますから妙な癖がつかず、保存上大層宜しう御座います。（賞）

豆乳の製法

四谷　坂田花子

子供に母乳を與へられぬ場合には、豆乳が代用として大層効能ある由承りましたので、私方では牛乳と交へて用ひて見ましたが、牛乳ばかりで育てたよりは結果がよい樣に思はれます。卽ちよく吟味したる大豆を一晩水に浸しおき、翌朝ざつと煮立て、擂鉢に入れて、よく擂りつぶし、一合の豆なれば水を入合加へてよくまぜ合せ、味噌漉又は水嚢にて濾し、之れに砂糖と鹽少し加へて飮ませます。豆乳は配達してもくれますが、新樣に致せば、左樣手數もかゝらず、新鮮なる上に、至極經濟で、且濾したからは豆腐のからよりもおいしくいたゞかれます（賞）

遠慮の程度

松山　高田露子

地方祭には每年來客がありますの今年も例によつて客がありましたが其中の一人が遠慮してか、又他に理由があるのか、一向召上らない。いろいろ口を酢くして勸めると、宅で遲く晝飯を頂いてまゐりまして滿腹で御座いますとの御挨拶。私は少々不平に思ひました。人の行爲は咎めるには及びませんが、遠慮も程度のあつたもので折角饗應しようとて心を盡して居る人に失望させるのは卻つて失禮であります。私達も招かれた時、又人に勸められた時には必ずべきであると思ひました。

パン粉の製法

四谷　修子

食パンの周圍の堅い處を棄てずに、金網か焙烙で焦げぬやうに乾かし、擂鉢で程よく突き碎けば上等のパン粉が出來ます。それを罐に入れて濕らぬやうにして置き、入用の時に用ゐるのです。半斤の食パンの屑で、大丈夫三錢位のパン粉が出來ます。パン屑にパンやジャミが附着てゐるか、又は焦過ぎて黑くなつてゐるところなどは、乾かす前に削り取つた方が宜しうございます。尙擂鉢で碎いてから、茶焙よりも少し目の粗い篩にかければ、一層上等のパン粉が得られます。

不時の入用金の溜方

群馬　由子

一家の經濟には常の費用の外に臨時の費用が要ります。この臨時の費

用の出所が無いと不時の入用に差支へます。私は初め此の臨時費用の金が無いために、ひどく困りましたから、當節は怠りなく夫の樣に預金して居ります。其れは斯うです、何でも私は一度自分の財布に入つた五厘銅貨は必ず銀行預金罐に入れて了ふのです。而して一杯に成つたらこの罐を銀行に持つて行つて預金を致します。是れは臨時の費用に充てるつもりです。斯うすれば不時の入用が出來ても、さまで心を勞さずに濟むだらうと思ひます。

火熨斗の火の消えぬ法

牛込　輝子

火熨斗の火は兎角消えて困るものです。皆樣のお宅では、どう遊ばすか存じませんが、私共ではミルクが何かの空罐の底をくりぬいて、火熨斗の中へ嵌め込みます。すると買ひたてのと少しも違はず、大變に火の持ちが宜しう御座います。

火氣の利用

東京　千代子

私は先頃一つの廢物利用を考へました。御承知かもしれませんが、私の家はお風呂をコークスで焚します。そして煙突がございませんから、ふと考へづきまして、其の火氣が其の儘放散させるのは惜しいと思ひ、少し高めの足の五德を求めて、その上に置き、お鍋や、藥罐をかけました。是でお湯も沸せばお汁も實立てます。中にも鰹節のダシを取るのには誠に妙で、カス／＼になる程よくダシが出ます。あまりに沸騰せずに長時間溫められるからでありませう。其他適當と思ふものをかけますと、一ばし用に立ちまして、且つ經濟になります。

自信と成功

大和　靜香

私は生來手藝には不得手な方で、殊に編物ときては絕體的に習つた事がありませんし、編針なんか嘗て手にした事もありません。ですから精巧な編物なんかを見ますと、まあ綺麗だ　何うしてこんなに出來るのだらう、私もしてみたいが、不器用だからとても出來まいと諦めて居ましたところ、どうもしてみたくつて／＼仕樣がありませんから始めました。と、案外仕易いもの、面白いもの、するにつれて段々興味が湧いて來ますし、今一つ／＼と慾もついてきて、知らず／＼の間に出來る樣になり、あゝこんな事なら早くして見ればよかつたのにと思ふ樣になりました。ですから何事によらず自信して興味を以てすれば、屹度なし得られるものだと思ひます。

馬鈴薯の即席料理

東京　若菜

馬鈴薯をよく洗つて、薄く切り、又韮に細く刻み、味噌漉の中に入れ

て置いて、グラ〳〵煮立つたお湯をざつとかけます。別に三杯酢を拵らへて置きまして、其の中に前のを二十分も漬けておいて、ゼールの御肴に遊ばすと一寸あつさりして、お美味しく頂けます。それに是は手軽るですから、どなたにも出來ます。一人前なら小さい馬鈴薯が一つもあつたら澤山です。

風變りの卵子飯

新潟　小原康子

是れは北越地方の珍料理でして、他國から來た人などは食べ方に困つて、人の食べる迄待つて居たと言ふ笑話がある位です。先づ普通より硬目に御飯を炊き、一方には一人一箇宛に卵子を煠で、又一方にはお醬油の汁位の加減に汁をこしらへます。そして卵子の煠だり次第、冷水に入れ皮を取り、黄白に分ち、黄身は裏ごしにかけ、白身はみじんにきざみ、皿に二色に盛り、卸し大根又は山葵などを藥味とします。御飯はかろく茶碗に盛り、汁は吸物碗に盛つて出します。お客樣は此皿の卵子を黄白御勝手に御飯に載せ、上にお汁をかけて上るのです。淡泊な料理で、そしてお吸物やお皿の代りになります、お汁の中に肉など入れゝば更に妙です。

體裁の好い襷

神奈川　木村恭子

殿方の衿や袖口になります、本人の縁が澤山貯まりましたら、其れを接ぎ合せて長くし、二枚重ねて兩端を絎けて襷に致します。耳が見えませんから、一寸何やら分りませんで體裁が宜しう御座います。帯芯の（女の方ゝ半衿の悪くなつたお上りも襷に致しますと、誠に綺麗でございます。

裾廻りの揃へ方

京都　上田いく子

皆樣小袖の重れなど召します時、裾廻りを揃へますのに骨が折れませう。ですから私は下着の表と上着の入裾との裾より、約そ一尺許り上の處へ衽、脇、背と一つ〳〵紐を付けて置きます。そして、それを着ます時、互に結び合せるのです。かう致すと、何の雜作もなく、きちんと着られて、且つ、いくら起つても着崩れが致しません。

魚串の削り方

伊豆　不二子

誰でも魚ぐしを削るのに、丁寧にするつもりで、節の突き出た部分を削り落して了ひますが、あれは殘して置く方がようございます。些細の事ですが、あれを置きますと、魚の油がその先端から落ちますから、魚ぐしの本に流れませんで、手を汚すことがありません。



美文

舊師

四谷　坂田花子

昌平橋から電車に乗る。車掌が「お茶水！」といふ聲に、小赤壁といはれたのはこゝらだなと、窓から首さしのべて見て居ると、どや〳〵と大勢入込んで來た。向ふの出口に近い吊皮につかまつた御老人は、どうも見た樣な方だと思つたも道理、在學當時の漢文の先生。眼鏡をかけて少し俯向き加減になつて居らつしやる御様子は、「壬戌の秋七月既望」と講釋して居らしつて、「舷をたゝいて歌ふ」と、机を力入れておたゝきなさつた其頃をしのばせる。大分年もたつた事とて、お鬚も餘程白くなつた。學校もあの後大改革があつて、先生もおやめになつたさうだから、其後の御様子も伺ひたいと思つたが、此人込みではどうすることもできないと思つて居るうち、飯田町で降りておしまひになつたので飽かず御後姿を見送つた(一等)

餘興の練習

牛込　平塚白百合

先生はシエークスピアの小本を左手にもつて少しそり身になりながら練習を見てゐらつしやる。

デメトリアスは花野に倒れてねむつてしまつた。舞臺は静かにひくいピアノは花野のやわらかい味を現はして夢のやうにかすかに響く。背景にゑがかれた花野に對照してくろい服が如何にもふさわしい。

花のやうな少女が出てくる。また男と女が。それもねれ入つてしまつた。

うつとり見てゐると、小鬼が天使のやうな姿して花束をもつて現はれた。

ねむれるデメトリアスの瞳に花の雫をしぼる。このあたりは南歐のスヰートな畫でも見るやう。マア詩的ね――、と水野さんがいふ。

シーつと誰れか制した。

先生はニコやかにほゝゑんでゐられる。(二等)

みどり子

東京　もみぢ葉

此度の日曜に寫した、武夫の寫眞が出來て來たので、故郷の御兩親を始め親類知人へ送つた所、四五日して諸所から受取の文が來た。何れも立派な子、しつかりした事と、ほめてないのはない。御世辭とは知りつつも、何となく嬉しく、今更つく〴〵寢顔をのぞき込むと、實に男らしいよい子だ。よくも私に此樣な子が生めたものよと、獨り會心の笑をもらしたが、あゝ然し行末は如何あらう。此無垢のみどり子を、玉となすも瓦となすも、これからの敎育一つにあると思へば、實に空恐ろしく果して母としての責任が盡くせるかどうかを危ぶまれて、思はず心に神の加護を祈つた。(三等)

雨の朝

東京　氏家寒江子

氣たゝましい目ざましの音にゆめを破られて時計を見ると丁度五時、耳を澄ますと、相も變らぬ雨の音。今日で四日。ほんとにいやになつてしまふ。御飯たき上げて、兩親のおまくら許に煙草のお火を差上げ、御膳立をして弟のお辨當をつめてゐると、六時を打つ。二階へ上つて弟を起すと、ウ……と未だゆめの中から出た樣な返事をして居る。雨戸くり乍ら此んな空では とても上らないわれへと弟に言つた積りでふり返へると、まあ嫌だ、又蒲團かぶつて眠入つて居る。夏さんもう十五分過ぎよと大きな聲で 少しかけれをしてやると、漸く起き出して、はしごをひどい音をさせて下りて行く。まあ 靜かになさいな、お目ざめになるわと叱つてやる。やあ失敬々々と笑ひ乍ら顏を洗ふ。仕度整へて毛繻子の包みを小脇に、洋傘さして行つて參ります。あゝ氣を付けて行らしやいと送り出す。小學校をおへてからめつきり 背が高くなつた事。そして思ひなしか聲迄 兄樣にそつくりの樣だ。思へば、三年前私が十六の夏 學校を卒へて、遠く南米の地に赴かれた當時は、朝夕門行く人の靴の音にも空耳走らせたつけが、早いものだ、もう弟が早稻田へ通ふ樣になつて、又朝夕靴の音が出入する樣になつ…。(芳逸)

秋の夜

長野　あざみ

ばらりと、落る桐の葉音― 寂しい秋の夜は次第に更けてゆく。老いたる母樣は、電燈をずつと下げて、我が子の爲には夜の更るもいとはずせつせともみ裏の着物を縫つて居られる。一針毎に近づく運命― 私は

こゝ一月の後には此慈愛深い母の許を去つて、他家の人とならなければならぬ。人に後指さゝれる樣な事があつては、亡き父樣に申譯けがないからつて、先々の事迄しみ〴〵訓された言葉は、深く胸に銘じてゐる。苦しい中から身に餘る仕度をして 出して下さる母樣の御苦心を思つて胸は張り裂けさうだ。外にはかすかな蟲のなき聲がする。(芳逸)

夢の露子

京都　野村もと子

やうやく退院を許可されし嬉しさに、そと寢臺より降りみるに、足元ふら〴〵として、胸の動悸も烈しきに、今更身の重態なりしを悟りつ。力なく坐すれば、母樣と聲して走り來るは露子なり。懷かしやと双の手に抱きしめ、見れば、何處となく面痩せて見ゆるに、哀れさ增りて叔母樣は可愛がりて下さるや、どこも惡うは無いかと問けば、昨日は二階よりおちたりと云ふ、驚きて、怪我はなかりしか、爾にて二階へは必ず上り給ふな、今より母も降りて和女と遊ばむといへば、又なう悦びて歸りには動物園にも連れて行きてよと罪なき風情得も云はれず。飽かず見守りたる折しも、廊下に響く氷割る音にふと目覺むれば、今見し我子の影もなく、寂寞たる室の中 電燈のみ徒らに輝きて、花瓶の天竺牡丹頭重げにゆら〴〵と紅の露を宿せり。(芳逸)

あぶら繪

長野　伊都子

名も知らぬ西洋の草花 數多芝にまぢりて咲きたる中に、おごそかに建てられたるは チャーチなり。今しオルガンの音に、信者の聲も交りて朝の寂寞を破りし所ならむ。一人の婦人の 淡ピンクの服を裾長に着

なし、ボンネットには白ばらを優しう飾り、愛に充ちたる その眼はおくれがちに附き添ふ 可愛きベービーの面に注ぎ、無言の中にやゝせくやうに 手を引きて石段に片足かけたるは、げに神々しき姿にこそ、これぞ去ぬる年 秀穂が御歸朝の節の我土産なり。今日朝よりしめやかに秋雨降りてハラ／＼と木の葉を打つに、ゆくりなう 昔を憶ふ。秀穂が大なる希望と其愛とを葬りさりたるは 今日の如き日なりしよ。一枚の此油繪は今は永久の形見となりぬ。吁。

暮れゆく夕

大阪　多津子

もう六時。びつくりして針數を改め、手早く片付ける。今日はあまり一心に仕事をした故か、頭痛がする。一寸 鏡の前で前髪直し小窓開けば、サツと吹きこむ秋風さむく。夕日は今し西山に消え、鮮やかに色どられたる紅の雲も、次第々々に薄らぎ、やがて ほの暗くなり行く。

晝間氣付かなかつた向ひの屋根のしのび垣から、まづ白の花が折々吹く風にひら／＼と、ちやうど小蝶の舞ふよう。烏は西から東へと鳴き過ぎた。

ひとしきり、騒々しかつた水くむ音も今は絶え、名も知らぬ蟲、哀れをそへてすだく。

地震

神奈川　瓜香

午前五時といふに、一寸目をさますと、目がふらふらする。天井の板目が妙に動く。臺所の方でたゞならぬ物音がする。釣るして おいたランプのホヤと笠が當る音も聞える。地震だなと感つたので、傍に寢て居た、祖母を起して、「祖母あさん、地震だネ」といふと、祖母は最う目がさめてると見えて、僅かに頭を動かして何とか言はれた樣だつたが、はつきり分らなかつた。フト氣が付くとセコンドの刻む音も絶えてゐた。

秋の社

東京　若紫

きざみ足に敷石を傳つて社殿の下に額いた 雛妓二人は、手拭で巻いた細肩を、同じ樣に右の端において、一心に何か祈願を籠める。柏手三つ。

鈴をガラ／＼と鳴らして、雙に散つた銀杏の葉をソツと拂つて靜にたつた。紅入友禪の對の長い 袂を朝風になびかせて、輕い足音を殘して石段を下りて行く。參詣人の絶えた社殿の奥が神鏡にキラ／＼輝き、鳩は淋しげに鳴いて居る。

ふさはしからぬもの

三重　あそやぎ

面に小波たゞよへる人の、廂髪高くルイザ巻などに結びたる。美はしき少女の、袖短き衣きたる。切下げ髪の後室の厚化粧に襷かけて忙しげに水仕事せる。半ば軒傾ける家の表札に、何殿とか、何男とか いかめしき名の記したる。手には肩上げなどほころびとれたる 見苦しき衣着せ、己れは流行衣裳まばゆく、これみよと許りにあたり拂ひてゆくいとあさましく。又娘にのみ、頭より足の先まで寸分のぬけめなく。目覺むる許りよそほひさせて、母の後より小尼にかくるやうに、從ひゆくなどふさはしからずといふもなか／＼おろか成りや。

焼栗の香

相模　廣田糸子

お父様は役場の村會から未だお歸りにならない。春夫をはじめ光子や道子はキヤツ〳〵あばれる事あばれる事。ランプの下へ行く度にヒヤヒヤする。お母様は「お父様がお留守だとこれだから困つて了ふ」つて仰しやる。ほんとうにお母様の睨み位では却々きかない。不意に火鉢の中でポンと一發。同時に燒き栗の匂ひがプンと鼻をうつ。「あ、燒けた、燒けた」つて春夫が飛んで來た。「兄ちやん頂戴な」、「あたしにもよう」、「ちやうだい、ちやうだい」、末の弟までお母様の膝の上から紅葉の樣な手を廣げる。「あ、危ぶない、光子、鐵が〳〵、土瓶がひつくり返へります、ほら〳〵」、土瓶よか人の方がひつくり返へる樣なさわぎ。又一發二發ポン〳〵灰をまどらしてはれ上つた。

たそがれ

信濃　村田ふみよ

金色の雲を漂はせた西の空を眺めながら、こし方を想ひめぐらした。今はなき人の數に入り給ひし姉君は、こんな夕が大好きだつた。「文さん散歩しない事」つて然す私を誘ひ、「夕日はかくれて道ははるけし」と小聲に歌ひながら裏庭から桑畑をわけて野原に出るのが例であつた。あのやさしい姉さん、いつも口元に笑みをたゝへて居られたあのやさしい姉君は、私の行くのを待つて居らるゝだらう。夕星が見え出した。姉樣はあの星のあたりに居らるゝだらうか。私は夢の樣に昔をたどつて居ると、金色の雲は消えて仕舞つて、いつか身のまはりは暗くなつた。鐘の音は遠くひゞいた。

晴れた朝

沼津　大川文子

しと〳〵と降る陰氣な雨に閉ぢ込められてゐた裾野町は、今朝初めて生き〳〵した姿を出した。富士は秀麗の容姿を澄み切つた北の空に現はして、白ろい雲がフワリ〳〵頂上の空を西へ流れる。垣に添ふて咲いた紅芙蓉の花が、微かな風に顫えてゐる。街の瓦屋根は午前の日光を受けて、和かい光りを奉げてゐる

裏の樅の梢へ少さな渡り鳥が深山來て、悲しげにピイ〳〵鳴いてゐる何處かでかん高い百舌鳥の鳴聲がした。渡り鳥は一時に舞ひ立つて、海岸の方へ飛んで行つた。私の眼は漂渺の小鳥の影を何處も追ふ。……南の方へ。

破れ寺

大磯　道子

秋立ちて、千草にすだく蟲の音の、しだい〳〵に細りゆくきのふけふ大磯の秋は一しほ淋しい。

高來山のふもと、住む人とてもなき破れ寺に、いつ頃か朝夕讀經の音がする。

廿歳を越えぬ花の姿に墨染衣まとひし美しい尼様だとは村の若者等のうはさ。

破れ寺の内、あれは幸を捨てし若き尼僧がこゝろの中はいかに。

母の慈愛

東京　もと子

草も木も無い、黄ばんだ曠野を、私は俯き勝ちに辿つた。影のやうなものが、す―つと前をよぎる。不意怖れのまなざしを上げ 朦とした刹那、其影はつと遠んで、私の手を執つた。眉間をうつた。あれつとはつきり眼を開いた時、「大分熱があるれ」と母様のお聲。柔かいお手は額に加へられてあつた。

「丁度三十分經つたよ、さあとのお藥りを」と仰言つて枕元のをついで下さる。やう〳〵身を起し 、眼をつぶつて、顔を顰めて、ぐつと飲み干した時、左の手には、今 剝かれた斗りの林檎が、軽く載せられた。

私は何と無く、目が熱く成つて、其儘うつ伏して了つた。

故鄕

廣島　小川苔花

廣い野原小さい沼。可愛い流を思ふてどんなに 私は故鄕を思つたか知れぬ。然し今歸つて見ると、私の夢に載つた様な故鄕ではなかつた廣い野原や小さい沼は一面に芋畑と稻田とに變じ、可愛い 流れは劃然と新らしい御影石で築上げられてゐる。其れが私には限りなく 寂しかつた。山の重なり合ふた麓の邊に、茅葺の棟と 棟との間に、柔らかい秋の日光に輝いた瓦葺の私の家が見え出した。私は 今更のように小走りした。麓に來た時は全身に汗が濕然と出た。姉ち 去年嫁られた義姉さんにはどんな挨拶をしようかと心配になつた。義姉さんは 私の想像と違つて居た。私は兄さんの御顔を見て急に悲しくなつた。

小春

駿河　若葉子

空は青く澄んで、眞綿のやうな雲が浮いてゐる。何といふしづかな日であらう。百舌が頻りに友を呼ぶ。緣側の障子を虻がさ〳〵と這つてゐる。緣側で妹の守をしながら編物をしてゐると、こと〳〵と如露の水を吸ふ音がする。お祖父さんが 菊の手入れである。遠くの方で飴屋の太鼓うつ音が聞える。ドン〳〵と。「お祖父さんいゝ日れ」といふとお祖父さんは聞えないのか默つて頻りと水を掛けて いらつしやる。山茶花が一輪音もなくくづれ落ちた。

寒き夜

東京　竹內とみ子

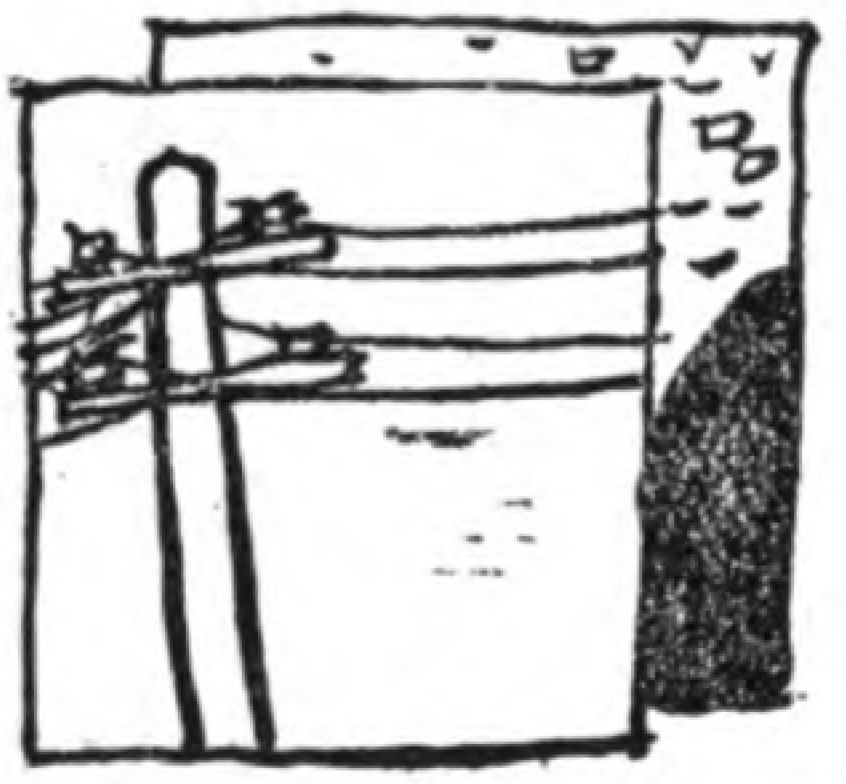
都大路を木枯の吹き荒ぶ夜中、私の車は往來の雜蹈を後に、母様に續いて萬世橋を渡つた。寒くて〳〵、ショールに埋れた頬からかけて手も足も氷つてしまひさう。街頭に聳え立つ大時計は、十一時を打つた。横丁へ入ると、四邊は眞暗に成つたあらゆる顔が 走馬燈のやうに消えては又現はれる。不意にヒユーッと一陣冷い風が幌をゆすぶる。氷つた途を走る紙屑や落葉の干乾びた音がすごい。家に近づいた頃は、街燈の光冷く、家々は皆小さく閉ぢてあつた。

秋の月

弘前　衣子

淋しさに宿を立ち出でながむれば
いづこも同じ秋の夕ぐれ

さてもよくうがてる歌かな。桐の葉ごしに月見えて、咲きおくれたる野菊の本にわびしげにすだく蟲の音も、いとゞ物あはれに聞ゆ。あゝ思へば昔の我のそゞろ戀しさ。月は霞におほはれぬ。



書簡文

秋の田舎より

長野　あざみ

君子樣、御無沙汰致して濟みません。けれども御忘れ申すなんて、夢さらそんな氣は御座いません。都を去つて、元の田舍娘に立ち還りました私の今日此頃は、毎日々々冬物とほろ綴くりで手の休まる暇も御座いませんが、華やかに過した去年のなつかしさに獨り泣く夜も御座います。けれどもそれもこれも運命とあきらめて出來る限り母の手助けを致して居ります。紅葉した野山、すつくりと出揃つた稻穗、黄金色に熟した柿の實この美しい自然の色彩、都詩人のあこがれる豐かな田舍の秋の景を、せめてもの慰みに……。これからは追々收穫時に向ひますから、又も忙しい思ひをしなければなりません。何卒當分の間の御無沙汰は、寛き御心もて御許し下さいまし。木の葉散らす朝夕の風にも御身御いとひ遊ばせよ。《壹等》

婚約を友に報ず

王子　紫房

氣清らかに空高く澄める秋の日を、如何に過させられ候や、とかく御無沙汰のみ申上居り候得ども、別に御變りもなう入らせられ候御事と存候さて此度は思ひがけなくも秋野樣の御世話にて、廣島の隊付士官にて大尉吉井と申す者と婚約成り立ち、來月上旬に彼の地に於て式を擧ぐる事と相成り申候。誠に突然の事とて何と無く夢の樣にも考へられ候得ども一生中の大事なれば、なか〳〵に夢として相變らずの樂觀も申しては居られず、あれもこれもと母や伯母などよりの命令烈しく、足元より鳥の立つやうに御座候。いよ〳〵私も家庭の人と相成候上は、何卒此上にも御助力下され度、何れ御暇乞には伺ふべく候得ども、先は取敢ず御報知迄。かしこ《秀逸》

都會の友へ

牛込　平塚白百合

稻の穗のゆらぎも見えず此の秋は水にあけたり利根川の家。

都會の渦卷にまかれない土地はこんな大水で一層淋しうございます。夕方出て見ましても稻のゆらぎも見えなければ、火影も疎らでございます。

同じに學んだあなたは理想の音樂家として着々その道を進んでゐらつしやいますのに、私はもうフッツリ思ひ切られればなりません。私も今迄はミユヂックの嘆美者でした。さうして音樂を以て天職と自任してゐた位ですから、空想も理想も人一倍大きうございました。

けれど洪水といふ暴君に藝術の血まで流されて了つたのでございます心機一轉して田舍妻に甘んじて了ふのが、私の持つて生れた運命ではございますまいか。せめては寂寞な私の心に樂うつ人となつてお勵まし下さいませ。《秀逸》

朝鮮の兄上樣へ

仙臺　佐々子小萩

寫眞が昨日屆きました。色の白い、鼻筋の通つた、眼のパッチリとした鮮子、女の子は父親に似るといふが、ほんとに兄さんにそつくりだわ。御安產だとの手紙が參り、そして女だと聞いた時の私の喜び。……私達兄弟八人の內、女は私一人だから、平常女の身內が欲しい〳〵と思つてゐましたのに、まして私の始めての姪でせう。寫眞を見て一層嬉しふ思ひました。名も日韓併合の紀念に、朝鮮で生れたので鮮子とお名附けの由、父上樣も嬉しまぎれに、每日寫眞を傍にして、親戚廻をしてゐらつしやいます。私早く可愛い鮮子が抱いて見たうございます。姉上樣にも宜ろしく申して下さい。

北の國より

丹後　永瀨初音

こちらは每日雨ばかり降り、まるで五月雨時のやうです。たゞ嬉しい事には、今日始めて松茸賣りの聲を聞き、秋らしい感じが致しました。何でも土地の人に聞きますと、今頃こんな雨天が續くと、寒くなると雪が一間先も見えない程降り、二尺近くも雪が積るとの事ですから、暖國から初めて來た私は、早くさうした時が來ればよいにと、好奇心を躍して居ります。

秋の夜友に

鈴木白萩

風なきに散るゝ紅葉、眠るゝ白萩、さては小川の流れに影を宿す一本の野菊にも無限の妙趣が溢れてゐます。深山の土の子が胸にも何となう波立ちますものを、あはれそのかみはクラスの詩人と持囃され給ひし御身の、楓樹美はしいお書齋の丸窓に凭れてのお想ひは何、歌か、詩かものし給ひしいみじきお文ちとお洩し遊ばしてよ。窓にさす月影、哀れな蟲の音、寂しい靜かな夜頃です。遙かの地にこの月影を仰いで被居る御身を想ふと、堪へられぬお懷かしさに、想ひは過ぎ來し方。嗚、あの窓に共に仰いだこの月影。昔が戀しくなりますのね。お體を御大切に。左樣なら。（貳等）

妹の許に

露子

今日は御許樣の修學旅行日。當地は十時頃から雨となりましたが、御地は如何でした。午前三時出發とありましたから、私も同じ時刻に起きて旅行中恙なきやうにと、氏神樣へ參詣しました。當地でさへ夜明け方の風は中々冷たく感じた程ですから、若しや風を引きはなさらなかつたかとお案じ申して居ます。明後々日頃は旅行先の珍らしき草花、木の葉とり〴〵に封じ込めての樂しきお手紙が舞ひ込むことゝ、それのみ樂みに待つて居ます。病む足引摺りながら歸つては、誰もよく歸つたかと言つて下さる人もないとの泣言は、今年はよもや出ないでせうね。ホヽヽ。不順の候、精々御用心の上御勉强なさる事を故鄕の空で日夜祈つて居ます。（參等）

反物に添へて

伊豆　不二子

五月雨の頃菅笠かむつて、一緒に植ゑた、前田の稻は、もう黃金色し

て來ました。御變りなく御勤めですか。うちでも、みんな達者ですから安心してください。

御申し越しの着物は、やうやく、今日織れましたから、早速送ります。都に住める御許樣には、氣に入らないかも知れませんが、不斷着のつもりですから、少し地味に織りました。下着の方は糸が染り次第織ります舂遲しは、當地には好い色合のがありませんから、そちらで買つて下さい。時節柄風引かぬやうに、御自愛なさい。

友に受驗をすゝむ

大和　靜　香

操さん何事です。また御氣の弱い事を。今更そんな事を仰有るとは……。あなた見えなのいですか、彼の燈臺を。あなたの前途には光明が燦爛と輝いてゐるぢやありませんか。どうせ荒き汎風を凌いで越さなけりや、其下に達する事は出來ません。崖に立つて渡らうか、何としやうかと躊躇つて許り居ては、何時まで經つても渡る事は出來ません。思ひ切つて勇氣を出して、洋神と戰ふ決心、意氣組で御出かけなさい、目標す燈臺迄、早く〳〵、悠圖々々しないで。幸ひ風も大分和いで來ました。浪も穩になりました。此の好機を逸せず、早く〳〵。

學窓より故郷へ

信濃　あ　や　木

一昨夕無事入舍致し、同室の皆樣とも親しく相成候間、何卒御安心下され度候思へば、かくも完全なる學窓の下に、何の心配もなく物學び得る身となりしも、みな母君と姉君とが蚤々ならぬ御苦勞の賜物あゝ何と御禮申すべきや。唯だ此上は、二方樣よりたまはる千萬無量の御情をゆめ忘るゝ事なく、又我が昔日の歷史をも忘れずに、尊い學業にいそしみて、一日も早く目的を達し、幾分にても御心安め參らせん覺悟に候。日日にお寒さのまさり行き候へば、母上も姉樣も御大事にして、お風など召さぬ樣、御用心遊ばされ度、呉々も念じ上げ參らせ候。かしこ。

親しき友に

美濃　藤　井　操

久しく打ち絶えて御顏も拜しまゐらせず、朝な夕なに御慕ひ申し居り候。私もこの田舍に參り候てよりは賑がしかりし都の事ども思ひ浮べ、つく〳〵と山がつの命水らふてふことの理なるを悟り侍りて候。頃に閑靜になりしことゝて、うたゝ寂しさを覺え、栗の實の二つ三つ落つる音にも驚かるるゝほどにて、徒然の日を送り居り候。

美代子樣には、御勉學中にて、御暇とてはおはすまじとお察し申候へ共、可成く御都合遊ばされ、來る土曜日より日曜にかけ、御越し下され候て、お美しきお姿を御見せ下されたく、御待ち申居り候。なほ其折には栗拾ひ茸狩の御案内も仕るべく候。かしこ。〔秀逸〕

乳母の娘へ

東京　竹　內　と　み　子

富さん、愈々明後日の一番で行きますよ。思ひがけ無く母樣からお許しが出たので、私何だか夢のやうよ。昨日からかゝつて集めたお土產の數々、最う悉皆揃ひましてよ。お別れしてから最う三年。彼の時稚兒輪に結んで居た富さんの髮の毛も、どんなにか長く延びたでせう。乳母やは何時も達者ですつてね。嬉しいわ。此方でさへ最う霜を見た位ですから、お山の櫨の木は眞赤でせう。懷しい土の香や、其の上に置く霜を踏

み、美しい草紅葉を分けて行く時の樂しさは、まあ何樣でせう。おや、最う十時よ申したい事は澤山あるけれど、明後日の今頃、皆で寄つて、ゆつくり話しませうね。

別れし師に送る

小石川　小川すみ子

校庭の秋草は日に増し、しほらしく相成候。今日友人と「時はよくなりたれども、詩情は平凡なり」といふことを、申し合ひ候ひしが、其次ぎには、また「ましてや、先生は去りて、ゐまさず」と申し出でざるを得ず候ひき。

古都の月は、如何に先生を照らし候ふやらん。

留學中の兄へ

岐阜　野菊

𦾔去り紅葉散つて秋も漸く老い候。游路遙けき異鄕の空に旦暮物學びし給ふ御懐しき兄上樣には、如何御暮し被遊候や、其後は暫くお便りもなきまゝに、一同御案じ申居り候。こちら何れも變りなく、殊に本年は母上樣も例の御持病も起らず、極めてお達者にて日々家事の手傳致し居られ候間、何本御安心被遊度候。新屋の敏夫樣、度應に御入學。靜子樣もはや母樣に成られ候、日増しに寒さに向ひ候折柄何を申すも旅の空、呉々も御いとひ被遊たく、一日も早く錦着て歸り給はん時をのみ御待ち申居り候。母上、姉上樣より宜敷と申され候。先づは御伺ひまで、かしこ。

滋賀の友へ

橫濱　たき子

露子樣、入景の繪葉書御送り下され、嬉しく拜見致しました。早速アルバムに挾みました。

故鄕を遠く離れて、只一人旅の御身では、どんなにかお寂しいでせうね。雨の降る夜など尚更貴孃を慕ふて眠られぬ事も有ります。又月の夜などは御好みのハーモニカに旅情を慰めて居られるでせうと思ひ、私も持ち出す事も御座います。寄宿舍の窓から月を眺めて、語り合つたり、又歌ひ合つたり致した事を思ひ出すと、殊に戀しくなります。

平常から御弱い御體質に居て御病氣なさらぬ樣呉々も御注意を祈ります。次の御便りを今から樂しみに待つて居ります。

別れし友の許に

千葉　櫻井幸子

旅ゆく駒の足搔早く、そもじ樣に御別れ申してより、若葉の春も夢の如くに、立ち去りて、紅葉色めく秋の景色と相成り候。さて西と東と別れては、又昔の如く朝夕御目にかゝる事も相叶はず、年月をふるまゝに御懐しさの情、一入相増し申し候。されば昨今はたゞ日頃賜はりし御玉章繰擴げては、御やさしき御心をうれしみ居り候。何本白雲たなびく高根の空を隔つとも、相變らず、お便りなし下され候やう御願ひ申しあげ候。

前途の方針に迷へる弟に

千葉　山口秋子

心のもだへを小さき胸に惱み餘て、此姉に御相談下され候段嬉敷存じ候。扨てお答へ申上ぐる前に一言申したきは、疑惑租身をそこなひ、出世の妨げをなすものは御座なく候。士官學校に入學して一身を國家に捧

げ給ふも宜しからん。文學に志し名を擧げ給ふも頭腦好き御身には、ふさはしき御事なるべし。されど〱、御身は商家に産れ給ひし一粒種に候はずや。さすれば商業に從事し給ふこそ宜しかるべしと存じ候。兩親もさう望まるゝとの御事なれば、猶更左樣ありたきものに御座候。孝は百行のもと、何事も兩親の命に從ひ給へ。

よく〱御勘考ありて、商業學校に入學し給はん事を父母と同じく、此姉もお勸め申候。まづは御返事迄早々。

小心なる弟へ

陸奥　若竹

御手紙確に拜見致し候。意外の事情に驚き入り申候。さる六ヶ敷き中に御勤めなさる御身の御苦心如何計りと母上も私も涙して御察し申候。併し御憤慨もさる事ながら、一年に足らずして辭職なさるは信用上如何かと御案じ申候。それに先頃關樣より模範的教員を得て、非常に好都合なる由承り、初めてなればと御心配ありし母上は包みきれぬお喜びを遠き兄上にも御洩しなされ候矢先、事情は十分御察し申候へど、能く〱御考へ下され度候。古き諺に喬木は風に折らるゝとか申候はずや。此難關御切り拔けなされてこそ御身の眞價を表する事も得候はめ。呉々も中傷などに心痛められず、正々堂々御勤務の程切に願ひ申候。母上も御心配遊ばされ候へば、返すぐも御身大切に、心ひろく御暮し下され度候。

お願ひ

山形　阿部英子

兄樣、私御願ひがあるの。今日ネ、私が千葉樣の御宅に御伺ひしたら姉さんの御話が出てネ、今度こそはとたのしみに待つて居た卒業もなく又失敗つたさうですの。

それで、若しや兄樣があきれて、誠さんの學費を中止する樣な事があつたら、どうするだらうと、大變心配して居てよ。

實際千葉樣も御氣の毒ネ。不憫で〱たまりません。先の幸さんに笑はれない樣に、此人丈けは立派に卒業さしてやりたう御座いますワ。どうぞ兄樣。私御願ひですから、最う一學期だけ學費をつゞけて送つて下さいな。千葉樣どんなに喜ぶでせう。誠も、いづれ叔母さんも御願ひに上るつて居ました。

丘の家より

羿　鬱金香

芒の穗は到る處の野に岡に、風に靡いてゐます。御承知の通り、私の家の窓から見える金剛山は、遙か南の方に、氣高い姿に聳えてゐます。裏は例の櫟や椎の雜木山で、此頃は毎日カサ〱と、秋風が喧しう吹いてゐます。椎の實、椋の實などは、カラ〱と飛んで、昨日なんかも、裏山の社の石段で、弟や妹が拾つて來た椎や銀杏は、大笊に入れ切れない程ありました。

夜になると、家中の者が皆、圍爐裡に寄つて、栗などを燒きつゝ、盛に話します。寢る頃には能く、裏山の雜木の葉擦の音に交つて、空高く啼き過ぎる渡り鳥の聲が、遠くかすかに聞こえて來ます。こんな時はいつでも、都に在るあなたの事を慕ひ出します。



日記文

菊日記

信濃 あや子

濃い霧が下つた。桑畑から笊を提げて來る下女の姿が ボーッとして何となく神秘的。

十時頃、西山樣から赤飯を頂く。今日は舊暦九日で菊の節句です。黒地菊散しのお重に紅白二枝の江戸菊を そへてある。パタリと明けると底にも白いのが三四輪あしらつて有る。誰方の御意匠かしら。床しきお心の程もほの見えて、嬉しくなつかしい。

午後、髪を結び入浴。秋の水は更に澄みきつて 美しい。いたづらに白菊の花片をむしつて、お湯に浮べて見た。

夜は早く部屋に引込んで、和歌を考へる。前の雜木林で風がしきりにさわぐ。（秀逸）

結び瘤

東京 若栄

起ろや否や、郵便ツ。的切り千曾樣からと思つて、室を飛び出すはずみに、いやつて云ふ程 八重と鉢合せ。朝つぱらから縁喜でもない。四通の中一つも私の爲はなし。がつかりしてしまつた。

お稽古に行かうと思つて、帶を締めなほして 居たら、帶止めに結び瘤が出來て、何うしてもほどけない。自然に瘤が 出來るのは人から何か貰ふ前光だつて、八重がこの間言つたから、ためしにとそのまゝにして置く。

お晝から叔母樣がいらしつた、いよ〳〵 結び瘤の利目があるかと思つて居たのに、今日は私には何のお土產もない。八重の言ふ事も當にならないと思つて居たら、夕方父樣が靜江にやる物があると仰有るので喜んでお部屋に行つて見たら、習字の御手本を書いてやらうと仰有る。厭だ又習ひ出さなければならない。こんなものを頂く位なら 今朝結び瘤をほどいて置けばよかつたと思つた。（三等）

午前

東京 竹内とみ子

二三日前から灰色に曇つて居た空が、思ひがけ無く からりと晴れて絣目の美しい花壇のあたりを四十雀が 枯れ〳〵の菊に突つた鬼灯の實をつゝいて居る。明るい南窓の傍で 正ちやんの羽織を仕立て上げながら、針の序に疊紙の中から縮緬の小切れを出して、くゝり猿を七つ程拵へて見る。緋紅色の少し大きい切れがあつたので、草色の線を付けて香守りの柿を二つ縫ふ。是は濱町の姉樣へ差し上げるつもり。蠅が一匹障子の棧をかさ〳〵と這ふ。糸のついた縫針で ひよい〳〵と追ひかけると直に捕つて了ふ。ふいと、愚圖々々して居る間に 來月は最う叔母さんに成るんだなと思ふと、何とも云へぬ嬉しさが込み 上げて思はず笑みが頬に上る。（一等）

木犀日記

牛込　平塚白百合

秋雨がシトシトと絲の色をうすめながら降つてゐる。

葉鶏頭が枯れて、ダリヤが色あせて、紫苑の藤色とコスモスの華々しい花が雨に弄ばれてゐる。池の金魚は洪水の時流されて一疋もゐない。水の底にうす明のした空が光つて、木犀の香がやんわりと解けてゐる。

夜雨が上つて、シーンと蟲の音が冴える。

障子を細目に開けて、木犀の香をかぎながら、紅葉の實の香に親みふけた。青い月が押し出された様に昇つて冷えてくる。乳母がそつと傍に置いた羽織をはをつて十一時迄よんだ。芭蕉にあたる風が荒びて來た。(秀逸)

温泉日記

神戸　ゆかり

三日　朝、魚賣り來り、大鮎一尾五錢と言ふに急ぎ求めしが、後にて宿の主婦はゆるゆる直切り、三錢にて買ひし様なり。午後夫と湯へ行きての歸るさ、繪はがき屋の前にて先日汽車にてお近付になりし方に逢ふ、進めらるゝまゝにお宿にあがり、やがて、お暇して立てば縁に置きし手拭乾き居たり。

四日　風強けれど殘り日少ければと思ひ立ち、二人にて　船借り、玄武洞へ行く。川面の風殊に強く、遊船など影も無し、風にむせぶ尾花が岸へ吹きはられしも興度。洞の邊、今日は人影もなく、風の音のみいと寂し。洞の内殊更寒く、風ひても〱遂に中には　得入らず。寒らし氣に見らるゝ夫を促して歸る。此度は行手を風帆にうけ、夕日に色づく田山川を心地よくも走りに走る。

洗張の一日

牛込　華　子

起きて見ると、何うやら晴らしい。昨夜の雨は、白萩の葉に滴つてゐるけれど、大丈夫お天氣らしい。今日は思ひ切つて張りませうと、襷もお化粧もそこ〱とすませて、「フノリ」煮るやら、張板ふくやら。折角の日曜を……と憎いような氣もする。追々日が高くなつて、暑い位手拭を姉さんかぶりにして、赤い襷かけて、昔の趣を滑るまいと、こは〱張板持つてあるく姿は、昨日の舞踏靴を穿いた紫式部と　大違ひ。午後二時、大層暗くなつて來たので心配した。秋の景色は七化つて、誠にあてにならない。母様は張れた切を疊むで下さりながら、借着せうより洗ひ着しやれといふ事がありますよ、いくら粗末な着物でも　自分で張つて着たら、心地がいゝでせうと。仰有つた、私は此一言で、今日の骨折甲斐があつたと誠に嬉しかつた。(二等)

雨漏り日記

松山　露　子

降り續く長雨に家も屋敷も氣も心も　腐り果てた。今日は一月振りで太陽を仰ぐ事が出來た。庭矢車草の苗の成長を見ようと思つて　菜園の方に行つたが、部屋の壁に雨漏の痕が見える。こは大變と急ぎ歸つて部屋の押入の中をあらためた。一番目の本箱を出したが無事。二番目、三番目無事。四つ目の底が濡らつて居る。中々重くて出せない。弟を呼んだ弟は姉さん白蟻が居ますと叫んだ。あゝ仕舞つたと思つて、早く〱中をあらためてといつた。思ひ出多き年の日記帳は　雨漏りの音を被つて

寫し直す事も出來ない。白鳩は木箱の後から隧道を作つて、中に入り四肥鋼を蜜食して居た。

その日〳〵

徳島　中村玉野

二十日庭のコスモスが散つて、菊が一輪二輪咲き初めた。隅の方に白い白粉の花がひらひら散つてゐる。蟲の聲が減つて、これから段々霧のチラ〳〵降る日が近寄るのです。私は今日から裏のついた袷を着ました。が、ポカ〳〵と暖かい日などには額から汗が浮れさうです。

二十一日わづか一日違ひで、もうすつかり冬らしくなりました。朝など袷一枚では寒い位。風は冷々して濁つた空から白い雪でも降つて来さうです。菊も段々咲きかけたが、寒さが激しいので、いぢけた様に見えます。朝は背物を満載した車が絶間なしに通ります。昨日迄鳴いてゐた床の蟲も、もう今日はスツカリ鳴かなくなつて了ひました。

供養の日

豐原　山口天都子

蒼く澄んだ秋の空には、軽い空氣が充ち満ちて、晴快な日であつた。和尚様のお經が終り、墓参も濟んだ夕暮時分、手傳の人も皆歸らうとする時、獨り取り殘される氣がして、座つて居る所が自分の家でない様に思つた。極く親しい、隣の春子様が居殘つて、親切に其後始末といつてせつせと働いて居るのに言葉もかけずに茫然として居た自分は、きりきりとした春子様の支度に見とれたのだ。あの春は如何位するのだらう、春様のお佛様は何んでも買つて與れる、と、淋しげな下らぬ思ひが浮んで、春しも今頃迄……と幼き記憶を呼び起して、ほろりと冷き涙か頬を俯つた。十三年前、母の死んだ今日は晴天であつたらうか。

花日記

駿河　若葉子

二日、雁来紅が眞赤になつた。火を點けたやうで美しい。細い一莖を折つて一輪挿にすると、見る間に萎れて了つた。枯根はもうすがれて蘆の尾花が眞盛り。花といふ種のものでもないが、何となく捨て難い秋にはなくてならぬ草と思ふ。よく晴れた日で裏の柿の樹で頻りと百舌が鳴く。

三日、珍らしい小春日和。コスモスが始めて咲く。西洋の花ではあるが、日本の庭にもよくうつる。あるかなしかの風にひら〳〵と花瓣の揺れる所なんぞ繪のやう。西洋館でも建てゝ家の前へ植ゑたらばなぞと思ふ。この頃、庭の木犀の香が仄かに書齋を訪づれる。

四日、秋海棠が咲き盛る。淋しげな花ではあるが、何處かに趣がある其の葉の風采顔なのが面白い。山茶花は小春日にふさはしい花である。編物でもしながら、ガラス障子を透して、この花を眺めるのは、又となく嬉しいもの。今日も長閑な秋日和、時々思ひ出したやうに田圃の鳴子が鳴る。(秀逸)

御寫眞

大和　靜香

今朝叔様から御寫眞が來た。早く開け度くて〳〵、イラ〳〵したが、伯様の手前さうもならず御辭しした。まあよく寫つて被居ること快活な方だわれ」と被仰る。嬉しくつて〳〵すぐにも見たかつたが、よりけなく躊ふて針箱の抽斗へ入れた。と、美ちやんと武ちやんとが何ゥて原

けて來て「これどなた！」と五月蠅く訊く。「他家の方よ」。「エ、他家の方つてどなた、まあヘイカラね。」「他家の方だからあなたなどに言ふたつて解らないわ。」「まあ姉様の意地惡」。でもまるか良人とも言ひかねて精々と針運ばすもの〻、嫁入つてからの事のみ想像されて、ともすれば恍惚として手が休んでゐる。そつと飾の母様を見て、御氣の付かないのにやつと胸な下した。晩、この御寫眞を入れるやうにと寫眞掛を編む。

まだ見ぬ嬰兒

美作　田づ子

朝、良人を玄關に送つて後、茶の間に一人、色美しき友禪擴げて未だ見ぬやゝの着物仕立つべく尺度とりぬ。

つひ此の間までは、子供など抱へて、恥かしい、そんなもの入らすと思ひもし、誇りもしたる身の後一ヶ月と云ふがまても待ち遠き事よ。生るゝ子は男か、女か。良人は只だ男子をのみ好み給へど、女も亦よしと思ふ。

生れし子は學者たるべきか、はた御國を守る軍人か。又は父の跡つぐべき法官か。否な音樂家にもしたし、美術家にも、など思へば、却て一人のみにては心もとなし。五人も七人も欲しい。どうか無事に早く生れてよなど、よしなき事も思はれぬ。

祭禮前の一日

伊豆　不二子

お祭迄には、たつた、七日しかない。父様は、障子の紙つぎ、母様と家とは障子洗ひ、兄様は、裏の畑の手入を拜命なすつて、掘り、途々とお出かけなさる。歸りがけに、柿を取つて來て下さいと頼んだのに、返事もなさらない。また、洗ひ終らぬのに賑やかなる奥來猫の笛、現金な兄様、笛の音の止まないうちに歸つて入らつしつた。

でも、柿は籠に一ぱい。午後、紺屋へ、糸を染めにゆく。歸ると德島屋か來て居た。肉色羽二重の帯を買つて戴いて、去年以來の希望がやうやう叶つた。德島屋と入り違ひに、郵便の聲。兄様の校友會報と、私の女學世界、十一時床につく。

秋　晝

堺　爵金香

日當りの好い南の小縁では、山雀がしきりに、コツ〳〵と餌を啄いてゐる音がする。眼白が朗らかな、心地の宜い聲で囀く。障子を開けて縁へ出ると、秋の空は、水の様に碧く澄んで、白い小さな雲が、輕く浮かんでゐる。暖い秋の日を浴びて、コスモスの花は、垣の側に、鷄頭や鳳仙花と一緒に、明るい色に咲いてゐる。

籠の蓋を明けて、小鳥に餌と水とを入れてやつた。暫く其處に見てゐると、山雀はコツ〳〵と啄いては、籠の中を飛廻はつてゐる眼白はさも心地よささうに、羽を水に浸けては振るつてゐる。黄色い羽の身體の端に、小さい白い輪のある眼と、珊瑚の様な艶々しい嘴を見詰めてゐると、自分の身體が秋の光の中に溶けて行く様に、うつとりとなつた。

雨の日

札幌　俣野恭子

今日も亦雨。私は秋雨の日が大好き。あの冷い寂しい胸に沁み入る様な音を聞くと、堪らなく淋しくなつて、熱い〳〵涙が、胸の眞底から

湧いて來る。かういふ日は、屹度机によつて懷しい思ひ出に耽るのが私の癖。寂しい癖だねつて、兄様が仰有つたが、私は直さうとは思はない。

時子様にと思つて筆を執つたが、何となしに悲しくなつて、筆を噛んで捨てゝ了ふ。擴げた卷紙の上に俯伏になると、涙が滲んで頰に紙がつく。ふつと顏を上げると、ちらつと青い花が目に入つた。それは楓の下のじめ〳〵した地上に凋寒の露湛へた露草の花！　秋雨の日と侘しげな露草。淋しい懷しさが身に迫る。

嬉しき半日

宇都宮　牧たかこ

今日の九星は大吉日と出て居る。まあ嬉しい事。いそ〳〵と御座敷のお掃除を爲て居る所へ、俄に雀が舞込で來た。朝から何と云う景氣の好い事だらう。夫を玄關にお見送り申て、今日大掃除に當て居るので早速に取かゝる。お座敷から戸棚の隅から、お臺所の流の下迄すつかり掃いたり、ふいたり隨分骨が折れた。やれ〳〵是から髪でも結んでお湯へでも行きませうと思つて居る所へ、兼てお願して置た産婆の、角田様が入らしつた。早速見て頂く。「奥様お産は輕さうですよ」と云つてお歸に成る。結髪入浴手早く、すまして掃き清めた所を一人笑しつゝ見廻した。實に善い心持である。あゝ我身を勞した後に受得る快樂ほど尊い物は無い。私は毎日此精神上の快味を樂しみつゝ、惰情を戒めて務めて居る。

針持つひま

王子　紫房

一面に曇つた灰色の空が、何となく頭を重く感じさせる。今日は何うしても祖母様の道行を仕立上げれぱと思ふけれど、氣が進まない。

折よく澄子さんから雜誌を送つて來た。第一に目次を見ると秋六景が目につく。急いでページを繰つて讀んで見ると、どれもこれも面白いのばかりで胸がすくやうだ。中にも「蟲の音は」、丁度自分が此頃毎晩聞いてゐるだけに一層感じを深くさせた。「北伊豆日記」も早く讀みたいが今夜のおたのしみとして、心なくも再び針を持つた。

宮詣り

備前　横谷郁子

一日、鄕里から親父様が來られた。わざ〳〵千鶴子が宮詣りの着物を持つて來て下すつた。私は染み〴〵勿體ないと思つた。

二日、千鶴子がお宮へ詣つて歸ると、直に近所の少女を招んで饗應した。

三日、霜が下りてゐた。道理で朝晩の冷たく成たこと、夜なんど浴衣着て居るのが不似合に成つて來た。此夜始めて袷着した。母に成つたせいかしらね。

四日、愛兒を寐かせて、お隣りの幸ちやんと、鈴蟲松蟲を取りに行つた。二人ぎりで本統に寂寥しかつた。廣い天地は只蟲の聲ばつかり。私は何となう秋は懷かしいものだと思つた。松蟲が一疋取れた。



和歌

佐々木信綱先生選

一等

○ 美作 出雲井田鶴子

都戀ひし心も失せて今はただ針にしたしむ吾はをみな子

評 少女心に、ひたすら都にのぼらまほしく、都の學びや、都のちまたを夢にまで見つゝありしかど、父母の胴、家の都合などにてせん方なく、思ひなやめる果は、「我はをみな子」ぞと自覺して、裁ぬひの針にしたしめる、いとほし。

二等

○ 丹波 細見文子

露重うふれる徑に貝殼の放つ光りをしづやかに見る

評 貝がらの放つ光に目をそゝぎたる、新らし。

二等

○ 尾張 榊原みね

草の實を袴につけて歸り來し子が遠足の秋日和かな

評 結句すこしおちつかざる感あれど、よき秋日和の一日にてありしよと解して採れり。一二句に田舍の秋よくあらはれたり。

三等

○ 青森 小野寺みのる

なつかしき遠世の母の何事かのたまふ如く汐遠く鳴る

評 汐鳴をよめる歌は、かつても度々見しやうにおもへど、一首よくとゝのへるをもて採る。なるべく人のあとを踏まず、自らの感じをうたひ出たまへ。

三等

○ 福岡 大庭たか子

月うすし繪卷の中の人のかげわが前をゆくこゝちするかな

評 月夜の景、まこと繪卷のやうに美くしくうつし出られたり。

三等

○ 對馬 佐伯榮子

ひと戀し海のかなたの國戀し去りゆく船よわれ若ければ

評 濱山にたゝずめる對馬をとめのまなざし見るやうにて。

秀逸

○ 山梨 遠藤美野子

鐘の音もくゝもりがちに消えてゆく雨の精舍の叢樹立かな

評　二句、四句よく調和せり。

○　伯耆　佐々木とさ子

にほやかに花藻をひたし夕汐のさす夜となりぬ川沿ひの家

評　結句原作新婚の家とあり。さては汐のさす事いかゞ。

○　下總　月沖百合枝

神無月あけびたわわに熟れにしと消息たびぬ森の家より

評　此森の家あるじ、いかなる人にかとゆかし。

○　京都　文屋藻の花

ふるさとの山の麓の茱萸の實に渡の鳥むるゝ頃となりけり

評　古里をおもひやれる歌も、類想多きに過ぎたり。因に云、藻の花と云ふ如き雅名は今より後あらため給へ。

○　牛込　平塚白百合

灯ともせば小雨ふる見ゆしめやかに温泉の香しづみてこほろぎのなく

評　おちつきたるおもむきあり

○　相州　齋川嘉女子

ちぎれ雲西へ〳〵と飛ぶを見ぬ寂しき濱の秋風の朝

○　大阪　喜多山とも

美しき京の夢かも流れ來ん秋たつ橋の袂ぬふ浪

評　たくみなる歌。

○　東京　竹内とみ子

油さす彌宜のあと追ふ鹿の子の瞳を見れば父の戀しき

評　初句にて、一首活躍せり。

○　福島　中村玉野女

仄暗き崖のもとなる白き花ひとり靜かに散れる寂しみ

評　二句原作崖の窪地に。

○　岐阜　蝶子

富士遠く初雪したる額みせて夕月さしぬ穗すゝきの山

佳作

○　横濱　原瑠璃子

故郷の古井のわきの棕櫚のはな黄になる秋の夕まぐれかな

○　同　村瀬涙子

ほの〴〵と靄より白らむ大利根や蘆間の小屋に鷄の啼く

○　駿河　飯高ふし子

鹿笛の聲は谷間に消え行てさ霧わきくる山の御社

○　靜岡　樽いわせ

わが心まぎるゝすべもあらばやと白帆かぞへぬ秋の磯山

○　神奈川　白き花

ちからなきつばさひろげて秋の蝶靜かにねむる白萩の上

○　信州　湊紅子

秋晴や遠き御堂のいたゞきに輪をかく鳶を丘にして見る

○　本郷　末廣愛子

初秋やペンを走らす事務室の女の顏にうかぶさびしみ

○　尾張　三浦ぎん子

うたひつゝ病後少女が青疊縫る手も細し糸菊の花

○　大阪　荒木よし

ひやゝかな月光をあびはら〱と公孫樹落葉の淡き香をかぐ

○　牛込　つげ枝子

カサコソと落葉せゝくる夕風に誘はれ出づる胸の悲しみ

○　島根　喜代子

雷雨の一陣すぎて初秋の光しづかに街にあふるゝ

○　米國　村越光子

月かげを千々にくだきてせゝらぎの寒しさうたふしら萩の庭

○　大連　矢代濱子

海路行く君は今宵の月かげをいつくの濱の上に見るらん

○　門司　瀬吉雪枝子

風吹けば水草ゆれて夕闇に白き花浮く秋のみづうみ

○　伊勢　岩本淑子

海にすてむ胸にあふるゝたへがたきこの悲しさとこの淋しさを

○　佐渡　古藤英子

泣きぬれし君が兩頰の色に似る十月の野のまひるの靄よ

○　長野　岡部春子

拾月や小家取り巻くもみぢ葉の木立に群るゝ鵯の聲

○　弘前　貴合香芽子

母に似し面影人よいと戀し秋の港の町の夕ぐれ

○　越後　大竹功子

その情をめでて歌ひし兄君の靈祭り日に萩の花ちる

○　京城　中尾靈子

人しのび胸を病む子は今日もまた丘の木かげにもの思ふかな

○　大阪　波滿子

君なくば死ぬべかりける命とも病みし日偲び秋の雨きく

○　德島　升田輔子

ものうくも海邊にちかき窓により夕燒雲をつく〲と見る

○　堺　さくら子

丸鏡涙に濡るゝ瞳と青き灯とをうつしぬ秋の雨夜に

○　高輪　美江子

緋鷄頭さく垣根路や染物の藍の香にむす秋あつき日よ

○　橫濱　鶴松よし江

松蟲のなくなる庭の小松山月かげさえて夜は更けにけり

○　越後　大島たつ子

秋の夜や枯れし葡萄の葉がけより青なる月の淋しうもるゝ

○　越後　伊倉吉秀

朝ぎりに田のくろ行けば爪先きのつめたき頃となりにけるかな

○　渡島　小川白葦

彼の君か水に捨てたる紅き花なかれてゆきぬ夕さびしき

○　尾張　佐藤政子

風なきに紅葉散りしく窓によりなき子おもひて淋しさになく

○　新潟　嘉美子

顏洗ふ水も冷き秋の朝朝顏の花小さう咲きぬ

○　千葉　光子

枯れのこる尾花が末にいみしくもゆかり色こき野菊一もと

○　大阪　上田るい
星影に君のおすがた浮べ見ぬ蟋蟀すだく萩さく丘に

○　本郷　佐久間千代
朝夕やそと手さはりにわれながらあやしきまでのおもやつれかな

○　京都　忘草
哀れなる女の身の上思ひては涙せきくる木枯の夜

○　大阪　小泉貞子
初稲首筋寄う白鷺の巣立ちて見ゆる秋の朝かな

○　神戸　石川まき子
夜をこめて月のかげしぬたふとくもあはれに見ゆる白菊の花

○　信濃　静子
樹に縋り眠く谷間の澤底に沈む朽葉の時に過ぎて見ゆ

○　長野　金井はるへ
一人たび草まばらなる野をすぎてやせたる村を物思ひゆく

○　神戸　森木かつみ
東西屋の赤きのぼりをはたはたと打ちふるはせて秋の風ふく

○　備中　磯千鳥
華やかに灯かげ匂ひて流る霧の中にどよめく港町かな

○　名古屋　森井せき子
病める身を小窓によせて力なく小雨の園をながめやるかな

○　下野　野澤代志子
秋晴空高く小鳥の一むれか過ぎにしあとの野は靜かなり

○　備中　西玉子
薔薇の花眞白き上を青螢のさはに鳴きゆく朔月夜かな

○　金澤　菊子
柿の葉の籠つくりて喜びし我も昔は少女なりけり

○　新潟　吉田かなる子
亡き母に愛でられし日をしみじみと秋はことさら思ふにかなし

○　陸奥　若竹女
黄金波しづかにゆらぐ千町田に浮島ならし宮のしげ森

○　横濱　會田よし子
日は沈む別れてひとり沼澤のほとりに立ちぬゆく秋の風

○　福岡　後藤文子
秋くれば氣紫少女が絣の帯の目にこそ見ゆれ萩白き野に

○　福岡　坂口八千代
赤き實の柿と藁家と水草の白きがうつる小さき湖

○　陸前　浮草子
寂る時は君がみかほのうつりたる水の面に我はうつらむ

○　遠江　石野くに子
秋雨のしめじめと身にしむ如く淋しき夜を絲と睡りぬ

○　信州　吉池英子
初秋やしめり香みちゝはかなげに晝も音なく故郷の家

○　豐前　田鶴子
あどけなきちごの思ひよ秋の日に笑みやはらかきとこなつの花

○　越後　田鶴子
雨ほそき夕さびしみ戸にたてば小家めぐりて薔薇白うさく

○　岐阜　伊眞井露花
病みませる君が淋しき音づれに泣き泣く我を誰か知るらん

○　廣島　若花
熱も冷め涙もつきて只身ありたゞ身あり死を我は好めど

○ 山口 弘重紫鳴
切れて飛ぶ雲の行方や灰色のすゝむ運命に逼ばる哥は

○ 日本橋 津田千代子
月見草咲く夕闇をなつかしむ戀にやぶれし淋しき女

○ 栃木 鈴木靜枝
秋風に冷えゆくむねをいだきてはそとおもひ見るわかき日の夢

○ 東京 環枝
琴や尺八きゝて其主をなつかしみたる旅籠おもはる

○ 栃木 鎌田流子
くれがたを水汲みはてし井戸端に風たつ空のあきの色見る

○ 神戸 島村いそ
何となく胸やすからぬ夕ぐれを小まどによれば秋の雨ふる

○ 札幌 やす子
一つひらく絣とあぢさゐの絹傘よ繪にふさはしき秋はれの道

○ 美濃 右近
京の家やなぎに雨の細き日を桃われ結ひて若やぎにけり

○ 島根 青柳秀子
萱わけて鎌持つ人のあらはれぬ朝霧はるゝ川添ひ堤

○ 金谷 野の花
足らぬてふ事をば知らぬわれながら故なくもたゞ涙落つる日

○ 芝 眞崎靜子
風は吹く京橋の夜の青柳と少さき舞妓の赤き袂を

○ 三重 大西千代子
夕霧は海を掩ひぬ燈臺の赤き燈のみ寂しうぞ照る

○ 神戸 長谷川ふん子
雲に對ふ白帆の影も失うして波に秋立つ大物の浦

○ 吳 みなつくし
亡き母のかたみわかつとはらからのつどふ今宵を秋雨のふる

○ 宮城 野木ちとせ
いさゝかの物賣る家に小雨してかたへに咲けるいそ菊の花

○ 長崎 深見つゆ子
花芙蓉みだるゝ中になやましう立ちし少女を美しと見ぬ

○ 弘前 黄合佳芽子
水烟り夢と漂ふ草川や牛に水飼ふ菅笠の人

○ 同 上
遊戯の兒の歌悲し夕風に尾花露散る初秋の道

○ 出雲 白菊子
月澄みて蟲歌ふなる松かげに笑みて歌ふよ兒の笛にて

○ 越後 岩木よし
朝の月しら〳〵照す野に立ては秋のかなしみ仄におほゆる

○ 深津 和久かつ子
砂白き林に入りてこゝろよきま壺の海の遠鳴をきく

○ 木郷 谷藤美恵
萩月夜茶の峯越る若尼僧捨てにし眉の美しき人

○ 常陸 今泉ちどり
彼岸會や人足しげき門前の破れし築地に曼珠沙華咲く

○ 和歌山 崎山才子
秋空や少女がまとふ矢がすりの袖に似し日と思ふ朝かな

○ 久留米 楢橋はつ代
花たえて秋風そよぐきのふ今日何を友とし日送らまし



俳句

天

澁柿の皮むく夜のながさかな　長崎　深見つゆ子

地

朝寒み石のけ見れば蟹二つ　神戸　砧女

人

朝霧の晴れてひときわ紅葉山　信濃　恒子

秀逸

秋雨に思ひは深し菊の花　東京　春子

芋を蒸る厨の月の曇りけり　赤坂　藤井紫

行秋をながめてふらり糸瓜かな　横濱　中田園子

逢ふていはず別るゝ友や秋のくれ　芝　美江子

烏柿の澁ぬく軒の日脚かな　能登　向井きぬ枝

つくろはぬ庭に美し菊の花　廣島　松青

笑ふ子に叱られて淋し秋の暮　但馬　太田菊野

房ごとに味深めたるぶどう棚　姫路　早崎ちよ

耳の治療怠るまゝに秋くるゝ　長崎　服部芳子

砧聞けば淋しと云ふや京の人　神戸　山本愛子

野鼠の土橋を走る野分哉　長崎　林田まさ

父ませと思ふ背あり糸瓜見て　久留米　園菊

茸狩りをれだつて功は栗を食べ　秋田　佐東まつ

我が影の壁に大なる夜寒かな　埼玉　野巻若葉

乳もらひの男たゝずむ夜寒かな　伊豫　田中愛

[illegible]白樂一本目立つ初袷　大阪　曾廣利

傾きて主なき家に紫苑さき　姫路　とみ子

殊更に淨瑠璃悲し秋の雨　麹町　牧野いてふ

生上げて一本ゆかし菊の花　東京　鈴木

鵯おりて暮るゝ日おしき冬田かな　廣島　白華

鐘一つ〳〵に秋の行く音かな　岡　紫花

秋晴れや病後散歩の小半日　茨城　軍司いく子

秋の夜を菊の雫におびえけり　大阪　青木久嘉

巖千丈峯のせの響きかな　横濱　佐藤芳子

月一つ芙蓉に寄る御堂かな　千葉　加藤嘉子
孫負へる盲目の漁夫萩嗅ぐ　尾道　佐々田晴子
富士見ゆる花野三里を馬上かな　大阪　か代女
うら庭に地鳥おり〳〵夜寒し　横浜　大川そめ
白芙蓉厠所の庭の月夜かな　神戸　藤森いち子
秋寒し三人殺し五人おり　牛込　藤澤ゆかり
菓子盆の栗やそのおどる栗　埼玉　野老若葉
初時雨片側町の宵の市　久留米　原　ひろ
白露に紅滴く京の女かな　埼玉　斎藤せい子
坊ちやんの御手によう似た紅葉哉　大阪　古川清香
今よりは隣の林も静かなる　牛込　澤井輝子
風が葉の白さよ今朝の秋　麹町　牧野はん子
焼栗や昔もなつかしき乳母が里　美作　岡　鶴子
風なぎて子供よりくる栗の下　東京　千葉八重子
軒に雲かけて時雨をきく夜かな　廣島　野　菊
病む母をいたはる夜中の時雨かな　廣島　かをる
時雨るゝや磯松原の一つ家　同　しすい
荒れ波の濱の長さよ小春晴　同　湖蝶
静かさや江村の夕柳散る　京都　波瀬かつ子
松笠の音を包む落葉かな　和泉　北野くま子
白鳥の社を中に枯野かな　神奈川　柏木しづ子
亡き母のわけて戀しや秋の暮　埼玉　岩田もと子
枯尾花三里の路や乳母が家　岩代　露　子
たきつぼに枝つき出す紅葉かな　肥前　山下しづ
のき毎に大根ほしや秋の暮　札幌　赤坂靜子

枯あしにみじかき日脚かゝりけり　能登　向井喜子
紅を溶く京の女や紅芙蓉　埼玉　寺尾露子
鳥の音や露草に明け月細し　同　斎藤つれ
あはれなりまつる主なき友の墓　愛媛　竹本晴代
崖急に曲り小道や草の露　肥前　服部ふぢ代
手燭して厨を捜す長夜哉　名古屋　あ　る
萩にさす夕日は赤し城のあと　土佐　美　郷
菊日和慈父君けふは喜壽の宴　大阪　樋口　君
芒枯れてあらはに淋し小督塚　京都　三宅喜賀子
屠殺場をめぐる一水秋深し　廣島　諏訪不二江
野にしもの降る夜を秋のなごりかな　岡山　河田静子
小鳥籠の泣く〳〵眠る寒さ哉　岐阜　文　子
朝寒や驢馬追ふ人の叱咤かな　清津　板井朝子
杜月峰の音のみ高し夜は更けて　廣島　木村つれ子
あの峠越すまで待てよ二日月　静岡　紫　花
夢破れ鳴子の音や初嵐　福岡　日　天子
峯高し雑木の中の楓かな　豊原　山口天都子
秋雨や蚊の潜み居る火吹竹　愛媛　近藤とめよ
ひら〳〵と錦の雨や初時雨　大阪　武田信子
狭田野や野菊摘み〳〵女連れ　大阪　角福きく
刈り残る田の一角や稲すゞめ　福岡　岡田まる子
都なれて読むや夜長な山家集　佐渡　島田安子
徒然の欠伸大なり夜中の秋　埼手　林　畝子
杉並に富士見えてけり秋の暮　牛込　菊　女
亡き人の舞ふ袖長く秋淋し　鎌倉　靜　枝子

讀者倶樂部

▲本誌本號に「饒舌家」を書かれし大原綾子氏及び「母親の線穿鑿」を書かれし名なし草氏の住所氏名至急御一報を乞ふ。（記者）

▲本誌九月號の第四十九頁に、土耳古の奇風俗の記事を、在土耳古中村商店主山田寅次郎氏の談として掲げたるは、大阪心齋橋山田寅次郎氏の誤りに訂正す。（記者）

▲「迷信に囚はれたる婦人」會面白うございました、上原綾子様の終りが鳳の通りで矣はずにはゐられませんでした、東京印象記植松晴子たんて、でもよまないうちから淋さんだとわかりましたよ、數度もくりかへして讀みました、どうかお二人とも、いつでもおふるひ遊ばせな、私ばかりでなく、皆さんも望んでいらつしやる事よ、それからムーンライトソナタ「月光曲」敎へて下さいな。あゝ、花散里の君がピアノの前で月光曲を奏で給ふそのお姿。（内藤千鳥）

▲諸姉様の中でどなたか日本の何新聞紙とでも宜いから米國 San Francisco に於て發行する新世界新聞と交換下さいませんか、又繪葉書の交換御望みの御方あれば致します。（米國加州フレスノ郡西本郡 P. Nishimoto. c/o C. L. OBrine R. R. F. 1 Calif Fresno Co.

▲皆様御丹精の花壇には、秋草見事に、そして種子も澤山お出來でせう、どうぞ、何んでも宜しいから、種苗の交換を、お願ひ致します、又初瀬參種は、特に澤山用意してありまするから何人にも實費で分讓致します。（信濃三留野青木恒子）

▲コダック又はキャメラに趣味をお持ちの方に御手製の寫眞の御交換をねがひます、着衣第此方でも手前ほしので、人物、景色其他頂だいたのに似寄たものにて御返し致します、御自身のを下されば私自身のをさし上げます、但し時日場所を御記入下さいませ。（Mrs. H. Yoshida. P. o. Box. 56. Tacoma Wash.）

▲九月增刊にて拜見仕りました、松村介石先生の御話の小岡板と申す物は、高價なものでせうか、又銀座の會員社としてやれば分りますでせうか。（田舍女）――二三拾圓か高くても五六拾錢のものと思はれますが、直接同社へお聞き下さい、その通りで屆きます。

▲九月の增刊面白う御座いましたのネー、殊に松村介石先生の御話は趣味ある事と存じました就いては物好きな私あの、小岡板がして見たくつて仕方が御座いませんの、記者様恐れ入りますが、其使用法及び價段、會員社所在地を（名古屋中區、鎮子）――右の答を參照下さい、又使用法は增刊に書いてある通りです。

▲九月增刊迷信に囚はれたる婦人ほんとに面白いでしたわ、つきましてはあの小岡板とか申す物の定價やあります所をお敎へ下さいませ。（無同名無草）――右の答へ參照ありたし。

▲いつもながら讀者クラブの繁盛實によろこばしい大慕ですことわ、妾は三年許りで御地の學校卒業後アメリカへ參りまして、都合上昨年冬歸朝しましたが、十月號で大分多く新嫁の通信を拜見しました、その中大分誤りがありますから老婆心迄に御注意申します、福村北子様のは Shattuck Ave. ミス吉田晴江の Tacoma は Tacoma. エス、ダホ様のに 18th St. オグデン市信子様のは P. O. Box. 583. Ogden. Utah. U. S. A. 誤りです、二年間西部米國で學校に關係していましたからわかります。（岐阜具長河畔にてメロアルト女史）

▲記者様、九月の增刊迷信に囚はれたる婦人中の、三十九頁、神經作用か、の次一行わかりません、何卒次號に載せて下さい。（三ッ島にて來鶴花）――下の通りです、「そりや得意の時代とか、壯健の方には迷信なんて馬鹿らしくつて……」

▲九月の增刊に東京印象記をお書きになつた植松様といふのは、若しや内藤千代子様ぢやない

の、お父様のお事業と云ひ、上原おや子様を御訪問遊ばした事と云ひ、そして一高がお好きでわざ〳〵見にいらつしやつたり、第一お年の頃ぴやうがどうしても千代子様にちがひないと思ふのよ。(牛込綁貞の子)

▲海洋の淋しき醫者様、あなたの美しき文を、本誌で拜見して、あなたの御住ゐの、海岸の天然の景が、秋の夜、如何に美しいかと、非常に切に感じました、そして自分が、御地に在るやうに思い〳〵空想にふけりました。嗚呼、あの美しき文を書かれるお心の美しさよ、あなたに一度なりとも、是非御手紙を差し上げ度う御座います、御住所を御教へ下さい御願致します。(東京菊枝)

▲七月と八月との誌上で、花散風の君の佳人の奇遇をみましてからは、いつかは千代子様のをと只それはかり樂しんで居ましたら、おゝ出ました出ました、九月の増刊に東京印象記植松晴子とは世をしのぶかりの名、まことの本名は内藤千代子様とこの黒い眼でにらんだのがなんで違ひましよう、オホ……、雑誌訪問のところ私何度くり返してよんだか知れません、恰度佳人對面の條をみる様ですわ、千代子様のお作此頃いよ〳〵御上達なさいますのね、今に二代目一葉女史とおなり遊ばす事と失禮ながら私望みをかけて居ますのよ。(鹿兒島つや子)

▲こほろぎ様の嫁入前の一日は、實に御作の通りですわれ、私も一度は覺えが御座いますの、一句々々讀みゆくごとに思ひ當ること許りなので、幾度となく拜見いたし、覺えず袖を濕しました。(名名屋わか枝)

▲戸板裁縫女學校長の、裁縫教授法を讀み、誠に分解教授法に感心いたし、非常なる喜びと望みとを持ち、同校長の御教訓にあづかりたいと存じます、同校の所在地お教へ下され度し。(鹿兒島松田くら子)——芝區三田ゝ國町二ノ十六です。

▲十月號の記事中、裁縫を教ゆるについての雛形(戸板女學校長)云々、事項有之、御教授の件に付直接御伺ひ仕度存居候間、學校の所在を御記載被成下度御依頼申上候。(赤羽愛讀者)——右御参照

▲若し皆様の中で裁縫のごく上手な先生を御存じでしたら、どうか御しらせ下さい、實は私内弟子志願ですの、年は十六です、私宅は多くの人をつかひ、何不自由のない身ですが、家がにぎやか過ぎて私には向きませんの、それゆゑ先生の御宅もなるべくならば靜なお家を望みます。(東京にてゆき子)

▲北米の北村雅子様に御願ひ申します、私は女學校を卒業して目下家事を手傳つて居るものですが、種々の事情の爲め親を養はなければならぬので、私も渡米して何にか婦人の身に適當した仕事をしたいと思ひます、如何でございましようか。(野州女)

▲御優しい姉様方の中で、肥滿を治す藥を御用ひになりまして効果を得られた御方が御座いますか、もしも御座いましたら何卒其の藥名發賣店とを御知らせ下さいまし御禮は必ずいたします。(秋の野の蟲)

▲守島いと子様に御尋ねします、九月一日發行女學世界いろ〳〵の實驗のところに、麻の葉と煎じて髪を洗へば、縮れがとれると書いてありましたが、只一時的でなく根本的に直りますか御教へを願ひます。(千葉淸水玉子)

▲寄稿してゐらつしやるのゝ外に、原稿紙なれば五六枚餘の文は、作くつて御送りして、もしよく出來て居ましたら御出し下さるでせうか。(愛知佐分ふみ子)——よく出來て居れば掲げます、其他趣味あり有益なものは何でも歡迎します。

▲東京小石川夏菊様、日本古切手を相當の價にて御讓渡相成候由、小生是非讓受け度候に付、代價御一報煩はし度願上候、追て小生も各國の印紙集め居候間、御望みならば御交換も願度候

八月廿六日(J. T. Kanda. #48. N. First St., Portland, Ore. U. S. A.)

▲藤田いさを様、あなた様は御幼少の時より文學御上達にて、種々の雜誌に花を咲かせ、大學を卒へてよりは、むさし野にて何々新聞に名文を書かるゝこと久しかりし由を此程耳にいたし候、其上あなた様はめづらしきバイオリンの御名手とかや、世にはかくも趣味深く多能多藝のお方もあるとかんじ入り申候、只今いづくの空にてお暮しあそばされ候や。(京都にて須賀子)

▲日本力行會長島貫先生に伴つて當地へ御渡來なされた御婦人達は、皆様御夫婦中も睦しく、大へん成績よく働いて居られます、今や移民禁止の時に當つて、立派な御婦人を在留青年の內助者として極めて眞面目に御選定御送り下されまする先生の御熱心を、遙かに感謝いたします(米國深雪)

▲記者様、山脇房子先生及び下田歌子先生の御住所をこまかに御知らせ下さいお願ひです。(三宜松大路)――山脇先生は赤坂區檜町山脇高等女學校、下田先生は東京府下中澁谷實踐女學校です。

▲奈良園藝好女様へ、横濱市中村町廿一番地の横濱植木株式會社、內國部より明治四十三、四年度の定價表を、お取寄せなされては如何ですか、又、南品川妙華園もよろしくあります。(越後よし子)

▲大阪神戸地方にてキリストを信んじて御出でなさる御方と御話致じたく存じますが、兩親がきびしく出る事が出來ませんからいつなりとも宅に御出で下され度く御待ち申して居ります。(兵庫縣武庫郡住吉森島靜子)

▲妾は吉野山の麓に住む田舍女です、都の皆様と繪葉書雜誌の交換を願ひます、妾は水彩畫が大變好きで、吉野山や、吉野川、名にしなふ櫻青山の景など種々自筆のがあります、御入用の方は何時でも下名へ言つてよこして下されば喜んで送ります。奈良縣吉野郡上市町宇木富藏方宇木喜美子)

▲新發田の曾保世様、私は貴女が御尋ね遊ばす人とはちがひますが、折角同性の方を御尋ね遊ばす貴女がほんとに御懷かしう存じます、私も本誌を無二の友と致して居りますの、どうか御示導をねがひます。(米國村瀨光子)

▲長らく本誌の口繪に見えなかつた加藤雨山氏の筆を十三號紙上に掲載されて、誠に嬉しく存じます、瀟灑なる氏の筆は私等ども畫を好むものにとりては實書用としてこの上もなき物で、深く感謝いたします。(濱岸紅園女史)

▲東京の紫雨様、貴誌文の「寄宿舍の妹に」はよく出來ましたのね、實に感心致しました。(淡路島晴千鳥)

▲横濱芙蓉花様、なだ住吉靜様、本年一月號の誌上にて私如き者に御同情下され、やさしく仰有つて下さいまして、厚く御禮申上ます、實は一月二月と多忙の爲め本誌を讀みませんで少しも存じませず、此頃他家でふと一月號の本誌をくらぶを拜見して驚きました次第です、御親切に住所迄御聞き下さいましたのに、失禮とも何とも申上る言葉もありません、さぞ變な者と思召したでせうが何卒御ゆるし下さい、誌上では少し住所を申上兼ねますから、御所を何はして下されますれば、私から御手紙差上ます。(名も無き花事大阪君子)

▲此の度の增刊は大變面白う拜見致しました、松村介石様の記事の中に、プランセントの事が出てましたが、ほんとに不思議れ、それから女學世界が來るなり目次を明けて待ちこがれた鶴様千代様のお作はと見たら、御名が見えないので私失望してよ、そしてだん〱と讀んでいつたら、東京印象記……嘉多……十八の春……まごふ方なき千代子様のお作、まあ私うれしくつてうれしくつて胸おどらせながら同じ處を二度も三度も拜見しました。(京都紫の宿)

▲京女の諸姉様の中に、繪葉書をよくするため、

化學的食養法を御實行遊ばして、居らつしやる方はありませんか、私も實行者の一人で日々熱心に食養して居りますが、少しも効能はなく、却て去年より多く脱毛致しますが、皆様には其様な事はありませんか。(白痴女)

▲庭瀬西尾きやう子様の御住所を何卒御報知下され度偏へに願上候。(陸奥操傍きや子)——麹町區飯田町六丁目丁六番地です。

▲愛讀者諸姉よ、私は二三年前より世の救主イエスを信じ救はれて今は喜の内に最も幸福なる生涯を送つて居ります、諸姉の内に若し主におありなさる御方がありますなら、御交際を願ひます、御差支へなくば御手紙を送つて被下い御返事を差し上ます。(松江市西茶町岡崎方和田清野)

▲深川さつき様、それでは羽山先生を御存じでゐらつしやいますの?　貴女はときき子様?　みち子様?　それとも……御別れしてより十年餘り、おなつかしう存じます、御姓名御明し下さいまし、御住所も何卒、御手紙差し上げたう御座いますから、次號をたのしみに待ちわびて居ります。(本郷小斧生)

▲荒木様、お久し振で御座います。私も以前第二小學校で同級で御座いました、此頃はお耳がいけないさうですが、さぞ〳〵御不自由でゐらつしやいませう、お察し申ます、どうぞ御身御大切に遊ばして……私も本誌の愛讀者で御座いますのよ。(昔の友の飯田愛子)

▲ゑはがきの交換を願ひます。(京都市佛光寺通り御幸町西へ入米田淋子)

▲増刊はほんとにおもしろく拜見いたしました、中でも東京印象記は實に心の底からおもしろく讀みました、いつもながら千代子様の御作の御上手なのには感服の外は有りません。(小田原あざみのはな)

▲皆様、私れ、よく出來ませんけれども、何より音樂がすきでございます、同好の皆々様御互に譜を交換いたしたら如何でせう、私はお琴とバイオリンをいたしております。(新潟嶋雪)

▲皆様の中に俄被り上手御不用の方がありましたら、お送り下さいませんか、相當のお禮は致し升からどうぞ。(茨城縣結城郡四靈田村坂從つる子)

▲私一昨年高等女學校卒業いたしまして、(小學校本科正教員檢定試驗も合格いたしました)當地小學校に奉職いたしてゐますが、此の度是非上京致し度存じますが、皆々様の中で家庭教師に御世話下さいます事は出來ませんか、其他何處の事務員でもよろしう御座います、忠實にはたらきます、委細は御手紙もて申上ます。(廣島市十日市坪井方〇M子)

▲皆様の御内に、本誌昨年の十月號と嫁ぐ人御持合せが御座いましたら、何卒お貸し下さるかお讓り下さいませ、相當にお禮いたします。(栃木縣宇都宮市大寬町三十六番地齋藤菫)

▲本誌増刊マダム號、嫁ニ行ク人、御不用の方は御讓り下さいませんか、御禮には近江八景エハガキ八枚物各一組宛必ずお送り致します。(近江國今津町平塚照子)

▲記者様、私は女學世界愛讀者ですが、投書してもよろしう御座居ますか。(横濱野の花)——どうぞ御自由になさつて下さいまし。

▲明治四十二年一月發行の女學世界増刊心の日記及び滑稽智慧くらべをお持ちの方は御惠み下さいませんか、お禮として名所繪葉書をお送りいたします。大阪市南區鍛谷西ノ町六黒江紫奈子)

▲記者様、誠に申兼れますが、女學世界を出來ます事ならもうすこし早くお出し下さいませ、樂待ち遠くてなりません(安東縣崎岡君代)

▲セント、マーガレット、スクールの野口いと子様、妹がいろ〳〵御世話になりまして難有う御座います、誌上してあつく御禮申上ます。(胡蝶)

新刊紹介

△圖說毛氈花壇　　林邑右源治著

庭園の趣味を始めとし、毛氈花壇の造り方、花卉栽培法等を説きたるものにして、文體は平易にして、何人にも分り易く、加ふるに美しき原色版と多くの寫眞版其他の圖を掲げて毛氈花壇の實際を示しあれば、此一册を讀めば、容易に之を實地に應用することを得べく、園藝に趣味ある人は之れによりて大に發見する處あらん、實價八拾五錢、本館發行

△小兒洋服裁縫全書　　伊澤峯子著

男兒服、女兒服の上着、下着、外套、前掛、帽子其他服裝の全體にわたりて仕立方を説きたるものにして、著者の言ふ所によれば、様式は佛蘭西式に依り、美術的、衛生的、經濟的なるやう十分注意を拂ひたるものなりといふ、一々圖を示して丁寧に説きあり、定價一圓三十錢、大倉書店發行

△小波叢書　　巖谷小波著

名家小説文庫の第八編として發刊せれたるものにして、本書には著者の作中の、あゝ京都、男の心、血、かつら川、軍國女氣質の五篇を納む、前四篇は東京日出新聞に、後の一篇は日露戰爭當時報知新聞に載せられたる作なり、孰れも舊作に屬すと雖も、一種獨得の輕快なる著者の筆致は本書に依つて十分窺ふことを得、定價貳圓本館發行

△俗曲評釋（第三篇 河東）　　佐々醒雪著

本書は河東の名曲數篇の評釋によりて河東節の淨瑠璃の歴史的變遷及び其特色等を明にしたるものなり、團十郎と助六と河東節とは江戸第一の名物にして、而して河東節は近世歌謠の粋として蜀山人の激賞せし所、今著者は江戸時代に對する薀蓄を傾倒して此書を成す、前二篇と共に參考なり、定價五拾錢、本館發行

△新題詠歌詞林　　羽根田文明著

維新以來最近に至る迄に出來たる新事物例へば國旗、議會、統監府、戰利品、電信、新聞紙といふ類ひのものを題に取りて詠みたる歌を集めたるものなり、其の斯かる著の出來なる所以は、歌はたゞ花鳥風月をうたふのみに止らず人工美をもうたはざるべからずといふ主張に基くなり定價金五拾錢、内外出版協會發行

△筆の友（十年紀念號）　書道奬勵協會

本號は特に十數頁の口繪を附して古今の名家の筆蹟或は人物の寫眞等を示し、讀物も豐富にして、中村不折の書法談、樋口竹香の手習談、土居香國の撰詩談、樋口氏の千字文講義、其他篆刻談等讀むべきもの多し、定價金拾五錢、神田淡路町二ノ七同會發行

△箏曲千鳥の曲　　鈴木鼓村作譜

千鳥の曲は、維新の頃、尾州吉澤檢校の作曲にかゝり、雅趣を失はんとせる箏曲界の革新を目的として出でたるものにして、曲の典雅なるを以て名あり、本書は之を西洋流の樂譜に上せたるものにて、此の好著の出でたるは好樂家の爲に喜ぶべし、裝幀又頗るよろし、定價六拾五錢日本橋馬喰町今古堂發行

△ナイチンゲール　　村田勤著

世に博愛慈善家尠からずと雖も、ナイチンゲール孃の如きは東西を通じ古來稀れなり、本書は孃の一生を記したるものにして、孃が少女時代より起し、立志、觀察旅行、クリミヤ戰爭に出發、孃の奮闘、看護婦長としての大活動等を何人にも分り易く書かれたり、附錄として孃の書翰、座右銘、或は孃と會見せし人々の話等皆讀むべし、定價五拾錢、警醒社發行

△女ばかりの衛生　　糸左近著

著者の衛生説は、何人も心得置くべきこと、又實行し得べきことを、最も輕快なる筆を以つて何人にも分に易く説くことに於て多く其の類を見ず、本書は婦人のみに關する衛生法を説きたるものにして、先づ衛生的に見たる標準女の説より初め、月經前後の攝生法、婦人科雜病、産科、ヒステリー、美容法等日常の衛生心得を最も詳細に説かれたり、定價六拾錢、京橋弓町三立社發行

才媛文壇懸賞募集（十一月八日〆切）

▲美　文（二十字詰十五行以內）

▲日　記（二十字詰十五行以內）

▲書簡文（二十字詰十五行以內）

▲いろ〳〵の實驗（十五行以內）

▲和　歌（一人一首）

▲俳　句（一人一句）

▲誌友倶樂部

△美文、日記、書簡文、有益な實驗の四種は用紙は半紙の事△和歌、俳句、倶樂部は端書に限る、△字體は楷書にて正しく書く事、不分明の字又は亂れたる書體は沒書とす△名宛は博文館內女學世界宛と、△原稿に文の種類及び住所氏名を明記する事

賞品

△美文△日記△書簡文
天賞畫圖、地賞七拾錢、人賞五拾錢

△和歌△俳句
天賞畫圖、地賞五拾錢、人賞參拾錢

△いろ〳〵の實驗（賞畫圖以下）

每月一回一日發行

定價表

一册（紙數二百八頁）…金二十錢
四册（三ヶ月分）……前金七十五錢
八册（半ヶ年分）……前金一圓四十五錢
十六册（一ヶ年分）……前金二圓八十錢
內（定刊數十二册 增刊四回 一、五、九、十一月價格同一）
郵稅 一册 二錢

廣告料

	特等	一等	二等	三等
二十四字詰一行	…	…	…	五十錢
[illegible]半頁	…	…	十圓	七圓五十錢
半頁（卅二行）	…	廿三圓	十九圓	十四圓
一頁（六十四行）	五十五圓	四十五圓	三十八圓	二十八圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

註文略規

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す
●郵券代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る
●書目錄御入用の方は二錢券相添申込あれ

明治四十三年十月廿六日印刷納本　第拾卷第拾四號

編輯兼發行人　松原岩五郎
印刷人　山田英二
印刷所　博文館印刷所　東京市小石川區久堅町百八番地

發行所　東京日本橋區本町三丁目　博文館

電話　本局　三千百三十八番　二千六百二十番　三千二百二十九番

最新發明 肺病 肋膜 新藥に就きて

新治療劑主藥の諸結核による熱度下降は可驚著効あり四十度を示す熱は本藥服用後は常溫下に減じ患者は藥劑が無味なるを喜び之が服用を嫌忌せず食慾を増進す 獨逸ドクトル高平氏報告（醫事週報二七號報告再錄）

右の外本劑の著効ある事は既に諸家の試驗報告及賞賛により明らかなれども今本院服藥患者につき其成績を左に報ぜん

●金森某（德義上住所姓名を秘す）**兩肺結核**に陷り咳嗽たん盗汗動悸呼吸不利。不眠。女子三年前發病遂に末期重症の發熱激しく度々喀血し非常に羸痩す服藥壹週頑固なる熱を去り咳嗽喀痰を輕快す服藥貳週喀血やみ臥蓐せしもの屋外に出で日光に暖をとるに至る連用三十日病全く治し食慾進み體重を増加せり

●兵頭某 卅一歳男 **肋膜炎**（喀血無し肺病初期の疑あり）胸部痛み食不振身體倦怠盗汗。咳嗽。頭痛あり身體羸痩を見る卅九度に至る發熱あり服藥五日奏効あり二週にして全治す僅々二週にて全治する如きは病輕症なるに因るとは云へ、いかに新治療劑が肺病。肋膜。肺炎。肺尖加答兒。氣管支加答兒。腹膜結核等の諸症に對し可驚効力ある全治藥なるを知らん以下病歴を細述する時は冗長に亘るを以て左の通略式とす

患者	性	病名	成績
三村	男	兩肺結核	全治
中川	男	肺尖加答兒	全治
松信	男	結核性肋膜及腹膜炎	微効
笠井	女	肋膜炎	全治
上野	男	右肺結核及腸結核	全治

患者	性	病名	成績
龍谷	男	兩肺結核末期	無効
宮本	女	結核性肋膜炎	全治
岡田	男	氣管支加答兒及肺炎	全治
阿崎	男	右肺結核及腹膜結核	全治
神村	男	肺結核初期	全治

斯の如き好成績は從來の藥物に於て見る能はず我國藥劑界名譽の發明藥として報告する義務あるを信ず又効力多大にして持長服藥するも副作用なく殊に**喀血**と其豫防に可驚効あるを以て醫藥の傍ら服用最も妙ならん吾人は病者に向つて新治療劑は現今に於て完全なる發明藥なるを紹介し安心服藥せん事を勸むと共に醫師は自家患者に本劑を投藥せん事を勸告す●本治療法を知らんとする患者は貧富の別なく醫者にも療法あり)遠慮なく送料郵券二錢添東京神田竪大工町拾三番地療養院製藥所村尾明治堂宛申込あらば新治療法の書を無代貰ひ得らる・故是非一讀あれ益する處多からん、之れにより全治の幸福を得らるべし

藥價

壹週金二圓
貳週參圓九十錢
參週五圓七拾錢
四週七圓貳拾錢
五週九圓

東京神田竪大工町 療養院製藥所 **村尾明治堂**
電話本局參千七百五十二番
振替口座東京壹四參壹九番（私書函神田本局第三號）

男女方必す御讀下さい

金五千圓を左の方法に依り差出すとせり御用濟の瓶にある商標を剝ぎ取り慈善事業へ御寄附あれば一枚五厘宛で本舗にて何枚にても引換ます



宮内省御買上の光榮を賜はりたる純良髪油は日本國中唯みやけ油あるのみ、みやけ油を常に用ゆれば髪の抜ることなし、産後病後髪を長くし、のぼせをしづめフケはなくなる、頭の病にかゝることなし、外に墨抜洗粉。スキ油ピンツケ冬しらず等好評嘖々近頃類似**椿**と稱へ色々混合物ある品澤山あり、みやけ油御望の方に對し粗悪品を賣り付る奸商四方にあれば必ず東京人形町の**みやけ油**と**御指名**の上御求めなさい販賣所全國信用ある店にあり

女(後付の一)

新文章を通じて現はれたる思想界の新傾向を見よ

文章世界

第五巻 第拾三號 (既成發行) 正價金廿錢 郵税二錢

▽私の好きな文章(好個の文範である と共に公平な諸家 の文章概評也、)
島村抱月 水野葉舟
沼波瓊音
戸川秋骨 高濱虚子

▼秋の自然を詠じた句……内藤鳴雪
▼倭朝廷時代の和歌……太田水穂
▼元政以來の小説家の性格 伊原青々園
▼自然本位と自己本位……小川未明

小品
▼草の實……吉江孤雁
▼蝶　實……兒玉花外

▽現代青年に與ふべき主義もしくば主張 (思想界に適從する所を失はん とする青年の爲めに先覺大家 の胸襟を披いて吐露せられた る高見卓說也)
東京帝國大學教授 井上哲次郎
早稲田大學々長 高田早苗
慶應義塾々長 鎌田榮吉
東京高等商業學校長 澤柳政太郎

▼評論の評論 極めて穩健に、極めて公平に 文壇の近事を評論せるもの。 相馬御風

▼美術展覽會見物に就ての注意 繪畫彫刻は如何にし て見物すべきか。懇切 に其の心得を說けり。 高村光太郎

▽ロンドンより……長谷川天溪 (印度洋より地中海を經てロンドン に至る間の印象を敍して、人をし て身其の處に在るの思ひあらしむ)

▽倫敦に於ける四年間の記者生活 此君郎 (新歸朝者の實驗談)

文叢

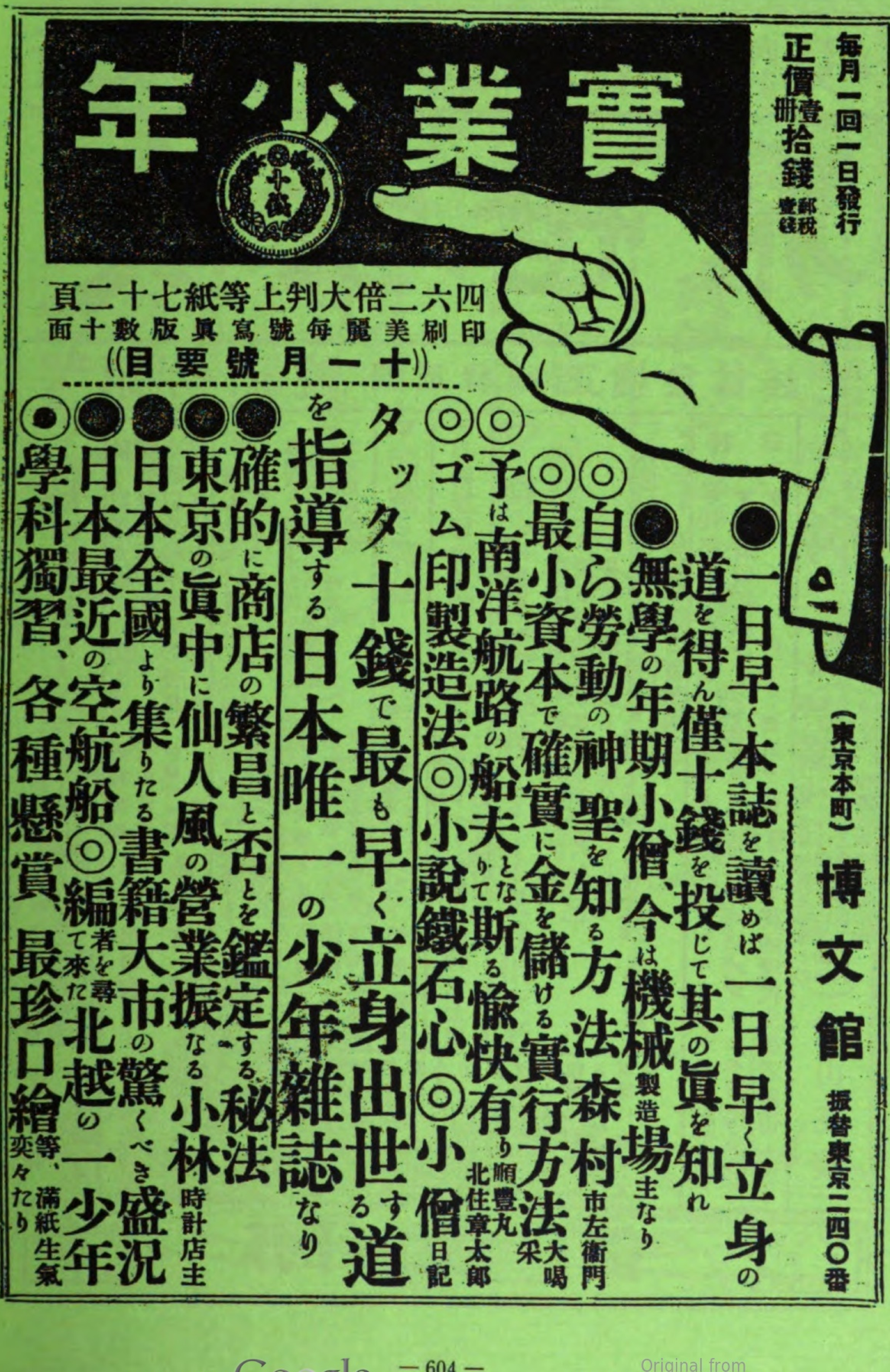
現代の青年文士が苦心の餘に成れる短篇小說・敍事文・抒情文・評論文・書簡文・小品文、はがき文、俳句、短歌及びコマ繪等を文壇の諸大家が最も嚴正に最も愼重に選評せるもの毎號百十頁餘に渉りて滿載。

詩歌
▼日記の中より……尾上柴舟
▼西瓜のにほひ……人見東明
▼九　月……前田夕暮

海外文壇
▼メテルリンクの悲劇思想……
▼ダンヌンチオの新作小說……
▼英國現代文學者書傳……

△小說 病人 (長く病床に在る青年と其の母との 生活を描きこれに配するに活動の ライフにある二人の客を以てした るもの、作者近來の苦心の作) 田山花袋

振替口座 東京 二四〇番　**博文館**　東京日本橋 本町三丁目


每月一回一日發行
正價壹冊拾錢 郵稅壹錢
實業少年
十錢
四六二倍大判上等紙七十二頁
印刷美麗每號寫眞版數十面
《十一月號要目》
●一日早く本誌を讀めば一日早く立身の道を得ん僅十錢を投じて其の眞を知れ
●無學の年期小僧、今は機械製造場主なり
◎自ら勞動の神聖を知る方法　森村市左衛門
◎最小資本で確實に金を儲ける實行方法　大喝采
◎予は南洋航路の船夫となりて斯る愉快有り　順豐丸　北住章太郎
◎ゴム印製造法◎小說鐵石心◎小僧日記
タッタ十錢で最も早く立身出世する道を指導する日本唯一の少年雜誌なり
●確的に商店の繁昌と否とを鑑定する秘法
●東京の眞中に仙人風の營業振なる小林時計店主
●日本全國より集りたる書籍大市の驚くべき盛況
●日本最近の空航船◎編者を尋ねて來た北越の一少年
●學科獨習、各種懸賞、最珍口繪等、滿紙生氣奕々たり
（東京本町）博文館
振替東京二四〇番

第拾六巻 第拾五號

少年世界

十一月一日發行

洋裝菊判紙數百二十八頁 口繪寫眞版豐富‥‥正價拾錢 郵税壹錢五厘

口繪

●何が釣れるの‥‥(三色版)

●團子坂菊人形 ●宇和島少年會

●『河内』進水式(新たに成った、戰闘艦「河内」は帝國第一の巨艦也)(寫眞版)

●山茶花‥‥(根本畫) 西野猪久馬

▼天長節譚物‥‥太田三郎

▼探檢小說 氷海王‥‥江見水蔭
(いよ〳〵出でゝいよ〳〵奇也)

▼魔物の銀貨‥‥竹貫佳水

▼天才‥‥木村小舟

▼朝鮮半島に於る日本府‥‥文學博士 上田萬年

▽お伽小說 飛右衞門‥‥巖谷小波
(ます〳〵佳境に入る)

▼少年笑話 ▼少年新聞

▼胡蝶の行方‥‥名和昆蟲研究所主任 長野菊次郎

▼紅葉のモデル‥‥宮川柴外

▼鳩の寫眞師‥‥前原理學士

▼栗拾ひ‥‥花咲翁

▼懸賞和歌‥‥尾上文學士

▼懸賞俳句‥‥沼波文學士

▼新年計畫 ▲全國少年 名刺交換會發表

●學藝顧問 ●少年通信

●少年文壇‥‥(懸賞發表)

東京本町 博文館 振替口座東京二四〇番

十月號は即日品切

本月號を買ひ遅れ
て後悔し給ふな

美麗三色版『荒野之獅子』水牛を殺して啖ふ圖、その外珍奇寫眞版數面

冒險世界

十一月五日發行　第三卷第拾三號　定價十五錢　郵稅一錢五厘

▼冒險小說 惡魔寶窟……押川春浪

▼空賊艦隊奇譚……河岡潮風

▼牛獸洞窟探檢記（中）……鳴海濤蔭

▼豺狼襲來中の膽力鍛錬……月下長劍生

▼爾靈山占領回顧錄……負傷中尉

▼シカゴ對早慶 野球戰々報……運動居士

◎潮風生奇病の由來

◎牛島魔王 大院君

◎フキー島ジー島 蜥蜴狩

◎鎖港時代の冒險

◎捕鯨界先鞭錄

◎銀杏城下の血雨

てう　ふう　荒野　佳人　有川　秋萍　井ヶ　秋劍　高橋　淡水　伊藤　悠遊

◎馬賊頭梁傳　太不平居士

◎探偵奇談 怪！怪！！怪

◎世界惡食譚

◎書生界名物男

◎野球漫畫 ボールの行衛

◎秋期運動總觀

蝶々　人生　白衣　仙人

鐵血書生　潮風案　未醒畫　戸外生評

本誌獨得の五色刷漫畫は、いよいよ技の妙を發揮す

東京本町　博文館　振替口座東京二四〇番

英語雜誌中に傑出せる本誌を見よ

英語世界

第四巻 第十三號（十一月一五日發行）正價金十錢 郵税一錢●前金一ヶ年十二冊一圓廿二錢

▽和文英譯 時文小品二篇……武信由太郎

▽英語獨學實歷談……成瀬仁藏

●英文學生日記

●英字新聞時文研究

▽チャールス・ラム氏原作 論文講義……增田藤之助

▽英作文の手引（感情を云ひ表はす法）……元田作之進

ナショナル講義 喜安璡太郎

慣用句の研究 芦澤繊江

英習字講義 ガントレット

入學試驗詳解 神崎保太郎

◎秋季增刊 大懸賞判讀發表◎

最近世界奇聞 長井氏晟

アクセント法 岸本能武太

聖書と讀本 片山義行

子供芝居 陰徳陽報 石川沽助

▽譯註 喇叭の間違……深澤由次郎

▽英文學講話（可笑味の文學）戸川秋骨

●英和對譯野球用語

●東京高商英語受驗談

▽構文研究 小品文講義……秋山正議

▽ツルゲーネフ 散文詩譯註……山崎貞

●發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 振替口座東京二百四十番 博文館●

名家小

第壹卷以下數版重ぬ

裝釘……洋裝菊判總

明治の世、新文學ありてより、僅に未だ三十餘星霜を閲すに過ぎずと雖も、其間思想の起伏、文運の變遷一にして足らず、大家相踵ぎて出で、雄編傑作また少しとせず。或は艶麗に、或は崇高に、或は平淡に或は怪奇に、皆な競うて其特色を發揮し、春花の爛熳、秋草の溫雅、人情の機微を寫し、心理の複雜を描き、文章思想共に美を盡し粹を極む。まことに聖代の偉觀と稱すべき也。されど珠は聯珠の美しきに如かず、雄編傑作また時ありて散逸。本館此處に思ふところあり、名家小說文庫を發刊し、毎巻千頁の大冊子となし、諸大家の集中苟も錄すべきものは悉くこれを輯め、裝釘を美にし價を廉にし、逐次刊行して、以て讀書社會の渴を醫さんことを期す。竊に惟ふ、本書完成の曉は明治文學の偉觀燦然としてそれ讀者諸君の眼前に輝かん乎。

露伴叢書

前編目次
▼自傳 ▼ひげ男 ▼夢がたり ▼客舍雜筆 ▼椀久物語 ▼二日物語 ▼新學士 ▼[illegible] ▼地獄谷日記 ▼春の山 ▼夜の雪 ▼迷霧 ▼醉鄕記 ▼碁[illegible]考 ▼當世外道の面 ▼僥倖 ▼和合樂 ▼珍饌會 ▼碁雜話 ▼封じ文 ▼縁の縁 ▼川舟 ▼獅子庵 ▼元祿時代の雜劇 ▼戲三鍛 ▼休暇傳 ▼大詫話 ▼伊能忠敬 ▼自縄自縛 ▼毒朱唇 ▼縁外縁 ▼まき筆日記 ▼折々草 ▼蹄鐵

後編目次
▼冷千氷 ▼日蓮上人 ▼うつしゑ日記 ▼箱根草 ▼二宮尊德 ▼鐵砲孝行 ▼突貫紀行 ▼遊行記 ▼夢日記 ▼醉興記 ▼旅の心得 ▼ひとよ草 ▼易心後語 ▼知々夫紀行 ▼新浦島 ▼春の一日 ▼鄭成功 ▼文明の庫

前編（九百七十餘頁） 正價金貳圓 小包料拾貳錢

後編（九百九十餘頁） 正價金貳圓 小包料拾貳錢

紅葉叢書

全一冊（紙數壹千餘頁） 正價金貳圓 小包料拾貳錢

柳浪叢書

本編目次
▼盗賊 ▼女の心 ▼猿冠 ▼鐵火 ▼聚樂殿 ▼島勘左衛門 ▼是非もなき ▼不老術 ▼新粧法 ▼[illegible] ▼眞の武士 ▼和の面 ▼五月女[illegible] ▼三千石 ▼男の面 ▼油井正雪 ▼大石内藏の助 ▼[illegible] ▼風乾之介 ▼他流試合 ▼脫走兵 ▼振武軍 ▼密告 ▼此の戀

前編（紙數壹千餘頁） 正價金貳圓 小包料拾貳錢

後編（紙數壹千餘頁） 正價金貳圓 小包料拾貳錢

說文庫

東京本町 博文館發行

〔クロース特製紙函入〕

前編目次（▼おもかげ橋▼昇降場▼骨ぬすみ▼姿▼今戸心中▼隅田の夜路▼罪の闇▼變目傳▼都の夢▼狂言娘▼畜生腹▼重づま▼貯金玉▼花ぐるひ▼幼時

後編目次（▼非國民▼松京饅頭▼狀歌留多▼黒蜥蜴▼兄の煩悶▼七騎落▼紫被布▼二人やもめ▼女夫心中▼八幡の狂女▼親ごゝろ▼そまる糸▼座敷牢▼中川心中▼淺沫の波

花袋叢書

全一册　（紙數壹千餘頁）　正價金貳圓　小包料拾貳錢

本編目次（▼名張少女▼女教師▼島の心中▼老夫婦▼新築の家▼春の別墅▼畫家の日記（アルフォンス・ドオデエ）▼令妹▼浪花節の名手▼寫生の花▼一家の妻▼初戀の人▼無辜（モウクス・メーテルリンク）▼不慮の出來事（フランソア・コッペエ）▼二人▼山小屋▼憶梅記▼思ふどち▼澤山翁谷▼老僧▼小桃源▼みやま鷺▼悲劇▼孤島

水蔭叢書

全一册　（紙數壹千餘頁）　正價金貳圓　小包料拾貳錢

本編目次（▼女房殺し▼新潮來曲▼旅役者▼林間の高塔▼湖心の誓▼紫海苔▼坤底の人▼崕下の家▼髭▼水棲記▼別莊守▼紙子くらべ▼つぎ紙子▼石地藏▼濁流▼海の饑渇▼惡道路▼花井お梅

小波叢書

全一册　（紙數壹千餘頁）　正價金貳圓　小包料拾貳錢

本編目次（▼あゝ京都▼男の心▼血▼かつら川▲軍國女氣質

（續刊）………

▽秋聲叢書

▽鏡花叢書

成女學校校長 宮田脩君序
日本女學校教頭 豐岡茂夫君著

女氣質と修養

感觸に捉はれ、欲の奴隸となるは女性なり、情火燃えて、盲目なるも女性なり、意馬脆く、蹎き易きも女性なり、女性の修養は、高く聖き絶對の靈光に觸れしむる、と同時に、其の天職に關する日常の智能に富ましめざるべからず、本書の說く所は、理想と與に現實あり、靈輝き肉躍る、女は自ら省み、男も讀みて、他山の石とせよ。

全一冊洋裝
菊半截美本
紙數三百頁
正價廿五錢
郵稅四錢

水田榮雄君譯述

男の好く女 女の好く男 兩性觀

男に取つては、女は不可解の寃性なるが如くに、女に取つては、男はスウフヰンクスの謎也。女を解せんと欲する男は本書を讀め!!! 本書は女性の顯微鏡也、不可解の寃性は、此顯微鏡に依つて正體を顯はす。男を解せんと欲する女は本書を讀め!!! 本書は男性の淨玻璃の鏡也、スウフヰンクスの謎は此淨玻璃に映じて忽ちに解けん。結婚前の青年淑女は本書を讀め!! 本書は青年淑女に幸福なる配偶の選擇を敎ゆ。結婚後の紳士貴夫人は本書を讀め!! 本書は紳士貴夫人に如何にして幸福の家庭を作る可きかを示し、父には兒女敎養の秘訣、母には賢母の秘傳を諭ゆ。本書の如きは上下貴賤貧富老弱に係らず男女必讀の珍書也。

洋裝三六版美本
紙數二百五十頁
定價金三拾錢
郵稅金四錢

販賣用電話 本局二六二〇番
東京本町 博文館
振替貯金口座 東京二四〇番

明治四十四年度の新學期入學者は今より準備に著手するの必要あり

★東京に遊學せんとする者は本書に就きて愼重なる調査を要す

最近調査

文學博士醫學博士 森鷗外君序文
巖谷小波君序文
坪谷水哉君序文
今井翠巖君著

女子東京遊學案内

(附錄) 最新東京實測明細地圖

洋装四六判美本 紙數七百頁 正價五拾八錢 郵稅拾錢

(口繪)……各學校寫眞版十五頁挿入

((萬朝報評)) 曩に好評を博せる『男子東京遊學案内』の姉妹書にして、またこれ好評を博すべきものたらずんばあらず、苟くも都下の學校養成所講習所私塾と稱するものはその何種たるを問はず網羅して痒き所に手の届きたる心地す……

森鷗外君 巖谷小波君 大町桂月君序
今井翠巖君著

最新増訂 男子東京遊學案内

(附錄)・・・・最新東京實測明細地圖

四六判美本紙數七五〇頁 正價七拾錢郵稅拾錢

本書は四十二年三月を以て初版を出し東都遊學者の便に資せしが多大の好評にて一時に數萬部を賣り盡し久しく讀者の望みを缺きたりしが今茲に本書に訂正を加へ最近に於ける各學校の興廢盛衰を明かにし且つ著者が新に得たる智識に依り案内記を増補し以て四十四年度新學期に就學せんとする者の好指針たらしむべく改竄せり

東京 博文館 本町

遠足會

((記事))

▽忘れぬ内……小波記、桂月書

◎懸賞書牘文……受賞者五十名

▲秋と少年 ▲秋郊問答 ▲修學旅行 ▲秋の手紙

▲少年大運動會 ▲少年遠足會 ▲一枚の紙 ▲其他數篇

洋裝菊判百卌六頁
正價拾錢郵稅壹錢半

(表紙)秋郊 高村眞夫
(口繪)遠足の朝 渡邊審也
外寫眞版……八頁

博文館
東京本町

少女世界 月乃卷

◎(少女對話)おみやげ……巖谷小波

◎少女訓話……(成女學校長)宮田脩

◎少女雜感……沼田笠峰

△(少女小說)生命の水 △(少女小說)窓より △(少女小說)お友だち △(少女小說)烟突の烟

△誌友だより △誌友想像記 △女學校問答 △試驗問題集

△(愛讀者)大葉子 △ナイチンゲール △少女讀書會 △少女日記の一節

△讀者の文章、和歌、俳句その他有益なる記事が澤山あります

●洋裝菊判紙數百廿八頁
●口繪三色版―花の香
●寫眞版八ページ

正價金十錢 郵稅壹錢

東京日本橋本町三丁目 博文館 振替口座東京二四〇番

女(後付の一四)

（女、後付の一六）

婦人一生の重荷

婦人と衛生　婦人は生理上身體の構造が纎弱ものなれば、疾病に罹り易く、又一旦疾病に罹りたるときは、回復するに多數の日子を要するものなれば、特に衛生に注意して、平素健康を保つて行くと云ふことを、心掛けねばなりません。

婦人の任務　婦人は一家の調和を謀り、家庭を圓滿ならしめ、愉快に面白く其日を過して行かねばなりません、且つ家政をも處理して行かねばなりませんから、一日たりとも其健康を損はぬ樣注意せねばなりません、若し不幸にして疾病に罹ることあれば、忽ち其家庭は陰鬱となり、一家の團欒を保つことが出來ません。

婦人特殊の任務　既に結婚したる婦人に在りては、一家の承繼者を造るの大任を負ふて居りますから、健全なる子孫を得て一家の繁榮と子孫の榮達とを希ふ婦人は、常に其身の健康を保つと云ふことに注意を拂はねばなりません、之れ上、祖先に對し下、子孫に對する婦人の責任であります。

見られよ、神功皇后の如きは、女性でありながら且つ姙娠中にも拘らず、朝鮮の民をして我王化に沐せしめんとの思召にて、親ら御渡海遊され皇威を八荒に輝かし給ひたるは、實に我邦女性の典型にして又日本婦人の誇にすべき所であります、而して之れ皆健康の賜であります、さすれば健康を維持して行くと云ふことが、即ち婦人一生の重荷であると云はねばなりません、今や冷氣を覺ゆるの時候ですから、たとへ健かな婦人にても、種々の病氣を惹き起し易すければ、今より中將湯を服用して之れを豫防し、又弱き婦人は勿論病める婦人は、速かに中將湯を服用して、健康を回復せらるゝ樣切に御勸め申します、さて中將湯の功能は

●子宮病子宮内膜炎にて白帶多く前たゞれ又下腹腰足の引つり痛人●婦人神經(ヒステリー)血の道にて氣欝ぎ癇高ぶり物を苦しく夜眠ず●月經不順月經滯り等にて吹出物多く又何となく身體惡き人●逆上頭痛眩暈し肩こり腰足冷え●息切れ動氣强く手足痺れ水腫●十七八歳になりて月經なく血ぶとり又月經の前後に下腹の痛む人●白帶赤帶滯下多く顏色蒼白き人●冷症にて難産流産の癖ある人●産前何となく常ならざる人、嘔吐産後古血の滯り或ひは日立惡く●此外子宮血の道月經不順に起因する諸病にてぶら〳〵と惡き人

定價は四日分卅五錢●一週間分六十錢●二週間分一圓十錢●三週間分一圓六十錢●五週間分二圓五十錢です

本舗は東京市日本橋區通四丁目津村順天堂で取次店は全國到る處にあります

(定價金貳拾錢●郵稅貳錢)

監修
小山静子　KOYAMA Shizuko
京都大学大学院教授

女学世界 明治期復刻版⑲
明治43年10月（第10巻第13号）、11月（第10巻第14号）

2010年7月10日　第1刷発行　　定価（本体20,000円＋税）

監　修　小山静子
発行者　富澤凡子
発行所　柏書房株式会社
東京都文京区本駒込1-13-14（〒113-0021）
電話　03-3947-8251［営業］03-3947-8254［編集］
協　力　株式会社博文館新社
印　刷　株式会社友美社
製　本　有限会社青木製本

ISBN978-4-7601-3857-9　C3321